

金井東裏遺跡

《古墳時代編》
本文編 2

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)道路改築事業(国道・連携)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第652集

金井東裏遺跡

《古墳時代編》
本文編 2

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)道路改築
事業(国道・連携)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一九

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



金井東裏遺跡

《古墳時代編》

本文編 2

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)道路改築事業(国道・連携)に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2019

群 馬 県 渋 川 土 木 事 務 所
公 益 財 団 法 人 群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 事 業 団

本文編2目次

第三章 発見された遺構と遺物	270	6 2・3区4面遺構	600
第2節 4面遺構	270	(1)1号祭祀遺構	603
1 4面遺構全体状況	270	(2)2号祭祀号溝	605
2 13区4面遺構	270	(3)1号畠	606
(1)19号道	270	(4)落ち込み・道・畦	608
(2)20・21号道	270	7 1区4面遺構	608
3 10区4面遺構	272	(1)1号平地建物	608
(1)15号道	272	(2)2号平地建物	608
(2)16号道	272	(3)3号平地建物	612
(3)17号道	272	(4)4号平地建物	613
(4)18号道	273	(5)5号平地建物	614
(5)8号道	275	(6)焼土	615
(6)9号道	275	(7)37号集石	616
(7)7号道	275	(8)3号道	618
4 9区4面遺構	275	8 8区4面遺構	620
(1)屋敷地区画内の遺構群	275	(1)28号集石	620
(2)42号竪穴建物	276	(2)23号道	620
(3)8号平地建物	285	9 7区4面遺構	622
(4)9号平地建物	288	(1)7号竪穴建物	622
(5)1号掘立柱建物	289	(2)5号祭祀遺構	623
(6)7・13号畠	305	(3)4号祭祀遺構	629
(7)11号畠	305	(4)6号道	629
(8)12号畠	313	(5)14号道	630
(9)屋敷地外の4面遺構群	317	(6)32号集石	631
(10)8号畠	317	(7)1号円弧状ビット群	632
(11)6号畠	317	(8)33号集石	632
(12)9号畠	317	(9)4面遺構面出土遺物	632
(13)10号畠	317	第3節 3-2面遺構	639
(14)10号平地建物	318	1 3-2面遺構全体状況	639
(15)6号集石	318	2 10区3-2面	640
(16)屋敷地の周りの施設について	318	(1)15~17号道人足跡	640
5 4区4面遺構	319	(2)7号道人足跡	640
(1)3号祭祀遺構	320	(3)15号道馬蹄跡	642
(2)31号溝	588	(4)7号道馬蹄跡	642
(3)4号道	595	3 9区3-2面	644
(4)5号道	595	(1)屋敷地内の人足跡・馬蹄跡	644
(5)立木・畠	598	(2)屋敷地外の人足跡・馬蹄跡	647
		(3)剣菱形杏葉・須恵器大甕出土	650

4	4区3-2面	653	(1)線状衝撃痕	914	
	(1)1号人骨と1号甲の出土状況	662	(2)植物痕跡	914	
	(2)2号甲の出土状況	673	7	1区3-1面	915
	(3)3号人骨の出土状況	673	(1)線状衝撃痕	915	
	(4)4号人骨の出土状況	677	(2)植物痕跡	915	
	(5)2号甲の出土状況	687	(3)自然流路	915	
	(6)鉄鏝の出土状況	689	8	8区3-1面	919
	(7)鉄鉾の出土状況	689	(1)線状衝撃痕	919	
	(8)1号甲	693	9	7区3-1面	922
	(9)2号甲	747	(1)線状衝撃痕	922	
	(10)鹿角製小札	834	(2)1067号不明遺構	922	
	(11)胃	803	10	3面遺構面出土遺物	922
	(12)銀・鹿角併用装飾	834	第5節	2面遺構	926
	(13)鹿角装飾	846	1	2面遺構面全体状況	926
	(14)鹿角装刀子	868	2	13区2面	928
	(15)砥石(提砥)	873	(1)馬蹄跡	928	
	(16)管玉	875	3	10区2面	928
	(17)ガラス小玉	875	(1)馬蹄跡	928	
	(18)白玉	876	4	9区2面	928
	(19)4号道人足跡・馬蹄跡	885	(1)馬蹄跡	928	
	(20)5号道人足跡・馬蹄跡	887	(2)不明遺構	930	
	(21)4区出土馬蹄跡	888	5	4区2面	932
	(22)3号人骨脇石・空洞痕跡	893	(1)馬蹄跡	932	
5	1区3-2面	894	(2)鞋状遺構	932	
	(1)3号道人足跡・馬蹄跡	894	6	2・3区2面	932
6	7区3-2面(ヒト足跡・馬蹄跡)	900	(1)1号道	932	
第4節	3-1面(S:衝撃痕)遺構	903	(2)鞋状遺構	932	
1	3-1面遺構全体状況	903	(3)馬蹄跡	939	
2	13区3-1面	903	7	1区2面	939
(1)	線状衝撃痕	903	(1)2号道	939	
3	10区3-1面	903	(2)馬蹄跡	939	
(1)	線状衝撃痕	905	8	7区2面	940
4	9区3-1面	905	(1)馬蹄跡	940	
(1)	線状衝撃痕	905	9	遺構面不明の出土遺物	943
5	4区3-1面	908	第VI章	まとめ	947
(1)	線状衝撃痕	912	英・中・韓訳文	950	
(2)	38号溝	912	遺跡調査抄録	955	
(2)	風倒木	912			
(3)	炭化材・炭化物・植物痕跡	912			
6	2区3-1面	914			

本文編2挿図目次

第252図	4面道構全体図	269	第314図	3号祭祀道構Kエレベーション図・立面図・平面図・遺物図	336
第253図	13区4面道構全体図	270	第315図	3号祭祀道構G・42・193セクション図・平面図	337
第254図	13区道平面図・上層断面図	271	第316図	3号祭祀道構45・16・48セクション図・遺物図他	338
第255図	10区4面道構全体図	272	第317図	3号祭祀道構52～57セクション図・立面図・遺物図他	339
第256図	10区道平面図・上層断面図1	273	第318図	3号祭祀道構中央大型土器群配置復元図	340
第257図	10区道平面図・上層断面図2	274	第319図	3号祭祀道構西側大型土器群上層断面図・立面図設定図	342
第258図	9区4面道構全体図	276	第320図	3号祭祀道構43・23・25セクション図・遺物図他	343
第259図	9区4面扇敷地図	277	第321図	3号祭祀道構30・27エレベーション図・遺物図他	344
第260図	42号壔穴建物平面図	278	第322図	3号祭祀道構58～64エレベーション図・遺物図他	345
第261図	42号壔穴建物上層断面図	279	第323図	3号祭祀道構19・47・Hエレベーション図・遺物図他	346
第262図	42号壔穴建物遺物出土状況図・出土遺物図1	280	第324図	3号祭祀道構28～28、28・28エレベーション図・遺物図他	347
第263図	42号壔穴建物出土遺物図2	281	第325図	3号祭祀道構29・27エレベーション図・遺物図他	348
第264図	42号壔穴建物出土遺物図3	282	第326図	3号祭祀道構29・123・104エレベーション図・遺物図他	349
第265図	42号壔穴建物出土遺物図4	283	第327図	3号祭祀道構103・100・18エレベーション図・遺物図他	350
第266図	42号壔穴建物出土遺物図5	284	第328図	3号祭祀道構西側大型土器群配置復元図	351
第267図	8号平地建物平面図・遺物出土状況図・上層断面図	285	第329図	3号祭祀道構東側大型土器群上層断面図・立面図設定図	352
第268図	8号平地建物出土遺物図1	286	第330図	3号祭祀道構Pセクション図・平面図	353
第269図	8号平地建物出土遺物図2	287	第331図	3号祭祀道構3・46エレベーション図・遺物図他	354
第270図	9号平地建物平面図・エレベーション図	288	第332図	3号祭祀道構44・4エレベーション図・遺物図他	356
第271図	1号竪立柱建物平面図・上層断面図・エレベーション図	290	第333図	3号祭祀道構5・51エレベーション図・遺物図他	357
第272図	1号竪立柱建物赤玉出土状況図・上層断面図	291	第334図	3号祭祀道構P426・37エレベーション図・遺物図他	358
第273図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)1	292	第335図	3号祭祀道構6・38エレベーション図・遺物図他	359
第274図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)2	293	第336図	3号祭祀道構1・2エレベーション図・遺物図他	360
第275図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)3	294	第337図	3号祭祀道構2・7エレベーション図・遺物図他	361
第276図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)4	295	第338図	3号祭祀道構H・41エレベーション図・遺物図他	362
第277図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)5	296	第339図	3号祭祀道構Y・Xエレベーション図	
第278図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)6	297			364
第279図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)7	298	第340図	3号祭祀道構67・66・Dセクション図・遺物図、P102・211・331・220・323遺物図他	365
第280図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)8	299	第341図	3号祭祀道構東側大型土器群配置復元図	366
第281図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)9	300	第342図	3号祭祀道構小型鋳・紡錘・短方形石製模造品出土状況図	367
第282図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)10	301	第343図	3号祭祀道構玉頸出土状況図・垂直分布図1	368
第283図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)11	302	第344図	3号祭祀道構玉頸垂直分布図2・玉頸度数分布図	369
第284図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)12	303	第345図	3号祭祀道構ガラス玉出土状況図・垂直分布図1	370
第285図	1号竪立柱建物出土遺物図(赤玉)13	304	第346図	3号祭祀道構ガラス玉垂直分布図2・ガラス玉度数分布図	371
第286図	高全体図	306	第347図	3号祭祀道構石製模造品出土状況図・垂直分布図1	372
第287図	7・13号高平面図・上層断面図	307	第348図	3号祭祀道構石製模造品垂直分布図2・石製模造品・勾玉形石製模造品度数分布図	373
第288図	7・13号高エレベーション図	308	第349図	3号祭祀道構平円形・有孔円板・有孔方板・剣形石製模造品度数分布図	374
第289図	11号高平面図・上層断面図	309	第350図	3号祭祀道構鉄器出土状況図・垂直分布図	375
第290図	11号高上層断面図・エレベーション図1	310	第351図	3号祭祀道構鉄器垂直分布図・遺物図	376
第291図	11号高エレベーション図2	311	第352図	3号祭祀道構鉄器度数分布図	377
第292図	7・11号高出土遺物図	312	第353図	3号祭祀道構白玉出土状況図・垂直分布図	378
第293図	12号高平面図・エレベーション図・出土遺物図	313	第354図	3号祭祀道構白玉垂直分布図・白玉度数分布図	379
第294図	6・8・9・10号高平面図	314	第355図	3号祭祀道構粒状隕石出土状況図・垂直分布図1	380
第295図	6・8・9・10号高上層断面図・エレベーション図1	315	第356図	3号祭祀道構粒状隕石垂直分布図2・粒状隕石度数分布図	381
第296図	6・8・9・10号高エレベーション図2	316	第357図	3号祭祀道構 その他の遺物出土分布図	382
第297図	6・8号高出土遺物図	317	第358図	3号祭祀道構小型土器集積群位置図	383
第298図	10号平地建物平面図・上層断面図・6号集石図	318	第359図	3号祭祀道構小型土器集積群配置区分図	384
第299図	4区4面道構全体図	319	第360図	3号祭祀道構小型土器群北西部区分図・25セクション図・遺物図他	385
第300図	3号祭祀道構遺物出土状況図1	321	第361図	3号祭祀道構22・Eセクション図・遺物図他	386
第301図	3号祭祀道構遺物出土状況図2	322	第362図	3号祭祀道構23～23・21・22セクション図・遺物図他	387
第302図	3号祭祀道構土器据置直平面図	323	第363図	3号祭祀道構23～23・11セクション図・遺物図他	388
第303図	3号祭祀道構上層断面・立面図設定図	324	第364図	3号祭祀道構小型土器集積中央部群エレベーション設定図	389
第304図	3号祭祀道構Dセクション図・平面図	325	第365図	3号祭祀道構108・102エレベーション図・遺物図他	390
第305図	3号祭祀道構Hセクション図・平面図	326	第366図	3号祭祀道構106・109・P608・P127エレベーション図・遺物図他	391
第306図	3号祭祀道構Aセクション図・平面図	327	第367図	3号祭祀道構26・26エレベーション図・遺物図他	392
第307図	3号祭祀道構Bセクション図・平面図	328	第368図	3号祭祀道構Iエレベーション図・遺物図他	393
第308図	3号祭祀道構Cセクション図・平面図	329			
第309図	3号祭祀道構立面図1・2	330			
第310図	3号祭祀道構B立面図1・2	331			
第311図	3号祭祀道構Eセクション図・立面図・平面図	332			
第312図	3号祭祀道構の道構群区分図	333			
第313図	3号祭祀道構大型土器群中央大型土器群上層断面図・立面図設定図	335			

第369回	3号祭祀遺構101・95・96エレベーション図・遺物図他	395
第370回	3号祭祀遺構107・91エレベーション図・遺物図他	396
第371回	3号祭祀遺構98・99エレベーション図・遺物図他	397
第372回	3号祭祀遺構94・12エレベーション図・遺物図他	398
第373回	3号祭祀遺構89エレベーション図・遺物図他	399
第374回	3号祭祀遺構85・90エレベーション図・遺物図他	400
第375回	3号祭祀遺構20・0エレベーション図・遺物図他	402
第376回	3号祭祀遺構82・84エレベーション図・遺物図他	403
第377回	3号祭祀遺構71・97・114エレベーション図・遺物図他	404
第378回	3号祭祀遺構40・63・P93エレベーション図・遺物図他	406
第379回	3号祭祀遺構93エレベーション図・遺物図他	407
第380回	3号祭祀遺構88エレベーション図・遺物図他	408
第381回	3号祭祀遺構92エレベーション図・遺物図他	409
第382回	3号祭祀遺構87・115・P125エレベーション図・遺物図他	411
第383回	3号祭祀遺構80エレベーション図・遺物図他	412
第384回	3号祭祀遺構17・120・83・121エレベーション図 ・遺物図他	413
第385回	3号祭祀遺構81エレベーション図・遺物図他	414
第386回	3号祭祀遺構118・116・117エレベーション図・遺物図他	415
第387回	3号祭祀遺構78エレベーション図・遺物図他	416
第388回	3号祭祀遺構小型集積土器群南部群エレベーション設定図	417
第389回	3号祭祀遺構69・68エレベーション図・遺物図他	418
第390回	3号祭祀遺構72・P53・P54エレベーション図・遺物図他	419
第391回	3号祭祀遺構P43・P101・P225・P132・P86セクション図 ・遺物図	420
第392回	3号祭祀遺構P51・P52・P69群、P50セクション図 ・遺物図	421
第393回	3号祭祀遺構小型集積土器群立面設定位置図・積み重ね状況復元①(233～234・236～241・243～246)	423
第394回	3号祭祀遺構小型集積土器群積み重ね状況復元②(243・241)	424
第395回	3号祭祀遺構小型集積土器群積み重ね状況復元③(240)	426
第396回	3号祭祀遺構小型集積土器群積み重ね状況復元④(239・234)	427
第397回	3号祭祀遺構小型集積土器群積み重ね状況復元⑤(238・233・237・236)	428
第398回	3号祭祀遺構小型土器群配置区分図	430
第399回	3号祭祀遺構小型土器群北部群セクション他設定図	431
第400回	3号祭祀遺構16・15・12・Vセクション図 ・P440・483遺物図他	432
第401回	3号祭祀遺構13・P492セクション図・遺物図他	433
第402回	3号祭祀遺構14・P・R・R1エレベーション図 ・遺物図他	434
第403回	3号祭祀遺構小型土器群西部群エレベーション他設定図	435
第404回	3号祭祀遺構8・P512セクション図・遺物図他	436
第405回	3号祭祀遺構0-0セクション図・遺物図他	437
第406回	3号祭祀遺構T・T・S・T・Vエレベーション図・遺物図他	438
第407回	3号祭祀遺構S ¹ -5・S ² -5エレベーション図・遺物図他	439
第408回	3号祭祀遺構S ³ -エレベーション図・P530・P510遺物図他	440
第409回	3号祭祀遺構0-0 ² ②P80・P79・P107エレベーション図 ・遺物図他	441
第410回	3号祭祀遺構U ¹ -10セクション図・遺物図他	442
第411回	3号祭祀遺構小型土器群中央群セクション他設定図	443
第412回	3号祭祀遺構M ¹ -Rセクション図・遺物図他	444
第413回	3号祭祀遺構P・P103・Sエレベーション図・P28遺物図他	445
第414回	3号祭祀遺構P0 ¹ -0エレベーション図・遺物図他	446
第415回	3号祭祀遺構小型土器群南部群セクション他設定図	447
第416回	3号祭祀遺構S ⁴ ・P272・P273エレベーション図 ・P332遺物図他	448
第417回	3号祭祀遺構P135・P100・P85・P77エレベーション図 ・P111・P307・P312遺物図他	449
第418回	3号祭祀遺構P190・P75・P74・P76・P38・P136・P97エレベーション図 ・遺物図他	450
第419回	3号祭祀遺構小型土器群立面設定位置図	451
第420回	3号祭祀遺構小型土器群配置状況復元①(251・250・249)	452
第421回	3号祭祀遺構小型土器群配置状況復元②(253・0・252)	453

第422回	3号祭祀遺構小型土器群配置状況復元③(248・255・254)	454
第423回	3号祭祀遺構小型土器群内埋納器具位置分布図	455
第424回	3号祭祀遺構M ² -南側大型土器群位置図・土層断面図他	456
第425回	3号祭祀遺構M ² -南側大型土器群出土状況図・配置図	457
第426回	1号盛土遺構遺物出土状況図・土層断面図	459
第427回	1号盛土遺構出土遺物図	460
第428回	3号祭祀遺構出土遺物図1(杯A①)	462
第429回	3号祭祀遺構出土遺物図2(杯A②)	463
第430回	3号祭祀遺構出土遺物図3(杯A③)	464
第431回	3号祭祀遺構出土遺物図4(杯A④)	465
第432回	3号祭祀遺構出土遺物図5(杯A⑤)	466
第433回	3号祭祀遺構出土遺物図6(杯A⑥)	467
第434回	3号祭祀遺構出土遺物図7(杯A⑦)	468
第435回	3号祭祀遺構出土遺物図8(杯A⑧)	469
第436回	3号祭祀遺構出土遺物図9(杯A⑨)	470
第437回	3号祭祀遺構出土遺物図10(杯A⑩)	471
第438回	3号祭祀遺構出土遺物図11(杯B①)	472
第439回	3号祭祀遺構出土遺物図12(杯B②)	473
第440回	3号祭祀遺構出土遺物図13(杯B③)	474
第441回	3号祭祀遺構出土遺物図14(杯B④)	475
第442回	3号祭祀遺構出土遺物図15(杯B⑤)	476
第443回	3号祭祀遺構出土遺物図16(杯B⑥)	477
第444回	3号祭祀遺構出土遺物図17(杯C①)	478
第445回	3号祭祀遺構出土遺物図18(杯C②)	479
第446回	3号祭祀遺構出土遺物図19(杯C③)	480
第447回	3号祭祀遺構出土遺物図20(杯C④)	481
第448回	3号祭祀遺構出土遺物図21(杯C⑤)	482
第449回	3号祭祀遺構出土遺物図22(杯C⑥)	483
第450回	3号祭祀遺構出土遺物図23(杯C⑦)	484
第451回	3号祭祀遺構出土遺物図24(杯C⑧)	485
第452回	3号祭祀遺構出土遺物図25(杯C⑨)	486
第453回	3号祭祀遺構出土遺物図26(杯C⑩)	487
第454回	3号祭祀遺構出土遺物図27(杯C⑪)	488
第455回	3号祭祀遺構出土遺物図28(杯C⑫)	489
第456回	3号祭祀遺構出土遺物図29(杯C⑬)	490
第457回	3号祭祀遺構出土遺物図30(杯C⑭)	491
第458回	3号祭祀遺構出土遺物図31(杯C⑮)	492
第459回	3号祭祀遺構出土遺物図32(杯C⑯)	493
第460回	3号祭祀遺構出土遺物図33(杯)	494
第461回	3号祭祀遺構出土遺物図34(高杯①)	495
第462回	3号祭祀遺構出土遺物図35(高杯②)	496
第463回	3号祭祀遺構出土遺物図36(皿)	497
第464回	3号祭祀遺構出土遺物図37(小型壺①)	498
第465回	3号祭祀遺構出土遺物図38(小型壺②)	499
第466回	3号祭祀遺構出土遺物図39(壺①)	500
第467回	3号祭祀遺構出土遺物図40(壺②)	501
第468回	3号祭祀遺構出土遺物図41(壺③)	502
第469回	3号祭祀遺構出土遺物図42(壺④)	503
第470回	3号祭祀遺構出土遺物図43(壺⑤)	504
第471回	3号祭祀遺構出土遺物図44(壺⑥)	505
第472回	3号祭祀遺構出土遺物図45(壺⑦)	506
第473回	3号祭祀遺構出土遺物図46(壺⑧)	507
第474回	3号祭祀遺構出土遺物図47(壺⑨)	508
第475回	3号祭祀遺構出土遺物図48(壺⑩)	509
第476回	3号祭祀遺構出土遺物図49(壺⑪)	510
第477回	3号祭祀遺構出土遺物図50(壺⑫)	511
第478回	3号祭祀遺構出土遺物図51(壺⑬)	512
第479回	3号祭祀遺構出土遺物図52(壺⑭)	513
第480回	3号祭祀遺構出土遺物図53(壺⑮)	514
第481回	3号祭祀遺構出土遺物図54(壺⑯)	515
第482回	3号祭祀遺構出土遺物図55(壺⑰)	516
第483回	3号祭祀遺構出土遺物図56(小型壺①)	517
第484回	3号祭祀遺構出土遺物図57(小型壺②)	518
第485回	3号祭祀遺構出土遺物図58(小型壺③)	519
第486回	3号祭祀遺構出土遺物図59(小型壺④)	520
第487回	3号祭祀遺構出土遺物図60(小型壺⑤)	521
第488回	3号祭祀遺構出土遺物図61(小型壺⑥)	522

第489回	3号祭祀遺構出土遺物62(表①)	523	第555回	31号溝出土遺物①	594
第490回	3号祭祀遺構出土遺物63(表②)	524	第556回	31号溝出土遺物②	595
第491回	3号祭祀遺構出土遺物64(表③)	525	第557回	4・5号道全体区	596
第492回	3号祭祀遺構出土遺物65(表④)	526	第558回	4・5号道土層断面区・出土遺物区	597
第493回	3号祭祀遺構出土遺物66(表⑤)	527	第559回	2・3・4号高平面区・土層断面区	598
第494回	3号祭祀遺構出土遺物66(表⑥)	528	第560回	2・3区4号道溝全体区	600
第495回	3号祭祀遺構出土遺物67(表⑦)	529	第561回	1号祭祀遺構平面区・土層断面区	600
第496回	3号祭祀遺構出土遺物68(表⑧)	530	第562回	1号祭祀遺構出土遺物①	601
第497回	3号祭祀遺構出土遺物69(表⑨)	531	第563回	1号祭祀遺構出土遺物②	602
第498回	3号祭祀遺構出土遺物70(表⑩)	532	第564回	1号祭祀遺構出土遺物③	603
第499回	3号祭祀遺構出土遺物71(表⑪)	533	第565回	2号祭祀遺構平面区・土層断面区	603
第500回	3号祭祀遺構出土遺物72(表⑫)	534	第566回	2号祭祀遺構出土遺物①	604
第501回	3号祭祀遺構出土遺物73(須忠勝①)	535	第567回	2号祭祀遺構出土遺物②	605
第502回	3号祭祀遺構出土遺物74(須忠勝②)	536	第568回	1号高平面区・土層断面区	605
第503回	3号祭祀遺構出土遺物75(須忠勝③)	537	第569回	1～3号高ち込み平面区・土層断面区	606
第504回	3号祭祀遺構出土遺物76(須忠勝④)	538	第570回	22号道・4号畦平面区・土層断面区	607
第505回	3号祭祀遺構出土遺物77(須忠勝⑤)	539	第571回	1区4号道溝全体区	608
第506回	3号祭祀遺構出土遺物78(小笠原)	540	第572回	1号平地建物平面区・土層断面区	609
第507回	3号祭祀遺構出土遺物79(玉箱①)	542	第573回	1号平地建物出土遺物区	610
第508回	3号祭祀遺構出土遺物80(玉箱②)	543	第574回	2号平地建物平面区・土層断面区	611
第509回	3号祭祀遺構出土遺物81(玉箱③・紡輪)	544	第575回	2号平地建物出土遺物区	612
第510回	3号祭祀遺構出土遺物82(ガラス玉類)	545	第576回	3号平地建物平面区・土層断面区	612
第511回	3号祭祀遺構出土遺物83(石製模造品①短甲形)	546	第577回	3号平地建物出土遺物区	613
第512回	3号祭祀遺構出土遺物84(石製模造品②勾玉形)	547	第578回	4号平地建物平面区・土層断面区	613
第513回	3号祭祀遺構出土遺物85(石製模造品③平円形①)	548	第579回	4号平地建物④区・出土遺物区	614
第514回	3号祭祀遺構出土遺物86(石製模造品④平円形②)	549	第580回	5号平地建物平面区・土層断面区	615
第515回	3号祭祀遺構出土遺物87(石製模造品⑤有孔円板形①)	550	第581回	9・10号畦平面区・土層断面区・出土遺物区	616
第516回	3号祭祀遺構出土遺物88(石製模造品⑥有孔円板形②)	551	第582回	37号集石平面区・土層断面区・出土遺物区	617
第517回	3号祭祀遺構出土遺物89(石製模造品⑦刺形①)	553	第583回	3号道土層断面区①	618
第518回	3号祭祀遺構出土遺物90(石製模造品⑧刺形②)	554	第584回	3号道土層断面区②	619
第519回	3号祭祀遺構出土遺物91(石製模造品⑨刺形③)	555	第585回	8区4号道溝全体区	620
第520回	3号祭祀遺構出土遺物892(石製模造品⑩刺形④)	556	第586回	28号集石・23号道平面区・エレベーション区	620
第521回	3号祭祀遺構出土遺物893(石製模造品⑪刺形⑤)	557	第587回	7区4号道溝全体区	621
第522回	3号祭祀遺構出土遺物894(石製模造品⑫刺形⑥)	558	第588回	7号平地建物平面区・土層断面区・出土遺物区①	622
第523回	3号祭祀遺構出土遺物895(石製模造品⑬刺形⑦)	559	第589回	7号平地建物出土遺物②	623
第524回	3号祭祀遺構出土遺物896(石製模造品⑭刺形⑧)	560	第590回	5号祭祀遺構平面区・遺物出土状況区・土層断面区	624
第525回	3号祭祀遺構出土遺物897(石製模造品⑮刺形⑨)	561	第591回	5号祭祀遺構灰化物分布区・出土遺物区①	625
第526回	3号祭祀遺構出土遺物898(石製模造品⑯刺形⑩)	562	第592回	5号祭祀遺構出土遺物②	626
第527回	3号祭祀遺構出土遺物899(滑石製白玉①)	563	第593回	5号祭祀遺構出土遺物③	627
第528回	3号祭祀遺構出土遺物900(滑石製白玉②)	564	第594回	4号祭祀遺構平面区・遺物出土状況区・出土遺物区	628
第529回	3号祭祀遺構出土遺物901(滑石製白玉③)	565	第595回	6号道土層断面区	629
第530回	3号祭祀遺構出土遺物902(滑石製白玉④)	566	第596回	14号道平面区・土層断面区	630
第531回	3号祭祀遺構出土遺物903(滑石製白玉⑤)	567	第597回	32号集石平面区・土層断面区・出土遺物区	631
第532回	3号祭祀遺構出土遺物904(鉄器①鏃①)	569	第598回	1号円筒状ビッド・附・33号集石平面区	632
第533回	3号祭祀遺構出土遺物905(鉄器②鏃②)	570	第599回	4号道溝外出土遺物区①(13・10・9区)	633
第534回	3号祭祀遺構出土遺物906(鉄器③鏃③)	571	第600回	4号道溝外出土遺物区②(9区)	634
第535回	3号祭祀遺構出土遺物907(鉄器④鏃④)	572	第601回	4号道溝外出土遺物区③(9区)	635
第536回	3号祭祀遺構出土遺物908(鉄器⑤鏃⑤)	573	第602回	4号道溝外出土遺物区④(4・2区)	636
第537回	3号祭祀遺構出土遺物909(鉄器⑥鏃⑥)	574	第603回	4号道溝外出土遺物区⑤(1・5区)	637
第538回	3号祭祀遺構出土遺物910(鉄器⑦面方鏃①)	575	第604回	3-2面道溝全体区	638
第539回	3号祭祀遺構出土遺物911(鉄器⑧面方鏃②・穂筒①)	576	第605回	10K3-2面道溝全体区	639
第540回	3号祭祀遺構出土遺物912(鉄器⑨穂筒②)	577	第606回	7号道ヒト足跡平面区	641
第541回	3号祭祀遺構出土遺物913(鉄器⑩交柄杓)	578	第607回	10Kヒト足跡・踏跡平面区・断面区	642
第542回	3号祭祀遺構出土遺物914(鉄器⑪刀子①)	579	第608回	9区3-2面道溝全体区	643
第543回	3号祭祀遺構出土遺物915(鉄器⑫刀子②)	580	第609回	屋敷地内ヒト足跡・踏跡全体平面区	645
第544回	3号祭祀遺構出土遺物916(鉄器⑬刀子③・釵)	581	第610回	屋敷地内ヒト足跡個別平面区・断面区	646
第545回	3号祭祀遺構出土遺物917(鉄器⑭素材①)	582	第611回	屋敷地内ヒト足跡・踏跡全体平面区・個別平面区・断面区	648
第546回	3号祭祀遺構出土遺物918(鉄器⑮素材②・押棒)	583	第612回	奈良・須忠恵出土位置区・状況区・土層断面区	649
第547回	3号祭祀遺構出土遺物919(粘状障①)	585	第613回	奈良形古葉平面区・断面区	650
第548回	3号祭祀遺構出土遺物920(粘状障②)	586	第614回	須忠恵遺物区	651
第549回	3号祭祀遺構出土遺物921(その他)	587	第615回	4区3-2面道溝全体区	652
第550回	31号溝全体区①	589	第616回	1号出土	654
第551回	31号溝全体区②	590	第617回	1号溝及び4・5号道平面区	655
第552回	31号溝土層断面区①	591	第618回	1号人骨・2号人骨・2号甲・鉄鏃出土状況区	656
第553回	31号溝土層断面区②	592	第619回	1号甲・1号人骨・鉄鏃・2号人骨出土断面区	657
第554回	31号溝エレベーション区・溝底部区	593	第620回	2号甲・鉄鏃・1号人骨出土断面区	658

第621図	甲着装の1号人骨と遺物の下出上関係図	663	第687図	右袖当第5段小札の縫じ・幅・覆輪模式図	815
第622図	1号甲の上面(後脚)断面図	664	第688図	背裏面状態図	816
第623図	31号溝・4号道跡と3号人骨出土状態図・土層断面図	674	第689図	背各部位計測図	817
第624図	3号人骨出土地点の31号溝土層断面図	675	第690図	背復元模式図(前面)	818
第625図	3号人骨の出土状態図	676	第691図	背復元模式図(外面)	819
第626図	4区における人骨と甲冑等出土位置図	678	第692図	背復元模式図(側面・後面)	820
第627図	4号人骨の出土状態図	678	第693図	鎧・鹿角併用装飾計測位置図・法量表	834
第628図	31号溝と鉄蘘分布図	690	第694図	鎧・鹿角併用装飾展開図	836
第629図	人骨・甲と鉄蹄の位置関係図	691	第695図	物集女車塚古墳出土鎧装飾・跡・石突実測図	838
第630図	鉄蹄出土状態と上層位相断面図	691	第696図	国越古墳出土鹿角装飾・跡実測図	839
第631図	1号甲展開図 X線CTスキャン解析画像から作図	699	第697図	信都馬場出土鎧装飾実測図	839
第632図	1号甲前脚部外面図	700	第698図	群馬県内出土跡と装飾跡断面図1	840
第633図	1号甲前脚部内面図	701	第699図	群馬県内出土跡と装飾跡断面図2	841
第634図	1号人骨と1号甲前脚部の関係	702	第700図	鹿角装飾部・鹿角装飾分類図	846
第635図	1号甲後脚実測部分の分割図	706	第701図	鹿角装飾図(①～⑧)	847
第636図	1号甲後脚裏上内面実測図	708	第702図	鹿角装飾図(⑨～⑯)	848
第637図	1号甲後脚長側一腰札内面実測図	709	第703図	鹿角装飾図(⑰～㉑)	849
第638図	1号甲後脚長側内面及び腰札展開図	710	第704図	鹿角装飾図(㉒～㉔)・塵埃集合図	850
第639図	1号甲後脚長側一腰札一草摺実測図	711	第705図	鹿角装飾遺存矢筈痕図	851
第640図	1号甲後草摺内面実測図	712	第706図	鹿角装飾復元図①・計測位置図②・法量表③	852
第641図	1号甲草摺右端部実測図	713	第707図	鹿角装飾各部位法量度数分布図	853
第642図	1号甲後脚内面実測図(個別図を合成)	714	第708図	鉄蘘(鹿角装飾・材質不明装具)図	856
第643図	1号甲小札構成表	721	第709図	鉄蘘編年図1	858
第644図	1号甲臙・綴模式図	722	第710図	鉄蘘編年図2	859
第645図	1号X線CT解析画像展開図	741	第711図	鹿角装飾刀子計測位置図①・法量表②	868
第646図	1号甲後脚小札配列図	742	第712図	群馬県内鹿角装飾刀子出土遺跡・古墳位置図	869
第647図	1号甲構成模式図	744	第713図	1号人骨携帯の鹿角装飾刀子実測図	869
第648図	1号甲の大きさ想定図	745	第714図	群馬県内鹿角装飾刀子集成図	870
第649図	2号甲外面実測図	750	第715図	提袋	873
第650図	2号甲内面実測図	751	第716図	碧玉	878
第651図	2号甲内外面展開図	754	第717図	ガラス小玉	878
第652図	2号甲小札構成表	763	第718図	白玉	879
第653図	2号甲臙・綴模式図	764	第719図	4・5号道ヒト足跡出土位置図	884
第654図	2号甲後脚部外面の小札配列図	765	第720図	4・5号道土層断面図	889
第655図	2号甲構成模式図	766	第721図	4・5号道ヒト足跡個別断面図	890
第656図	鹿角製小札の個別番号図	774	第722図	4区出土馬跡跡出土位置図	891
第657図	鹿角製小札の出土状態図	775	第723図	4区出土馬跡跡個別断面図	892
第658図	鹿角製小札の穿孔パターン表	776	第724図	3号人骨付近石・空洞検出状況	893
第659図	鹿角製小札全形展開図	778	第725図	1区3-2面道溝全体図	894
第660図	鹿角製小札段毎の展開図	779	第726図	3号道ヒト足跡・跡跡出土位置図	896
第661図	鹿角製小札第3段展開図	780	第727図	3号道ヒト足跡個別断面図1	897
第662図	鹿角製小札平面展開推定図	780	第728図	3号道ヒト足跡個別断面図2	898
第663図	鹿角製小札右側小札列図	780	第729図	3号道ヒト足跡個別断面図3	899
第664図	鹿角製小札個別実測図(1)	784	第730図	3号道跡跡個別断面図	899
第665図	鹿角製小札個別実測図(2)	785	第731図	7区3-2面道溝全体図	900
第666図	鹿角製小札個別実測図(3)	786	第732図	6号道ヒト足跡・跡跡個別断面図1	900
第667図	鹿角製小札個別実測図(4)	787	第733図	6号道ヒト足跡・跡跡出土状況図、ヒト足跡・跡跡個別断面図2	901
第668図	鹿角製小札個別実測図(5)	788	第734図	3-1面道溝全体図	902
第669図	鹿角製小札個別実測図(6)	789	第735図	10区線状衝撃痕断面図	903
第670図	鹿角製小札個別実測図(7)	790	第736図	9区線状衝撃痕出土全体図	904
第671図	鹿角製小札個別実測図(8)	791	第737図	9区線状衝撃痕個別断面図1	905
第672図	鹿角製小札個別実測図(9)	792	第738図	9区線状衝撃痕個別断面図2	906
第673図	鹿角製小札個別実測図(10)	793	第739図	9区線状衝撃痕個別断面図3	907
第674図	鹿角製小札個別実測図(11)	794	第740図	9区線状衝撃痕個別断面図4	908
第675図	鹿角製小札個別実測図(12)	795	第741図	4区線状衝撃痕出土全体図	909
第676図	鹿角製小札個別実測図(13)	796	第742図	4区線状衝撃痕個別断面図1	910
第677図	鹿角製小札個別実測図(14)	797	第743図	4区線状衝撃痕個別断面図2	911
第678図	鹿角製小札構成表	800	第744図	4区溝・根拠本断面図	912
第679図	鹿角製小札の復元推定図(作図石田真)	802	第745図	4区火跡遺中出土炭化材・炭化物・植物炭跡出土位置図	913
第680図	青出上状態図	805	第746図	2区線状衝撃痕出土全体図	914
第681図	襪に装着した鹿角底板	806	第747図	2区線状衝撃痕個別断面図PP下・植物炭跡断面図	915
第682図	胄下面状態図	806	第748図	1区線状衝撃痕出土全体図・個別断面図1	916
第683図	胄出上状態断面図	809	第749図	1区線状衝撃痕個別断面図2	917
第684図	胄跡展開図	810	第750図	1区線状衝撃痕個別断面図3・植物炭跡断面図	918
第685図	胄内面と断面図	811	第751図	1区植物炭跡拡大断面図	919
第686図	胄相當で・綴使用小札の種類	813			

第752図	1区不明道橋(Sa)・自然流路平断面図	920	第768図	4区2面馬蹄跡出土位置図・馬蹄跡個別平断面図	933
第753図	7区線状衝撃痕出土全体図	921	第769図	4区畦状遺構平断面図	934
第754図	7区不明道橋平断面図	922	第770図	2・3区2面遺構全体図	935
第755図	3面遺構外出土遺物1	922	第771図	2・3区2面馬蹄跡出土位置図・馬蹄跡個別平断面図	935
第756図	3面遺構外出土遺物2	923	第772図	2・3区2面1号道平断面図	936
第757図	3面遺構外出土遺物3	924	第773図	2・3区2面1号畦平断面図	937
第758図	2面遺構全体図	925	第774図	2・3区2面2号畦・3号畦平断面図	938
第759図	13区2面遺構全体図	926	第775図	1区2面遺構全体図	939
第760図	13区南部2面馬蹄跡出土位置図	926	第776図	1区2号道平断面図	939
第761図	10区2面遺構全体図	927	第777図	1区2面馬蹄跡出土位置図・馬蹄跡個別平断面図	940
第762図	10区北部2面馬蹄跡出土位置図	927	第778図	7区2面遺構全体図	941
第763図	10区南部2面馬蹄跡出土位置図	928	第779図	7区2面馬蹄跡出土位置図	942
第764図	9区2面遺構全体図	929	第780図	遺構面不明出土遺物園1(4区)	943
第765図	9区2面馬蹄跡他出土位置図・不明遺構平断面図	930	第781図	遺構面不明出土遺物園2(4区)	944
第766図	9区2面1号古墳付近馬蹄跡他出土位置図	931	第782図	遺構面不明出土遺物園3(4・2・1・8区)	945
第767図	4区2面遺構全体図・炭化木平断面図	932	第783図	遺構面不明出土遺物園4(7・5区)	946

表 目 次

第3表	1号小札横成表	745
第4表	2号小札横成表	767
第5表	1号甲と2号甲の比較	767
第6表	鹿角製小札観察表	801
第7表	菅汁測一覽	817
第8表	菅玉・ガラス小玉・白玉観察表1	877
第9表	菅玉・ガラス小玉・白玉観察表2	879
第10表	菅玉・ガラス小玉・白玉観察表3	881

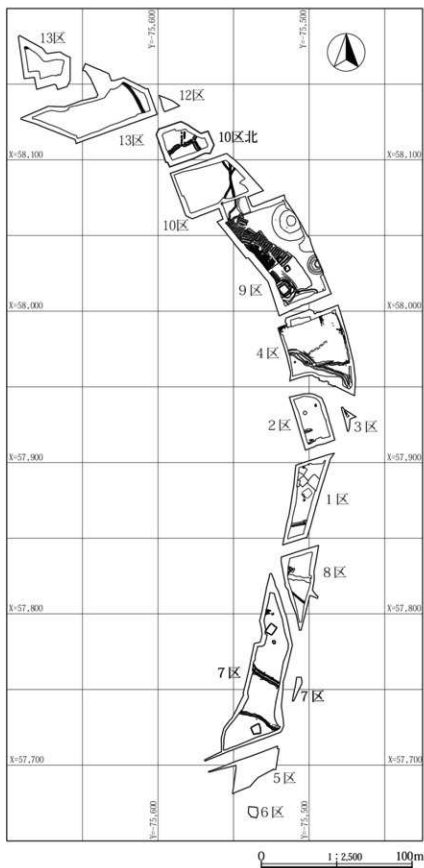
本文写真目次

写真9	31号溝東端の状況	658	写真72	3号人骨頸椎と下顎骨に挟まれた碧玉	684
写真10	31号溝東端の調査	658	写真73	3号人骨歯槽(右側)の状態	684
写真11	31号溝内外の出土状況	659	写真74	3号人骨歯槽付近から出土した白玉群	684
写真12	31号溝内の1号人骨(手前)と2号甲の調査	659	写真75	塊状の白玉群	684
写真13	31号溝内の出土状況(東から)	660	写真76	3号人骨の歯槽と左腕骨	685
写真14	31号溝の地槽テフラ断面と鉄鍬(左手前)	660	写真77	3号人骨歯槽の計測作業	685
写真15	31号溝土層断面B'-B'	661	写真78	田中良之教授指導による歯槽取上げ	685
写真16	31号溝東壁土層断面	661	写真79	歯槽取上げ時の瞬間	685
写真17	31号溝土層断面C'-C'	661	写真80	取上げた3号人骨歯槽	685
写真18	31号溝土層断面A'-A'	661	写真81	4号人骨歯槽の確認状態	686
写真19	降下火山灰Siを踏み込んだヒト右足跡	661	写真82	九州大学調査スタッフによる現地での4号人骨調査	686
写真20	うつ伏せの甲着装の1号人骨発見状況	665	写真83	テフラ層-Eに残る4号人体足跡	686
写真21	甲着装人骨(右)と2号甲(左)の位置関係	665	写真84	4号人骨右脛骨の検出状況	686
写真22	甲着装人骨の詳細調査前状況	666	写真85	4号人骨全身の検出状況	686
写真23	後頭部の丸われた歯槽の状態	666	写真86	2号甲出土と土層断面	687
写真24	肘を曲げた左腕骨	666	写真87	2号甲出土状態(南から)	688
写真25	跪いた状態の内脚	666	写真88	草摺から見た2号甲出土状態	688
写真26	肘を曲げた右腕骨	666	写真89	31号溝南岸から出した鉄鍬(西から)	692
写真27	詳細調査により四肢骨を露出させた状態	667	写真90	鉄鍬出土状況(東から)	692
写真28	明らかになった腰骨とつま先立ちの状態	667	写真91	1号人骨着装の1号甲後脚部分	694
写真29	腰骨と甲の間を埋める火砕流堆積物	667	写真92	1号人骨着装の1号甲(右側から)	695
写真30	九州大学調査スタッフによる四肢骨調査	667	写真93	1号人骨着装の1号甲(左側から)	695
写真31	調査スタッフによる腰骨調査	668	写真94	1号甲右側面	695
写真32	甲の後脚を外した状態	668	写真95	1号甲後脚(前部方向から)	695
写真33	調査スタッフによる甲内人骨の詳細調査	668	写真96	1号甲草摺と火鍬骨	695
写真34	次第に見られる上半身の人骨	668	写真97	1号甲の後脚壁と長腿の重なり(頭部方向から)	696
写真35	明らかになった甲内の人骨状態	668	写真98	1号甲長腿～腰札左脇部分	696
写真36	1号人骨全体像と甲脚部	669	写真99	1号甲右後ろの草摺部分(頭部方向から)	696
写真37	腰骨と大腿骨の状態(下方から)	669	写真100	1号甲草摺部と1号人骨大腿骨	696
写真38	調査スタッフによる甲内人骨の精査	670	写真101	1号甲後脚壁上外面と裾位に並ぶ織組紐痕	696
写真39	甲内に残る人骨の取上げ	670	写真102	1号甲草摺外面の堆出した織組紐	696
写真40	甲内の人骨調査最終段階	670	写真103	1号甲後脚壁と甲内に充満する火砕流堆積物	696
写真41	田中良之教授による人骨取上げ	670	写真104	1号甲の草摺部から見た内部状態	696
写真42	甲内人骨を取り上げた状態	670	写真105	1号甲後脚壁上部の取上げ作業	697
写真43	歯槽切離し前の歯槽調査	671	写真106	1号甲後脚壁を外した作業	697
写真44	歯槽切離しの状態	671	写真107	1号甲草摺右側を外す作業	697
写真45	歯槽切離し作業	671	写真108	1号甲草摺の右上部札列を外す作業	697
写真46	歯槽下位から露呈した胫	671	写真109	取上げた1号甲後脚部分の裏面	697
写真47	甲から歯槽・胫を切り離す直前状態	671	写真110	1号甲後脚壁上の外面	697
写真48	歯槽切離し後の甲脚断面	671	写真111	1号甲後脚草摺の外面	697
写真49	発泡ウレタンによる歯槽保護作業	671	写真112	1号甲後脚壁を外した状態	703
写真50	分離して取上げた1号人骨歯槽	671	写真113	九州大学調査スタッフによる甲内人骨取上げ	703
写真51	1号人骨歯槽内の襷	672	写真114	明確になった1号甲前脚部分の表面	703
写真52	1号人骨のX線C T撮像	672	写真115	刀子出土状態	703
写真53	断面と胫辺(胫)との接触状態のC T撮像(下から)	672	写真116	草摺内部の刀子と提踵	703
写真54	歯槽と胫のC T断面撮像	672	写真117	1号甲前脚部分内部の全容	704
写真55	2号人骨の発見状況	679	写真118	左前脚内部の状態	704
写真56	歯槽片の下方でガラス小玉が出土	679	写真119	左前脚内部のワタガミ織組紐痕	704
写真57	2号人骨歯槽片の近接写真	679	写真120	左前脚壁上面の平織履	704
写真58	2号人骨に伴うと思われるガラス小玉2点	679	写真121	1号甲前脚部分外面の状態(クリーニング前)	705
写真59	最初に発見された3号人骨の右脛骨	680	写真122	1号甲前脚部分外面の状態(クリーニング後)	705
写真60	九州大学調査スタッフによる現地での3号人骨調査	680	写真123	1号甲後脚壁上下面	715
写真61	現地調査で3号人骨全身骨格を確認	680	写真124	1号甲後脚壁上面	716
写真62	3号人骨発見状況の3次元計測作業	680	写真125	1号甲後脚長腿骨～腰札内部	716
写真63	3号人骨の出土状況(北から)	680	写真126	草摺内部左側	716
写真64	3号人骨全身骨格の状態	681	写真127	草摺内部右側	716
写真65	3号人骨上半身部分の状態	682	写真128	長腿～腰札～草摺の右側破片内部	716
写真66	3号人骨歯槽付近の状態	682	写真129	1号甲後脚草摺中央部内部	717
写真67	3号人骨取上げのための養生作業	683	写真130	1号甲後脚内部の腰札配列状況	717
写真68	3号人骨の室内搬入状態	683	写真131	1号甲後脚内部の長腿小札配列状況	717
写真69	九州大学調査スタッフによる3号人骨精査	683	写真132	1号甲後脚壁上部7・8段右側部分	717
写真70	3号人骨の歯槽から左腕骨の状態	683	写真133	1号甲長腿第1段右部分破片内部	718
写真71	3号人骨頸部に廻る菅玉列	683	写真134	1号甲長腿第1段右部分破片内部	718

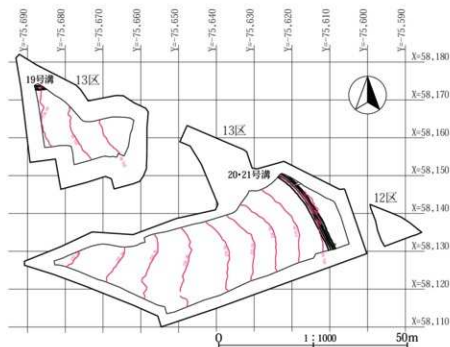
写真135	1号甲長側第2段右部分破片外面	718	写真201	1号甲草摺右側片内面の状態	734
写真136	1号甲長側第2段右部分破片内面	718	写真202	履輪の下に下積み直が見える	734
写真137	1号甲後製上第8段左側破片外面	718	写真203	履輪に残る平織痕	734
写真138	1号甲後製上第8段左側破片内面	718	写真204	履輪の平織に被せた革	734
写真139	1号甲草摺断面	718	写真205	写真203の部分アップ	734
写真140	1号甲草摺断面	718	写真206	草摺履輪と結び付けの組紐	735
写真141	1号甲後製上部の織・縫の様子	725	写真207	結び付け組紐のアップ	735
写真142	1号甲後製上最上段内面左側	725	写真208	草摺履輪の赤かがり	735
写真143	1号甲後製上最上段内面中央	725	写真209	赤かがりのアップ	735
写真144	1号甲後製上最上段内面右側	725	写真210	赤かがりの断面	735
写真145	左前脚内面のワタガミの革・織物と結び組紐	725	写真211	1号甲前脚内面のワタガミの結び付け直	736
写真146	前脚内面のワタガミの革・織物と結び組紐(上方から)	725	写真212	1号甲左前脚上内面の平織痕	736
写真147	堅上最上段左端の小札断面に見える組紐	725	写真213	写真212に続く平織のアップ	736
写真148	写真147の組紐アップ	725	写真214	写真213のアップ	736
写真149	後製上左端に残すワタガミ裏面	726	写真215	左前脚上外面に残る平織	736
写真150	ワタガミ裏面の革・織物痕	726	写真216	左側右後破片の外面	737
写真151	ワタガミ革部分アップと左下の平織痕	726	写真217	写真216のアップ	737
写真152	ワタガミの破断面	726	写真218	右側腰札内面	737
写真153	ワタガミの一部と思われる平織痕	726	写真219	写真218の黒色部アップ	737
写真154	ワタガミ結び付け組紐のアップ	727	写真220	草摺履輪に残る平織	737
写真155	結び付け組紐に残る革状物質	727	写真221	写真220のアップ	737
写真156	ワタガミ結び付け組紐痕と革状物質	727	写真222	長尺札列の付積み	737
写真157	革状物質を貫く組紐痕	727	写真223	写真222のアップ	737
写真158	写真157組紐のアップ	727	写真224	1号甲縦断面のX線C T画像	738
写真159	堅上端に残る革状物質アップ	727	写真225	1号甲横断面のX線C T画像(堅上部)	738
写真160	堅上第1段小札に残る平織痕	727	写真226	1号甲横断面のX線C T画像(腰札部)	739
写真161	ワタガミ結び付け断面と組紐	727	写真227	1号甲横断面のX線C T画像(草摺部)	739
写真162	組紐間の革状物質アップ	728	写真228	2号甲の出土状態	748
写真163	組紐間に付着した平織と革状物質	728	写真229	2号甲取上げ作業	748
写真164	堅上側履輪の革	728	写真230	2号甲取上げ梱包の状態	748
写真165	後製上第1段左側縁	728	写真231	X線C T撮影のためのウレタン梱包	748
写真166	後製上第1段中央部	728	写真232	X線C T撮影状況	748
写真167	堅上第1段内面の横走する黒色組紐	728	写真233	2号甲外面の状態	749
写真168	後製上外面に残る赤褐色と黒色の織組列	728	写真234	2号甲堅上外面に見える織紐	749
写真169	写真168の組紐部アップ	728	写真235	2号甲左側(後製)上に残る織紐列	749
写真170	1号甲後製上側履輪	729	写真236	2号甲草摺外面に残る織紐列	749
写真171	写真170のアップ	729	写真237	2号甲草摺外面の織紐(革部)アップ	749
写真172	1号甲横の組紐(堅上第7段内面)	729	写真238	2号甲C T解析画像	753
写真173	1号甲下積み草組列(長側第2段内面)	729	写真239	2号甲C T画像(後脚縦断面)	755
写真174	1号甲下積み草組列(草摺第2段内面)	729	写真240	2号甲C T画像(巻込み部縦断面)	755
写真175	写真174のアップ	729	写真241	2号甲C T画像(右前脚縦断面1)	755
写真176	1号甲下積み(長側第3段内面)	729	写真242	2号甲C T画像(後脚→左前脚断面)	755
写真177	写真175のアップ	729	写真243	2号甲C T画像(右前脚縦断面2)	755
写真178	1号甲左前脚の外面(腰札付近)	730	写真244	2号甲C T画像(横断面)	755
写真179	写真178のアップ	730	写真245	2号甲C T画像縦断面アップ	755
写真180	1号甲左前脚外面の組紐痕アップ	730	写真246	2号甲C T画像(草摺横断面)	755
写真181	1号甲左前脚外面の組紐面	730	写真247	箱内での2号甲裏面調査	758
写真182	1号甲後脚右側の腰札列内面	730	写真248	2号甲裏面を確認した鹿角製小札の端部	758
写真183	写真182のアップ	730	写真249	2号甲裏面から発見された鹿角製小札	758
写真184	写真183の横向き状態	730	写真250	2号甲と分離するための鹿角製小札取上げ	758
写真185	1号甲腰札下位内面の織と結びの組紐列	730	写真251	2号甲裏面のクリーニング作業	758
写真186	1号甲腰札頭部内面の織紐	731	写真252	2号甲裏面の状態	759
写真187	1号甲腰札内面の織と横結びの組紐	731	写真253	2号甲の出土状態(堅上方向から)	759
写真188	腰札内面での横結び組紐アップ	731	写真254	2号甲の巻かれた堅上部分アップ	759
写真189	腰札内面での横結び組紐アップ2	731	写真255	2号甲後製上外面の織痕	759
写真190	腰札内面に残る革状物質	731	写真256	2号甲後脚長側外面の織痕	759
写真191	写真190のアップ	731	写真257	2号甲後脚腰札外面	760
写真192	腰札の下積み	731	写真258	写真257のアップ	760
写真193	写真192のアップ	731	写真259	2号甲右前草摺内面	760
写真194	1号甲後脚草摺内面のアップ	732	写真260	草摺内面アップ	760
写真195	1号甲後脚草摺下端内面のアップ	732	写真261	2号甲右前脚内面	760
写真196	1号甲後脚草摺内面の下積み直	733	写真262	2号甲右前草摺内面の木炭痕(中)と革痕(下)	760
写真197	写真196のアップ	733	写真263	2号甲腰札列内面	760
写真198	1号甲後脚草摺外面に残る織痕	733	写真264	堅上最上段に残るワタガミ結び	760
写真199	写真198のアップ	733	写真265	右前脚堅上内面のワタガミと思われる革状痕	761
写真200	1号甲後脚草摺の履輪直	733	写真266	写真265のアップ	761

写真267	写真266平織履のアップ	761	写真333	背裏面の状態	822
写真268	平織履の拡大	761	写真334	踵内底板	822
写真269	革状物質を貫く紐痕	761	写真335	踵上面の平坦部に附着した底板側面観	822
写真270	写真269紐痕のアップ	761	写真336	背鉢裏面の状態	822
写真271	2号甲右前草摺履輪の内面	761	写真337	踵内面裏面の状態	822
写真272	写真271履輪のアップ	761	写真338	背鉢内面の状態	823
写真273	2号甲裏面に発見された鹿角製小札	771	写真339	鉢内面に突き出た鉄骨のアップ	823
写真274	巻かれた状態の鹿角製小札	771	写真340	鉢内面の地板第1段と新脚の状態	823
写真275	2号甲裏面の鹿角製小札発見地	772	写真341	鉢内面の地板第2段と新脚の状態	823
写真276	発見時の鹿角製小札	772	写真342	鉢内面の銅巻板と地板の断面状態	823
写真277	鹿角製小札全容(頭部側から)	772	写真343	鉢内面地板第1段の貫つた載前履	823
写真278	鹿角製小札全容(下端側から)	772	写真344	鉢内面の新脚の状態	823
写真279	鹿角製小札全容(右側から)	772	写真345	伏板と地板第1段に打たれた新脚	823
写真280	遺存のよい2-1と悪い1-1AB(手前)	772	写真346	踵裏面の状態	824
写真281	鹿角製小札の三次元計測状況	772	写真347	踵左側の裏面アップ	824
写真282	三次元計測のレーザー照射状況	772	写真348	踵裏面の小札と鉢の縫じ組紐	824
写真283	取上げ前のクリーニング	773	写真349	踵裏面の小札と縫じの組紐	824
写真284	2号甲との隙間の火気除去作業	773	写真350	踵右側の裏面アップ	824
写真285	鹿角製小札取上げ作業	773	写真351	左組当て第1段裏面の鉢縫じ組紐と平織履	825
写真286	鹿角部のコーティング作業	773	写真352	鉢内面に残る横走の紐当て付け紐痕	825
写真287	2段目小札列の状態	773	写真353	左組当てと鉢を縫じる組紐	825
写真288	2-3段目の小札列を残した状態	773	写真354	写真353組紐のアップ	825
写真289	写真288の頭部側からの状態	773	写真355	踵裏面に残る縫じれた平織履	825
写真290	取上げた鹿角製小札	773	写真356	踵裏面に残る平織履のアップ	825
写真291	鹿角製小札出土状態全容	774	写真357	踵裏面に残る平織履の可能性ある痕跡	825
写真292	1-3段合成図(三次元画像)直上からの裏側面	781	写真358	踵第3段の履輪の可能性ある平織履	825
写真293	1-3段合成図(三次元画像)写真292の反対面	781	写真359	踵右側裏面に残る平織履と革状物質	826
写真294	1-3段合成図(三次元画像)札足側から	781	写真360	踵中央裏面の状態	826
写真295	1-3段合成図(三次元画像)表面の中央が正面	781	写真361	踵第3段裏面の平織履	826
写真296	1-3段合成図(三次元画像)左側面から	781	写真362	写真361平織履のアップ	826
写真297	右側2枚分の縦列列(三次元画像)	781	写真363	踵第3段裏面の履輪と思われる平織と革包み	826
写真298	写真297の裏面	781	写真364	写真363のアップ	826
写真299	写真297の左側面観	781	写真365	踵第3段裏面の平織履の広がり	826
写真300	小札右側縁に直交する細かな平行条線(三次元画像)	782	写真366	写真365平織履部分アップ	826
写真301	小札裏面に残る斜行条線群(三次元画像)	782	写真367	左組当ての裏面状態	827
写真302	小札裏面に残る削り痕(三次元画像)	782	写真368	左組当て履輪の状態	827
写真303	小札裏面左辺の削り痕(三次元画像)	782	写真369	左組当て裏面の履輪痕サンプル採取	827
写真304	小札右側縁の面取り削り痕と直交平行条線(三次元画像)	782	写真370	左組当て履輪部分のサンプル採取と糸かがり	827
写真305	小札表面の下指み孔周辺の削り痕(三次元画像)	782	写真371	写真370の糸かがりアップ	827
写真306	小札下端の削り段差ないし折痕(三次元画像)	782	写真372	右組当て表(外)面の状態	828
写真307	小札減孔にある穿孔段差か(三次元画像)	782	写真373	右組当て前側縁の状態	828
写真308	小札側縁に残る鹿角角紋	783	写真374	写真373の平織と縫じ組紐のアップ	828
写真309	小札裏面に残る鹿角海綿質	783	写真375	写真374の平織アップ	828
写真310	小札内面の鹿角海綿質のアップ	783	写真376	右組当て後側縁の糸かがりによる履輪	828
写真311	小札外面に残る斜行条線群	783	写真377	写真376糸かがりのアップ	829
写真312	小札表面右側縁の平行条線群	783	写真378	右組当て第5段前部の小札と点	829
写真313	小札表面右側縁の平行条線群と穿孔周辺削り	783	写真379	写真378の札足履輪	829
写真314	平行条線群のアップ	783	写真380	写真379の糸かがりアップ	829
写真315	平行条線群を潰す研磨機	783	写真381	写真379の履輪縫じ組紐	829
写真316	鹿角製小札個別写真(1)	798	写真382	写真379の履輪横断面	829
写真317	鹿角製小札個別写真(2)	799	写真383	写真379の履輪横断面	829
写真318	貫出上状態	804	写真384	写真381組紐の部分アップ	829
写真319	背右側面観	804	写真385	写真378の側縁履輪アップ	830
写真320	背正面観	804	写真386	写真385の平織部分	830
写真321	1号人骨を覆ったウレタンの掘削	804	写真387	写真385のはくれた組紐部分	830
写真322	頭部付近の下位調査で見えた背踵部分	804	写真388	写真385の第1減孔を通した組紐痕	830
写真323	背左側面に堆積した火砕流堆積物S ₁ 上部層	807	写真389	写真385の糸かがりアップ	830
写真324	背を埋める火砕流堆積物(S ₁ とS ₂)断面	807	写真390	履輪側縁のぞく平織履	830
写真325	背頂部の鉄骨	807	写真391	組紐に縫じ込まれた平織履	830
写真326	左組当ての表(外)面	807	写真392	履輪に残るフェルト質	830
写真327	踵左半の表(外)面	807	写真393	鉢内面の2孔を貫通する紐痕(?)痕	831
写真328	踵右半の表(外)面	807	写真394	地板第2段内面にみられた紐痕	831
写真329	踵末端に潜りこんだ鉄線の基部	807	写真395	背鉢右後ろ内縁部に残る被覆状部分	831
写真330	右組当ての表(外)面	807	写真396	地板第2段内面の平織履と革状物質	831
写真331	背縦断面(C T 画像から)	808	写真397	踵後部内縁部に残る平織履の被覆痕	831
写真332	背裏面の状態	808	写真398	写真397の被覆痕のアップ	831

写真399	鉢後部内面(腰巻板～地板第2段)の状態	831
写真400	左前の地板第2段内面	831
写真401	鉢と相当して縫じ付け部の平面画像(C T撮像)	832
写真402	胄中央部の縦断面画像(C T撮像)	832
写真403	上から透視した胄全体像(C T解析画像)	833
写真404	左側方から透視した胄全体像(C T解析画像)	833
写真405	胄出土状況(火砕流中の上層断面)	835
写真406	胄出土状況(右に銀・鹿角併用装具)	835
写真407	胄取上げ直後の状況	835
写真408	胄取上げ直後の状況(銀・鹿角装具近接)	835
写真409	胄取上げ直後(鹿角装具直弧文拡大)	835
写真410	胄全体	843
写真411	胄袋下端部銀・鹿角装具出土直後	843
写真412	胄袋下端部銀・鹿角装具	843
写真413	胄袋下端部銀製緑金具側面①②	843
写真414	胄袋下端部銀製緑金具側面①	844
写真415	胄袋下端部銀製緑金具側面②	844
写真416	胄袋下端部銀製緑金具側面③	844
写真417	胄身付着獣毛	844
写真418	胄身付着獣毛拡大①	844
写真419	胄身付着獣毛拡大②	844
写真420	胄銀・鹿角併用装具拡大	844
写真421	胄 C T スキャン撮影状況	844
写真422	胄 X線(胄身～銀製緑金具)	845
写真423	胄 X線(銀装具・鹿角装具)	845
写真424	胄 C T スキャン対部断面	845
写真425	胄 C T スキャン八角袋部断面	845
写真426	胄 C T スキャン袋端部銀製緑金具断面	845
写真427	鹿角鉄鏝出土状況	855
写真428	鹿角鉄鏝と甲着装人骨	855
写真429	矢柄の断面	855
写真430	鹿角鉄鏝 X線写真(No. 1)	855
写真431	鹿角鉄鏝 X線写真(No. 2)	855
写真432	鹿角鉄鏝①～④	860
写真433	鹿角鉄鏝⑤～⑧	861
写真434	鹿角鉄鏝⑨～⑫	862
写真435	鹿角鉄鏝⑬～⑮	863
写真436	鹿角鉄鏝⑯～⑳	864
写真437	鹿角鉄鏝㉑～㉓	865
写真438	鹿角鉄鏝㉔～㉖	866
写真439	鹿角鉄鏝㉗㉘㉙・鏝塊集合	867
写真440	鹿角装刀子・掘取出土状況	871
写真441	鹿角装刀子全体・X線撮像	871
写真442	鹿角装刀子直弧文刻線①	872
写真443	鹿角装刀子直弧文刻線②	872
写真444	鹿角装刀子鹿角柄(下より)	872
写真445	鹿角装刀子鹿角柄(上より)	872
写真446	鹿角装刀子茎①	872
写真447	鹿角装刀子茎②	872
写真448	鹿角装刀子付着ベンガラ痕跡	872
写真449	鹿角装刀子付着ベンガラ痕跡拡大	872
写真450	鹿角装刀子対部先端革痕跡拡大①	874
写真451	鹿角装刀子対部先端革痕跡拡大②	874
写真452	I号甲前脚部の下腹部分近内側から出土した砥石	874
写真453	砥石平面の状態	874
写真454	砥石下縁の赤色顔料物質付着状態	874
写真455	碧玉	880
写真456	白玉	880



第252図 4面遺構全体図



第253図 13区4面遺構全体図

第2節 4面遺構

1 4面(屋敷地跡他関連)遺構全体状況

(第252図)

金井東遺跡のHr-FAの第1回目のマグマ水蒸気爆発で泥雨状の火山灰(S₁)が降下した直前の遺構群である。道・屋敷地・平地建物を中心に展開する。遺跡地北部の13・12区からは、道が認められる。9区から屋敷地東部が確認され、屋敷地外の北部にも屋敷地に接するように畠が検出された。屋敷地内には3棟の建物、畠が確認されている。4区からは、自然流路の可能性が高い31号溝が蛇行して北西から南東に向けて調査区の南側を流れており、その中から後章で述べる甲を着た人物や首飾りをした女性や2号甲・鉄鏝が出土している。9区の屋敷地外南すぐに、平地建物が1棟あり、さらにそこから南西へ15mで、4区北西部端には900個の土器を配置する3号祭祀遺構がある。ここからは土器以外の祭具も大量出土している。また、4区の北東部の数ヶ所に、畝跡の痕跡と想定される溝状の遺構が検出されている。この区画を畠として耕作していた可能性がある。2区には、2基の祭祀遺構があり、1区には5棟の平地建物とともにその南から道が確認できた。さらに南の8区からは道が、7区からは、平地建物が1棟、道が2条、祭祀遺構が2基、立木の根付近に集石したものや、単独に置いた立石

などの祭祀関連遺構がある。

以上、見てくると、一段階前の5世紀後半の時期に比べてかなり建物の棟数が減っていることが分かる。調査区の東側はすぐに比高20～30mの断崖があり、生活域の展開が難しいことからすると、ムラの中心は6世紀初頭になると、調査区より西側に移っていた可能性が高い。31号溝の中から、多くの土師器が出土することなども上流(西側)から土器が流されたものと考えて良いと思われる。

以下、北側から調査区ごとに火山灰直下の遺構群を記載する。

13区4面遺構(第253図 PL.100)

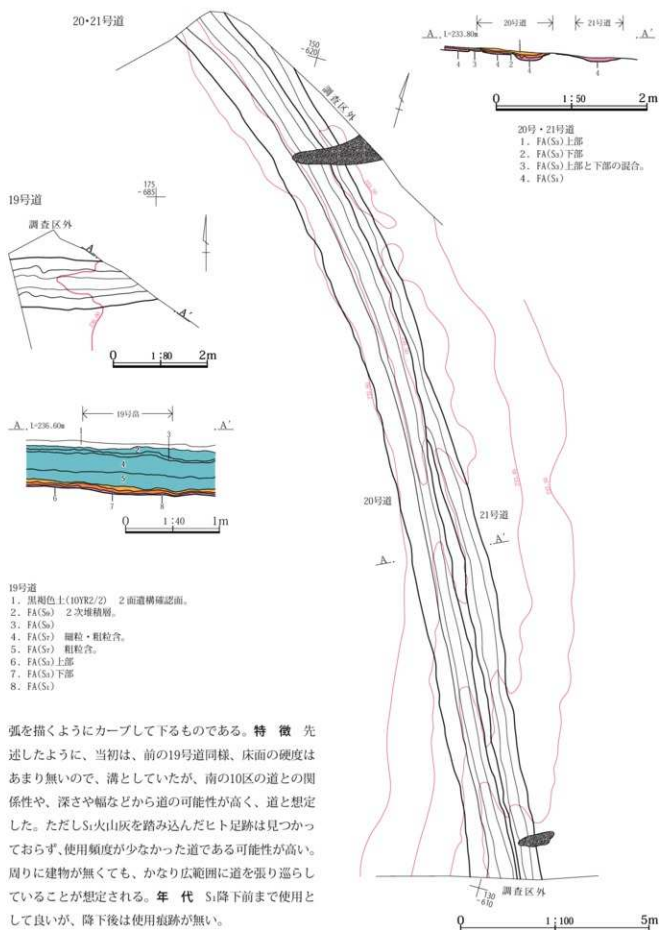
最北部の13区北部は、標高は、236～234.6mの西から東に向かう緩傾斜地である。西北隅から19号道が東西方向に検出された。13区南部は、標高237.7～233.1mで、西から東に向かい緩やかに傾斜している。遺跡地の東端に浅い南北方向に走る道の遺構が2つある。

19号道(第254図 PL.100)

位置 13区の西北隅にある。**遺存状況** ごく一部のみに調査した。**埋土状況** S₁火山灰が直接覆っている。**規模** 現状長1.6m、上幅52cm、下幅12cm、深さ4cmほどでごく浅いもので東に向かってやや下がる。深さが浅く、底面は道特有の硬度が無いが、道の可能性を考えている。**年代** S₁火山灰降下前まで使用として良い。

20・21号道(第254図 PL.100)

位置 13区東端に、20・21号道が並行するようにある。**重複** 20号道が21号道を切っているので、21号道が古く、20号道が新しい。**調査経緯** 床面の硬度が無いことなどから、当初溝としたが、深さや形状から道の可能性が高い。**埋土状況** S₁火山灰が直接覆っている。**規模** 21号道は現存長9.8m、上幅60～80cm、下幅22～36cm、深さ6cmほどの浅い道で、20号道は現存長9.9m、上幅100～130cm、下幅25～30cm、深さ10cmほどである。北から南への比高差25cmで、勾配率2.5%、勾配1.4°で緩やかである。いずれも、北西から南東にかけて緩い円



弧を描くようにカーブして下るものである。特徴 先述したように、当初は、前の19号道同様、床面の硬度はあまり無いので、溝としていたが、南の10区の道との関係性や、深さや幅などから道の可能性が高く、道と想定した。ただし S_1 火山灰を踏み込んだヒト足跡は見つかっておらず、使用頻度が少なかった道である可能性が高い。周りに建物が無くても、かなり広範囲に道を張り巡らしていることが想定される。年代 S_1 降下前まで使用として良いが、降下後は使用痕跡が無い。

第254図 13区道平面図・土層断面図

(4) 10区4面遺構(第255図 PL.100)

10区北部から南部には一部調査地の間隙があるも、西から東に向かって標高233.3～229.6mの西に向かう緩傾斜地である。北部に東西方向に走る道と南北に走る道が接続し、南部には、南北方向に走る道が3本あり、うち、1本は南の9区の屋敷地北部の畠の北側に接続するものである。

10区の道について 10区には、北へ延びる道が3本あり、さらに畦状遺構を伴う東西方向への道がある。後で述べるように、S₁火山灰降下後、古い道、あるいは使用頻度の少ないと推定される8・9・17・18号道以外は、それぞれヒト足跡があり、道として機能していたことが分かる。

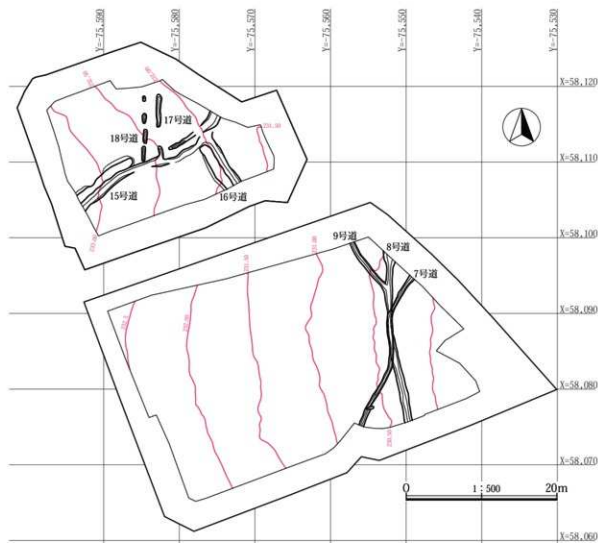
(1) 15号道(第256図 PL.100)

位置 調査地北部で、東西方向に走り、16・17・18号道路が南北に接続する状況である。**埋土状況** S₁火山

灰が道上に降下している。**規模** 現存長21.5mで、上幅0.8～1.2m、下幅50～64cm、深さ1cmであり、西から東に向けて1.31mの比高差があり、勾配率6.1%、勾配3.5°であり、東に向けてやや傾斜している。北側に幅1.5～1.6mの畦状の高まりがある。**足跡** 後章で述べるように、S₁上のヒト足跡が、この道上を中心に出土している。**年代** S₁降下前・後まで使用として良い。

(2) 16号道(第256図 PL.100)

位置 10区北部の東南端にある。15号道に南から繋がる。**埋土状況** S₁火山灰が道上に降下している。**規模** 現存長6.5m、幅1.7～2.2m、深さ3cmと幅が狭く浅い南北方向の道で、ごく緩やかに南に下る。東側に道に並行するように幅35～40cm、高さ5cmの畦状の高まりがある。**足跡** 後章で述べるように、S₁上からヒト足跡が出ている。**年代** S₁降下前・後まで使用として良い。

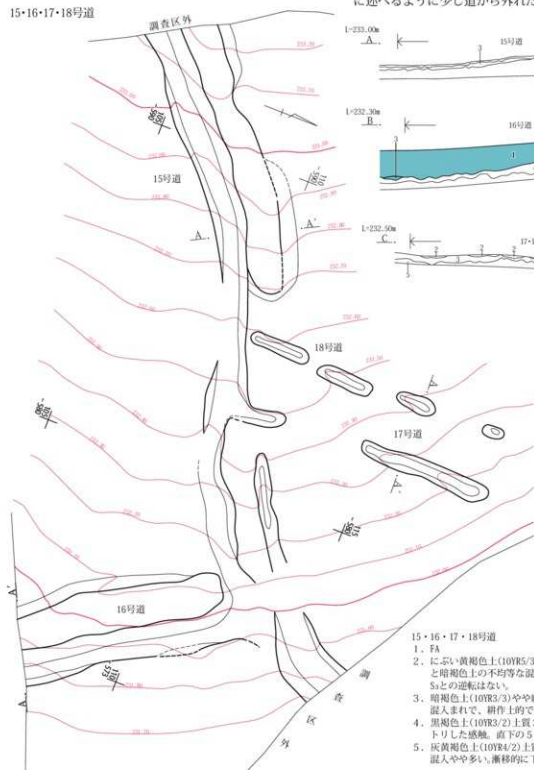


第255図 10区4面遺構全体図

(3) 17号道(第256図 PL.101)

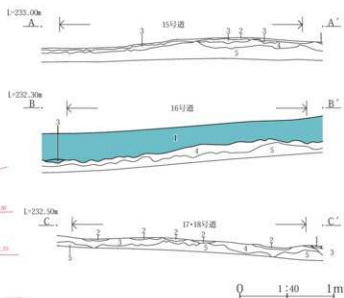
位置 10区北部、15号道から分岐し、北に向かう。
埋土状況 S_1 火山灰が道上に降下している。規模 途切れ途切れに、現状で長8.0m、幅48～58cm、深さ2cmで、緩やかに北に上る。年代 S_1 降下前使用として良い。

15・16・17・18号道



(4) 18号道(第256図 PL.101)

位置 17号道の東側で、並行するようにある。これを18号道とする。埋土状況 S_1 火山灰が道上に降下している。規模 途切れ途切れに、現存長8.6m、幅35～52cmで、深さ3cmで、緩やかに北に上る。足跡 後章に述べるように少し道から外れた所の S_1 上からヒト足跡



15・16・17・18号道

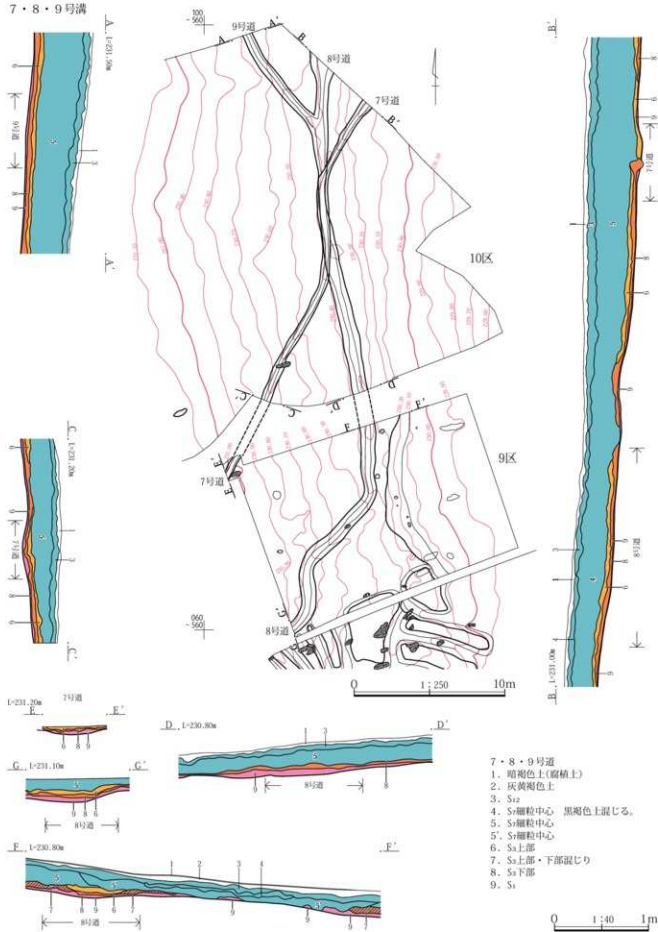
1. FA
2. にぶい黄褐色土(10YR5/3)FA (S_1 主体で一部 S_2 が混じる)と暗褐色土の不均等な混土。 S_1 は不揃いなブロック状で S_2 との逆転はない。
3. 暗褐色土(10YR3/3)やや腐植土質の細粒土。炭化物粒の混入まれで、耕作土的でない。微細なローム粒混じり。
4. 黒褐色土(10YR3/2)土質3層と同じ。混入物少なくネットリした感。直下の5層との境に鉄分凝集あり。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2)土質3層と同じ。微細なローム粒混入やや多い。漸移的に下側へ向かい黄色味が強くなる。

0 1:120 5m

第256図 10区道平面図・土層断面図1

第三章 発見された遺構と遺物

7・8・9号溝



第257図 10区道平面图・土層断面図2

が出ている。年代 S_1 降下前・後使用として良い。

17・18号道について 溝状に並行するようにあるので、道は中央の高まりで、その両側に溝溝があると考えられることもできる。その場合、幅246cm、高さ5cmの道となる。

(5) 8号道(第257図 PL.101)

位置 10区南部東側にあり、9区北西部の9号畠の北側までつながる。**埋土状況** S_1 火山灰が道上に降下している。**重複** 7号道に切られる。**規模** 長推定22.2+m、上幅1～1.5m、下幅30～60cm深さ1～2cmで、南北方向に走向するものである。**特徴** 道路面に明瞭な硬度を有するものである。南の9区へ繋がり、9区屋敷地北側の高地の北側を通るものである。**年代** S_1 降下前使用として良いが、7号道に切られるなど S_1 降下時には使用されていなかった可能性が高い。 S_1 上にヒト足跡が無いことなどもそれを裏付ける。

(6) 9号道(第257図 PL.101)

位置 10区南部東側、8号道路から分岐して北西方向に行くものである。**埋土状況** S_1 火山灰が道上に降下している。**規模** 現存長7.9m、上幅0.8～1m、下幅30～40cm、深さ2cmほどで、南から北への比高差は26cmで、勾配率3.3%、勾配1.9°で、北西に向けて上る。**年代** S_1 降下前使用として良いが、深さも浅く、その後の S_1 火山灰が積もった後のヒト足跡が一切無いので、 S_1 降下時には、8号道同様、道として使用されていなかったか使用頻度が低い可能性がある。

(7) 7号道(第257図 PL.101)

位置 10区南部、東端部にあり、9区北西端部につながる。**重複** 8号道を切っている。**埋土状況** S_1 火山灰が道上に降下している。**規模** 長推定21+m、上幅0.8～1.2m、下幅20～60cm、深さ1～6cmで道路床面は硬度がある。北と南の比高差が60cmあり、ごく緩やかに北に向かって上る。南の9区に繋がり、屋敷地北側の畠から10mほど離れて西側に向かっている。**足跡** 後章で述べるように S_1 上からもヒト足跡が多数出土しており、 S_1 降下後も機能していたことが分かる。**年代** S_1 降下前・後も使用している。

4 9区4面遺構(第258図 PL.102)

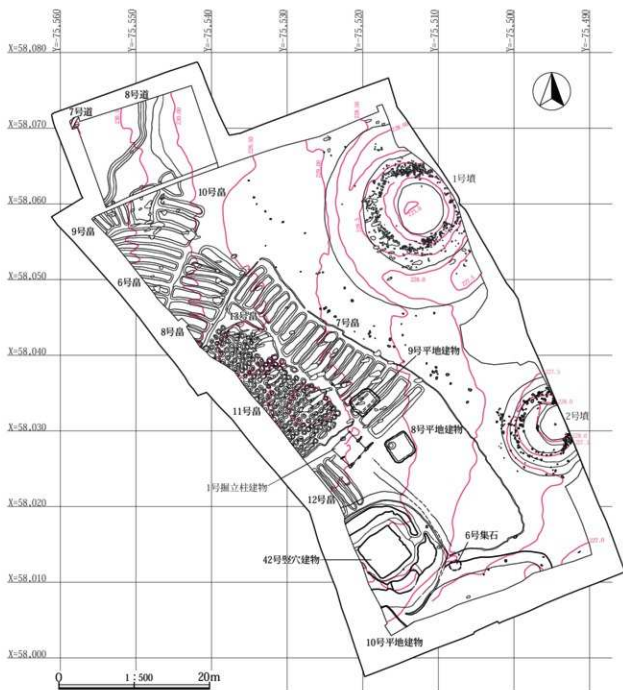
9区にはこの遺跡で明瞭に分かる屋敷地跡が出土した。屋敷地は、 S_1 火山灰で覆われており、その直前の様相を示すものである。屋敷地の西側は調査区外のため、

どれほど展開するのかわ判断できない。また屋敷地外の北側には、高地がある。なお、東側にある2基の古墳は、いずれも S_1 火山灰降下時には、周堀が有る程度埋まっていたもので、期的にはやや遅いものの、景観の中では、屋敷地の東すくにあたるように築かれているものであり、この屋敷地との関連を考慮すべきであろう。

なお、調査途中で保存が決定したため、8号平地建物より南側に関しては、 S_1 火山灰を剥がさずに、ヒト足跡を残したまま調査を終了し、上に砂をかぶせて保存処置を施している。調査は8号平地建物より北側は S_1 火山灰を剥がした段階で、南側は S_1 火山灰面で調査は終了している。42号竪穴建物も、床面精査直前で調査を終了した。そのため、 S_1 火山灰下の情報は少なくとも8号平地建物以南については情報を得ることができなかった。東側の屋敷地の現状での面積は417.6㎡である。3棟の建物と3区画の畠がある。以下、それぞれの遺構について記す。

(1) 屋敷地区画内の遺構群(第259図 PL.102)

区画 屋敷地の区画は、高さ2cmにも満たない段差で、屋敷地内部側から斜め段状に下がる形で屋敷地周りを区画している。また、特に区画の北・東側で確認できたのだが、区画の内外に直径2cmに満たないほどの小穴が複数個あり、おそらく垣根に使用した枝状の柱痕跡かと思われるが、詳細な調査をできずに調査が終了したので、情報は平面図での位置のみである。この屋敷地の区画は、南部の42号竪穴建物の周堤に当たって止まる。竪穴建物の周堤の南側は、地形変換点で、東西方向に1mほど一斉に下がっている。区画の段差と周堤の接点から少し南に下がった傾斜地の途中から、幅17～31cm、深さ1～15cmの区画溝が、周堤の西側半分ほどまで周る。そこで区画溝は終了するので、それ以降は自然の傾斜地を利用した区画となっている可能性が高い。屋敷地北側にある屋敷地外の高地との境界は、高さ2cmに満たない小さな外側へ傾斜する段差が、屋敷地東辺から北に向かうが、90°近い屈曲で西側へ方向転換するコーナーで、段差の下がる方向が逆転し、屋敷地内の高地側に斜めに下がる形態を有する。地形的に西側が高くなっているので、段差も西側に行くほど高くなり、北東コーナーでは、3cmほどの段差が、西側端では最大30cmほどの段差となっている。畠が屋敷地内の北側に4ヶ所ある。うち1ヶ所は休耕中と想定している。



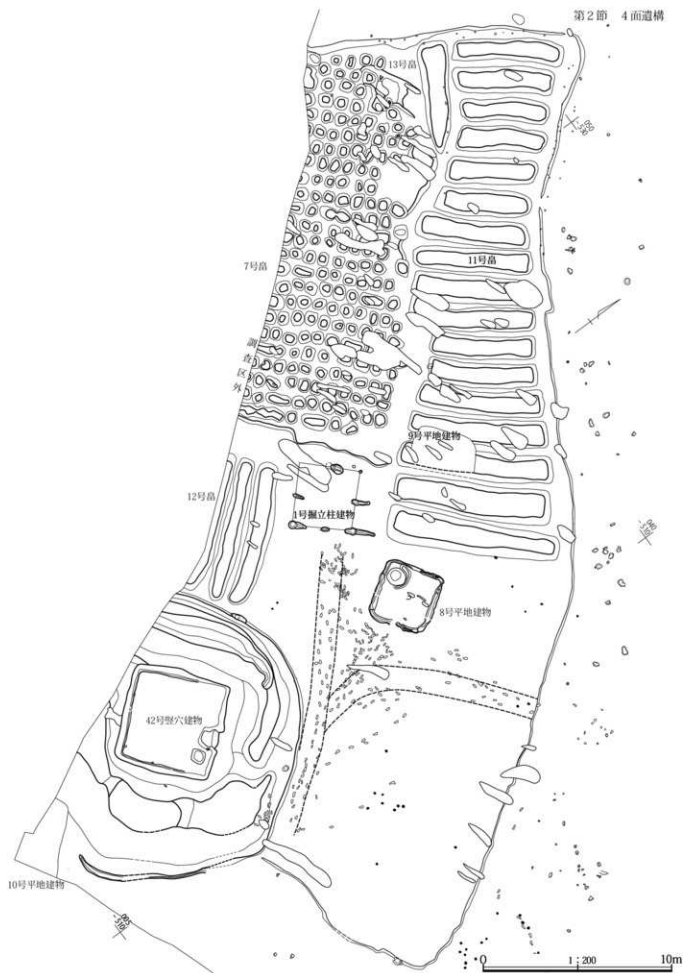
第258図 9区4面遺構全体図

(2) 42号竪穴建物

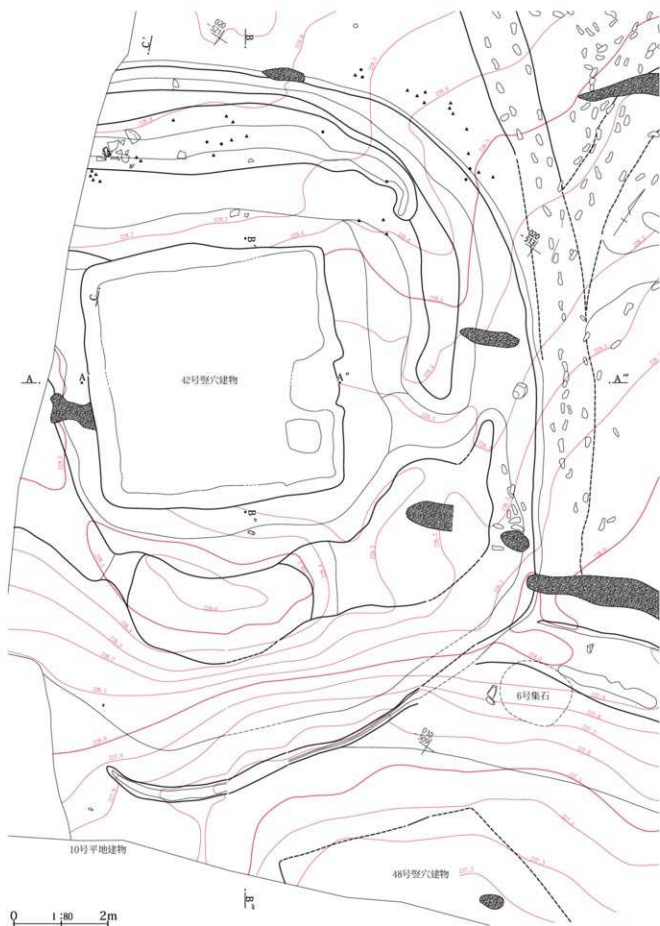
(第260～266図 PL.103～105・311～313)

位置 屋敷地内の南端にあり、屋敷地の境界の段差が竪穴建物の周堤の中央部にあたる。**調査経緯** 調査途中で保存が決定したため、柱穴・竈・貯蔵穴は調査せず、土層の下部も撤去せずに残したままにしている。出土遺物は、表面に出ているものに関してはすべて取り上げた。以下、全掘しない中での情報提示となる。**遺存状況** 北西部の周堤の一部が調査区外となっている。**埋土状況** 膨大な火砕流が建物の中に入り込んでいることが分かっ

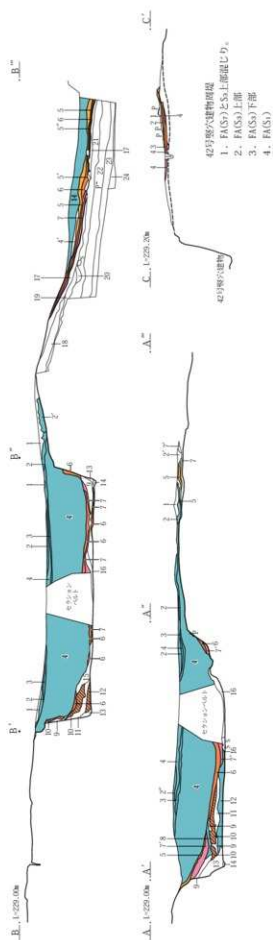
た。ほとんどすべてがS₇で、最大で90cmほど入り込んでいる。さらにその下にはS₀の下部層が入っている。さらにその下にS₁火山灰土層がごく一部であるが入っている。また、S₁と黒褐色土の混じり土なども西側を中心に入っている。さらに下層には、黒色土やローム土混じりの土が壁際で三角堆積している。三角堆積の土はローム混じりの土が中心で周堤が崩れた状況が想定される。S₀の火砕流により屋根が倒壊し、屋根上に載っていたS₁が屋根とともに屋内に入ったものと想定している。ただしS₁が最下部に積もっている箇所があり、その要因として



第250図 9区4面屋敷地図



第260図 42号竪穴建物平面図

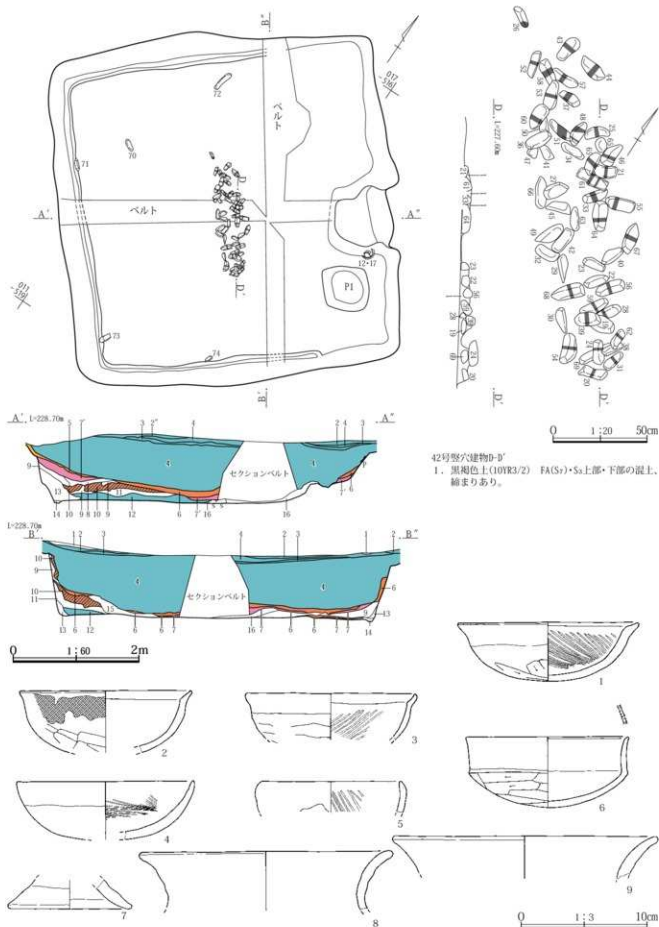


第26-11図 42号建物土層断面図

42号建物A-A'・B-B'

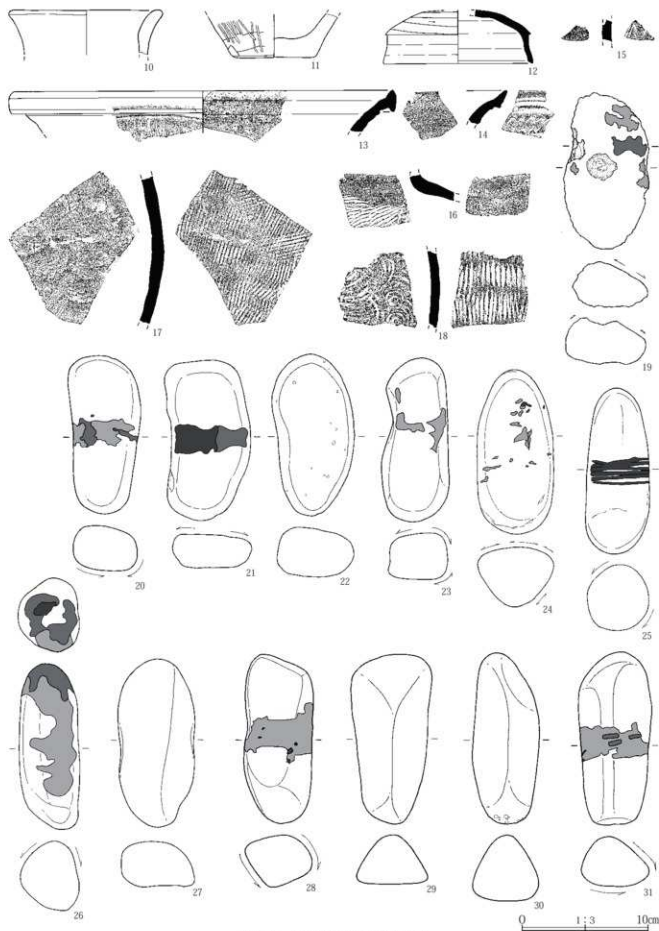
1. 黒褐色土(10YR3/2) 珚下黒含。
2. FA(Sa)
3. FA(Sa) 黒褐色土の混上。
4. FA(Sa) S₂の混上。
5. FA(S₂) 灰赤色土(2.5YR6/2)含。
6. FA(S₂)
7. FA(S₂)とS₂の混上。
8. FA(S₂)上部
9. 暗褐色土(10YR3/3) FA(S₂)を含、炭化物微量含。
10. FA(S₂)上部と下部混じり。
11. FA(S₂)下部
12. FA(S₂)
13. FA(S₂) 黒褐色土。
14. FA(S₂) 粗粒主体、黒褐色土を含、締まりややあり。
15. にふい黄褐色土(10YR4/3) ローム小塊・粒少量含、締まり弱。
16. FA(S₂)とS₂下部の混上。
17. にふい黄褐色土(10YR4/3) ローム小塊9層より多。
18. FA(S₂) 細粒と粗粒の混上。
19. 黒褐色土(10YR2/2) 褐色土塊、ローム塊を含。
20. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒小塊を含、周溝フク上。
21. 褐色土(10YR4/4) ローム小塊少量、FA(S₂)・S₂を含。
22. 黒褐色土(10YR3/2) FA(S₂)・S₂上部・下部の混上、締まりあり。
23. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒、炭化物小片を含、締まり弱、4面確認面。
24. 黒褐色土(10YR3/2) ローム1mm塊、ローム粒を少量含。
25. にふい黄褐色土(10YR4/3) ローム3~5mm塊を多量含。
26. 黒褐色土(10YR3/1) ローム1cm塊を多量含、締まり弱。
27. 黒褐色土(10YR3/2) 黄褐色土粒を少量含。
28. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒ボク土上部。
29. 褐色土(10YR4/1) 黒ボク土下部。
30. にふい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒多量含、ローム漸移層。

は、当時建物を使用しておらず傷んだ屋根からS₂が漏れ入った可能性を想定している。また、AセクションのS₂混じりの黒褐色土は、その上のS₂火砕サージにより、西側から運ばれてきたS₂とその下の黒褐色土が混じりあって入ってきた層と考えている。S₂の火砕サージでこの建物が倒壊したことはS₂火砕サージ層が、建物内一面に亘って流れ込んでいることから窺える。そして、その後のS₂火砕流で一週に埋め尽くされたことが膨大なS₂火砕流層の存在から分かるのである。倒壊した屋根や柱の痕跡などは、土層断面を見た限りでは確認できなかった。規模 東西5.43×南北5.13mで床面積は27.86㎡である。主軸方位はN-54°-Eである。周堤 建物の周りには周堤帯が良く残り、壁立ち上がりから計測すると幅2.6~3.1m、高さ5~10cmほどある。入口 南にあったと思われるが、それに該当するような痕跡は、S₂火山灰上での確認なのではっきりしないが確認できなかった。周溝 壁周溝は、南・西・北にあり、北・南には途中まで延びるものである。途中までの調査なので、深さ・幅は提示できない。柱穴 柱穴は未調査であるが、4本と想定される。カマド 未掘であるが、東

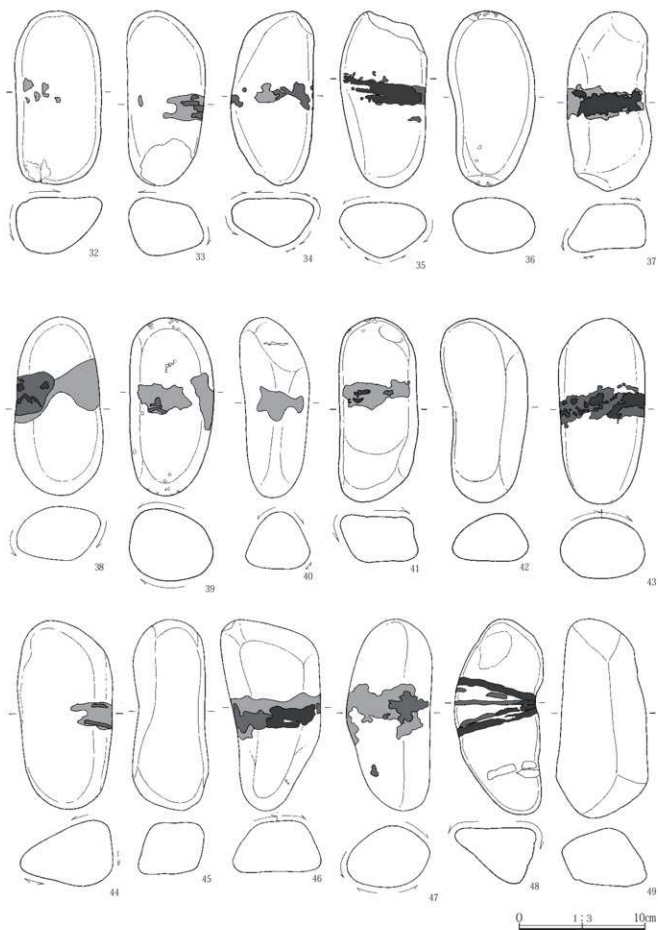


42号竪穴建物D-D'
 1. 黒褐色土(10TR3/2) FACS)・Sa上部・下部の混土、
 縮まりあり。

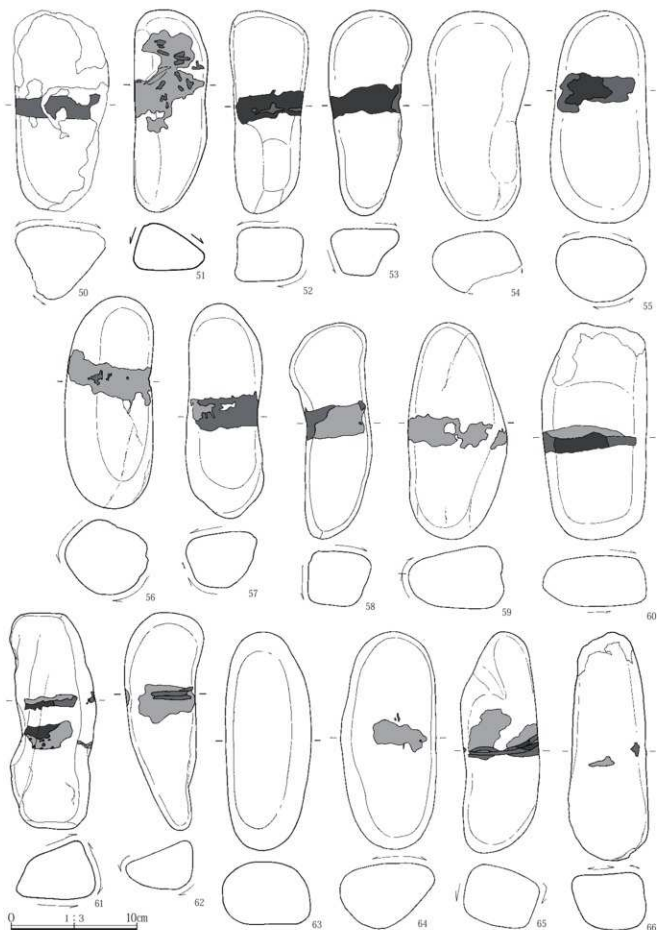
第262図 42号竪穴建物遺物出土状況図・出土遺物1



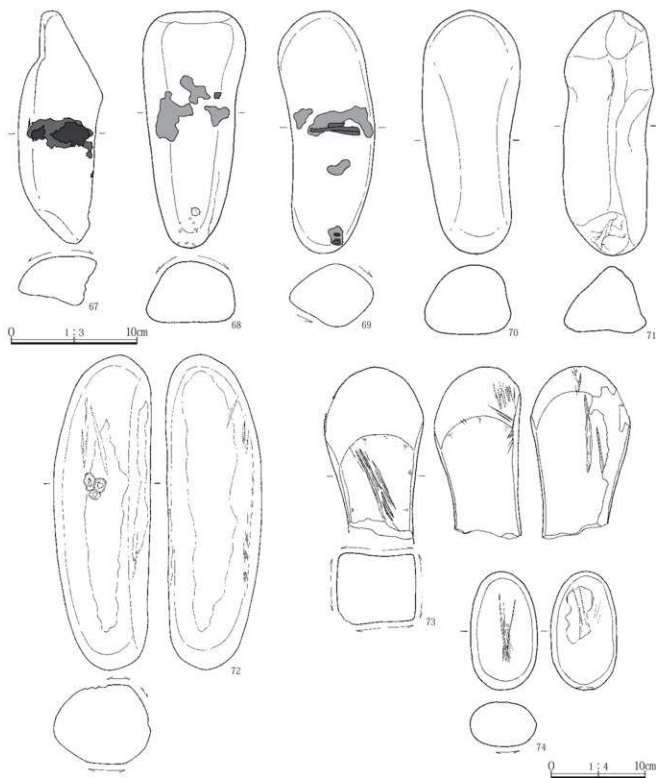
第263圖 42号竪穴建物出土遺物 2



第264図 42号竪穴建物出土遺物 3



第265圖 42号壑穴建物出土遺物圖4



第266図 42号竪穴建物出土遺物図5

壁中央やや南寄りにある。**貯蔵穴** 現状では約70cm四方の方形状に近い平面形を有するものである。未調査である。**出土遺物**(第262～266・図 PL.311～315) 砥石が3個壁際より出土している。いずれも研面が明確に残るものである。TK47併行期と推定される須恵器杯蓋が壱

上部より出土しており、須恵器は裏や甬の破片が出土している。それ以外でも杯AⅡ・Ⅳ、杯BⅠ、杯CⅠが出土している。他に、壺・小形甕などがそれぞれ出ており、Hr-FA直下の土器様相を示す資料として重要である。ただし、完備したわけではないので、限られた情報である。

興味深いのは、51個に及ぶ、非パイプ状ベンガラ（赤色顔料をまぶした紐で巻いた痕跡のある棒状礫である。紐で複数巻き付けた痕跡がよく残る資料もあるもので、このような類例は見たことがない。棒状礫の大きさも長12.3～19.3cm、幅5.0～8.3cm、重さ419.3～114.7gと有る程度そろっているが、今までいわゆる編み石と呼ばれてきたものの法量に近いものである。何か特殊な用途に使用される編み物を編んだ編み石である可能性がある。これらの棒状礫は、ほぼ中央に南北方向にまとまって出土していた。Ss混じりの黒褐色土が少し入るが、ほとんどは床面直上に置いてあったものである。性格後章で述べるが、ヒト足跡はこの竪穴建物の周りからは一切出土しておらず、この家に火山灰降下後、火砕流降下前に人が立ち入った痕跡は無い。このことも、Hr-FA降下時の初夏の時期にこの建物を使用していなかったこ

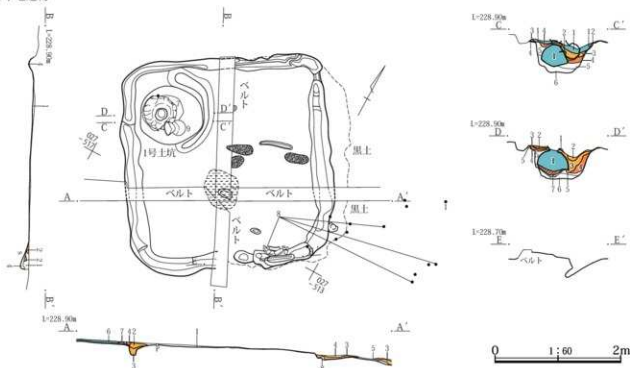
とや、家の屋根・入口などが痛んでいた可能性を示していると考えている。年代 Hr-FA降下直前の建物で、TK47併行期と推定される須恵器杯蓋や土師器杯A・杯B・杯C・壺・小形甕などが出土しており、5世紀末～6世紀初頭の当該期の土器組成を示すものとして重要である。

(3) 8号平地建物

(第267～269・図 PL.106～108・304)

位置 屋敷地南部で、42号竪穴建物の北東部、1号掘立柱建物の南東に位置する。この建物の南東には、空間が開いている。調査経緯 先述したが調査途中での保存決定のため、建物の土層観察ベルトは注記後、外さなかった。そのためベルト下にかかる、入口部及び中央部のがの確認が困難となった。周溝を調査し、貯蔵穴出土の大型土師器壺・須恵器長頸壺を取り上げた。遺存状況

8号平地建物



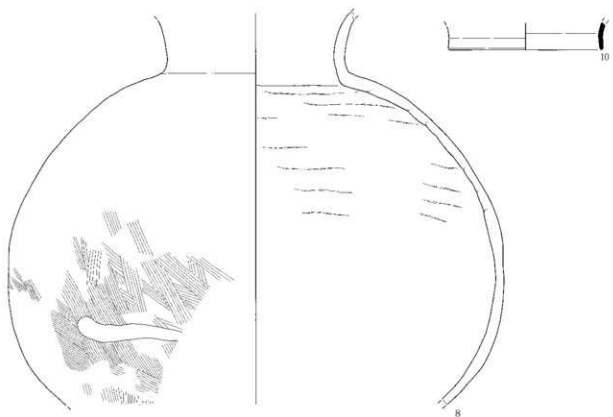
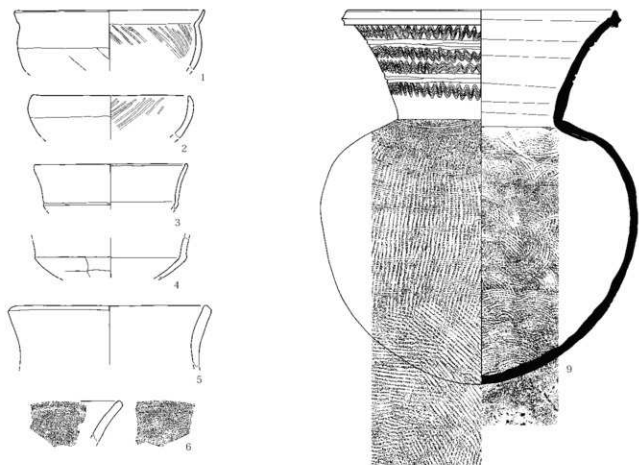
8号平地建物A'-A'・B'-B'

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) FA(Ss)上部・下部、黒褐色土、炭化物を含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2) FA(Ss)を含む。
3. FA(Ss)上部
4. FA(Ss)下部
5. にぶい黄褐色土(10YR5/3) FA(Ss)上部・下部の混じり。
6. FA(Ss)
7. FA(Ss)
8. 黒褐色土(10YR3/2)

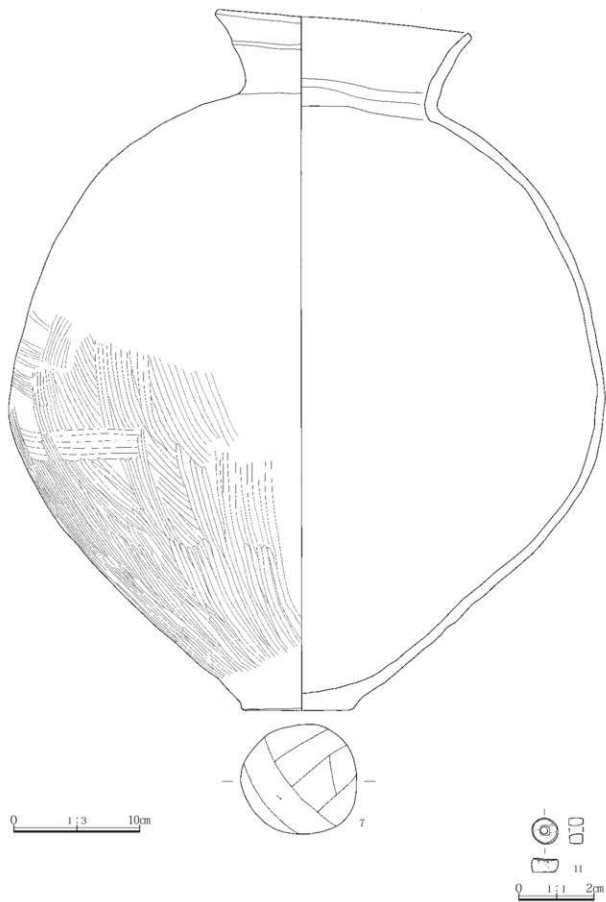
8号平地建物1号土坑C'-C'・D'-D'

1. FA(Ss) 粗粒。
2. FA(Ss)上部 一部攪乱Ssより受ける。
3. FA(Ss)上部
4. FA(Ss)下部
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱、上部を埋めた土。
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 黒ボク土、ローム粒を含む、締まりやや弱。
7. FA(Ss)とSsの混じり。

第267図 8号平地建物平面図・遺物出土状況図・土層断面図



第268図 8号平地建物出土遺物図1



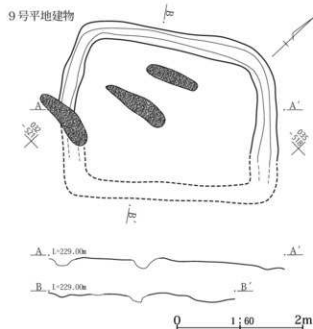
第269図 8号平地建物出土遺物図2

完存している。**埋土状況** 平地建物内部にはS₁火山灰は全く堆積せず、建物外側のみにはS₁火山灰が堆積していた。つまり、降下したS₁火山灰は屋根の上にと、屋根の無い外部のみにはS₁が積もるのである。その後S₂火砕サージの流下があって屋根や壁が倒されて、床面の上に直接S₂火砕サージが積もるのである。このようなあり方から8号平地建物が屋根を持ち、それがS₂火砕サージにより倒壊したことが分かるのである。また屋根の形の復元に、S₁火山灰の分布範囲が有効であるが、今回の調査では、東側ではある程度、S₁の分布が分かったが、西側に関しては明瞭ではなく、屋根形の復元はできなかった。**規模** 竪穴は南北3m、東西2.8mのほぼ方形で、主軸方位はN-33°-Wである。**周溝** 幅10～35cm、深さ7～15cmの壁周溝が四圍を廻るものであるが、南側中央部で溝が途切れている。**入口** 土層確認ベルトを外していないのではっきりと確認できないが、壁周溝が南側中央で切れているので、そこを入口と考えている。その入口に対応するように、東側に柱が倒れて、柱穴が東に倒れたようにゆがんだ状況で検出されている。この柱穴を、開き戸東側の支柱とすると、少なくともベルトセクションまでの55cmほどの幅の入り口があったと想定して良い。**炭化面** 建物内部中央長径60cmの平面楕円形の範囲に、床面の炭化面がある。土層断面に出てこないほど薄い層であるが、炭化面を剥がすことはしていないので性格は不明である。**貯蔵穴** 建物の北西隅に東西95、南北90、深さ48cmの平面楕円形底面平坦の大型の穴がある。穴の東側には穴の外形に沿って隆起した高さ3～6cmの土手状の高まりがある。**種実** 貯蔵穴より、イネ科(果実)、カヤツリグサ属(果実)、アカザ属(種子)が出土している。**出土遺物**(第268・269図 PL.314) 貯蔵穴には、胴径47cm、高さ54.6cmの大型土師器壺A③(第269図7)が埋置されている。底面から15cmほどの高さまで土器を埋めるための土を充填して安定させている。口辺は少し欠けていた可能性が高い。土師器壺内からは、白玉が1点出土した。この壺に何を入れていたか不明である。また、この壺のすぐ近くで、S₂火砕サージで流された須恵器壺の完形品(第269図9)が貯蔵穴のなかに転がり落ちて出土した。貯蔵穴の近くに置いてあったものであろう。在地産と考えられる須恵器である。火砕流に流された状況で、建物の南東部から、建物東部にかけて、破砕され

た状況で大型壺(第269図9)が出土した。これ以外にも、主に建物東部に火砕流に流された状況で、杯B・C・Dや小型甕破片などが出土している。**性格** この建物については、炭化面が明瞭に残るが、火処という事まで特定できない状況からすると、住居以外の作業場の可能性もある。その際に北西の穴に埋置されている大型土師器壺が、建物の性格を明らかにするヒントとなるであろう。**年代** Hr-FA S₂火砕サージで倒壊したものであり、6世紀初頭として良いだろう。

9号平地建物(第270図 PL.109)

位置 調査区中央部、8号平地建物の北5m、1号掘立柱建物から北東2.5mの、7号島の畝の間に確認された。**遺存状況** 一部7号島を壊すような形で確認できている。完全に島を壊して建物が立っているものではなく、島を一部壊して造成している途中で中断しているものと考えている。**埋土状況** S₁火山灰が全面覆っていたので、S₁降下時には建物を造成中で、屋根などはなかったと考えている。**規模** 現状では東西2.3、南北1.7mの長方形状で主軸方位はN-43°-Wである。**周溝** 浅い窪みを持つ幅20～28、深さ1～6cmほどの周溝の痕跡がある。**性格** 遺物の出土は一切無く、先述したように、遺構の出土状況からすると建設中か、建物建設中に放棄して、島を再造成していない可能性が考えられる。**年代** S₁火山灰に覆われているので、S₁降下前の遺構と考えて良い。



第270図 9号平地建物平面図・エレベーション図

(1) 1号掘立柱建物

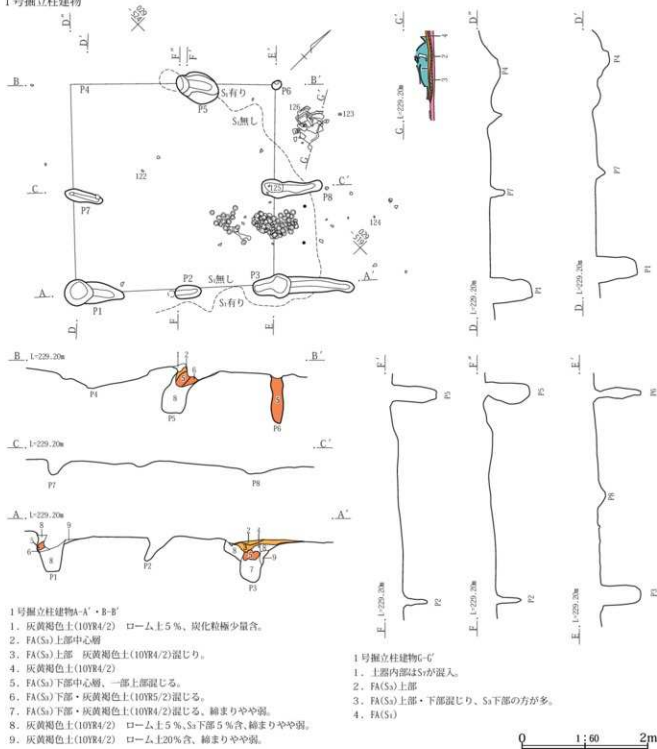
(第275～285・図 PL.110～113・315～324)

位置 屋敷地中央42号竪穴建物の北14m、8号平地建物の北西6.5mの所にある。南面以外の3方向を畝で囲まれている。**調査経緯** 当初、直径7cmほどの赤玉が大量に出始めていた時には、気づかなかったが、調査後半になってこの赤玉は、本建物の内部に置かれていたものであることが、周りの柱穴の確認により分かった。この建物も調査途中で保存が決定したため、柱穴P1・3・5・6のみ調査し、それ以外の柱穴は柱穴内の上層の火砕サージ層を外したのみで調査を中断している。**遺存状況** 西北隅の柱穴が線状衝撃痕により、不明となった以外は、遺存している。**埋土状況** 赤玉周辺の土層断面を見ると、床面には、直接S₂火砕サージが流下しており、屋根から外れたと思われる建物周りからS₁火山灰が確認できる。柱穴内の抜けた柱の内部にはS₂火砕サージか、S₂火砕サージまじりの土が入っている。42号竪穴建物・8号平地建物同様にS₂火砕サージにより倒壊したものである。東側にはS₁火山灰の降下範囲を確認できたが、西側は、建物と気づかずに調査したため、範囲確認はできず、屋根構造を知る情報は得ることができなかった。気になるのは、P6周辺にはS₁が降下していることで、東側には壁が無い空間があった可能性がある。そのことは、赤玉が、柱間をまたいで外側に一部出土していることから窺える。**規模** 柱間1.6m、2間で3.2mの2間×2間の側柱建物で、高床でない平地式の掘立柱建物で、主軸方位はN-46°-Wである。**柱穴** 先述したようにP1・3・5・6のみ調査しており、P1は、長径45、短径40、深さ62、柱痕径10cm、P3は、長径38、短径(35)、深さ65cm、P5は、長径33、短径30、深さ68、柱痕径15cmで、P6は、柱痕のみで、径15、深さ76cmである。まとめると、柱穴は長径が30cm代で、深さは60～70cm代であり、柱の太さは10～15cmほどであることが分かる。**入口** 後章で記述するが、S₁上のヒト足跡の出入りの様子から、入口は南東側のP2・3の間にあることが分かる。入口の構造は不明である。**衝撃力算定** 柱穴の火砕サージによる歪みを見ると、実は複雑な力が加わっていることが分かる。平面で見ただけでも、P6以外は、すべてきれいに東側に柱が倒れているが、断面図を見ると、P1は柱が浮き上がる様にして倒れ込むが、

P3・5は、柱が東に倒れるときに西側壁を反動で崩すような動きを示す。ところがP6は、柱穴は完存し、浮き上がってそのまま抜けたような形を想定できる。このようにS₂火砕サージにより衝撃を受けた時の、建物内での柱があった場所の違いによる力学的な違いから、各柱についてもそれぞれ、衝撃を受けた時の動き方が異なることを示すものと考えている。なお、群馬大学地盤工学研究室の亀山ひろ氏・若井明彦教授との共同研究で、地盤工学からみた柱穴の歪みから想定される衝撃力推定を、柱穴の歪み加減を3次元解析で分析した結果、雲仙普賢岳で測定された火砕流速度時速108kmと同じ速度でS₂火砕サージが流下したと仮定すると、250～500kgの物体が衝突する力積に相当するとの仮説が立てられている。**出土遺物**(第273～285・図 PL.315～324) 赤玉と呼称した、赤色球状未焼成土製品が総数約120個(確認できるものだけで、一括資料で崩れてしまったものも含めればさらに増える)と大量出土した。直径6.5～8.3cm(平均7.2cm)、重さ235～373g(平均280g)である。形態は底面が平坦で山形を呈するものが基本で、それにほぼ球形だが小さな底部が平坦面を形成するものがある。焼成していない。南東のP3とP8の柱間から東西方向に2ヶ所に分かれて出土している。分析によれば、パイプ状ベンガラ(鉄細菌による生物系ベンガラ)ではないが、酸化鉄に代表される鉱物質の非パイプ状ベンガラと呼ぶには鉄分が少なく、また石英や小礫などの夾雑物が多いので、赤みの強い赤土を採取して固めた未焼成品と想定されている。この想定は、本岡町古墳群C区2号墳資料も同様である。西側の一群は、1段で、総数17個と本来の形が崩れてしまった一括の資料である。球形状の赤玉が多く含まれていて、東側の一群と好対照を成す。東側の一群は、3段に積み上げており、総数87個で、ほとんどが、山形の形態のものである。下段のものは、重みにより形が崩れているものや、隣の赤玉と融着しているものなどが多い。93の赤玉にあるように、底面に2本の溝が並列する圧痕が残り、植物の茎の圧痕の可能性もある。乾燥する際に下に直接つかないように台として置いたものと考えたい。ただし、この痕跡が残るのはこの93のみで、それ以外の床面に直接、接地する資料であっても、痕跡は残っていないので、常に台として利用するものではなかったと考えている。なお、本岡町C区2号墳例に

も同じような痕跡が残るものがある。東群の底面は少し窪んでおり、安定して置けるようにしたものと考えられる。赤玉の大量集積は、この建物のみである。これ以外に9号竪穴建物からも1例出土しているが、赤みが強く固めて焼いている可能性のあるものである。赤玉の用途については、別途想定しているが、祭儀や副葬品としての意味合いを持つものと、実際にベンガラとして使用し

1号掘立柱建物



1号掘立柱建物A-A'・B-B'

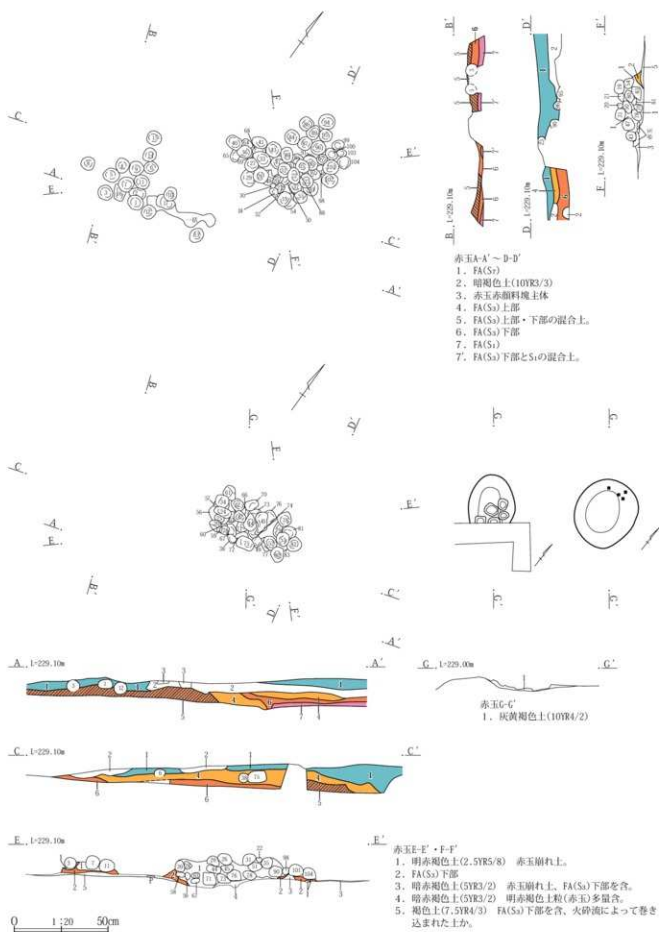
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%、炭化粒極少量含。
2. FA(Ss)上部中心層
3. FA(Ss)上部 灰黄褐色土(10YR4/2)混じり。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2)
5. FA(Ss)下部中心層、一部上部混じる。
6. FA(Ss)下部・灰黄褐色土(10YR5/2)混じる。
7. FA(Ss)下部・灰黄褐色土(10YR4/2)混じる。締まりやや弱。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%、Ss下部5%含、締まりやや弱。
9. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土20%含、締まりやや弱。

たものがあると考えている。第5分冊分析編に掲載した志賀氏の分析によると、群馬県内の赤色顔料試料をいくつかサンプル的に調べてみた所、パイプ状ベンガラの使用例もあるが、多くは石英や小礫などの夾雑物が多い、赤色土系のがほとんどで、それらが実際に石室の壁面や埴輪塗彩に使用されていることが分かってきた。群馬県以外の他地域では、パイプ状ベンガラを使用するか、

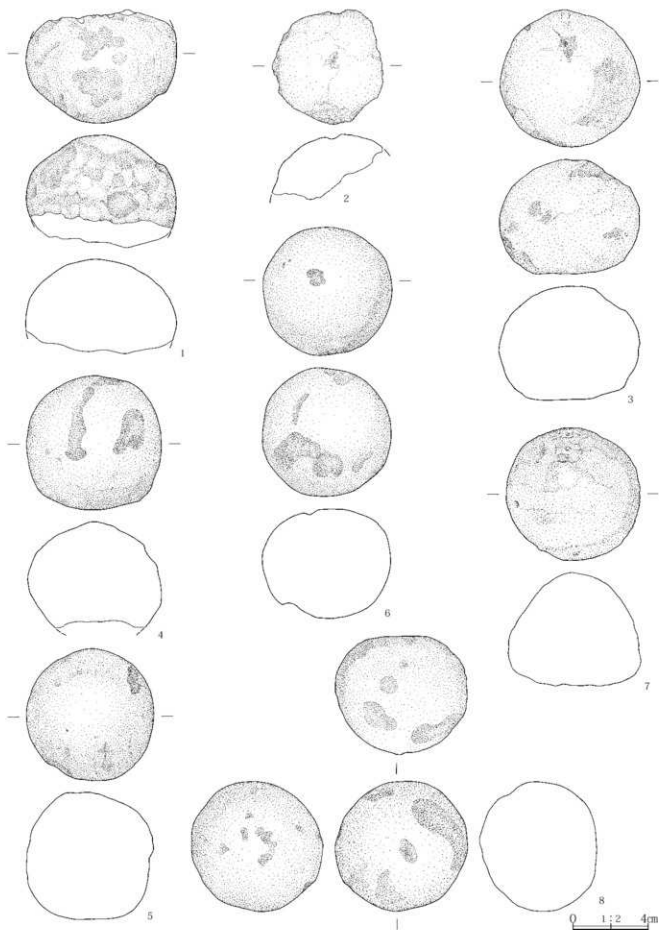
1号掘立柱建物G-G'

1. 土器内部はSgが混入。
2. FA(Ss)上部
3. FA(Ss)上部・下部混じり、Ss下部の方が多。
4. FA(Ss)

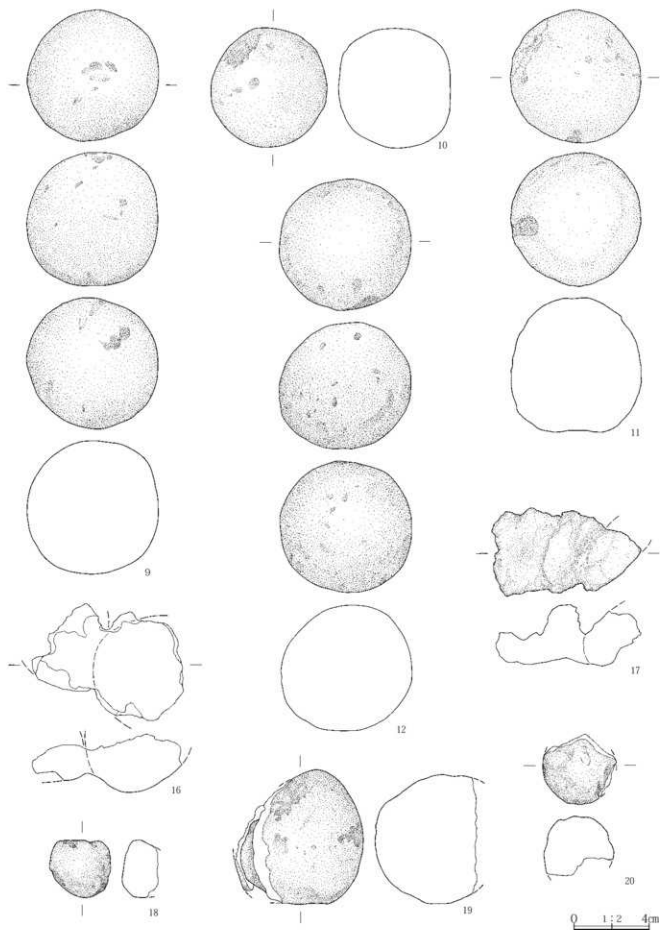
第271図 1号掘立柱建物平面図・土層断面図・エレベーション図



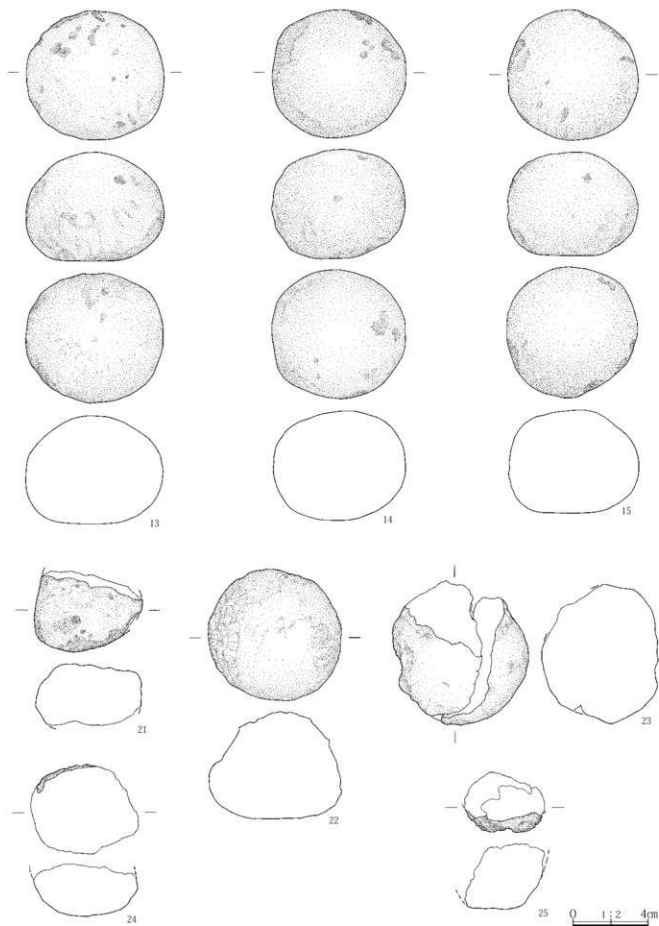
第272図 1号掘立柱建物赤玉出土状況図・土層断面図



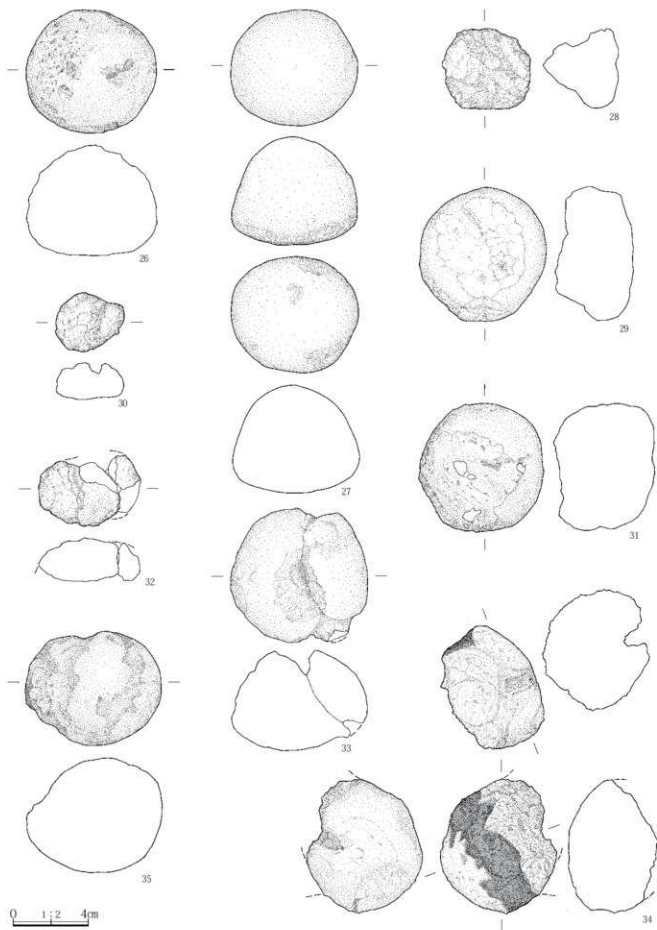
第273図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉) 1



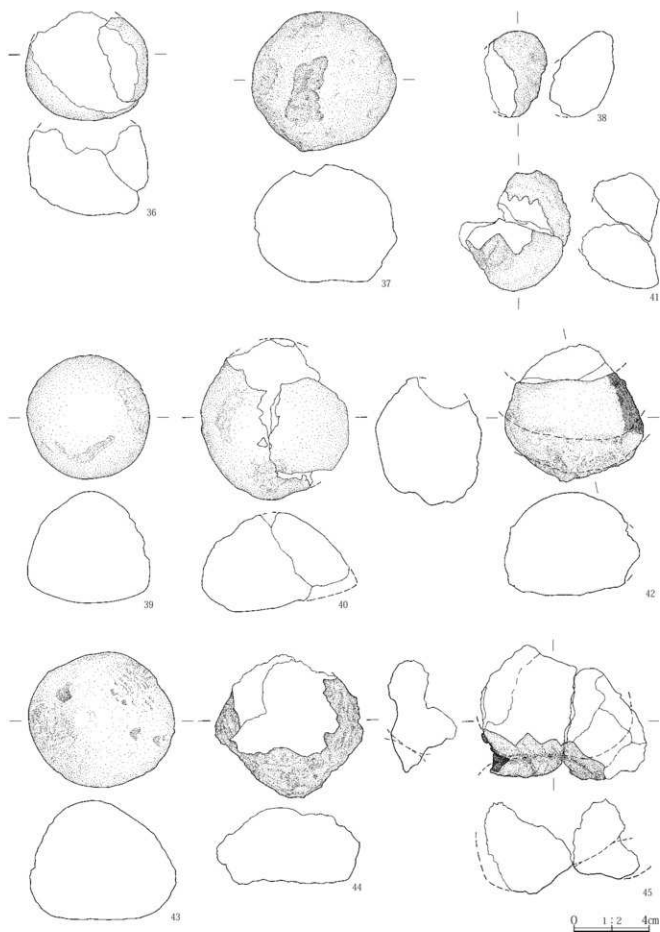
第274図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉) 2



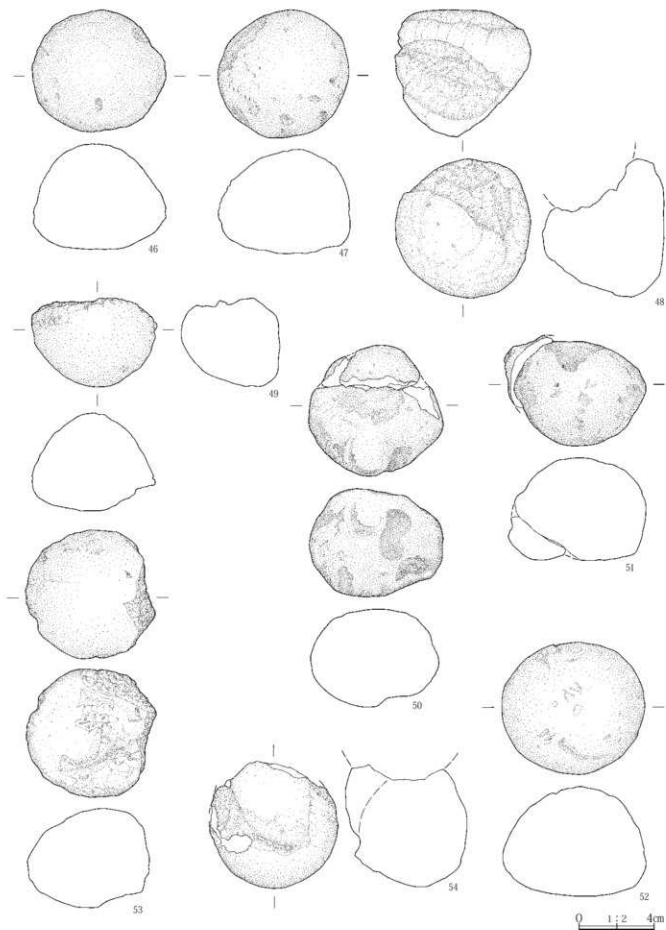
第275図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉)3



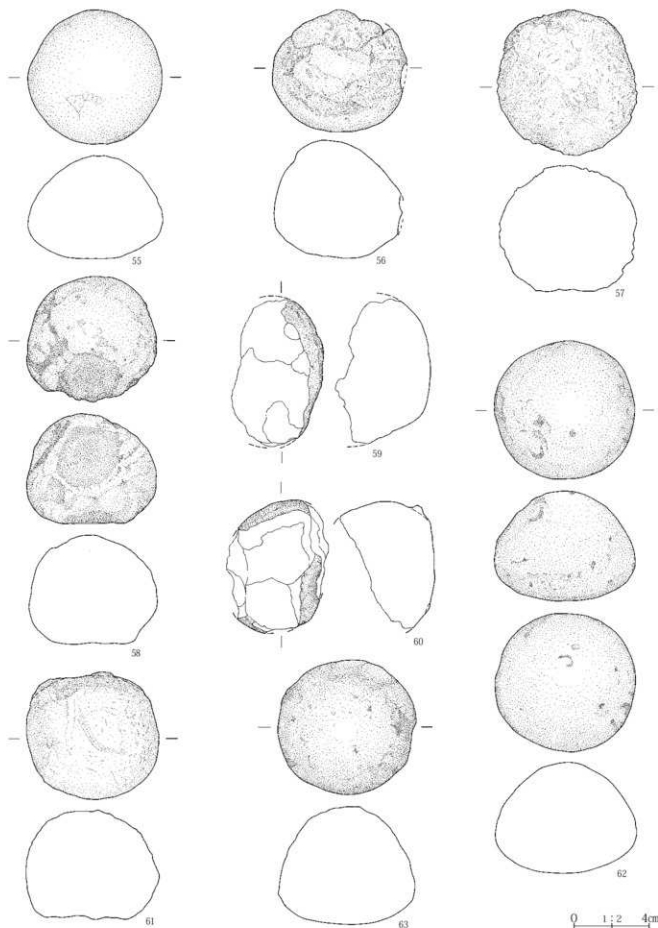
第276図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉) 4



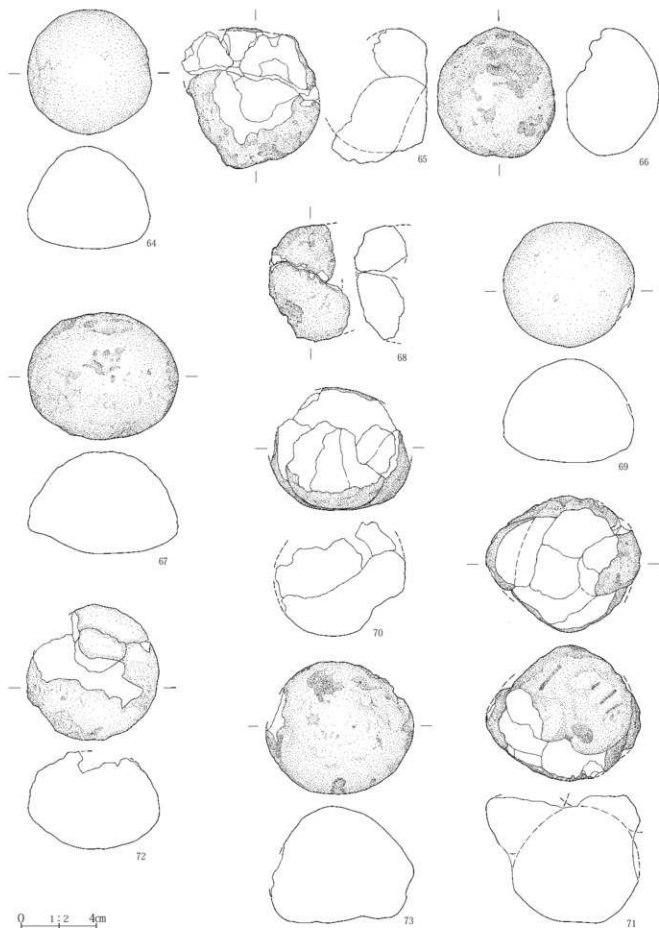
第277図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉) 5



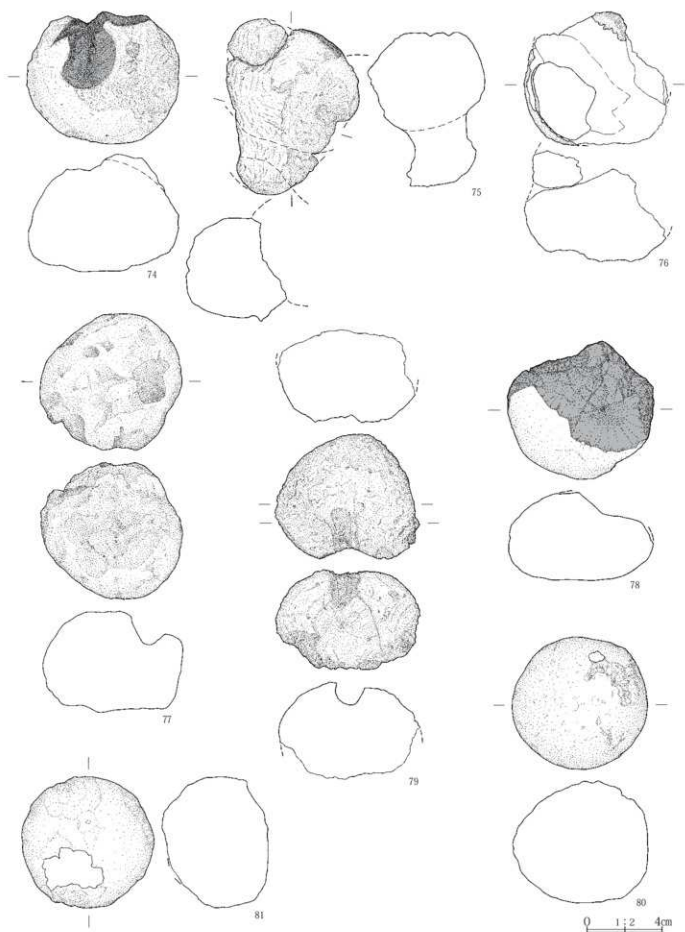
第278図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉) 6



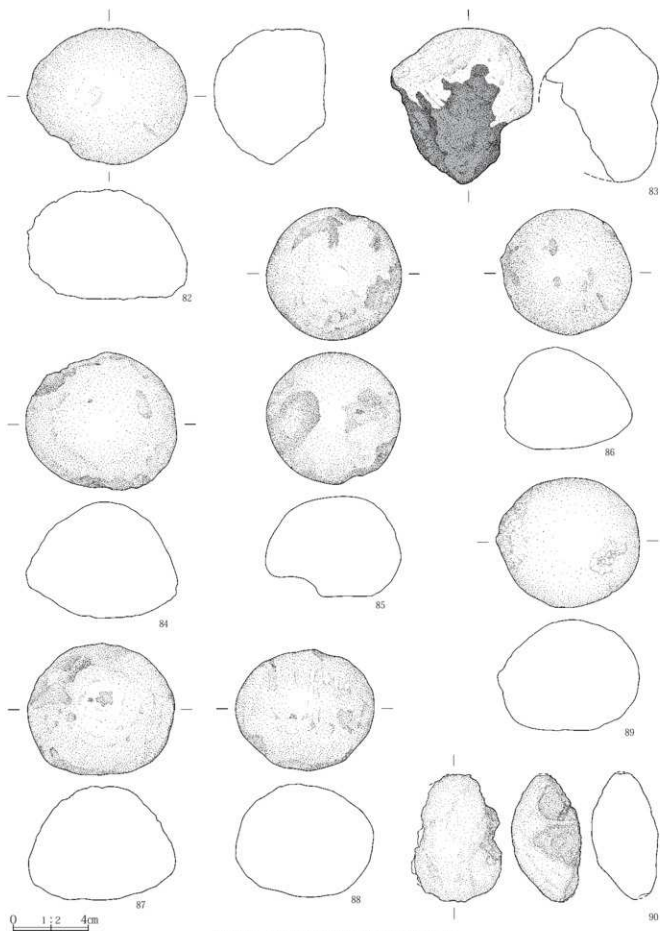
第279図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉) 7



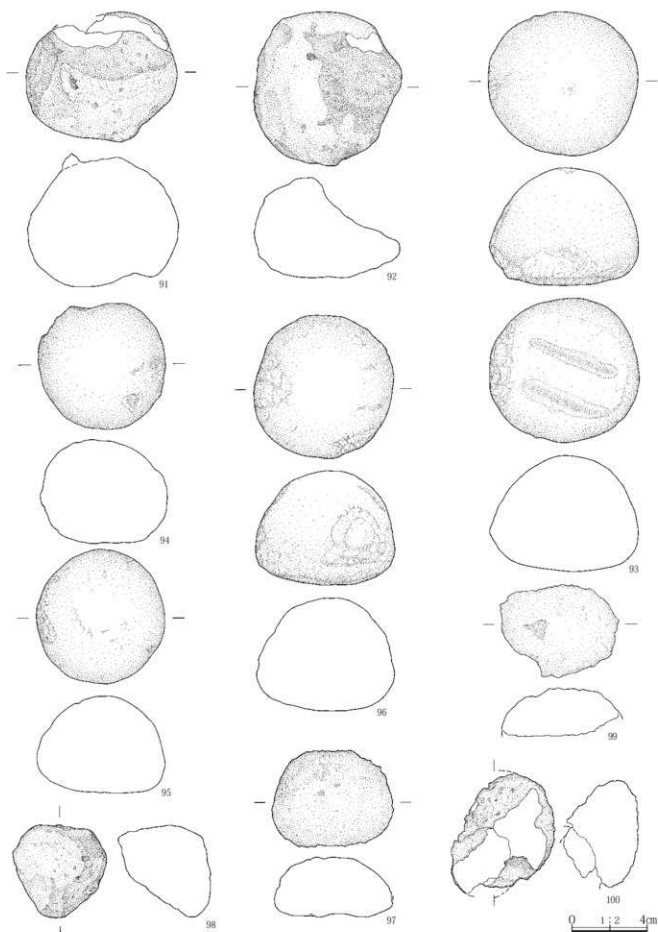
第280図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉) 8



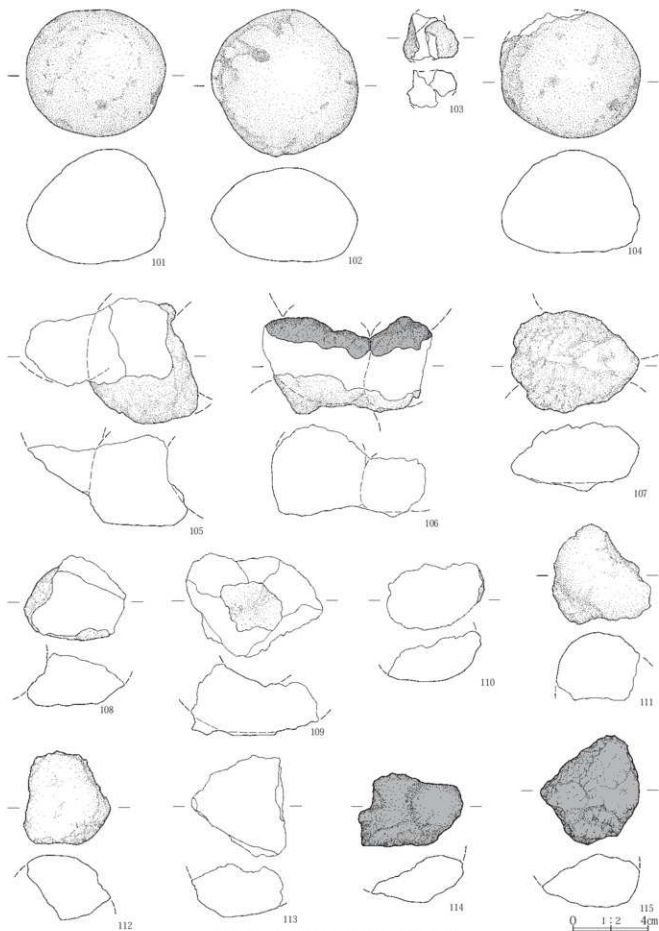
第281図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉)9



第282図 1号掘立柱建物出土遺物(赤玉) 10

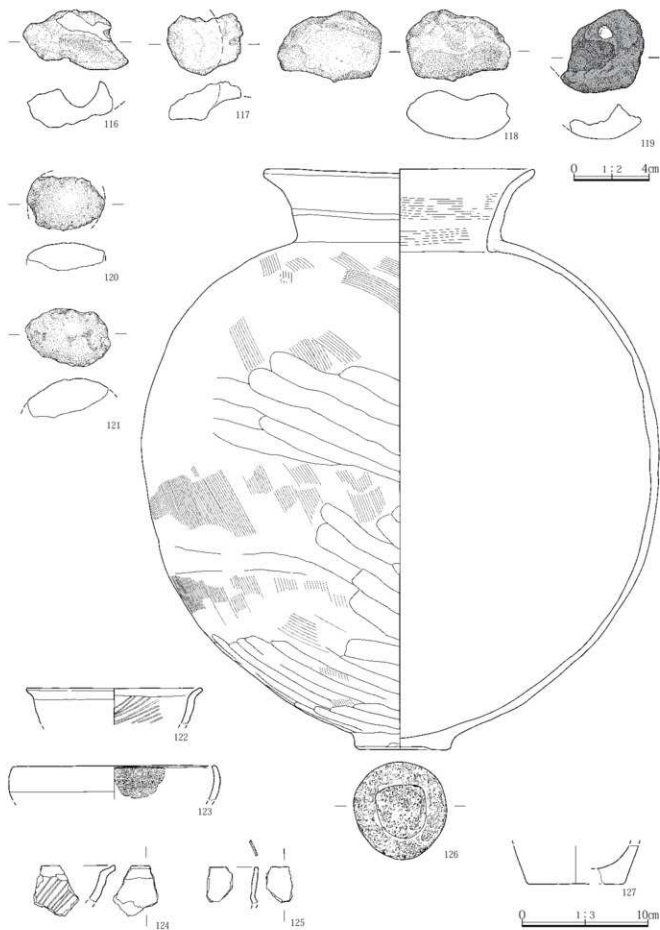


第283図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉) 11



第284図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉) 12

第三章 発見された遺構と遺物



第285図 1号掘立柱建物出土遺物図(赤玉他) 13

非パイプ状ベンガラでも鉱物系の酸化鉄を中心にしたベンガラを使用しており、群馬県地域の赤色顔料が赤色土を主に使用することは特異である。このことからすると、金井東裏遺跡の大量集積の赤玉は、かなり小礫の混じりの多いもので、ベンガラの素材とするには少し難しいと思われたが、他の遺跡の類例も同じような小礫混じりの例が多いことを考えると、非パイプ状ベンガラの代用品として、使用された可能性が高い。また、祭儀や副葬品に使用されたものもあるだろう。金井東裏遺跡9号竪穴建物のような締まりの有る、小礫の混じりの少ない資料については、積極的に非パイプ状ベンガラの代用品として、使用された可能性が高い。

土器は赤玉の北側P6・8の間のやや東寄りから土師器が出土し、特に土師器大壺が特徴的である。大破しているが、ほぼ完形になるような大型の壺が建物東側すぐにある。特定の用途が考えられる。また、小片が建物東側からいくつか出土しており、杯A・杯B口縁、杯Cの杯破片や、小型壺底部などが破片で出土している。この建物の中にあつたかどうかは、火砕サージによる移動で、はっきりと言えないが火砕サージの流れの方向からすると可能性は高い。土器は赤玉の北側P6・8の間のやや東寄りから土師器が出土し、特に大型壺A③(第285図126)が特徴的である。大破しているが、ほぼ完形になるような大型の壺が建物東側すぐから出ている。特定の用途が考えられる。また、小片が建物東側からいくつか出土しており、杯A・B・Cの破片や、小型壺底部などが破片で出土している。この建物の中にあつたかどうかは、火砕サージによる移動で、はっきりと言えないが火砕サージの流れの方向からすると、建物の中にあつた可能性はある。性格 大量の赤玉が、床面に複数段に積み上げられている状況で、しかも、赤玉が置いてある場所に壁が無い可能性がある、片流れ造りのような建物構造かと想定している。このことから、赤玉を保管・乾燥するような施設であつた可能性を考えさせる。年代 S₃火砕サージで倒壊したものであり、6世紀初頭として良いだろう。

(6) 7・13号畠(第287・288・292図 PL.114 ~ 324)

位置 7号畠は、屋敷地の北東側に、13号畠は、7号畠の北端西側に接するようにある。規模 7号畠は短冊形の畠が17個、東西方向、N-48°-Eに並んでいる

ものである。畠幅は1.14 ~ 1.95mあり、畠長は、4.60 ~ 9.20mである。畠間幅6 ~ 20cm、畠高は1 ~ 12cmであるが、全体的に深い箇所が多い。畠の形は、長さ・幅ともに大小があるが、屋敷地の区画に合わせているのか、畠の並びに屋敷地の境界区画を併せているのか、対応している。西側の11号畠とした、方形区画の畠も、7号畠の形態に合わせて、並びを変えている。7号畠からは土器破片がいくつか出土しており、杯C類を中心にした構成で、手捏ね土器や須恵器破片なども混じる。

13号畠は、畠の走向方向の違いから1つの畠のみだが、別の名前を付けた。南北方向、N-59°-Eである。畠長は6m、畠幅は1.62m、畠高は1 ~ 10cmある。別の作物を植えたのか、あるいは空間が空いたので、その場所にはめ込んだものであろう。特徴 S₄火山灰で覆われていて、畠高からすると、耕地として利用していたものと推定している。ただし、9号平地建物が畠を壊すような形で中途半端に進行していることを、先述したように建物の造成途中か放棄ということで解釈すること、7号畠の南側で畠を改変する動きがあることは、気を付ける必要がある。年代 S₃火砕サージで倒壊しているので、6世紀初頭として良い。

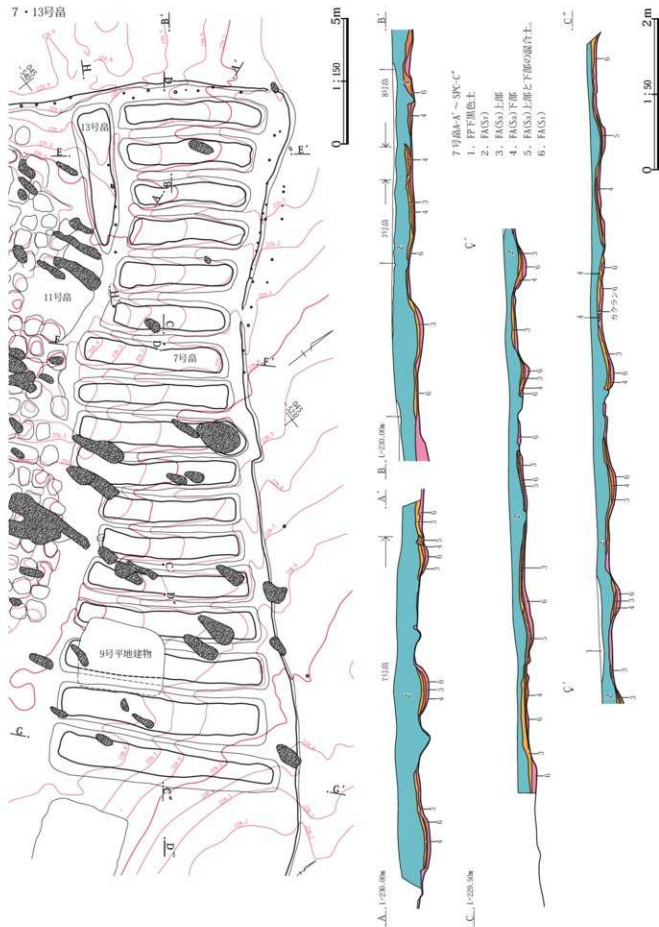
11号畠(第289 ~ 292・図 PL.115 ~ 117・324)

位置 屋敷地の北西側に位置する方形畠の畠である。遺存状況 調査区外の西側に連続して展開すると思われるが、今までの類例からすると、方形畠は建物の廃棄後の埋土の窪みなどの湿気の多い場所に多い。この畠地の下に、埋没建物が2棟 想定されており、その2棟 分の窪みにある畠とすれば、調査区外の西側にはあまり広がらないものと考えられる。形態 極めて珍しい方形の畠を形成するものである。方形の畠は、合計191個の方形畠が配置されている。規模 畠長は方形状のものは、40 ~ 90cmで、やや長方形状のものは、畠長1.1 ~ 2.4m、畠幅は、54 ~ 80cmほどである。いずれも、畠高は、2 ~ 13cmである。畠づくりの方向は、東西方向N-47°-Eに配列している。東に隣接する7号畠と東西方向のラインはあっている。性格 この類の方形畠は、旧子持村教委が調査した八幡遺跡(旧子持村石井氏より)と金井下新田遺跡にあるが、それ以外に類例を知らない。この畠形態を考える上で重要なのは、先述したように、これらの方形畠がある箇所の下部に廃棄して

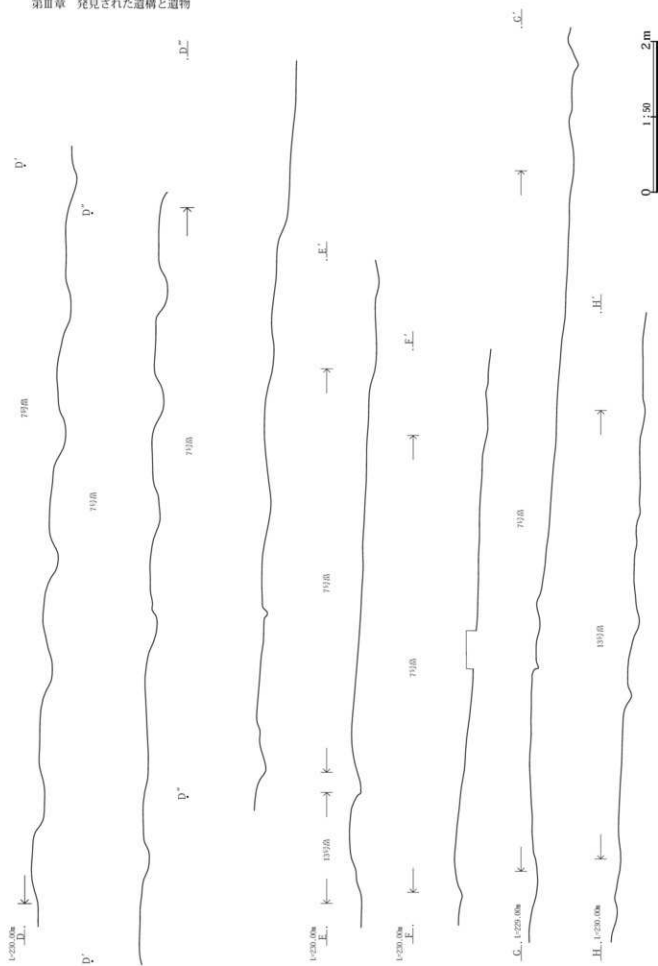


第286図 冢全体図

7・13号畠

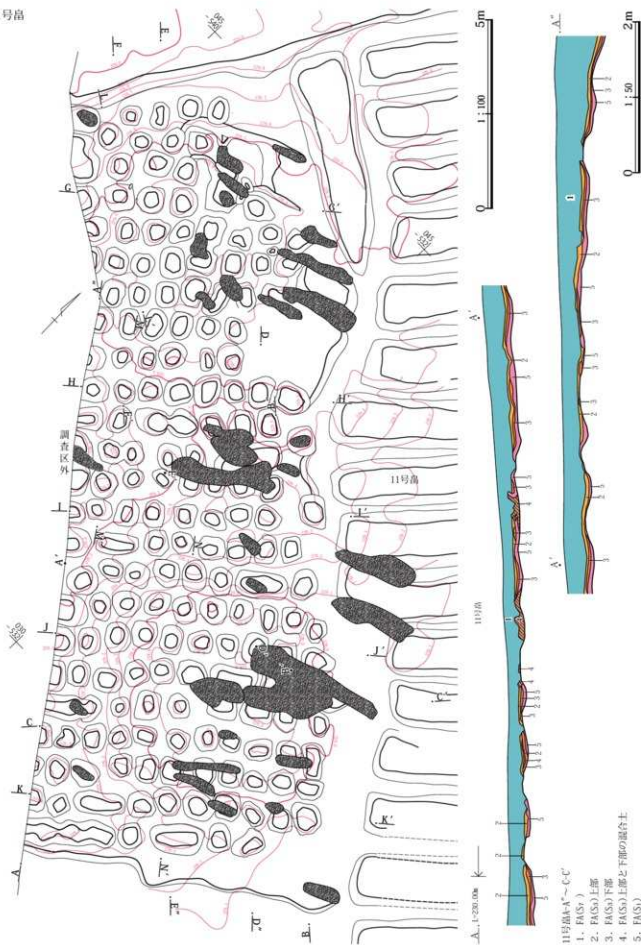


第287図 7・13号畠平面図・土層断面図

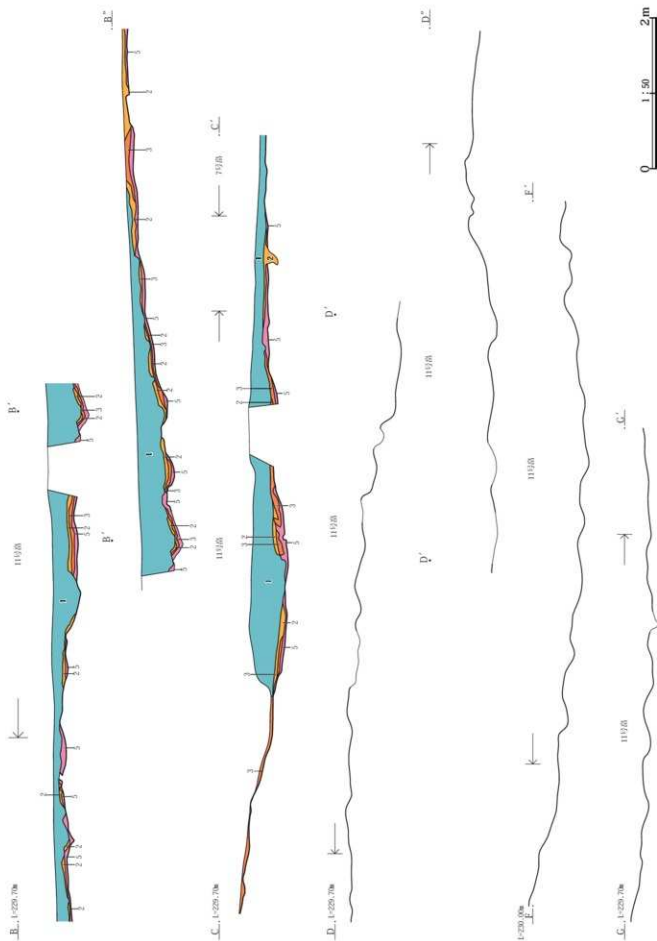


第288図 7・13号島エレベーション図

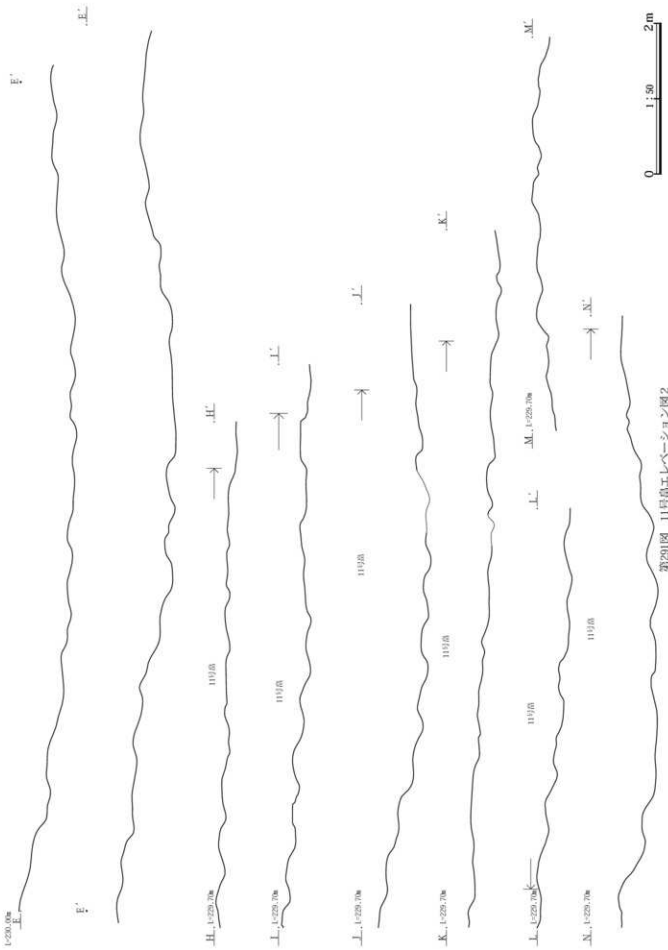
11号溝



第289図 11号溝平面図・土層断面図



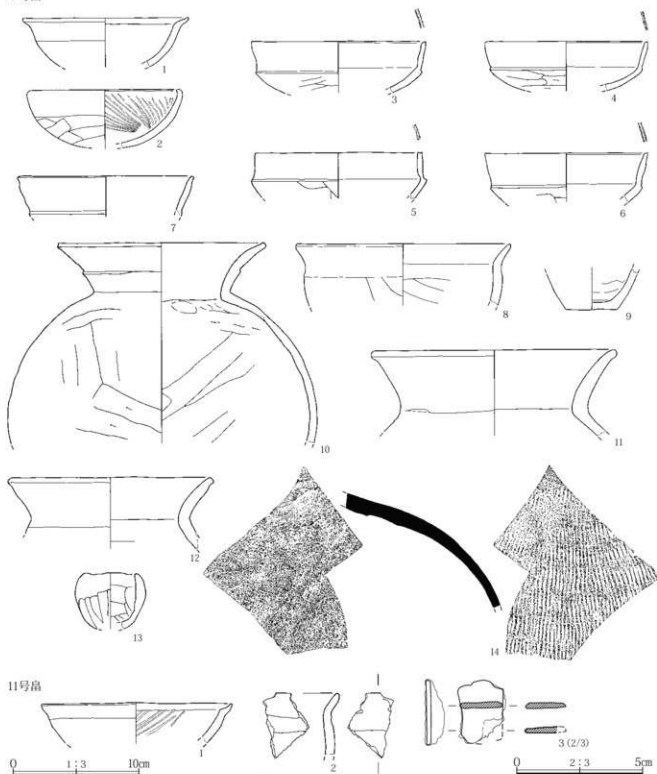
第290図 11号島土層断面図・エレベーション図1



第291図 11号富エレベルション図2

埋まっている竪穴建物があることである。該当箇所は、保存予定区であったが橋脚部を設置するために行った調査で1棟の建物が確認できており、さらに南側にも窪みの存在からもう1棟の計2棟、竪穴建物がこの場所にあることが想定される。そのため、調査時でもそうであったが建物が埋まった所が、やや窪地状になり、雨が降る

と水が溜まりやすくなっていて、湿気の多い箇所となっている。栽培する作物にとって、湿気を考慮した作物の選定及び、湿気対策を講じる必要がある。そのための方形畝という形を取ったものと想定している。参考となるのは、現代のスイカ栽培で、乾燥を好むために、個々のスイカに方形の畝を作成している。作物の種類や特性を



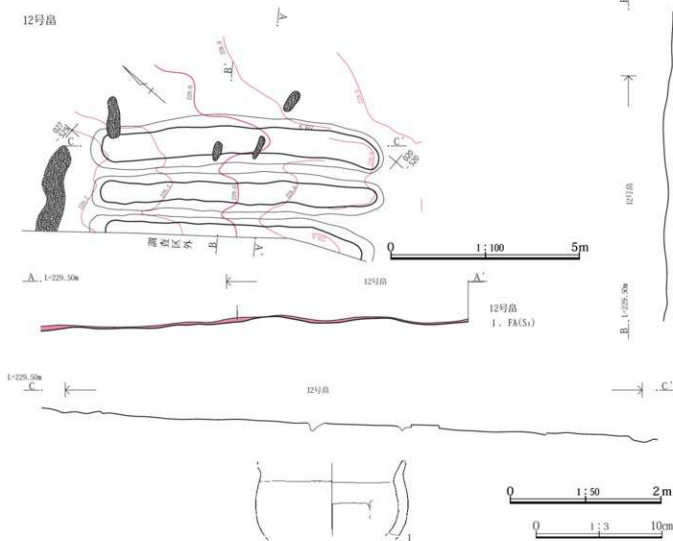
第292図 7・11号冪出土遺物図

考慮した畝であることは間違いないものとする。畝からは、杯AⅡと鉄素材と思われる板状品(第292図3)も出ている。年代 S₁火山灰で覆われていて、畝高からすると、耕地として利用していたものであり、6世紀初頭として良い。

(8) 12号畝(第293図 PL.118)

位置 1号掘立柱建物の西、42号竪穴建物の北側にある。**遺存状況** 調査区外となる西側に展開する可能性が高い。畝東端の3条の畝のみの調査である。**規模** 南北方向を主軸方向にした短冊形の畝である。畝長7.6~7.78m、畝幅90~132cm、畝間幅5~29cm、畝高0~11cmでかなり畝高が低い。**特徴** 畝高が低く、現地での畝痕の確認が難しかった。この低さから想定するに、被災時には、耕作していなかったと考えている。年代 S₁火山灰で覆われている。6世紀初頭として良い。先述したように、畝高からすると、休耕中と考える。

12号畝



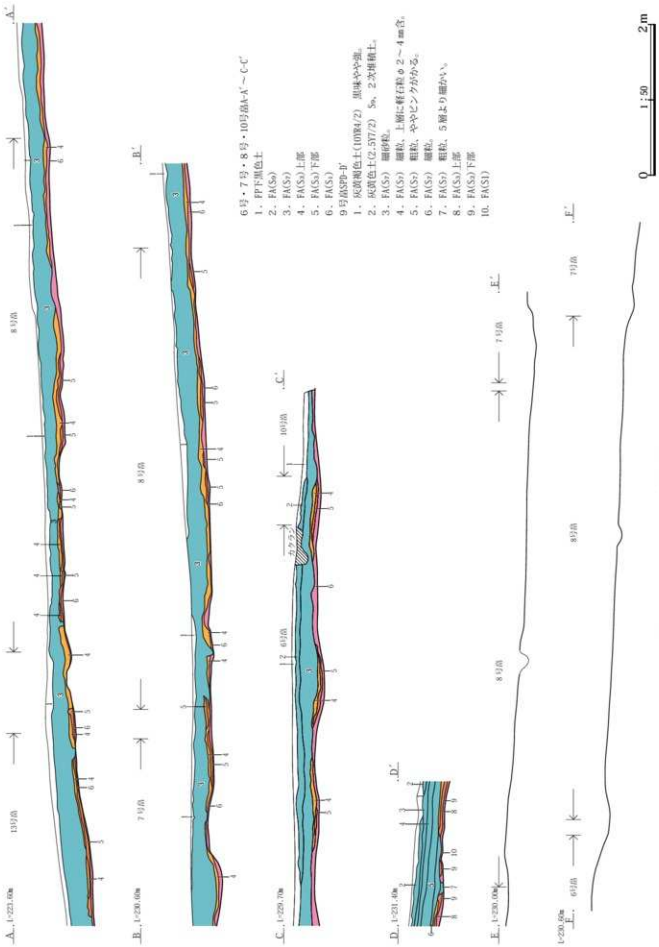
第293図 12号畝平面図・エレベーション図・出土遺物図

畝の栽培種の分析(植物珪酸体分析) 植物珪酸体分析では、7・11・12号畝の一部からイネ(機動細胞珪酸体由来)が数値は低い確認された。また、11・12号畝の一部からは、ムギ類(初級の表皮細胞)が検出された。陸稲の場合、連作障害や地力の低下を避けるため休閑期間を置くなどして、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなることである。また、初級が栽培地に残される確率は低いことから、陸稲・ムギが栽培された可能性が想定される。調査地点もしくはその近辺で、イネ(陸稲)・ムギの栽培の可能性が指摘される(植物珪酸体分析 第5分冊P.12参照)。なお、根菜類などの植物珪酸体分析では捉えられないイネ科栽培植物以外の作物が栽培されていた可能性も想定される。古墳の周堀埋土における花粉分析でも、すぐ西に位置する畝における栽培植物に由来する花粉の検出が期待されたが、残念ながら、それを示唆するような結果は出なかった。

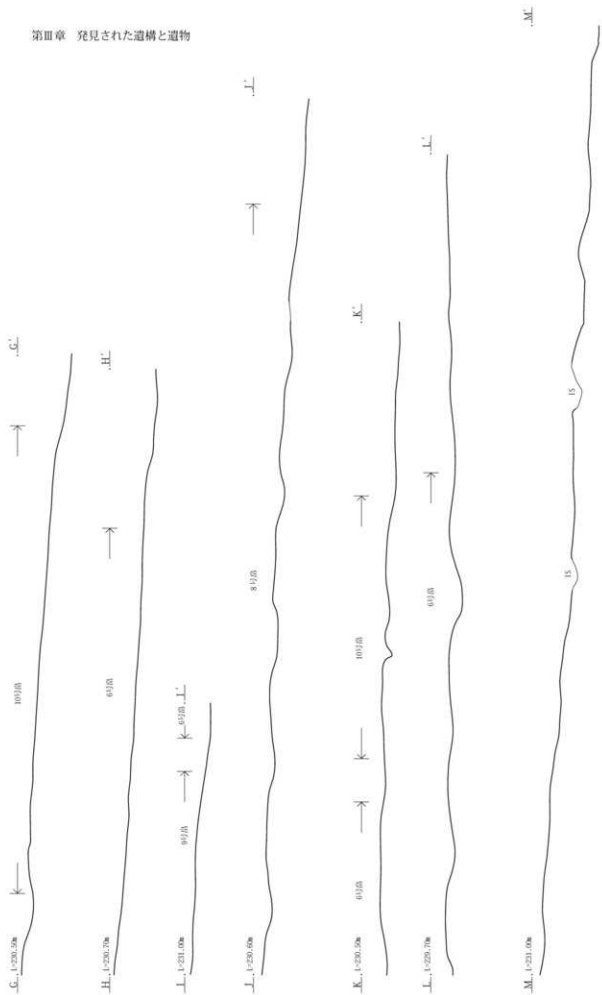
第三章 発見された遺構と遺物
6・8・9・10号畠



第294图 6・8・9・10号畠平面图



第255図 6・8・9・10号富士層断面図・エレベーション図1



第206図 6・8・9・10号品工レベル・シヨン図2

(9) 屋敷地外の4面遺構群

屋敷地以外の4面遺構は屋敷地のすぐ北側に隣接してある。6・8・9・10号畠からなる畠群と、屋敷地南の傾斜下面の10号平地建物がある。

(10) 8号畠(第294～297図 PL.118・119)

位置 屋敷地境界すぐ北西に位置する。**規模** 畝長6.53～7.12m、畝幅1.1～1.8m、畝間幅5～47cm、畝高3～12cmで、主軸は、東西方向で $N-76^{\circ}-W$ である。畝高が低い。椀IV類と小型甕が出土している。

(11) 6号畠(第294～297図 PL.118・119)

位置 8号畠の北西側に位置する。**規模** 最長現存畝長10.50m、畝幅1.3～1.84m、畝間幅16～60cm、畝高3～12cmで、畝の主軸は、東西方向で、 $N-90^{\circ}$ である。総体的に畝高が低い。杯A・Cと甕・小型甕が出土している。

(12) 9号畠(第294～296図 PL.118・119)

位置 6号畠の北側に接してある。**規模** 畝は、短冊形と、不定形の幅広の長方形の畝の2種類がある。短冊形は、現存畝長2.56～2.73m、畝幅87～118cm、畝間幅35～41cm、畝高0～3cmである。大形の長方形の畝は、畝長3.8～5.0m、畝幅2.4～4.1m、畝間幅

25～55cm、畝高1～12cmある。畝の主軸は、南北方向で、 $N-42^{\circ}-W$ である。相対的に畝高は低い。

(13) 10号畠(第294～296図 PL.118・119)

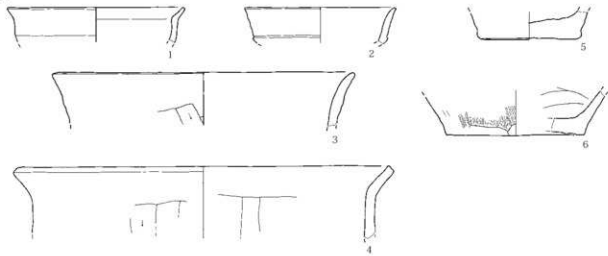
位置 6号畠の北側に連続して造られた。**規模** 畝長5.84～6.32m、畝幅1.23～2.23m、畝間幅32～62cm、畝高5～7cmであり、西方向で、 $N-75^{\circ}-W$ の短冊形畝である。相対的に畝高は低い。

畠の性格 6・8・9・10号畠を見ると、総体的に畝高が低く、現地で見ると、形態がはっきりと分からないくらいであった。そのような観点から、被災当時は、耕作が行われていない休耕畠の可能性が高い。

年代 Hr-FA S₁火山灰で覆われている。6世紀初頭として良いが、先述したように、畝高からすると、休耕中と考える。

畠の栽培種の分析(植物珪酸体分析) 植物珪酸体分析では、6・8・9号畠で、イネ(籾殻の表皮細胞)、9号畠で、イネ(機動細胞珪酸体由来)が検出され、また、6・9号畠でムギ(籾殻の表皮細胞)が検出された。籾殻が栽培地に残される確率は低いことから、陸稲・ムギが栽培された可能性がある。

6号畠



8号畠



0 1:3 10cm

第297図 6・8号畠出土遺物図

(14) 10号平地建物(第298図 PL.119)

位置 42号竪穴建物の周堤の南側の傾斜地から降りた、下の段から確認された。屋敷地外側の南にあたる。**調査経緯** 平坦状を呈した面の範囲と、焼土・炭などの確認により設定されているもので、遺物及び周溝や小ピットなどは確認できない。**埋土状況** S₃・S₇の火砕流が床面直上から確認でき、その下層のS₁・S₂ともに確認できない。したがって、S₃火砕流による被災当時、構築物があった可能性が高い。ただし、この地区の周辺はS₁・S₂ともに極めて薄く明瞭に確認することが難しい地点の為に、S₁・S₂の有無による屋根の有無などの確認が出来ないことが残念である。**規模** 現状では、3.8×2.4mで、主軸方位はN-43°-Wである。**焼土他** 焼土は、東南部を中心に、炭は中央から北側に分布する。建物材の一部の痕跡の可能性ある。**年代** Hr-FA S₃・S₇火砕サージで倒壊したものであり、6世紀初頭として良いだろう。

(15) 6号集石(第298図)

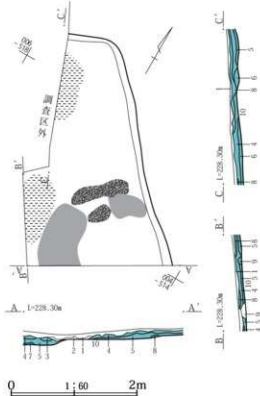
位置 42号竪穴建物の周堤の南東隅外の自然地形の傾斜で下がり始める地点に位置する。**規模** 長径130、

短径110cmの範囲に、5～42cmの礫を18個集めているものである。**性格** 周堤外であるが、42号竪穴建物を構築する際に出た石をまとめたものの可能性がある。

(16) 屋敷地とその周りの施設について

屋敷地の東側には、1号墳の墳丘及び周堀の外縁の弧状を意識して、屋敷地の外縁線も杯B状を呈しており、8mほどの間隔を空けている。2号墳の墳丘及び周堀については弧状を意識せず、ほぼ直線状に屋敷地の境界を設けているが、2.8mの間隔を空けている。いずれも、古墳の墓域、屋敷地を意識して境界を定めていることが分かる。屋敷地の北側には、畝群があり、その先には道が2本ある。この道については、10区の説明の時に説明を行う。さらに北には道があるのみで、調査区内からは建物などは見つかっていないので、居住域はこの屋敷地が北限となる可能性がある。屋敷地の南の境界及び竪穴建物の周堤南側は傾斜地となっており、0.5～1mの段差があり、その下段の面に10号平地建物が造られている。この南15mには900以上の大量の土器が集積され、多様な祭具が出土した3号祭祀遺構があり、この平地建物との関連が注意される。

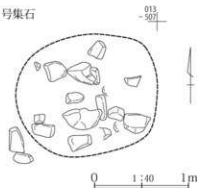
10号平地建物



10号平地建物

1. 黒褐色土(10YR3/1) 2面確認面。炭化物微量含、締まりやや弱。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) FA(S₃)を含、締まり弱。
3. FA(S₃) 黒褐色土を含、締まり弱。
4. FA(S₃)とS₇混上。
5. FA(S₇) 細粒。
6. FA(S₇) 粗粒。
7. FA(S₇)とS₃混上、炭化物を含。
8. FA(S₇) 焼土塊の粒を含。
9. FA(S₃)と黒褐色土の混上。
10. 黒褐色土(10YR2/2) 締まり弱。

6号集石



第298図 10号平地建物平面図・土層断面図、6号集石図

5 4区4面遺構(第299図 PL.120)

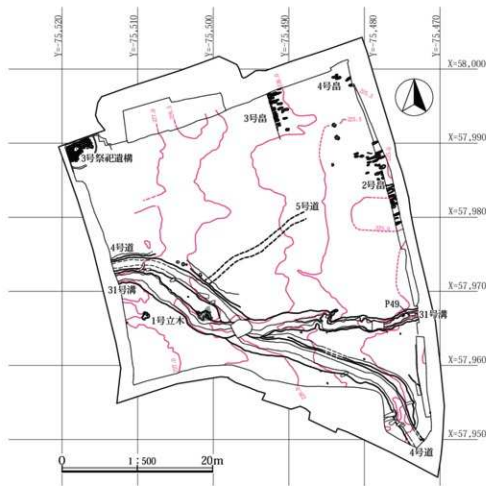
4区は標高227.4mから224.5mにかけての北西から南東にかけてゆるやかに降る傾斜地である。4区には甲着装の人物など4体の人骨がSa火砕サージ下から出土している。この人物がどうしてこの場所にいたかを考える意味でもこの人物がいた直前の当地区の風景を再現することが重要となる。ここには、31号溝と呼称した流路が中央やや南を蛇行して西から東の段丘崖に向けて流れている。さらにこの流路を東西方向にX字形に斜交して渡る4号道がある。この渡りの箇所にあるいは橋の可能性のある遺構が検出されている。31号溝を北西へ渡ると、4号道から幅の狭い支道(5号道)が東方向に枝分かれする。保存が決定したため、道そのものの確認はできなかったが、ヒト足跡の存在から枝道が通っていたことが分かる。畠の痕跡が、4区北東側に検出された(2~4号畠)。いずれも畠が明瞭でなくさく跡からかろうじて確認したものであるため、火山灰降下時には、すでに休耕していたものと考えている。植物珪酸体分析では、イネが数値は低

いながらhr-FA下で確認された。

また、900個の土器を配置した3号祭祀遺構が4区北西隅、9区の屋敷地の南側に検出された。祭祀遺構に積み重ねられた土器には、間層を挟まずにS₁火山灰が積もっているものがあるので、火山灰降下直前まで、祭祀関連の行為を行っていたことは確実である。さらに、すでに5面遺構として報告したが、火山灰が降下した時には、竈にかけられた土器の口まで土に覆われていた埋まりつつある20号竈穴建物が、3号祭祀遺構のすぐ南西側にあった。さらに、立木が南西の31号溝南部に1本、倒木が、北東部の4号畠の南西側に2本確認されている。以下、各遺構について記述する。

この地区は9区屋敷地の南側でムラの境界にあたる場所と考えて良いだろう。その境界を示す場所に、東西方向の31号溝と4号道、そしてやや北側に3号祭祀遺構があるという情景となる。

以下、各遺構について記述する。



第299図 4区4面遺構全体図

(1) 3号祭祀遺構(第300～549・図 PL.120～187)

3号祭祀遺構は、4区北西部端に位置する膨大な量の土器・祭具が出土した円形の囲いに区画された祭祀遺構である。

位置

北側に位置する9区の屋敷地から南へ20m、屋敷地すぐ南に位置する10号平地建物から南へ15mの所にある。また、S₂火山灰降下時には、竈にかけた裏の口あたりまで埋没していた20号竪穴建物の北側5mの所にある。屋敷地と10号平地建物が、S₂火山灰降下時の建物であり、さらにS₂火山灰降下時にも機能していた4号道が南15mの所を斜め東西方向に通っており、さらにその南で4号道と交差する自然流路を用水として利用していたと推定している31号溝が同じく南東に向けて流れている。4号道と31号溝の交差する箇所で、火砕流によりぐんとなった首飾りの古墳人(3号人骨)から北へ32m、さらに31号溝の中で甲を着たまま同じく火砕流で亡くなった古墳人(1号人骨)より北西へ45mの所にある。北側の屋敷地に代表されるムラの境界にあたる位置にこの祭祀遺構があると考えている。

調査状況

既存道路が北側と西側にあり、全掘することができなかった。最下層で検出された溝により直径5.4mの円形と推定復元した。復元平面積は22.9㎡で、そのうち、調査区の関係から、祭祀遺構の西側と北側の未調査面積が10.7㎡となるので、調査面積は12.2㎡となり、祭祀遺構の53%を調査したことになる。ただし、大型土器群の主要な箇所である南に開くコの字形配列の主要部分及び、杯皿を中心とした集積土器群や、祭具を埋納した南側の主要部分も調査区に入っていることから遺構の主要な部分は調査することが出来たと考えている。

土器埋没状況

集積された土器群及び遺構へのHr-FAの堆積を見ると、最上部の土器の直上にS₁・S₂火山灰が直接堆積している例がいくつか認められる。また、S₁・S₂火山灰が降下する前に黒褐色土が少量堆積しているものもあり、この土の存在から、S₁・S₂火山灰が降下する前に時間差を認めるのか、あるいは、土器を集積あるいは配置した後、土を入れるような行為があった結果なのか検討した。その結果、祭具が、黒褐色土の中に混じったような状況

で出ることが多いことから、土を入れているような形を考えた方が良く現状では考えている。また、S₁・S₂が無く、S₃火砕流が直接土器内に堆積しているものもあるので、これらは、S₂降下後に、土器を置いた可能性があるものである。

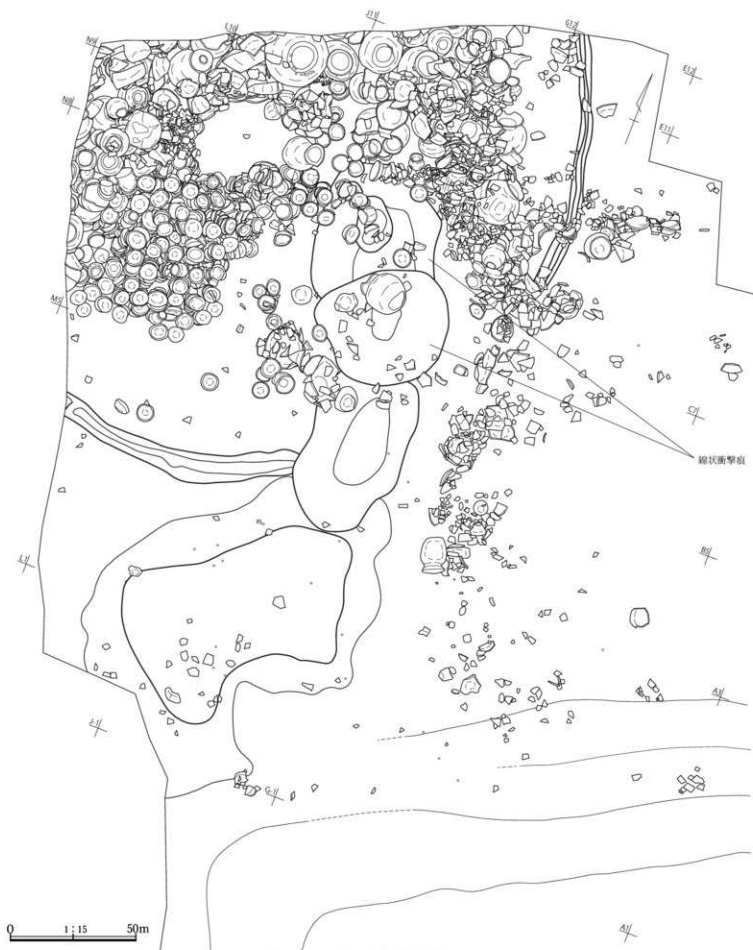
衝撃痕

後の3-1面の衝撃痕跡の章で詳述するが、3号祭祀のほぼ中央に平面円形から楕円形に近い窪みが3つある。うち南端の1つは窪みが浅く、衝撃痕とはしなかった。当初は、立木痕や土坑の可能性を考えたが、底部の形状や、S₁・S₂・S₃が認められず、フク土がS₂火砕流土を中心とすることなどから考えると、その可能性は低い。そこで、再度周辺も含めて検討すると、窪みの東側に隆起が認められ、周りの土器も窪みより東側の土器のみが粉碎されている様子が窺えることから、S₂火砕流に伴う衝撃痕とした。

祭祀遺構の概要

祭祀遺構は、復元直径5.4mの円形と推定される。上幅10～23、下幅3～10cmの周溝が円形に巡っている。入口は、周溝の途切れと、円形周溝部から外側に南に向かって一列に並ぶ土器群の存在から、南東側にあるものと想定している。ただし、衝撃痕があるために入口の様相ははっきりしない。遺構の内外にはS₁・S₂火山灰が降下しており、土屋が無かったことが分かる。円形周溝の溝部分には、S₁・S₂火山灰の降下が認められず、ここに構築物があったこと、つまり囲い状のものがあつたことを示している。囲いの種類・高さなどは痕跡が無く不明である。

土器の集積状況を示すために、平面図を3枚提示する。第300図は、破片も含めた祭祀遺構の土器出土状況図である。第301図は、破片類を取り上げた後、明瞭に分かる土器だけを表現したものである。第300図により、向かって右の東側に特に破片類が多いこと、しかも衝撃痕と推定された穴のすぐ東側に多いことが確認できる。第301図で、須臾器大甕が祭祀遺構のほぼ中心にあり、そこから南東に向かいコの字形に開くような形で大型の土器壺・甕群が配置されたことが分かる。ただし、大型土器を置く前に白玉を中心いくつか土器配置場所に埋納しており、大型土器の配置はそれら少数の白玉を中心とする祭具を埋納した後に行っている。



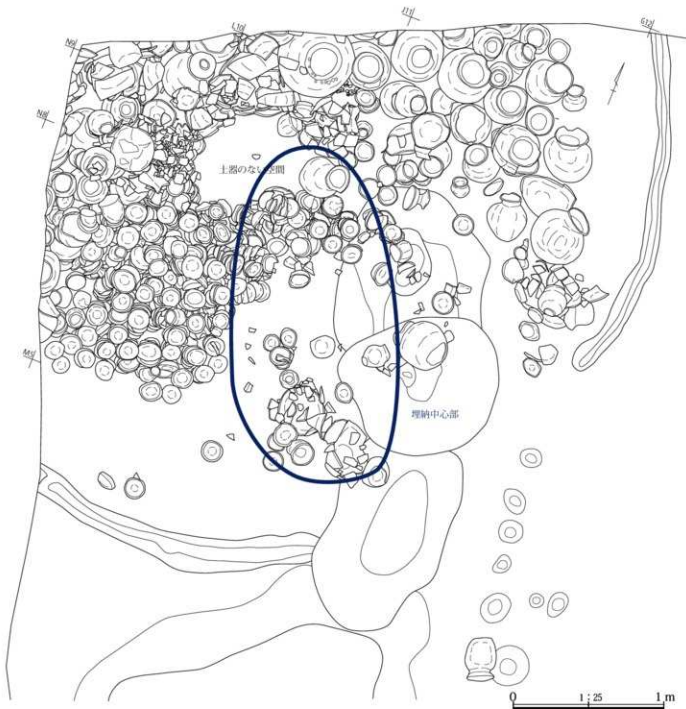
第300圖 3号祭祀遺構遺物出土状況図1

第302図は、土器及び土器群があったと思われる土器底部の窪みを表現した図で、本来の土器の配置が良く分かるものである。また、土器を設置するにあたり、かなり深く埋めていることが底部痕跡により分かる。土を軟らかくして押し込んだような形で埋置したものと推定する。

第301図に見られるように、大型土器設置の後で、その南側に多種多量の祭具を埋納したものと想定する。中央にある須恵器大甕の南側に50cm四方の土器を全く置か

ない円形の空間があることが分かる。この空間は、周溝から推定した遺構の中心となる場所で、この祭祀の主要部である。そこに土器を置かず、南側にも祭具をあまり多く埋納しないということは、ここは、有機質の置台などを置いていた空間であった可能性がある。

須恵器大甕の南側、土器を全く置かない空間のさらに南側地下に、南北に長い長径1.5m、短径1mの楕円形範囲を中心に、小型鏡1、ガラス玉216、玉類84、装身具2、鉄器184、石製模造品158、滑石製白玉9918、紡輪



第301図 3号祭祀遺構遺物出土状況図2



第302図 3号祭祀遺構土器据置痕平面図

1の祭具が、約50～70cmに渡る遺物包含層から出土している。ここが、祭具を埋納する中心的な空間であることが想定される。

中心部にある遺物を置かない空間から、集積土器や埋納祭具がある空間を挟んで、衝撃痕跡の南側にある長さ1.5m、幅1mの空間の下からは祭具がほとんど出土しなかった。ここは周りから転がり落ちた土器を除いては、ほんの少し埋納された祭具があるのみの空間である。その東側には土器が南北に並んでおり導入路と考えることができる。その入口から継続する通路的な空間には祭具埋納をあまり行わなかった可能性が高い。

この祭具埋納入口と推定しているところから北側の空間から西側の空間に祭具や土器を集中埋納していると考えられる。

圃いの南西部に、多い所で20段以上も積み重ねて集積していた。これは多人数に関わる飲食儀礼が別の場所で行われたと推定され、そこで使用した杯皿を中心とする土器群を集積したものと思われる。700個に及ぶ杯皿を中心とした小型土器群の積み重ねの状況を見ると、整然とした積み重ねでは無く、小皿や高杯などの器形の異なるものを雑然と積み上げたもので崩れかかっているものもある。使用後の片づけ的な在り方を示すものであろう。また、埋納を行った空間のすぐ上の空間、さらに北・東側には小型杯皿を中心とした土器を配置している。それらの杯は、単体や積み重ねがそれほど無い場合が多く、

しかもそれら杯皿の中に、玉類・ガラス玉・石製模造品・鉄器・白玉などを入れたまま置いているものかいくつか認められており、祭儀を行った祭具を土器の中に置いたまま置いている可能性がある。S₁・S₂が土器内面の直上から出ているので、火山灰降下直前で恐らくこの祭儀は最後の段階であったのではないかとと思われる。ただし、ごく一部は、S₁・S₂が認められず、S₃が直接覆っているものがあり、S₂降下以降に土器を動かして置いたことを示している。

今のところ、祭祀が行われた期間は、かなり短い期間ではないかと土師器群の様相から考えている。S₁・S₂火



第303図 3号祭祀遺構土層断面・立面図設定図

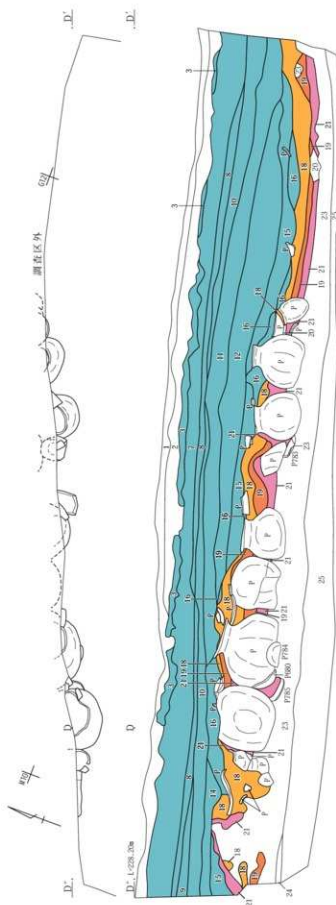
山灰降下直前まで行っていた時より前にあまり祭祀期間が過ぎないということからすると、噴火の前兆現象に対して行った祭儀であった可能性があるということである。

つまり、この祭祀遺構での大まかな使用の、円形囲いをして大型土器をコの字状に配置した後で、祭具を用いた祭儀を別の場所で行い、祭儀後、祭儀に使用した祭具を、囲い状遺構の中で、大型土器群に囲われた内側で土の中に埋納した。多数が参加する飲食儀礼も、やはり別の場所で行った後に、食器を中心とした祭具類は、祭具を埋納した場所の上に重ね置きしたものと想定している。また、祭具を納めたままの杯を中心とする小型土器を、単独あるいは数個を積み重ねて、祭儀の形を示したままで置いているものもある。

4区4面3号祭祀SPD-b'・SPH-b'

1. 黒褐色土(10YR3/2) FP下層。
2. にぶい黄色土(2.5Y6/3) S₀、2次堆積。
3. にぶい黄色土(2.5Y6/4) S₀
4. にぶい黄褐色土(10YR6/4) S₁シルト質土。
5. FA(Sr) 細粒(φ1~2mm)ラミナ状堆積。
6. FA(Sr) 粗粒(φ1~5mm)不冴法。
7. FA(Sr) 細粒(φ1~3mm)、軽石粒(φ1~7mm)ラミナ状堆積、にぶい黄褐色土(10YR6/3)。
8. FA(Sr) 粗粒(φ1~10mm)、にぶい黄褐色土(10YR6/3)シルト質土と混じり。
9. FA(S₀) 細粒(φ1~3mm)含。
10. FA(Sr) 細粒(φ1~5mm)ラミナ状堆積。
11. FA(Sr) 細粒(φ1~2mm)、軽石粒(φ1~2mm)ラミナ状堆積
12. FA(Sr) 粗粒(φ1~4mm)、軽石粒(φ1~2mm)2%含。
13. FA(S₀)とS₁上部との混じり、灰黄褐色土(10YR6/2)
14. FA(S₀) 細粒(φ1~2mm)とS₁上部の混じり。
15. 灰黄褐色土(10YR5/2) S₁とS₀上部の混じり、粗砂中心層。
16. にぶい黄褐色土(10YR5/3) S₁とS₀上部の混じり。
17. FA(Sr) 粗砂中心層(φ2~4mm)、S₃上部の混じり。
18. FA(S₀)上部
19. FA(S₀)下部
20. FA(S₀)とS₃下部の混じり。
21. FA(S₀)
22. FA(S₀)と灰黄褐色土の混じり、灰黄褐色土の表面の凹凸のあるところにS₁が入り込んだもの。
23. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ2~4mm)2%含。
24. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%含、祭祀の後にローム土を含めた土を使用したもの、縮まりやや弱。

0 1:20 50cm



第304図 3号祭祀遺構Dセクション図・平面図

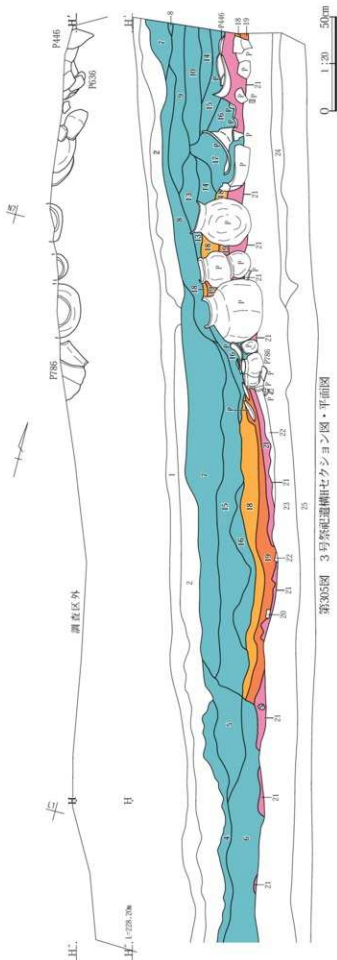
埋没状況詳説

遺構全体から見て土器群がどのように埋没したかその状況を示す立面図を5枚掲載した。立面の設置ポイントは第303図に示す。

第304図では、祭祀遺構北側の東西方向のDセクションにより、火砕流が流れる東西方向での大型土器群の埋没状況を示している。これを見ると、大型土器を埋置している土の上すぐにS₁・S₂火山灰が降下して厚い所で5cmほど堆積しているのが分かる。大型土器埋置後、あまり時期を経ずして火山灰が降下したことが分かる。土器と土器の間に入り込み堆積している様子も良く分かる。次に来るS₃は、S₃下部・上部合わせて厚い所で10cmほど堆積しているが、土器には破損や移動があまり無いことに注意したい。これは、人馬の死亡や建物倒壊にいたったS₃の動きを考えると不思議だが、高低差や場所によりS₃の強度が異なることを示していると考えている。その後によってくるS₇火砕流に伴う層は、西から東に向けて傾斜しており、厚い所で50cmもの堆積を示している。また、円形周溝の断面が見え、先述したように、そこには、S₁・S₂が無く、S₃の混じり層とS₃下部層が入ることで、S₁・S₂が積もることができないような構築物があったことが分かる。これは囲いがあったためと考えており、円形周溝に沿って円形に囲いが巡っていたと想定している。

第305図は、火砕流に直交する祭祀遺構調査区西壁側の南北方向のHセクションである。Dセクション同様にS₁・S₂火山灰が埋置土器の周囲から検出されている。厚いところで5cmある。また、Dセクション同様に、円形周溝の断面があり、S₁・S₂が認められず、S₃が入ってきている。S₇火砕流は、北が厚く、南に薄いもので北の厚い所で40cm、南の薄い所で20cmとかなり堆積の差があり、場所によって火砕流の堆積状況の差が示されている。

第306図は、祭祀遺構中央部南北方向のAセクションである。右側の大型土器が置いてある場所では、調査の関係から土層断面は上部で記録できなかった。大型土器配置の北部には、S₃火砕サージが入っているが、衝撃痕と考えられる箇所の土層は、S₇が中心の層で、この箇所がS₇火砕流による衝撃を受けた穴であることを示している。衝撃痕の南側へ行くと、S₁・S₂火山灰とS₃火砕流が堆積しており、それは、祭祀遺構の南側にある盛り土状



第305図 3号祭祀遺構Hセクション図・平面図

遺構までつながる。ここでも、円形周溝の溝にはS₁・S₂は入らず、S_{a1}により構築物が倒壊した後にS_{a3}が入っている。

第307図は、祭祀遺構中央部東西方向のBセクションである。小型杯皿の積み重ねのある西側の土層断面は記録できなかったが、東側については測図した。それを見るとやはり衝撃痕跡がかかる箇所は、S₇層となっており、これがS₁にともなう衝撃痕であることが想定される。さらに東側に大型土器が埋置されている。

西側の小型杯皿群の箇所は調査の都合上土層断面は記録できなかった。旧地形の東への傾斜及び西から東に向かう火砕流の動きや土器群の高さなどから、火砕流も西が高く、東に向かうにつれて薄くなる。

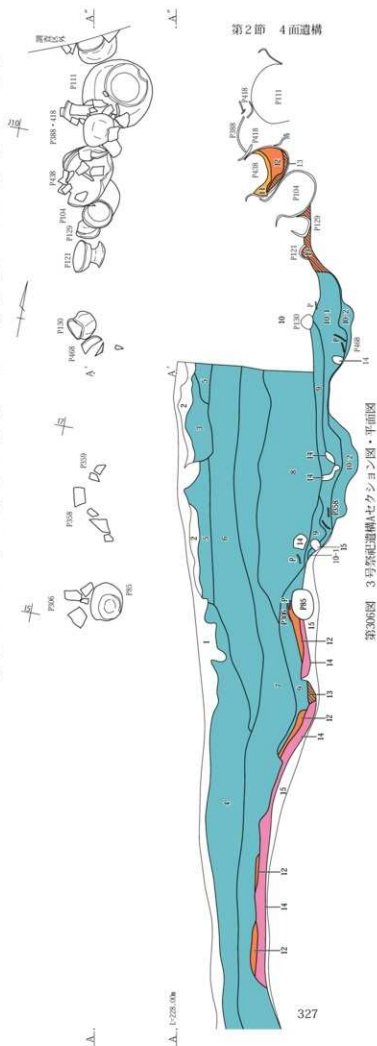
第303図は祭祀遺構西側小型土器群を南北に縦断するCセクションである。大型土器のP115の下部や、細かく土器が破碎している北側と、小型土器密集群の下にはS₁・S₂は土器に邪魔されて堆積していない可能性が高い。小型土器群集積が途切れる南側には、S₁・S₂が降下しており、小型土器群のP46・47の杯内部にS₁・S₂が入っている。また、ここでも円形周溝の土層断面を見ると、S₁・S₂が堆積しておらず、S_{a3}下部が入っているので、囲いがあったことが分かる。ここでも、S₇以降の火砕流は、北側の土器群があるところが少し高く、南側に向けて下がっている。

以上、5ヶ所の3号祭祀遺構の全体土層断面を見ると、円形周溝の中には、S₁・S₂火山灰が入らず、囲いと推定される構築物があったことを示している。また、周溝内

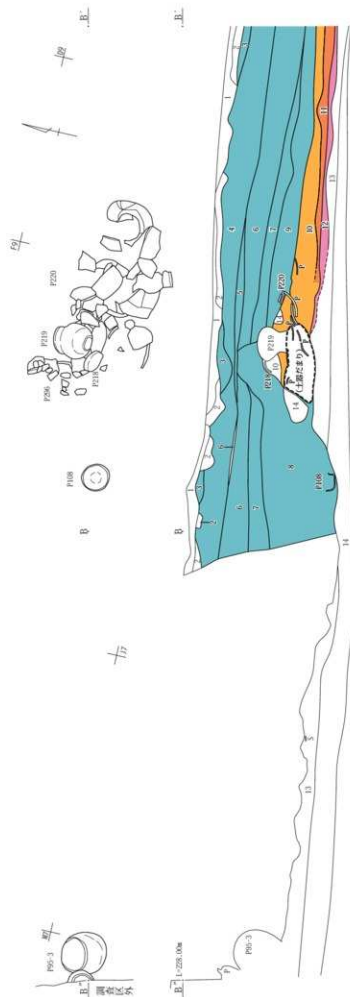
4区4面3号祭祀SPA-A'

1. 黒褐色土(10YR3/2) FP下里。
2. FA(S_a) 2次堆積。
3. FA(S_a)
4. FA(S₇) 細粒。
5. FA(S₇) 細粒、4層より細かい。
6. FA(S₇) 細粒、シルト質土互層となる。
7. FA(S₇) 粗粒。
8. FA(S₇) 粗粒、不均質。
9. FA(S₇) 灰黄褐色土(10YR5/2)と砂粒(φ1~2mm)混じり。
- 10-1. FA(S₇)細粒
- 10-2. FA(S₇)粗粒
11. FA(S_a)上部
12. FA(S_a)下部
13. FA(S_a)下部とS₁混じり、一部黒褐色土も含。
14. FA(S₁)
15. 灰黄褐色土(10YR4/2) S₁下里。

0 1:20 50cm



第306図 3号祭祀遺構Aセクション・平面図



第307図 3号祭祀遺構Bセクション図・平面図

で土器が置いていない箇所には、S₁・S₂が全面に堆積している。大型土器群が埋置された土器の隙間にもS₁・S₂が堆積し、また、小型土器群の最上部の土器の内部器面に直接S₁・S₂が堆積しており、大型土器の埋置や小型土器の集積後、間もない時期にS₁・S₂が降下した可能性が高いことを想定している。S₇火砕流は、西から東、北から南に向けて薄くなる傾向がある。ただし、これは土器群の高さや、旧地形の傾斜などの影響があるが、西から東に向かって流れる火砕流の動きも関係する可能性がある。また中央の穴状のものは、S₇に伴う衝撃痕跡の可能性が高いことが土層の観察から分かった。

立面図から見た土器埋置状況 3号祭祀遺構の土器の様子を主に立面図で解説する。第309図1は中央部から西に向けて見た図面である。調査開始時、膨大な土器が出現し始めた。取りあえず全体に掘り下げて出土した土器の様子を示した図である。右端には須恵器の大甕が見え、中央に盛り上がるようにして、小型土器群の積み重ねの最上部が見える。左には周溝の一部が円弧状に見えており、南側に連なる土器群が倒れた状況で見える。第309図2は、ある程度土層にあった破片などを含む土器を取り上げた段階のもので、右端に須恵器大甕があり、杯皿の積み重ねも良く見える。さらに円形周溝が明確に左側で確認できる。

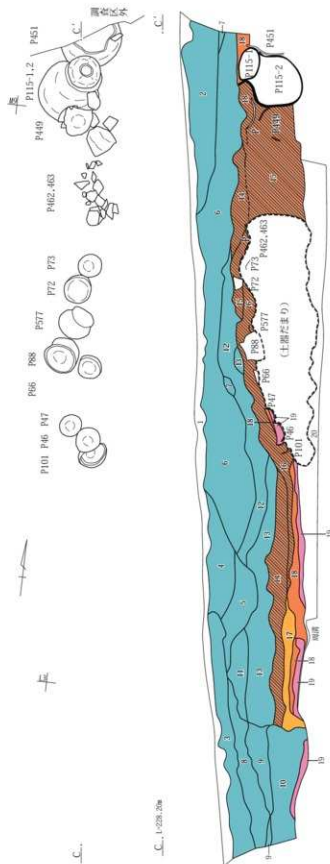
第310図1は中央から北に向けた立面図で、左端に小型土器群の積み重ねが見える。また中央部から右側にかけて大型土器群が見える。さらに、第310図2では、壁際の大型土器群のみの図であり、土器の配置の様子を示

4区4面3号祭祀SPB-B'

1. 黒褐色土(10YR3/2) FP下里。
2. FA(S₆) 2次堆積。
3. FA(S₆)
4. FA(S₇) 細粒、4層より細かい。
5. FA(S₇) シルト質、灰黄褐色土(10YR4/2)。
6. FA(S₇) 細粒、シルト質土互層となる。
7. FA(S₇) 粗粒。
8. FA(S₇) 粗粒、不淘汰。
9. FA(S₇)とS₈上部の混じり、灰黄褐色土(10YR5/2)と砂粒(φ1~2mm)混じり。
10. FA(S₈)上部
11. FA(S₈)下部
12. FA(S₈)
13. 灰黄褐色土(10YR4/2) S₁下里。
14. 黒褐色土(10YR3/2) やや黒味あり。

0 1:20 50cm

した。破片などがある程度取り除いた段階の土器群である。これら大型土器群は底が埋まり、底部を置いた痕跡が圧痕状に残り、側面の1/4程度まで地面に埋まるような形で埋置している。土を軟らかくした後に土器を据え置いたものと思われる。ほとんどすべての土器がそのような方法で置かれていた。小型の土器群も同じように軟らかくした土に埋め込むような形で置いている。そのような行為そのものが意味あることなのであろう。なお、第311図は、壁際に埋め込まれた大型土器の平面図である。これらの土器のほとんどは現地保存で残ってきている。



第308図 3号祭祀遺構にセクション図・平面図

4区4面3号祭祀SPC-C'

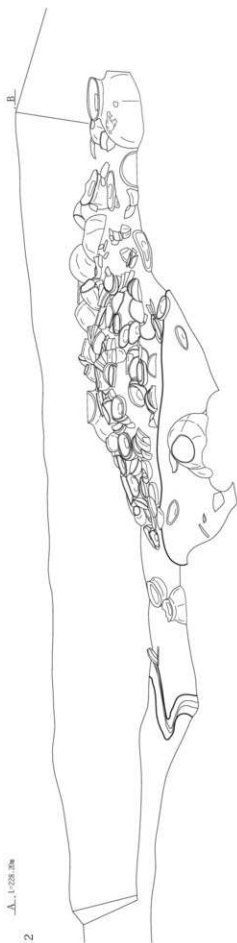
1. 黒褐色土(10YR3/2) FP下層。
2. FA(Sr) 灰黄褐色土(10YR6/2)
3. FA(Sr) 粗粒小軽石(ϕ 1~2mm) 2%含、灰黄色土(2.5Y6/2)
4. FA(Sr) 粗粒小軽石(ϕ 1~4mm) 5%含。
5. FA(Sr) 粗粒(ϕ 1~2mm)、褐灰色土(10YR5/1)
6. FA(Sr) 粗粒(ϕ 1~10mm)、暗灰黄色土(2.5Y5/2)
7. FA(Sr) シルト質、暗灰黄色土(2.5Y5/2)
8. FA(Sr) シルト質、砂質ラミナ状に入る。
9. FA(Sr) 細粒、黄灰色土(2.5Y6/1)
10. FA(Sr) 粗粒(ϕ 2~3mm)含。
11. FA(Sr) 細粒。
12. FA(Sr) 細粒、灰色土(5Y5/1)
13. FA(Sr) 細粒、(ϕ 2~3mm)含。
14. FA(Sr) 細砂~シルトとS3混じり、暗灰黄色土(2.5Y5/2)
15. FA(Sr) 細砂中心層。
16. FA(Sr) 細砂、15'層より粒径大、シルト混じり。
17. FA(Sr) 上部
18. FA(Sr) 下部
19. FA(Sr)
20. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱。

0 1 20 50m

330
1
A, 1/250.3m

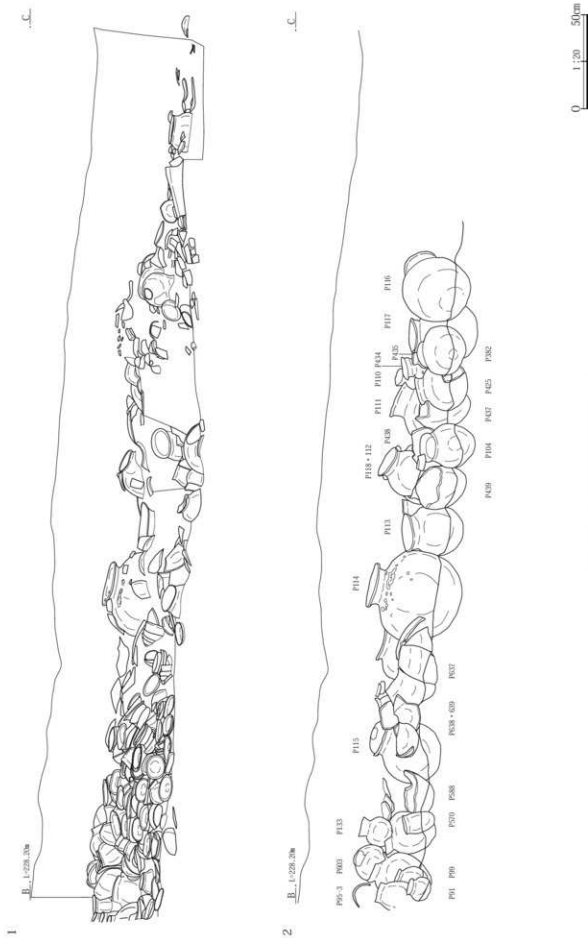


2
A, 1/250.3m

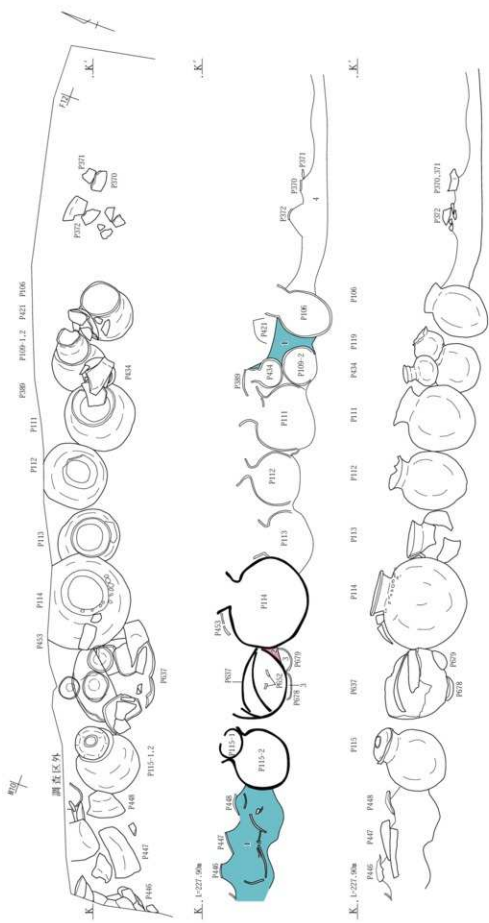


0 1:20 50cm

第309図 3号祭壇遺構A立面図1・2



第310図 3号系縄文遺構平面図 1・2



4区4面3号祭祀遺構K-K'
 1. FA (S₁) 細粒とS₁上部の混じり、黄灰色土砂質土。
 2. FA(S₂)
 3. 灰黄褐色土(O07B4/2) 細まりや中強。
 4. 灰黄褐色土(O07B4/2)

第311図 3号祭祀遺構Kセクション図・立面図・平面図

遺構の区分

遺構は、大きく5つに分けられる。南にコの字形に開く大型土器群と、大型土器群の南の土中から出た埋納祭具群、東南部に集中する700個に及ぶ小型集積土器群、単独か数個単位での重ね置きの小型土器群を中心とするいくつかのグループに分かれる1群囲いの外側に南北に並ぶ1群の5つである。

土器の番号・表現について

ここで土器の番号の付け方・表現について簡単に記す。単体の場合は土器にPをつけ番号をつけた。土器に積み重ねりがある場合は、代表の土器番号はPで始まる番号を付け、さらに枝番を上から土器から付けていく。例えばP132の番号を該当する土器群に付けると、上から枝番号で、P132-1、P132-2と呼称する。つまり最上段の土器が枝番で一番若い番号となる。積み重ねの説明の際には、

一番下に置いた土器から器形・分類記号で紹介する。最初に置いた一番下の土器を初めに記述する。例示すると、単体の場合はP112などといった土器番号、あるいは積み重ねの場合はP132群というような表記を取る。

個々の土器の説明は、土器の器形を初めに明示し、凡例で示した分類に基づき、分類記号で分類を示す。また、土器の中から白玉他の祭具が出土している。その場合は、土器器形・分類記号の後に(白玉3)などとして、納められた祭具の名称・個数を()内に記入する形を取る。以上を例示すると、単体の土器ではP99壺A①(白玉7)などと示し、積み重ね土器群だと、例えばP476群は杯CⅡ(白玉18)・杯CⅠ(白玉58)・杯AⅣ(管玉1・長頸腸挟片刃鎌1・穂積具1・素材1・白玉83)のように示す。この土器は3枚重ねということになる。

また凡例で示したように、土器を器種ごとに区分後、



第312図 3号祭祀遺構の遺構群区分図

細分類し、杯から甕・須恵器にかけて土器全体に通し番号をつけている。先述した、現場での取り上げ番号は、3号祭祀遺構での出土状態を明らかにするためにそのまま使用したので、一つの土器に対して2つの番号が付くことになった。遺物の出土状態を説明する際には、現場での取り上げ番号を優先する。出土状態をしめした1/6の土器図の口辺上に記した。器種分類後の通し番号は、左下に記した。器種分類後の1/3の土器図(第～図)は通し番号を右下に記すが、そのすぐ右の()内に(P)のように現場での取り上げ番号を記して照合できるようにした。

遺構の土層断面・断面番号の設定について

上記のような調査記録から調査現場では、土器の積み重ね等を明らかにするために、膨大な数の土層断面や断面図を作成した。そのため膨大な数のセクション番号が必要になり、随時付けていった。そのため数字とアルファベット両方を使用することになった。最初統合を図ったが、あまりにも膨大な数であることや、当時の記録との照合を考慮して、現場で付けた土層断面・断面の番号をこの報告でも基本的にそのまま採用し、一部混乱を招くものに限って修正した。

祭祀遺構の設置・使用・埋没想定

祭祀遺構は、大きく11のステージに区分できると想定した。以下、時間軸に沿ってその使用の状況を示す。

① **囲いの設置** 祭具・祭儀に使用した土器を埋納・埋置・集積するたの場所の区画を設定し、囲いを設ける。

② **土器設置準備** 囲い内で、祭祀使用土器・祭具を置くための準備として、地面を軟らかくして、白玉などを軟らかくした土中に敷く。

③ **大型土器群の設置** 大型の壺・甕を中心とする土器群のうち須恵器大甕を中心に据えて東西に直線状に設置した後に、東西端から南にコの字形にやや開き気味に、壺・甕を中心とした大型土器群を重列状に設置する。設置する際には、地面を軟らかくして、土器を押し込むようにして埋置させている。

④ **祭具の埋納** 大型甕の南、長径1.5m、短径1mの範囲に、土を掘り返し、その中に、小型鏡・玉類・石製模造品・鉄器・白玉など祭儀に使用した約11,450個に及ぶ品々を埋納する。深さは地面付近から深いもので50～70cmほどの深さまで埋納している。

⑤ **小型土器群の積み重ね** 祭儀の飲食儀礼で使用したと推定される食器類の杯を中心とした小型甕・埴・小型壺総数700個の土器を2～20段まで積み上げている。この土器の中には白玉が納められているものが半分ほどあり、祭具としての白玉の用途の一端を知ることができる。他の玉類や石製模造品・鉄器なども少数納められている。

⑥ **小型土器群・祭具の配置** 小型土器群の積み重ねと同時に及び少し後の段階で、単体か数個体の積み重ねで、大量の祭具を杯中心の小型土器類に納めたまま配置している。この配置は主に祭具を埋納した地点の上の地面を中心とした場所に限定される。

⑦ **囲い外側南の大型土器南北列配置** 大型土器コ字配置・小型土器群積み重ね・小型土器・土器群の配置との時間的前後関係は明瞭にできないが、囲い状遺構の南側の入口と想定される箇所から、南方向に向けて南北に大型土器群がほぼ一列に配列されている。

⑧ **榛名山爆発とS₁・S₂火山灰降下** 小型土器の配置・積み重ねの直後に榛名山が爆発し、Hr-FAのS₁・S₂が降下して、一斉に土器群の上に火山灰が積もる。

⑨ **少数の土器・祭具の配置・移動** ごく一部であるがS₁・S₂降下後に土器が置かれた様子が、小型土器群の一部に認められる。人が入って一部の土器や祭具を置いた可能性がある。

⑩ **S₃火砕流による被害** S₃の火砕流堆積した時に、10cmほどの火砕流により、大型土器群なども完全に埋まらずとも口辺部を少し残すほどまでの厚さ10cmの火砕流堆積物に覆われている。S₃火砕流が原因で明瞭に被害を受けた様子はうかがうことができない。

⑪ **S₄大火砕流による被害** 既にS₃火砕流サージで、家は倒壊して全滅していたが、その後のS₄大火砕流はHr-FAで最大の火砕流で、厚い所で50cmにも及ぶ層がある。火山弾などの衝撃が、3号祭祀遺構でも認められ、2つの衝撃痕跡を、中央部に残している。この衝撃により衝撃痕の東側は、地面が隆起し、土器が粉々になってしまった。3号祭祀遺構を含めた金井東裏ムラは埋め尽くされた。

以上、3号祭祀遺構の設置・使用・埋没状況の想定を示した。以下、この設置・使用の時間軸に沿って、遺構・遺物の説明をしていく。

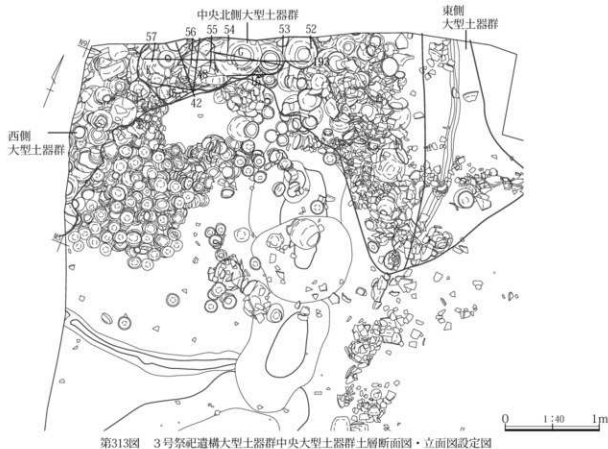
祭器遺構の想定使用・埋没状況から見た遺構説明

① 囲いの設置

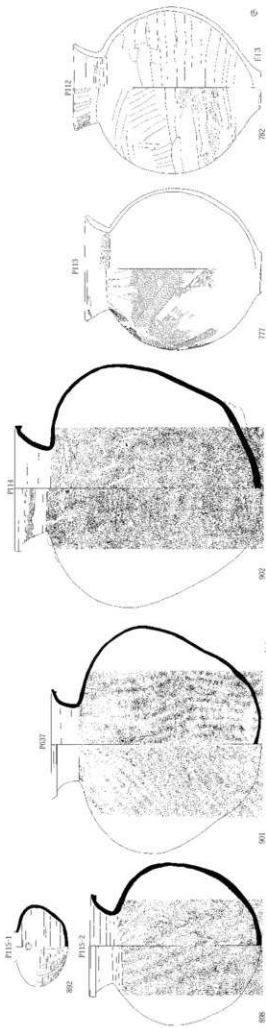
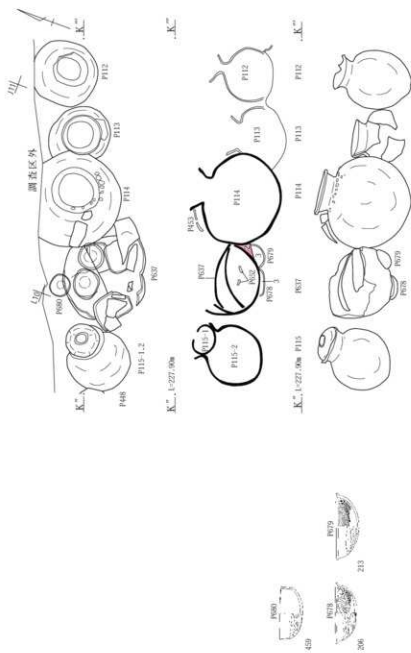
おそらく屋敷地の南の境界ということ意識して、祭具を埋納、祭儀に使用した土器群を埋置・集積する場所としてこの地点を選んだのであろう。3号祭祀遺構を囲む円形周溝は、第301図にあるような、ほぼ正円形であり、直径を推定すると5.4mである。周囲を上幅10～23、下幅3～10cmの周溝が円形に巡る。入口が、周溝の途切れと、円形周溝部から外側に南に向かって南北一列に並ぶ土器群の存在から、南東側にあるものと想定している。ただし、衝撃痕のために入口の様相は不明である。遺構の内外には S_1 ・ S_2 火山灰が降下しているので、上屋が無かったことは分かるが、円形周溝の溝部分には、第304～308)に見られるように、 S_1 ・ S_2 火山灰の降下が認められず、直接 S_0 の火砕流により覆われているので、この部分に構築物があって、 S_1 ・ S_2 火山灰が積もらなかったものと想定している。その候補として柵状の囲いを考えている。ただし、有機質・炭化物の残存は無かったので、囲いの材質・高さなどは不明で、厚みは溝の下幅未満のものであろうと推定する。囲いにより中にある土器群などを外から見えないようにしたものと推定する。

② 土器設置準備

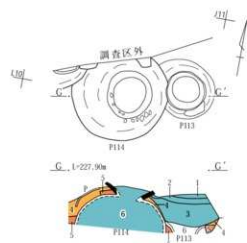
出土状況(第350・351図)に見られるように、白玉は、後に設置するコの字状に開く大型土器群の下の土中から、深い所で地表より50～70cm下からある程度数が出土している。つまり、主要な大型土器群設置の前に、白玉を撒くことがなされたのであろう。後に行われる中央部の祭具集中箇所以外での、大型土器群設置箇所の土中からは、白玉以外の祭具はほとんど出ない。さらに、この大型土器群を置いた所、及び小型土器群に関して、土器を取り上げた後に図化した第302図に見られるように、底部の痕跡が全体にスタンプ状に明瞭に残っており、土器をきっちりと据え置いたことが分かる。しかも、第310図2に見られるように、器高の1/3から1/2程度まで、埋め込んでいる土器もあることなどから、土器を置く部分の土を軟らかくして、上から押し込むようにして埋め置くとともに、さらに土を周りから寄せる様にして土器を埋置していることが想定される。土を全体にほぐすようにするとともに、白玉を散布し、同時に土を軟らかくして土器設置のための準備を行っているものと思われる。この際に、祭具埋納を集中的に行う箇所を中心にして少し深く掘り下げた可能性があるかと推定している。



第303図 3号祭祀遺構大型土器群中央大型土器群土層断面図・立面図設定図



第314図 3号発掘遺構“エレベーション”図・立面図・平面図・断面図・遺物図



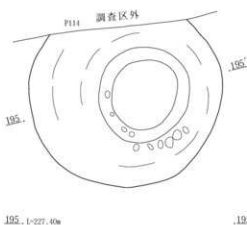
- 4区4面3号祭祀SPG-G'
1. FA(S₇) 細粒(φ0.5~1mm)含.
 2. FA(S₇) 細粒(φ1~3mm)含.
 3. FA(S₇) 粗粒(φ1~3mm)含.
 4. FA(S₇) 上部
 5. FA(S₇) 下部
 6. FA(S₇) 細粒



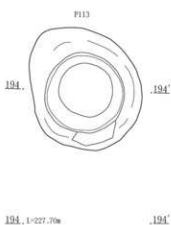
- 4区4面3号祭祀SP195-195'
1. FA(S₇) 細粒.
 2. FA(S₇) 上部

- 4区4面3号祭祀SP194-194'
1. FA(S₇) 細粒.
 2. FA(S₇) 上部

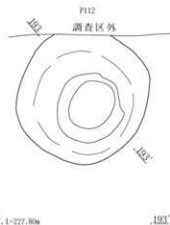
- 4区4面3号祭祀SP193-193'
1. FA(S₇) 細粒.



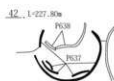
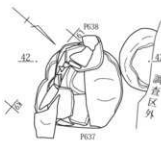
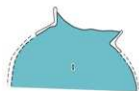
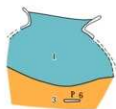
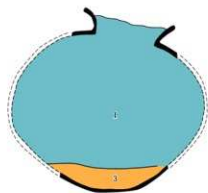
195. 1-227.40m



195. 194. 1-227.70m

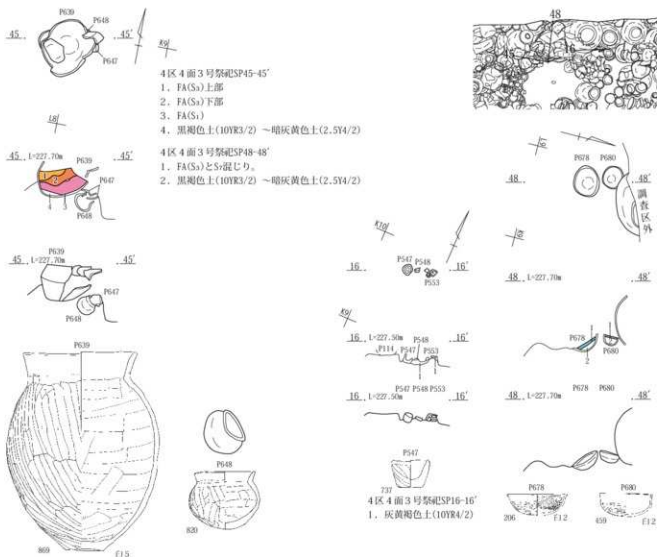


194. 193. 1-227.80m



第315図 3号祭祀遺構G・42・193セクション図・平面図

第三章 発見された遺構と遺物



第316図 3号祭祀遺構45・16・48セクション図・遺物図他

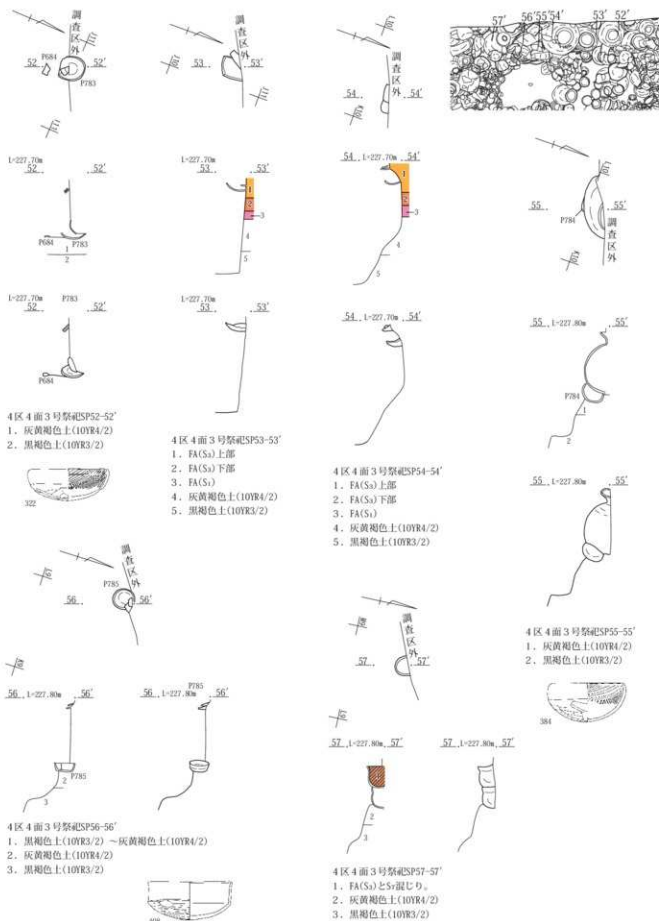
③大型土器群の設置

大型壺甕土器群設置は、大きく3つに分けられる。中央北側に東西方向に並置された須恵器大型甕群を中心とする中央大型土器群があり、残り2つは、西側と東側にコ字形に南側にやや開き気味に配置された大型土器群であり、中央北側及び西側・東側大型土器群をそれぞれ個別に解説していく。

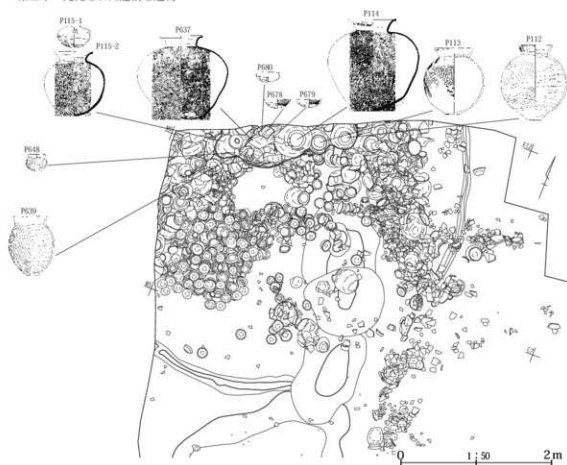
中央北側大型土器群の出土状況(第314図) 須恵器大型甕群がこの遺構の中心部すぐ北側に調査区外で現地保存の1個を含めると4個並置している。第301・302図を見て分かる様に明らかに、この場所を意識して置いたものであろう。復元直径から中心点を求めると、P637須恵器甕のすぐ前が中心点となる。P637須恵器甕の東横に配置した、P114須恵器大甕、P637須恵器甕の西隣に配置されるP115-2須恵器甕と、その甕の上に意図的に頸を欠い

ていると推定しているP115-1須恵器甕が出土している。この4個の須恵器甕・甕、及び現地保存の須恵器甕を含めると5個の須恵器群が祭祀遺構中の心的な土器となる。土師器ではなく、須恵器の甕を中心に置いたことに意味がある。これらの須恵器を含む大型土器群は、先の第310図を見ると、1/3程埋まで土器を埋めていることがよく分かる。土を軟らかくして埋め込んで、少し周りに土を寄せているようにして、しっかりと埋置していることが分かる。

K'-K''セクション(第314図)を見ると、中心の須恵器大甕となるP637の甕の下には、土師器杯が3点置かれている。P678杯AⅢ、P679杯AⅣが2個並置しており、P680杯CⅠをやや北側に置いている。P679杯AⅣに黒褐色土が堆積し、その上に須恵器甕P114・P637が覆いかぶさったその隙間にS₁・S₂が堆積している。このことから、



第317図 3号祭祀遺構52～57セクション図・立面図・遺物図他



第318図 3号祭祀遺構中央北側大型土器群配置復元図

P679は、 $S_1 \cdot S_2$ 降下前に、既に黒褐色土が入った状態で、置いてあり、このP679の両隣に、須恵器大甕のP637とP114を置いた後に、 $S_1 \cdot S_2$ が降下し、両土器の隙間から $S_1 \cdot S_2$ が入り込んだものと考えられる。P637須恵器大甕内部に滑石製白玉が5個出土した。G・195セクションで分かるように、P114の須恵器大甕には、上部に S_7 火砕流と、下部に S_3 上部層が入っていた。 $S_1 \cdot S_2 \cdot S_3$ 下部層については、確認できなかった。ただし、P114須恵器大甕の安置した箇所の土器周辺には、 $S_1 \cdot S_2$ が降下堆積しており、 $S_1 \cdot S_2$ 降下後に土器を置いたとは考えられない。甕の内部なので、 $S_1 \cdot S_2$ を観察できなかった可能性も考えたい。

須恵器大甕群の西側に土器壺が2個並置されている。P113壺B②・P112壺B②である。G・194・193セクション(第315図)を見るとP113壺には、P114須恵器大甕同様に上部に S_7 火砕流と、下部に S_3 上部層が入っていたが、最下部は不明である。P112には上層部に S_7 火砕流が入っている。P112の内部には白玉が3個入っていた。また、P637は、破損しているが、復元すると完形品の須恵器甕となっ

た。可能性として、この場所で破砕したことも想定する必要がある。

48セクション(第316図)にあるように壁際の土器器甕(現地保存)の南側すぐに土器器杯2点を置いている。甕に近い方がP680杯C I(白玉2)で、少し南に離れてP678杯A III(白玉2)がある。いずれも完形であり、黒褐色土が中に入っている。その上から、 $S_3 \cdot S_7$ の火砕流の混じり層が堆積している。 $S_1 \cdot S_2$ 降下時には、完全に他の土器により覆い隠されていたため、 $S_1 \cdot S_2$ が積もらず、 S_3 火砕流の西からの流下で入り込んだものと推定する。須恵器大甕P637の南側にP639甕D①とその東からP648小型甕C II①が置いてある。P639は、45セクション(第316図)にあるように、中に入っている火山灰土の堆積状況から見ると、土器が東方向斜めに倒れている状態で、黒褐色土が最下層にほんの少しあり、その上に $S_1 \cdot S_2$ が3cmほど堆積している。この上に S_3 下部・上部層が堆積している所から、この土器が既に $S_1 \cdot S_2$ が降下する時には東に倒れており、しかも割れていたことが分かる。

北壁際の壁に入り込んで、取り上げられなかった土器

も含めた一群の土器があるのでそれについて解説する。

東側から見ていく。52セクション(第317図)は、P112の北側下にP783杯BⅠを安置するもので、53セクション(第317図)は、遺物は取り上げできなかったが、P113の北東側の壁際に甕の破片が入っているの、ここに甕が安置されていることが分かる。P114の北西側の壁際にも54セクション(第317図)でみると同様に甕破片が一部見えており、こちら側にも甕があったことが分かる。同じくP114の北西側には、55セクション(第317図)で分かるように須恵器壺(現地保存)がある。この須恵壺の下に、P784杯BⅢがあり、この杯を置いた後に、須恵壺を上置いてある。P637の須恵器大甕の北側には、56セクション(第317図)に見られるように、P785杯CⅠが置いてある。57セクション(第317図)では、P115須恵器甕の北には、杯Aあるいは椀(現地保存)が2個重ねて置いてある。P114の西南には、23"にあるように、甕を安置するとともに、須恵器模倣杯を甕横すぐに置いてある。

中央北側大型土器群まとめ 中央大型土器群の配列の概要を記す。須恵器大甕を中心とする配置である。壁際の杯群は一部図を掲示しない。

P637須恵器大甕の前が、この3号祭祀遺構の中心となり、この中心部すぐ北側下に3個の土師器杯3個を置く。P678杯AⅢ・P679杯AⅣ・P680杯CⅠを少し埋め込むような形で配置する。その上に少し土を被せて、安定させた後に、須恵器大甕P637を安置した。ここが祭祀の中心場所となる重要な箇所である。この甕は、大きく破損していた。破損したものはほぼ接合できたが、この破損が人為的によるものかどうかは不明である。破損した可能性も考えて置く必要がある。この須恵器甕の中から白玉が5個出土した。この須恵器大甕のすぐ東側には、大きさでP637より更に大きい遺跡内で最大の大きさを持つ須恵大甕P114が安置される。この大型須恵器甕の下には杯他の土器は無い。一部口縁が欠けているが、頸部以下は完存である。口縁の欠けは人為的な欠けの可能性も考えて良いだろう。P637須恵器大甕のすぐ西側には、須恵器甕P115-2とその上に載る須恵器大型甕P115-1の組み合わせがあり特徴的である。特に甕はTK208型式並行の陶邑産の可能性が高いもので、このムラに入ってきた須恵器でも古い段階のものである。このように、3号祭祀遺構の中心点すぐ北側に、3個(さらに奥に壁に埋め込

まれていて持ち出せなかった同じく須恵器甕1個も含めると4個)の須恵器甕が並置されている事は、この祭祀において、須恵器甕が意味することが大きいことが明確に分かる。甕が上に載るセットのさらに西側には、P648小型甕CⅡとP639甕D①がある。須恵器大甕P114東側には、土師器の大型壺が2個並置される。P114のすぐ東にP113、さらにその東にP112の大型壺で、P113もP112も共に壺B②に分類されたものである。P112中には白玉が3個出土している。火山灰S₁が、須恵器大甕のすぐ横地面の上に降下しているの、明らかに須恵器大甕安置後に火山灰が降下したことは分かる。大甕の他にも、甕の底部付近からいくつかの杯が出ている。図示していないが、西から、P783杯BⅠ・P784杯BⅢ・P678杯AⅣ・P680杯CⅠ・P785杯CⅠで、いずれも単独で1点ずつ置かれていた。さらにP678杯AⅣ・P680杯CⅠの中には、白玉が2点ずつ納められていた。土師器壺・甕などの大型土器を、須恵器甕を中心に東西方向に直線状に置いている。ただし、壁際で埋め込まれて現地保存したままの大型土器を見ると、本来は2重以上の大型土器列があったと考えられる。また、単独で置かれた杯がいくつかあり、大型土器以外に、単独の埋置された杯があることも注意しておきたい。いずれも火山灰の観察からS₁・S₂が降下する前と推定している。

西側大型土器群の出土状況 中央の須恵器大型甕を中心とする土器群の西側に南西方向に南側に延長して配置された一群である。北側大型土器群の端から、やや南西に開き気味に広がりを持って延長していくもので、大型土器を中心に小型の土器も一部入るものである。北側から見ていくのを基本とするが、断面図の位置の関係等から、必ずしも説明は北からの順番通りにいかない場合もある。

北側中央の須恵器大甕P115-1のすぐ西に配置された土器が、43セクション(第320図)のP642甕C②とその上に乗るP646甕? (口辺が欠損しており分類不能)である。大型の甕が2個重ね置きされている。さらにその西横にはP645小型甕CⅡと、その上にP643小型甕AⅡが置かれていた。P642・645共に、内側にS₁・S₂が堆積している。上に置いてあった土器が破損していた可能性や間隔が開いていた可能性が高い。

23" 23"セクション(第320図)から、中央北側大型土

器群のP115-1須恵器大甕の南西に白玉を1個納めたP588甕C①と、そのすぐ南脇にP592杯CⅡが置かれていた。

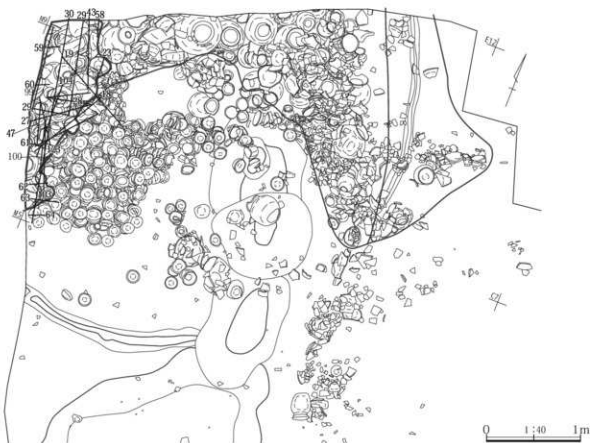
25セクション(第320図)は、P588南東にある甕のP580群を示す。下から、小型甕A C②、甕A①の重ねである、上段の甕Aの中には、 $S_1 \cdot S_2$ が破砕された土器内面に降下しており、 $S_1 \cdot S_2$ 降下以前に、上段の甕は破砕していたと思われる。下段の甕は口辺付近まで、埋置されていた。

30-30'セクション(第321図)は、西側大型土器群の主要な大型土器の南北方向の配置を示している。北側に起点となりうるP533甕B③、P604-2甕B①とその上に乗るP604-1小型甕AⅡ①がある。その南側にP607-2小型甕BⅠ①があり、P99-2甕A①(白玉7)、P99-1甕A①とはほぼ同形・法量の甕が2つ重ね置きされている。27セクションに見られるようにP99-1は、外反する広口の甕なので、 $S_1 \cdot S_2$ 灰が甕底部に厚く堆積した後に、 S_a 下部・上部層が堆積している。 $S_1 \cdot S_2$ 降下前から安置されていたことが分かる。

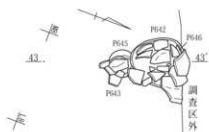
P605-3小型甕、P95-3甕、P92埴が北から南へと並んで

同じように、器高の1/2から1/3程度まで土器が埋置されている。土器の内部の土層は確認できなかったが、土器と土器の間の隙間に、 $S_1 \cdot S_2$ が堆積しており、これらの土器が $S_1 \cdot S_2$ 以前に埋置されたことが分かる。西側の大型土器群の西壁の調査区外とのセクション(58~65セクション)から想定できるのは、甕及び小型甕が中心に埋置されていることである。58セクションは、甕(現地保存)、59セクションでは甕(現地保存)、60セクションも甕(現地保存)、61セクションは小型甕(現地保存)が2段重ねである。62セクションは、P787小型甕CⅢ①の上P786大型甕(分類不明)が載っているものである。一部は積み重ねている。64セクションは、埴の体部(現地保存)らしきものが一部見えている。

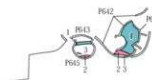
19セクション(第323図)では、中央北側大型土器群のP533甕の南のP133群(後述)に、P465甕B②が横倒しになっている。P465には、内部に $S_1 \cdot S_2$ が堆積しておりそれが、既に横倒になっている段階での堆積の可能性が高く、 S_1 降下前に、甕が横になって、しかも破砕していた可能性が高い。



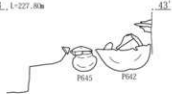
第319図 3号祭祀遺構西側大型土器群土層断面図・立面図設定図



43. 1-227.90m

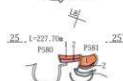
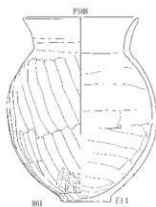
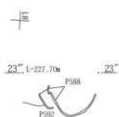
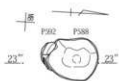
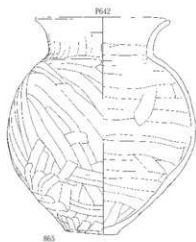
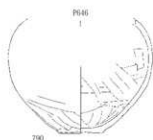


43. 1-227.80m

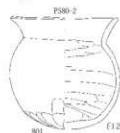


4区4面3号祭祀SP43-43'

1. FA(Sa)とS7混じり。
2. FA(S.)

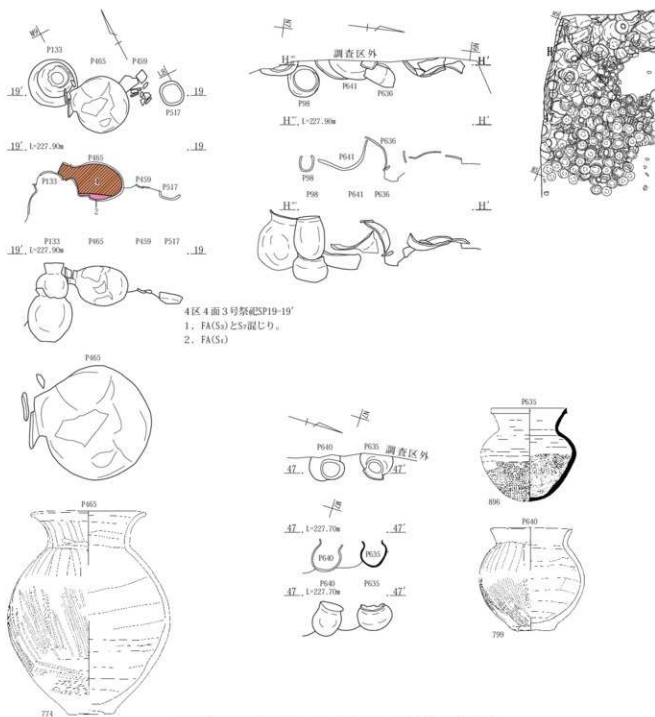


- 4区4面3号祭祀SP25-25'
1. FA(Sa)下部
 2. FA(S.)



第320図 3号祭祀遺構43・23・25セクション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物



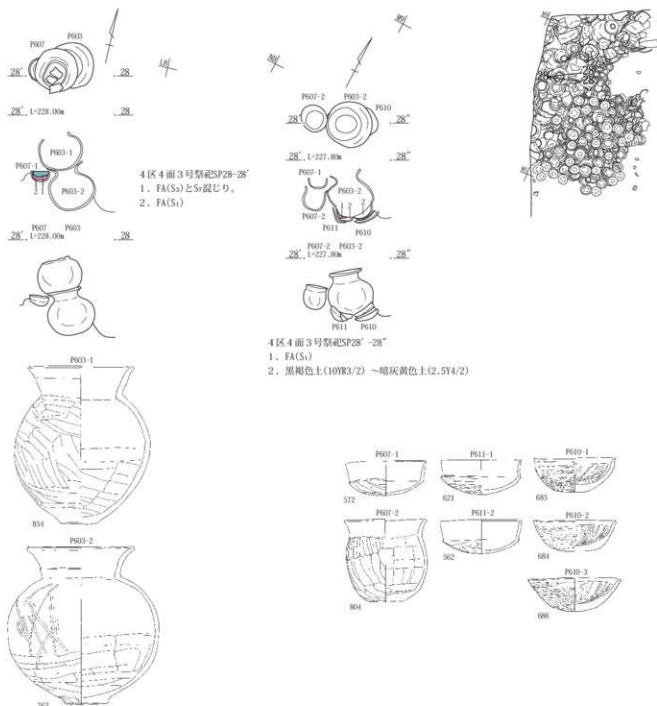
4区4面3号祭祀SP19-19'
1. FA(S₁)とS₂混じり。
2. FA(S₁)

第323図 3号祭祀遺構19・47・Hエレベーション図・遺物図他

Hセクション(第323図)は、西壁沿いに北から、甕(現地保存)、P636(現地保存)、P641(現地保存)、P98甕E、甕(現地保存)と並んでいる。大型の甕をまとめて並べていることが良く分かる。47セクション(第323図)を見ると、南中央壁よりP635須恵器小型壺とP640小型甕A I ②が南北に並置している。28'・28"セクション(第324図)で見ると分かるが、中央西壁側にP607群があり、小型甕B I ①と、その上に杯C IIが2段重ねで置かれている。上段の杯には、器内面に直接S₁・S₂が降下してい

る。その東側には、P611群の杯C IIと杯C IIIの2段重ねと、P610群の異形杯群の杯D V類の杯のみでの3段重ねの杯を並置した後、それらP611群、P610群の上にP603群甕A①・甕C①が2段重ねになっているセットである。P611-1杯C IIIの内面に、最下層に黒褐色土が積もり、その上にS₁・S₂が堆積している。土器の配置の隙間から堆積したものであろう。P611-1がS₁・S₂降下前に安置されたことが分かる例である。

29～29"セクション(第325図)は、先述したP603群の

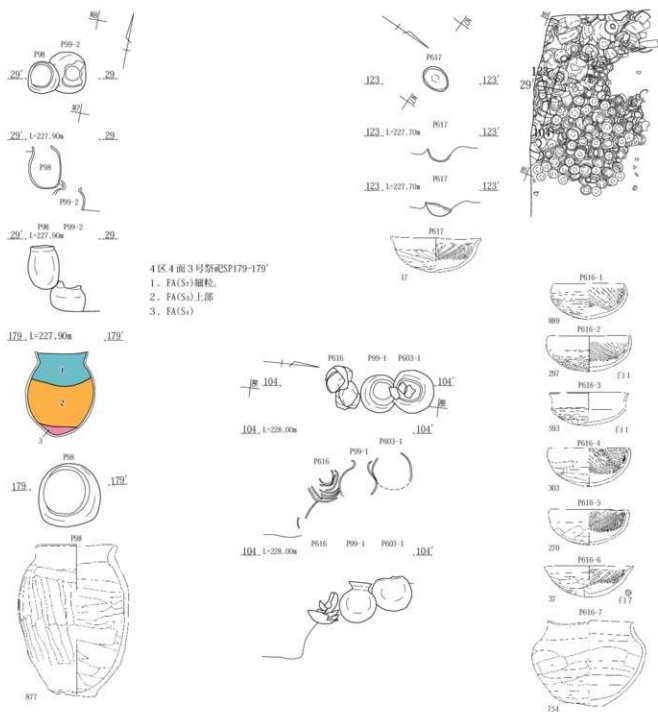


第324図 3号祭祀遺構28' -28, 28' -28' エレベーション図・遺物図他

北側にP612群があり、さらに、その北側にP133群があることを示している。P612群は、杯AⅡ(白玉7)・杯BⅡ(白玉1)が2段重ねで、埋置されている。P612-1には、黒褐色土が充満しており、その上からS₁・S₂が降下したものと想定している。その東にはP133群があり、甕C①・小型甕A②の2段重ねである。上段のP133-1の小型甕A②の中にはS₁・S₂が堆積しており、この土器がS₁降下前に置かれていることを示している。

27セクション(第325図)を見ると、P603群の南東に、

P614群があり、杯AⅣ・杯CⅠ(白玉1)と2枚重ねで置いている。この2個の杯の斜め上西側にP99群があり、壺A①を2個置いており、先述したように、ほぼ同形同大の壺で興味深いセットである。P614群の東側に、P600群があり、杯AⅡ・杯AⅢ・杯CⅢ・杯CⅠ(白玉2)・杯AⅣ・埴②(白玉5)の6個重ねである。さらに、P600群の東から斜めに倒れ込むようにしてP606杯AⅣがある。西側にP99-2の小型甕と、少し斜めになったP600-1の埴の上にP99-1の甕を置いている。



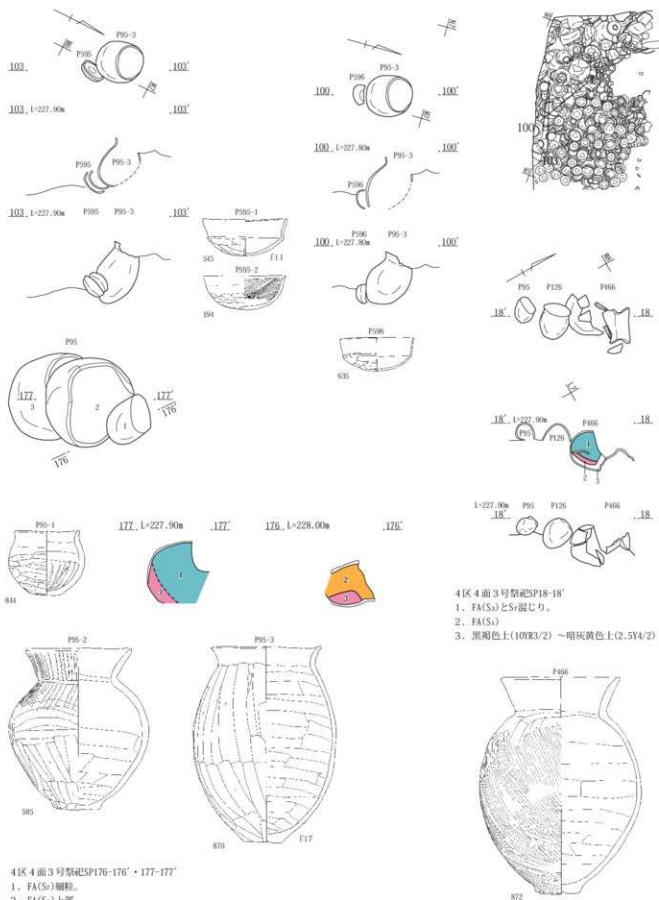
第326図 3号祭祀遺構29'・123・104エレベーション図・遺物図他

白玉を納めているものがある。

103・100セクション(第327図)は、西側大型土器配置群と、小型土器集積群との境を示す図で、特に注意したいのは、先述したP98裏の南部にも大型土器を中心とした積み重ねがあるが、土器を置く高さに差があり、P98の裏は高い位置で裏を置いているが、その南には、段差の低い面で土器を置いているものがある。小型土器集積群と同じ高さの面に、P595群があり、杯AⅡ・杯CⅢ(白

玉1)を重ね置きしたものと、P596杯CⅡの小型土器の上にP95群が載り、177セクション(第327図)にあるように裏D①(白玉7)・裏A①・小型裏CⅢ①の3個重ねである。P95-1小型裏、P95-2裏と共に、S₁・S₂が下部に器面に密着して堆積しており、S₁・S₂降下の直前にこれらの土器が置かれていたと考えられる。しかも、火山灰層の堆積状況から見ると、もともと直立していたのが、S₃火砕サージで倒壊して、そこにS₃が入ってきたとい

第三章 発見された遺構と遺物



- 4区4面3号祭祀SP18-18'
1. FA(Sa)とS7混じり。
 2. FA(S)
 3. 黒褐色土(10YR3/2)～暗灰黄色土(2.5Y4/2)

4区4面3号祭祀SP176-176'・177-177'

1. FA(Ss)粗粒。
2. FA(Ss)上部
3. FA(Ss)

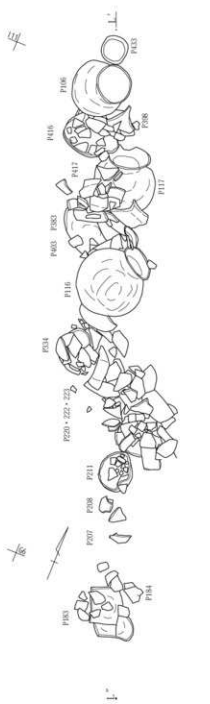
第327図 3号祭祀遺構103・100・18'エレベーション図・遺物図他

なる珍しい形で、そのすぐ東隣に、P600群があり、杯AⅡ・杯AⅢ・杯CⅢ・杯CⅠ(白玉2)・杯AⅣ・埴②(白玉5)の6個重ねである。P99-1は、火山灰からS₁・S₂降下前から安置されていたことが分かる。P99群の斜め下にもP614群があり、杯AⅣ・杯CⅠ(白玉1)と2枚重ねで置いている。さらに、P600群の東から斜めに倒れ込むようにしてP606杯AⅣがある。P99のすぐ西隣にP98甕Eがあり、P98の近くに単体で、P617杯AⅡが埋置されている。P98の西に、須恵器甕P635がある。さらに南にP640小型甕AⅠ②が置かれている。P640の東に小型土器の積み重ねをしているP616群がある。小型壺C①・杯AⅡ・杯BⅠ・杯BⅠ・杯CⅡ(白玉1)・杯BⅡ(白玉1)・杯BⅢの7

個が積み重ねられている。西側大型土器群は、このような小型土器群の積み重ねが少ない中で、白玉の納めも多く特徴的である。P640の東南にP95群があり、甕D①(白玉7)・甕A①・小型甕CⅢ①の3個重ねである。火山灰層からS₁・S₂降下の直前にこれらの土器が置かれていたと考えられる。西側大型土器群は、その大半が調査区外に入っているために、正確な実態は不明であるが、調査区内での内容からすると、甕・壺を中心にして、一部小型土器群を交えて2列以上の土器列で配置したものと想定される。白玉などの祭具も少数ではあるが入っている土器が有る程度があることが分かる。



第329図 3号祭祀遺構東側大型土器群土層断面図・立面図設定図



1. 黒褐色土(10YR3/2)

2. FA(Ss)とSsの混じり

3. FA(Ss)下部

4. FA(S)

5. 灰褐色土

4区4面3号発掘遺構L'

1. 黒褐色土(10YR3/2)

2. FA(Ss)とSsの混じり

3. FA(Ss)下部

4. FA(S)

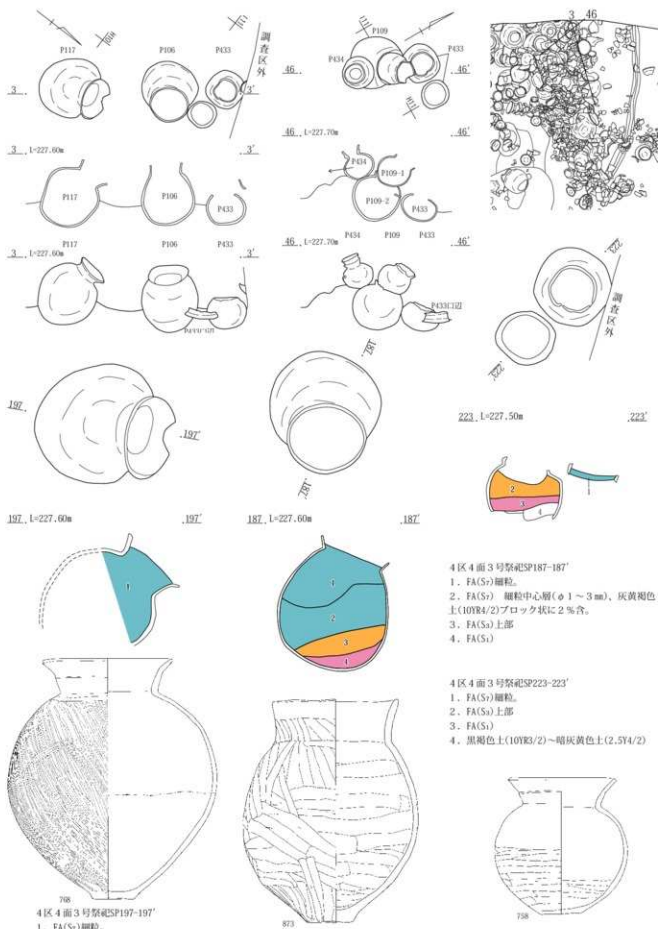
5. 灰褐色土

1. 1:227.70m



第330図 3号発掘遺構L'セクション図・平面図

第三章 発見された遺構と遺物



第331図 3号祭祀遺構3・46エレベーション図・遺物図他

東側大型土器群の出土状況 中央の須恵器甕を中心とする土器群の東側に、南東方向にやや開いた形で南に延びて大型土器を配置する土器群である。西側が、かなりの部分が調査区外で、様相が分からない所があるのに対して、図○にあるように、ほぼ完掘できたので、大型土器の配置が良く分かる土器群である。複数の土器配列があるのでその列ごとに見ていく。

Lセクション(第330図)に関連する平面図と土層断面図から、東側土器群の東端の南北方向の土器配置が良く分かる。北部は、P106・117・116が南北に器高1/3程まで埋め置いてあることが良く分かるが、南部に関しては、かなり細かく破砕されている状況が断面図から良く分かる。これは、西側から来たS₇火砕流及び火山弾による衝撃により飛散したものと考えている。

3・46セクション(第331図)により、東側大型土器群の北東部東側の配置の状況が分かる。P433壺A①が、口辺部のみ輪状に欠いて、土器本体の南東部に置いてある。このように自然に割れるとは想定しづらいので、口辺部を欠いて、その欠いた口辺部のみ南側に置いたと想定している。P106甕D②がその南側にあり、P117壺A②がその南東にある。うち、壺P433は、223セクションにより、黒褐色土が最下層に、その上にS₁・S₂があり、その上にS₃が載っている。甕P106には、187セクションにより、内部にS₁・S₂、S₃・S₇が入る。また、土層断面からすると、この土器自身が少し斜めになっている状況でS₁・S₂が降下したものと考える。壺P433のすぐ横に破損したP395甕がある。口辺部欠損のため甕の型式は不明である。44セクション(第332図)は、甕P106のすぐ南側にあるP119埴②の配置を示すもので、中に、白玉が7個入っている。199セクションに認められるように、土器内部の土層は、S₁・S₂が最下層に入っており、S₇がその上に堆積しており、やはりS₁・S₂直前の埋置を示している。4セクション(第332図)により、土器の東側土器群の北部端中央部の南北の土器の配置が分かる。調査区外にある、北端にある甕(現地保存)の南側からP109-2甕A②とその上にP109-1小型甕B②が置かれている。小型甕は、もともと北東に少し倒れかけていた段階で、S₁・S₂が降下して堆積している様子が190セクションの土器内部土層断面から分かる。さらに、P436須恵器壺が胴部半分ほどまで埋め込んで埋置されているが、その須恵器の中の226セク

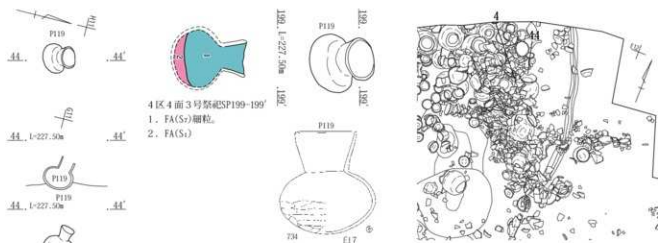
ションの土層堆積断面を見ると黒褐色土が5cmほど最下層にあり、その上にS₁・S₂層が降下しており、S₁・S₂降下前に時間差があったか、有機質の存在あるいは土を入れた行為があったものと想定される。

51セクション(第333図)は、東側土器群東端、北壁端のセクションで、甕(現地保存)の上に杯(現地保存)が置いている様子を示している。

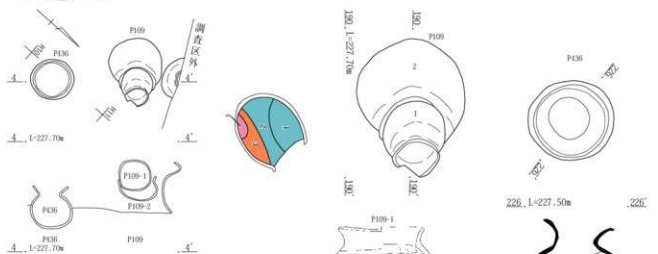
5セクション(第333図)は、東側土器群の中央部やや西側の南北群を明らかにする一群である。基本的に壺・甕の並びである。北から、壺P110、甕P109-2、この甕P109-2に須恵器模倣罎P434が胴部に載り、その南に甕P435、壺P426、大型壺P403、須恵器甕P116の並びとなる。このうち、P110の壺B①には191セクションにあるように、S₃上部層が入っているが、S₁・S₂は確認できなかった。ただし、S₁・S₂層とS₃上部は、シルト質のあずき色に近い火山灰土なので見分けが困難な所もあるので、S₁・S₂との分別ができなかった可能性もある。隣のP434須恵器模倣罎は、甕P435に寄り掛かるようにしているが、黒褐色土の上にS₁・S₂が堆積している。さらに南のP435甕C②には、225セクションにあるS₁・S₂が最下層にあり、その上にS₃上下層が載っている。南のP426壺B②は、破砕しているもので、S₇火砕流が中心に入っている。P403壺B③は火砕流で倒壊しており、37セクション(第334図)によりP116須恵器甕も火砕流で横転している状況である。いずれもS₇火砕流が周りを埋め尽くしている。白玉がいくつかの土器内部に入っており、須恵器甕P116に9個、大形壺P403に1個、須恵器模倣罎P434に2個入っていた。この付近の土器はS₇火砕流による倒壊・破損が多い。

6セクション(第335図)は、東側土器群の一番西側の南北列を示すものである。北から見ると、北端には、壁に埋め込まれている甕(現地保存)があり、その南には、壺P111が埋置され、さらに壺P437、壺P425があり、さらにP(427・633)は、火砕流により倒壊しているもので、さらにその南には壺P382がある。いずれも、器高の1/3か半分程土器を埋置している。P437壺Cには正位で、227セクションにあるように、S₁・S₂が最下層に入っているが、P111壺B③(第336図)は、S₃上部層が最下層に入っており、検討を要する。先述したように、P(427・633)壺A②は、火山弾による衝撃で破砕され、P382壺は

第三章 発見された遺構と遺物



4区4面3号祭祀SP190-199'
1. FA(S₁)細粒.
2. FA(S₁)



4区4面3号祭祀SP226-226'
1. FA(S₁)と灰黄褐色土(10YR4/2)混じり。
2. FA(S₁)
3. 黒褐色土(10YR3/2)～暗灰黄色土(2.5Y4/2)

火砕流で倒れたものと想定している。これらの壺・甕には白玉が多く入れられており、P425壺B①には20個、壺(P427・633)には5個、P382壺B③には、白玉11と菅玉1が入っている。白玉を入れる行為がここでも行われている。

1・2セクション(第336図)は、東側土器群北部の東西方向の並びを確認するための断面である。1セクションは、下層の遺物群で、東から西に向かって埴P119と甕P106、甕P435、大甕P111とP644-1小型甕CⅡ①、壺・甕の2段重むP118-2壺B②、P118-1甕A①が並置されている。2セクションを見るとP111の肩部に須恵器模倣甕P434が置かれている。

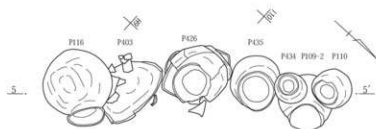
Zセクション(第337図)は、先の1・2セクション

4区4面3号祭祀SP190-190'
1. FA(S₂)細粒。
2. FA(S₂) 細粒中心層(φ1~3mm)、暗褐色土(10YR4/2)ブロック状に2%含。
3. FA(S₂)下部
4. FA(S₂)

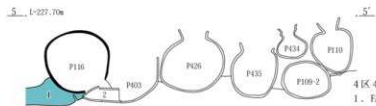
第332図 3号祭祀遺構44・4エレベーション図・遺物図他



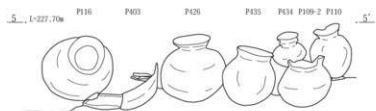
4区4面3号祭祀SP51-51'
1. 灰黄褐色土(10YR4/2)
2. 黒褐色土(10YR3/2)



5, L=227.70m



4区4面3号祭祀SP5-5'
1. FA(Sa)とSr混じり。
2. 黒褐色土(10YR3/2)



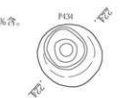
5, L=227.70m

4区4面3号祭祀SP191-191'

1. FA(Sr)細粒。
2. FA(Sr) 細粒中心層(φ 1~3mm)、灰褐色土(10YR4/2)ブロック状に2%含。
3. FA(Sa)上部



4区4面3号祭祀SP224-224'
1. FA(Sa)と灰黄褐色土(10YR4/2)混じり。
2. FA(Sa)
3. 黒褐色土(10YR3/2)~暗灰黄色土(2.5Y4/2)



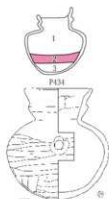
224, L=227.70m



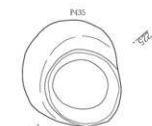
191, L=227.70m



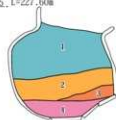
369



738

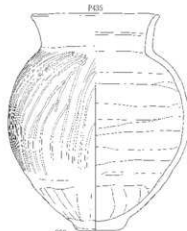


225, L=227.60m



4区4面3号祭祀SP225-225'

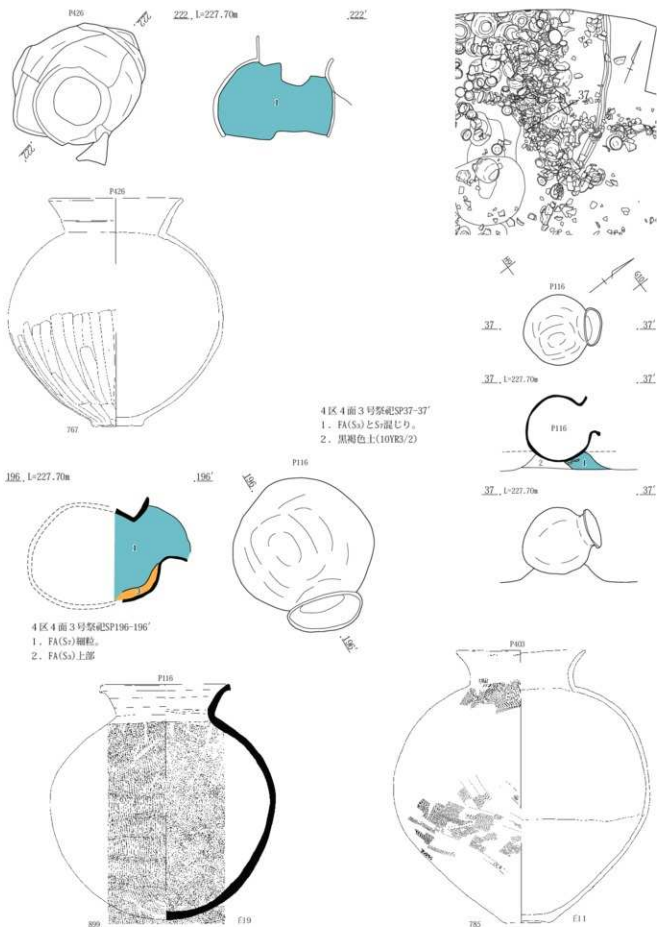
1. FA(Sr)細粒。
2. FA(Sa)上部
3. FA(Sa)下部
4. FA(Sr)



806

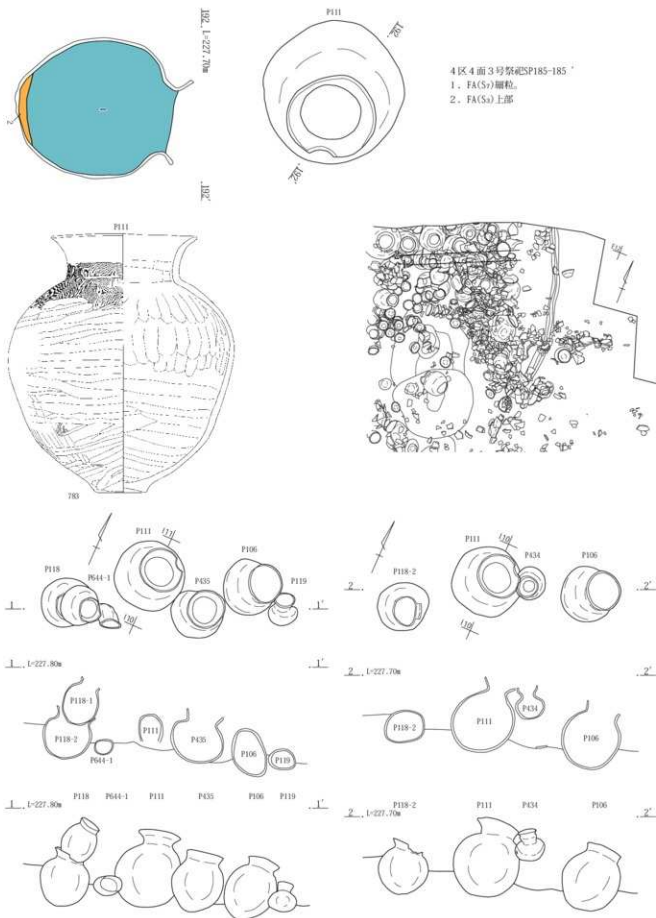
第333図 3号祭祀遺構5・51エレベーション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物



第334図 3号祭祀遺構P426・37エレベーション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物



第336図 3号祭祀遺構1・2エレベーション図・遺物図他

ンの南側の東西方向の一群を示している。東から須恵器壺P436、P437壺C、P438壺D②、P439壺D③がある。壺P439の土器内部土層断面を見ると、S₁・S₂層が最下層に入り、S₃、S₇の順で堆積している。この壺もS₁・S₂降下以前に器高3/4まで埋置していたものであろう。壺P438の北にP418壺B②があり、7セクション(第337図)で分かる様に、壺P438の南にP104壺D①がある。壺P104の土器内部の土層は、185セクションを見ると、最下層にS₁・S₂が堆積し、S₃、S₇と積もっている。S₁・S₂降下前に置いてあったことを示している。

■セクション(第338図)は、中央大型土器群の壺P112の南に、2段重ねP118-2壺B②とそのその上にP118-1壺A①があり、壺P118-1には198セクションにあるように、S₃上部層が下位に入り、検討を要する土層である。その南のP439壺D③には、■セクションにあるように、S₁が最下層に入っている。

41セクション(第338図)により、壺P438の北にP644群があり、下から小型壺CⅡ①と小型壺CⅢ②が積み重ねられている。

Yセクション(第339図)は、先のZセクションの南側の東西方向の壺壺の一群の様子を示すものである。東から壺P117、壺P426、壺P425、壺P104、P458杯群のいずれも土器を1/3程埋置していることを示している。

Xセクション(第339図)は、Yセクションのさらに南側の東西方向の壺壺の一群の様子を示すものである。東から須恵器大壺P116、壺P382が並置されているが、火砕流の影響でやや北側に倒れている。須恵器壺P116は、S₁・S₂火山灰が、胴部ぎりぎりまで堆積しており、この壺がS₁・S₂火山灰降下前に置かれたことを示している。

東側土器群の南端の土器の様相を示す一群(第339図)があり、それがP219小型壺BⅠ②、P220～224壺、P218杯CⅢ、P351埴Ⅱであるが、いずれも倒れている。特に、大型壺P220～224は、粉々に破砕しており、すぐ西側にある火砕流に伴う衝撃痕から、おそらく火山弾等の衝撃により壊れたものと思われる。東側土器群中央西部の壺P425の南東部にP122小型壺A①がある。P218には白玉が2個収められている。小型壺P122内部には、最下層に黒褐色土があり、その中に白玉が5個入っていた。その上にS₁・S₂火山灰が堆積しており、S₁・S₂降下以前に置いてあったと思われる。東側土器群壺P382の南側に割れた

状況で出土したのがP343・344杯BⅡである。

67セクション(第340図)では、周溝外に流された杯を主体とする積み重ねのP266群で、高杯DⅡ・杯DⅩ・杯AⅢ・杯AⅣ・杯AⅠ・杯BⅡ6個の積み重ね群である。これらは、周溝内の東側土器群の東端に積み重ねられて置いたものが、土層断面・土器立面を見るとS₃火砕サージで西から東に流されたことが分かる。もう一つ、流された杯の積み重ね群がある。それが66セクションのP261の一群で、杯BⅡ・杯AⅣ・杯CⅡの3個体で、土層断面・土器立面で見ると、やはり、S₃火砕サージで西から東に流されて、周溝から東側に約80cmまで流されている。ただし、P261の一群の杯の内部には66セクションに見られるように、S₁・S₂が堆積しておらず、S₃が積もっており、あるいは、S₁・S₂降下後、S₃火砕サージが流下する前に置かれたものである可能性がある。

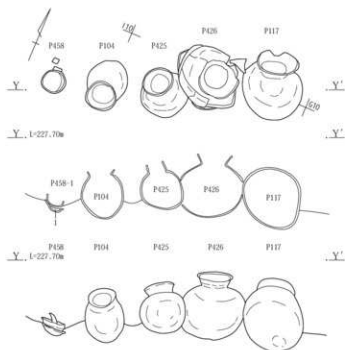
周溝外でやや大きな土器が2個検出されている(第340図)。壺P102と壺P323である。周溝(囲い)の西側約30cmの所からP102小型壺C②が出土している。小型壺P102の出土土層断面を見ると、S₁・S₂火山灰降下後のS₃火砕流下部層の上、S₃火砕流上部層の上に載って出土している。しかし、土器の内部断面を見るとS₁・S₂が最下層に堆積し、S₃上部層が堆積しているため、S₁・S₂火山灰降下前に別の場所に置かれ、S₃・S₇火砕流時に西から東に動かされたものと考えられる。先ほどの土器群と同じように、囲いの内部から、囲いがS₃により倒壊する中で、西側に流されていると推定している。P323壺は、破砕しており、おそらく火砕流に伴う衝撃によるものと想定している。

周溝内部から出ているもの、上半部が、S₃・S₇時の衝撃により、吹き飛んだものかP(211・331)小型壺BⅠである。底部のあるP331の位置が本来の位置であったと思われ、そこから吹き飛ばされて、東側に上部が飛散したものと想定している。

さらに分かれて出土したが、土器群南端から一部東南部に流されてP351埴②が出土している。

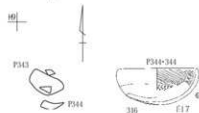
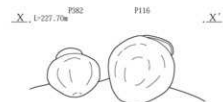
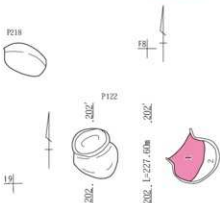
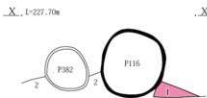
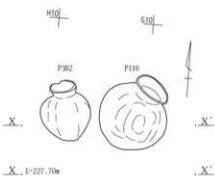
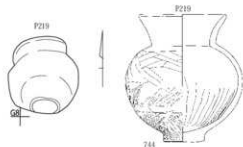
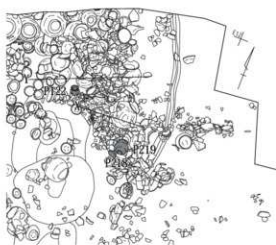
立面D～E'は、西から見た東側土器群のうち北壁近くにあるP112～P116までの壺・壺群の配置状況を示したものである。いずれも半分から2/3程埋められていることが良く分かる。意識的に壺・壺は底を安定するために、地面を掘って軟らかくするとともに、掘え置いた後も意識的に土を周りから寄せて埋置するような形をとっ

第三章 発見された遺構と遺物



4区4面3号祭祀SPY-Y'

1. 黒褐色土(10YR3/2) ~ 暗灰黄色土(2.5Y4/2)

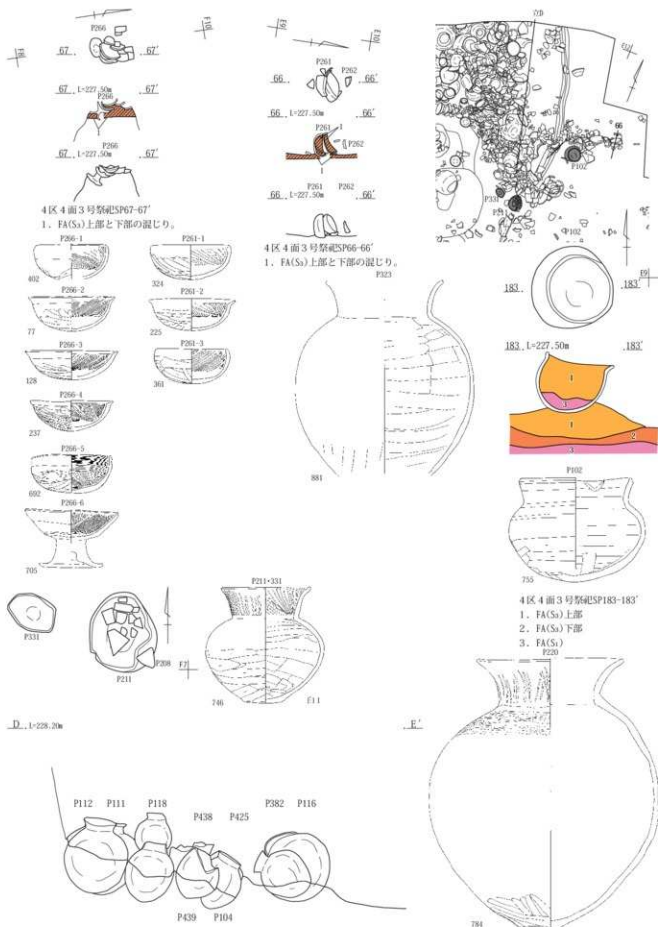


4区4面3号祭祀SP202-202'

1. FA(S)

2. 黒褐色土(10YR3/2) ~ 暗灰黄色土(2.5Y4/2)

第339図 3号祭祀遺構Y・Xエレベーション図・P122・218・219・223・343・344遺物図他



第340図 3号祭祀遺構67・66・Dセクション図・遺物図、P102・211・331・220・323遺物図他

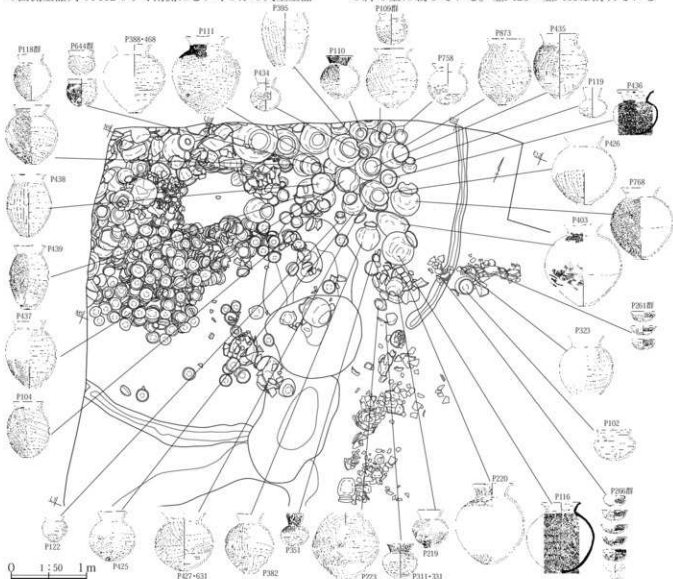
たものと思われる。これは全ての土器では無いが、観察するとかかなりの部分の土器をこのような形で埋置していることが調査により明らかになった。

東側大型土器群の配置過程(第341図) 東側大型土器群配置の概要を記す。基本は、西側大型土器群と同様大型壺・甕を核として、一部小型土器群を重置きしていくものである。北側から見ていく。東部大型土器群壺P112のすぐ西及び南から西側土器列が確認される。P112のすぐ東北側の甕は、現地保存のため型式は確認できない。この甕の南、P112の南西に大型のP111壺B③がある。この土器が起点となるような形で、東南側に土器が設置される。P111の南に連続して、北からP437壺C、P425壺B①、P(427・633)壺A②、P382壺B②と続く。この南に現状では倒壊が著しい南端部の土器群がある。これらの西側土器列のP112のすぐ南側にもいくつかの大型土器

群があり、これも東側土器群に含めて考えている。P112壺のすぐ南に、大型のP418壺B②がある。割れている。そのすぐ西横にはP118群があり、甕A①の上にやや大形の壺B②が重置きしている。その南には、P438甕D②、P439甕D③がある。いずれも割れている。東南には、P104甕D①が完形で出ている。この土器群のすぐ南にある杯を中心とする小型土器は、中央部全体から出てくる、小型土器群の中の一団として別に捉える。

南側、甕P425の南西にP122小型甕AⅠ①が置いてある。

中央・東側の土器列を北側からみていく。中央列は、壺P111の北東、北壁際にP110壺B①があり、南に向かって、P434土師器甕、P435甕C②、P426壺B②、P403壺B③、P116須恵器甕と並んで出てきている。P434甕以外は大型の壺・甕群である。P434甕は、壺P111と甕P109-2の肩の上に載っている。壺P426・壺P403は割れている

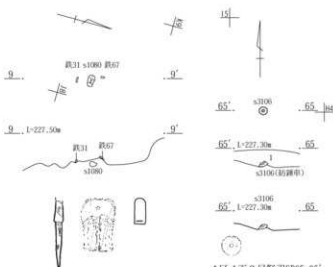


第341図 3号祭祀遺構東側大型土器群配置復元図



4区4面3号祭祀ESP35-35'・36-36'

1. 黒褐色土(10YR3/2)炭化物2%含。白玉含。締まりやや弱。



4区4面3号祭祀SP05-65'

1. 灰黄褐色土(10YR4/2)

第342図 3号祭祀小型鏡・紡輪・短甲形石製模造品出土状況図が、それ以外は完形である。

一番東側の列は、北から、口辺部を意図的に欠いていると想定しているP433壺A①があり、その北東に破損していたP395甕(型式不明)がある。その南にP106甕D②とそのすぐ東南脇にP119埴②がある。甕P106の西には、P109群があり、壺A②に小型甕B②が載っているものである。甕P106の南には、P436須恵器壺、P117壺A②と並ぶ、甕P395、須恵器甕P436以外は完形である。

また、この東側の列付近から、囲いが倒壊して火砕流に流されて出てきた土器が囲い外側から出土している。

P102小型甕C③とP323甕(型式不明)である。P323は破砕している。また、杯等の小型土器の積み重ね群もやはり西から流されてきた可能性のあるものが2つある。P266群は、高杯DⅡ・杯DX・杯AⅢ・杯AⅣ・杯AⅠ・杯BⅡ6個の積み重ね群で、P261群は、杯BⅡ・杯AⅣ・

杯CⅡの3個体の積み重ねである。

南端にある土器は、P219小型壺BⅠ②が南端近くに出ており、その下から、P220～224壺(型式不明)が出ているので、積み重ねていた可能性が高い。P(231・351)埴②とP(211・331)小型壺BⅠは、南端部付近よりでており、いずれも破損している。P218杯CⅢ、P343・344杯BⅡは、南端部の西側から出ており、あるいは西から火砕流で流されてきた可能性もある。

④祭具の埋納(第342～356図)

大量の祭具を、中央大型土器群の南側、長径2m、短径1.5mのほぼ楕円形の範囲を中心に集中して埋納している。大型土器群の内側に土坑様の掘方を設けて、土中に、鏡・玉類・ガラス玉・石製模造品・鉄器・白玉を埋納していると想定している。以下、祭具ごとに埋納の様子を示す。

小型鏡 (第342・506図) 小型鏡は、第345図にあるように、埋納部のやや北西の場所で、小型土器群の積み重ね群P73群とP64群の下から出土した。積み重ね土器群を外した段階で、その下約1cmの土の中から、鏡面を下にして出土している。周りに白玉が分布しているが規則的では無い。積み重ね土器の下、埋納はごく浅い所で行われており、ほんの少し土がかけられているという状況で土中に納められている。このことから、この鏡の土中への埋納は、祭具の埋納行為の最終段階におこなわれたと考えている。その後、あまり間をおかずに、埋納した鏡の上に小型土器が積み重ねられたと想定している。

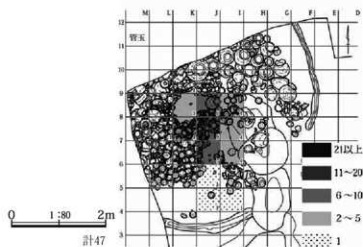
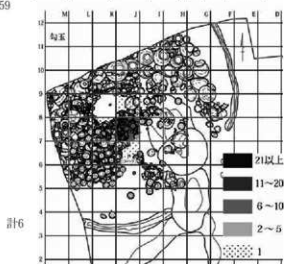
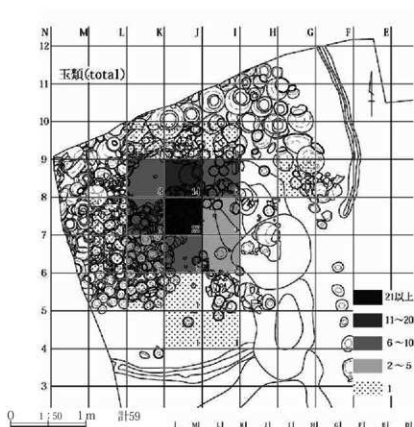
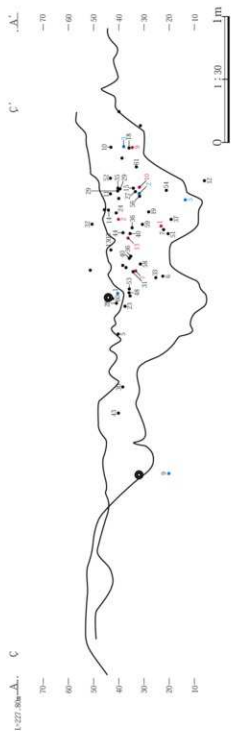
玉類(第343～356・507～510図) 玉類は、祭祀遺構の中心地点に近い、中央大型土器群のすぐ南西にある土器を配置しない空地の南側から、南北方向に楕円形状の範囲から59個出土したものである。ほとんどが、中央の楕円形状の特にJ・7・8Gに集中する。集中部から出土した。

勾玉(第343・344・507図) 中央部に集中し、計6個がJ7Gを中心とした集中部から出土する。深度が深い箇所と浅い箇所の両方から出土する。琥珀勾玉は、集中部の南部深さ5cmほどの所から頭部を北側に、下向きに出土している。出土当初は、半透明の美しい姿であったが、空気に触れて、少し割れが入るなどしたので、保存処置を施した。

管玉(第343・344・508図) 総数47個が土中から出土し



第343図 3号祭祀遺構玉類出土状況図・垂直分布図1

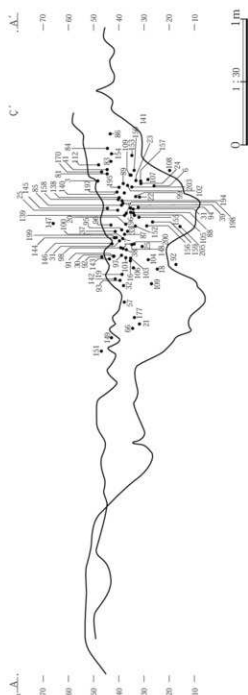


第344图 3号祭祀遺構玉類垂直分布図2・玉類度数分布図

ガラス

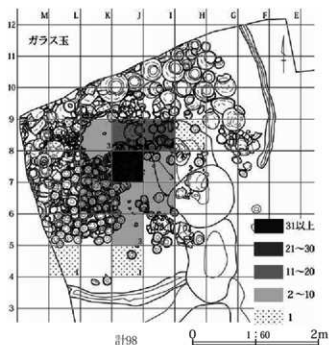


第345図 3号祭祀遺構ガラス玉出土状況図・垂直分布図1



第346図 3号祭祀遺構ガラス玉垂直分布図2・ガラス玉
度数分布図

ている。J7Gでは9個出土し、その周辺のJ7Gを核にした楕円形長径1.5mの範囲に、複数の管玉が出ている。北のJ8Gから6個、北東～南東のI6～I8Gから4個、南のJ7Gから7個、北西のK8Gから3個、西のK7Gから4個が出土している。管玉は祭祀遺構で出土する例が多いが、これだけの量が出ることは稀である。管玉は、囲いの内側ではあるが、南側や西側などい

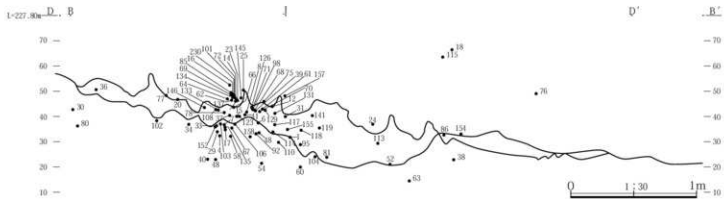


くつか集中域から外れた地点からも出土している。小玉・丸玉(第514図、第346・347図)も中央部から集中出土している。珍しい三角形の垂飾(第514図、第346・347図)は、小型土器P80群の積み重ね土器の下の土中から出土している。この地点は、小型土器の中に豊富な祭具を納めた土器群が配置された箇所である。琥珀製丸玉は、J6Gから出土した。

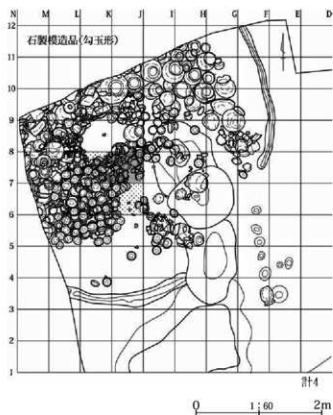
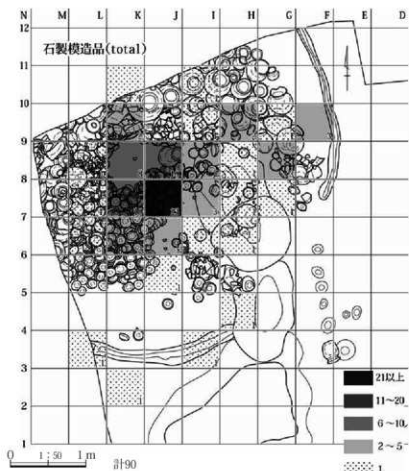
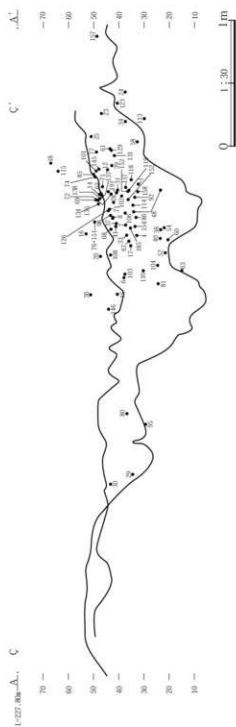
紡輪(第343・345・509図)特徴的な場所から出土した。第346図にあるように、入口と想定される南東方向に繋がる、円形囲いの溝の東端部の下20cmほどの所から出土している。囲いの内部からは1点の紡輪も出ていないことと併せて興味深い。

ガラス玉類(第515図、第348・349図)総数98点が出土している。やはり、中央大型土器群の南、長径2m、短径1.5mの半に集中する。ガラス勾玉は、小型土器集積群中央部群のP509群の北東、P481群の下の土中から出土している。勾玉は既に頭部が折れた状態で出土した。3号祭祀からのガラス製勾玉は唯一例である。

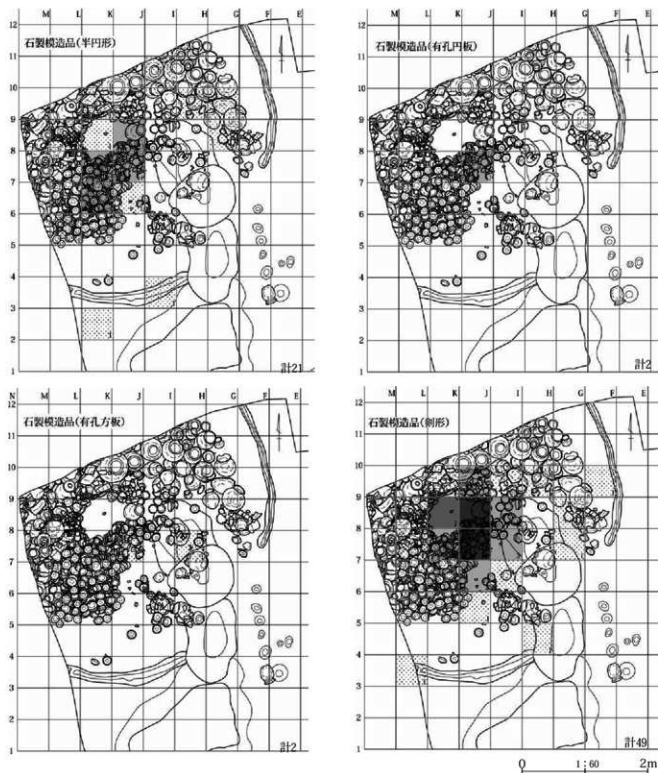
ガラス小玉は、地面から深いもの、浅いもの両方ある。一番集中して出土するのは他と同じくJ7Gである。鋳型法と引き伸ばし法により大きく2大別されるが、鋳型法によるガラス玉は、41個出土している。うち17個は、土器の中に納められており、それ以外の24個が土中埋納である。



第347图 3号祭祀遺構石製模造品出土状況圖・垂直分布圖1



第348图 3号祭祀遺構石製模造品垂直分布图2、石製模造品・勾玉形石製模造品度数分布图



第349図 3号祭祀遺構半円形・有孔円板・有孔方板・剣形石製模造品度数分布図

引き伸ばし法のガラス小玉は、総数167個だが、土中埋納のガラス玉は、81個が土器の中に納められ、86個が、土中埋納となる。ほぼ50%の割合である。製作技法による、出土場所の偏在は認められない。

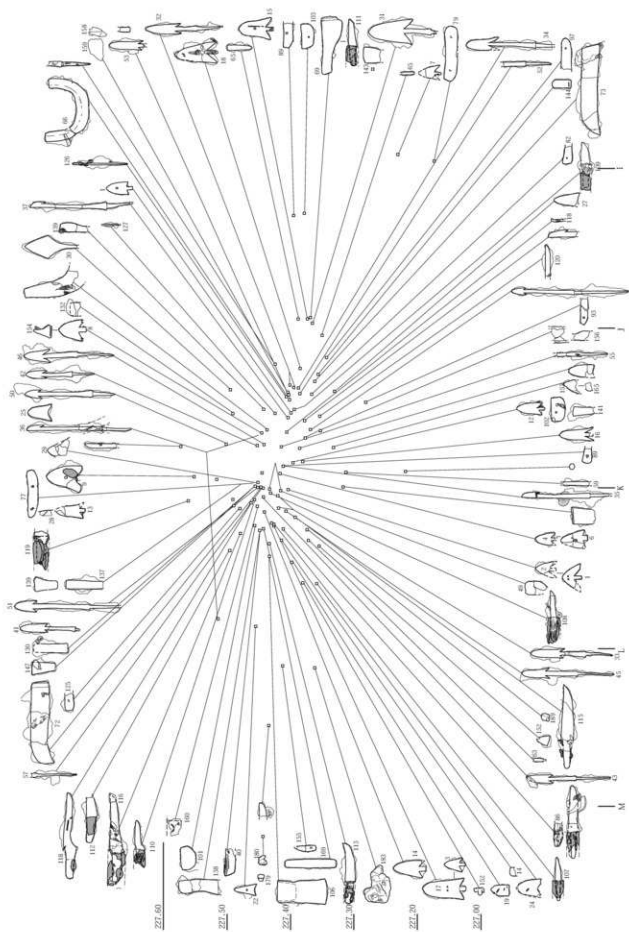
石製模造品(第511～526図 PL.401～407) 石製模造品は、3号祭祀遺構で総計158点出土しているが、うち

90点が土中埋納である。残りは、土器内に納められているものである。土中埋納の出土数は、剣形品が49点と多く出土しており、他に勾玉形4・半円形21・有孔円板形2・有孔方形板形2と出土している。石製模造品全体の分布は、J7グリッドに23個出土しており、すぐ北側のJ8グリッドから10個、すぐ西側のK7Gから10個出土

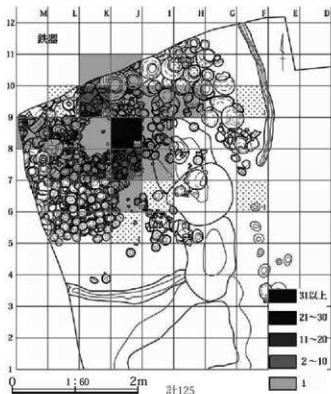
鉄器平面



第350图 3号祭祀遺構鉄器出土状況図・垂直分布図



第351図 3号祭祀遺構鉄器垂直分布・遺物図



第352図 3号祭祀遺構鉄器度数分布図

しており、この3Gからの出土が最も多い。ここを中心にして長楕円形状に分布している。

短甲形(第342・511図 PL.401)にあるように、1点のみ出土した。中央部、一番石製模造品が集中するJ7Gすぐ北のJ8グリッドにある須恵器壺P195(900)の底部に接して、前胴部を上にして、上部を西向きにして横倒しに埋置されていた。その上に土が5cmほど被さっている。この短甲形模造品のすぐ横に鉄製の長頸鐵破片(第536図 PL.436)と、板状素材(第545図 PL.443)が出土している。この短甲形が集中部の中央に埋置されていることから、この模造品が重要視されていることが分かる。形態が不明瞭であるが斧形品とした模造品(第512図 PL.40)は最も模造品が出土するJ7Gの530土器の中から出土している。この杯からは、他に剣形品や管玉2、ガラス玉、白玉81が出土している。

勾玉形(第512図 PL.401)はやはり楕円形集中部に纏まっており、バラバラと出土している。特にJ7Gからは12個も出土している。**半円形**(第513図 PL.402)は、勾玉形の簡略化したものと想定されるが、集中部だけでなく、その周囲からもある程度分布しており(2930・2・2490・2489・3014・3017・2930・2281)、剣形品と同様の分布域の広さである。やはりこの模造品も早い段階で

の埋納に係る鍵となる模造品であった可能性が高い。

有孔円板(第515図 PL.403)は、楕円形集中部に纏まっているが、各個体別個に出土している。**有孔方板**(第516図 PL.403)も、やはり楕円形集中部に纏まっており、個別に出土している。

剣形品(第517～526図 PL.403～407)は、一番多い出土量がある。模造品全体の分布と同じような集中傾向を示し、J7Gに最多の29個の出土、北側のJ18Gで、17個、西側のK7Gで11個の出土を見る。剣形品は大きく2分類されるが、分類形式ごとに分布の差は認められない。

剣形品は、広範囲に分布しており、楕円形状の集中部以外からも出土され、しかも出土深度が低いところが多く、埋納する際に、早い段階に行われたものである可能性が高いものはいくつかある。(3015・2282・2292・127)つまり、埋納行為において、早い段階で埋納される模造品であった可能性がある。剣先の方向とか傾斜角度などはバラバラで、整えた様子は認められない。

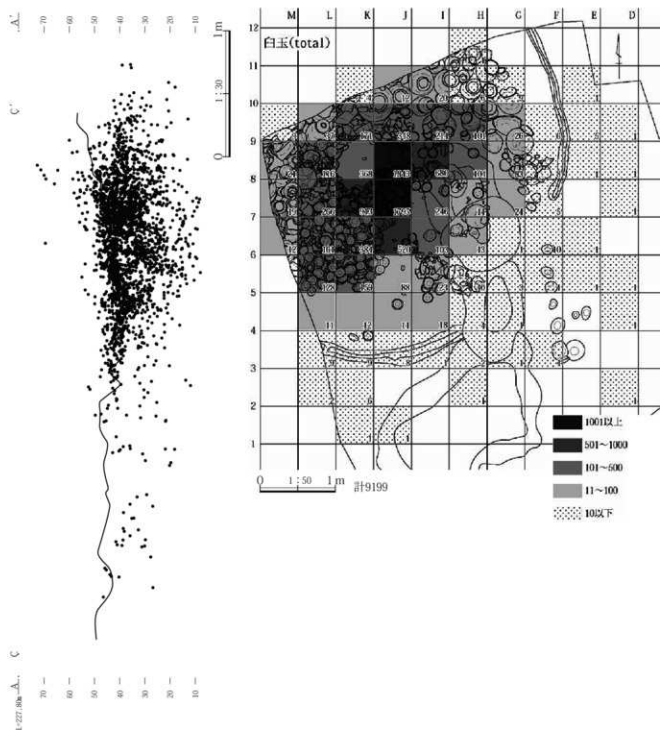
鉄器(第532～546図 PL.434～443) 鉄器は184点が出土している。この鉄器の出土も中央部から南側に土坑様の中に埋納していく。平面分布図で見ると、標高227.40mの高さで特に集中している。227.50mがほぼ土器群を置いた地面高なので、それから10cm下あたりに集中する傾向がある。鎌や鹿角装刀子も多く出土するなど、鉄器出土の中心的な位置である。その上下にも鎌・鎌・刀子・穂積貝と鎌と農具の組み合わせで多数出土している。白玉や玉類・石製模造品などと混じりあいながら出土するが、特に鉄器を中心に埋納している箇所は、中央部に近い中心地J7・8Gにある。

白玉(第527～531図 PL.408～433) 1万点近い9918点をこえる白玉が出土した。大型土器群の下から600個ほど出土しているものは、先述したように大型土器群の埋納前に、埋納されたものである。それら以外の大多数は、中央部の楕円形状の平面を呈した箇所から大量に出土している。土器を埋置した面より、地表面直下から、深さにして50～70cmほど下まで白玉が万遍なく出土している。大型土器配置前に土器配置箇所埋納し、さらに中央部の祭具集中埋納箇所にも多数の白玉を埋納しているのである。白玉を中心とした祭具を埋納した後、大型土器を祭具の埋納する予定の空間を囲むように

白玉



第353図 3号祭祀遺構白玉出土状況図・垂直分布図



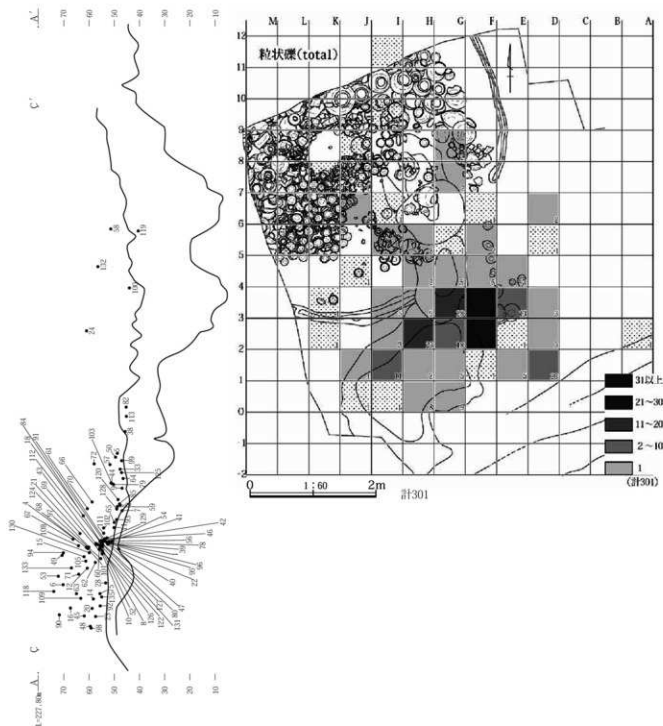
第354図 3号祭祀遺構白玉垂直分布図・白玉度数分布図

配置したものと想定している。

調査では、膨大な数の出土数ゆえに、白玉が出土し始めてから数百点と、白玉の出土が少なくなり始めた想定された最後の段階についてのみ、点上げで取り上げることで、白玉の分布の最低限の情報は取得した。最初と最後以外の取り上げは、グリッドごとで一括して上げているので、グリッド上げを主に行った中間部分の白玉の詳しい出土深度については、情報が無い。ただし、現場

での感触でいえば、ほぼ万遍なく出土している想定される。なお、白玉以外の祭具は全点、点上げを行っている。

白玉が特に集中するのは、度数分布図(第351図)にあるように、グリッドでいうと、J7・J8Gで、それぞれ1800個ほど出土しており、この2グリッドを中心にして、南北方向の長楕円形状に分布している。出土深度図で見ると、窪み状に白玉が分布しているのが分かり、緩やかな立ち上がりを持つ土坑様の中に白玉をまき、そこ



第356図 3号祭祀遺構粒状礫垂直分布図2・粒状礫硬度数分布図

に土を被せていく様子が見取れる。一部、繋がりがあ
るような形で出土した白玉もあるが、ほとんどはバラバ
ラに出土しているので、紐で繋いだまま納めたと推定さ
れるものも一部あるにせよ、バラバラに納めたものが多
かったと想定している。大型土器群により囲まれた空間
の中に土坑様の窪みを設け、その中にあまり規則性無く、
白玉をバラバラに納めていったという行為を想定してい
る。

粒状礫(第355・547・548図) 径が小さい粒状の礫が、
数多く出土している。ほとんどの礫の角がとれ、円磨状
を呈している。遺跡地の他の地点ではほぼ出土するこ
とが無いため、どこか別の地区より、この地に持ち込ん
だものと推定される。3号祭祀遺構の内部からもいくつか
出土しているが、円形の囲いの外側の入口と想定される
箇所を南東に集中して地表付近の土中から出土してい
る。F 3 Gで33個、F 4 Gで49個、その2つのグリッド

ETC



第357図 3号祭祀遺構 その他の遺物出土分布図

の西側G 3 G、G 2 Gでそれぞれ28個、18個、さらに西側のH 2 Gで23個が出土した。1号盛土状遺構からもある程度出土している。最も重要なのは、先述した囲いの入り口付近に多くの粒状礫が出土していることで、この場所を意識して、埋納した可能性があることを想定している。

⑤小型土器集積群の積み重ね(第358図)

中央部やや南東地区に南北に開くコ字形大型土器配置に囲われるように、やや南東部に10数段の積み重ねを行う一群の杯を中心とする小型土器群がある。これらの小型土器群は、白玉・ガラス玉・玉類・鉄器などの祭具の一群を埋置した後に、その上面に積み重ねているもので、時間差があると考えられるものである。

700個に及ぶ大規模な集積なので、地区に分けて説明する。土器の配置を北側から置いたものと仮定して、北部、中央部、南側の3グループに分ける。以下それぞれのグループの説明を行う。

北部の一群(第359・360図) 西側大型土器群に接するようすぐ東にある、小型土器集積群である。東側には、先述して空閑地がある。ここに机などの祭壇を置いた可能性も考えられ、そのすぐ西側にあたる重要な土器群である。

25セクション(第360図)を見ると、この群の北端にあたる東西列の群が分かる。西端に位置する、P580-1、2の襖の重ね置きは、西側的大型土器群の東端と考えた方がよい。

この襖の東に連続してP581の小型襖と杯の重ね置きがある。下から小型襖CⅡ①、杯CⅢ、杯CⅡ、杯BⅡで、

小型襖の中に白玉12個が入っている。一番上の杯Bには、土器内面にS₁・S₂が器面に積もり、その上にはS₃下部がある。S₁直前に置いたものであろう。

22'セクション(第361図)を見ると、P580襖の下には、P591杯AⅡがある。白玉11個を収めており、黒褐色土があり、その上からS₁・S₂が積もっている。白玉を収めた後に、黒土を入れた可能性を考えたい。これらの行為後に、襖2つを重ね置きしているのである。P580襖の東側に杯を5個積み重ねているP579群がある。下から杯AⅠ・杯BⅠ・杯AⅡ(白玉7)・杯CⅠ2個と積み重ねられている。この土器群の最上段の杯Cには、器面にS₁・S₂が直接積もっており、この土器群もS₁・S₂降下直前に最後の土器を積み重ねられたことが分かる。

すぐ南側に位置するU' (第361図)セクションから、P578の積み重ね土器群は、下から高杯FⅠ・杯AⅡ3個・杯BⅡ(白玉8)・杯AⅡ(白玉5)が積み重ねられている。最上段の杯AにはS₁・S₂が器面に直接降下している。最下段の高杯Fは、口辺付近まで土中に埋められている。この土器群の北側に、P589群の土器積み重ねがあり、杯CⅠ2個がある。上段の杯に10個の白玉と、下段の杯に12個の白玉が納められている。

22'セクション(第362図)は、やや南側の東西積み重ね



第358図 3号祭祀遺構小型土器集積群位置図

群である。甕P570の東側には、P569の積み重ね群があり、下から杯BⅡ・杯AⅣ・杯AⅡがある。最上段の杯AⅡにはS₁・S₂が降下している。その東には、P584小型甕CⅡ①の上に、P557ロクロ使用土師器である高杯Iが積み重ねられている。小型甕は横になり、高杯は正位であるが破損していた。その東には、かなり不安定で振れているが、12段の積み重ねP559群があり、下から椀CⅡ・杯AⅡ・杯CⅡ・杯AⅡ・杯CⅠ・杯BⅠ・杯CⅢ・杯CⅡ・杯BⅢ・杯BⅡ 2個・高杯EⅡが積み重ねられていた。最下段の椀に13個の白玉、最上段の高杯に8個の白玉が収められていた。

21セクション(第362図)は、この土器群のすぐ南側に須恵器高杯の杯部片が一番上に載り、その下に5段の土師器積み重ねがある。須恵器高杯P558は、脚部が欠けている状況でしかも、杯部も割れた状況で出土している。その下に、P582群の積み重ね群があり、小型甕AⅠ①・

杯AⅡ 3個・埴②の順に積み重ねられている。最下段の小型甕に2個の白玉、その上段の杯AⅠに1個の白玉が収められている。この土器群の南には、中央土器群に位置づけられたP73積み重ね群が入る。

23' - 22' セクション(第363図)により、P465甕のすぐ南にあるP574群の杯・小型甕の組み合わせと、P570小型甕の並置が確認できる。P570小型甕BⅡ②は、器高の1/3程埋めている。また、先述した22'セクションを見ると、甕P570の中には、S₁が器内に積もっており、この甕がS₁・S₂直前に埋置されていることを示している。

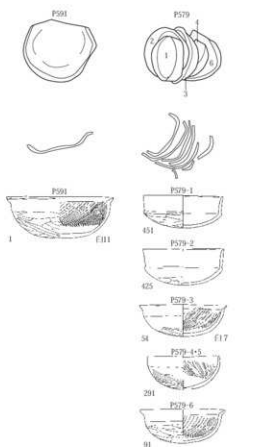
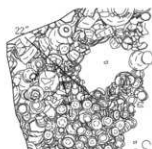
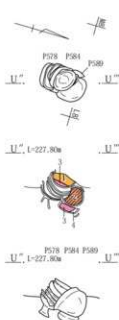
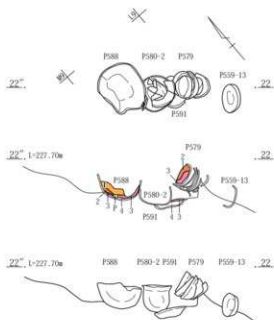
P574群は、杯AⅡ・杯CⅢ・杯AⅡ・杯CⅡ・小型甕CⅡ①の積み重ねである。

11セクション(第363図)は、この土器群の最南部の土器群で、東西方向に杯が2個並ぶ。さらに、東南には、中央土器集積群に含めたP63、P64の一群が続く。P517杯CⅠは、土器を口辺まで埋め込んであり、白玉を18個納



第359図 3号祭祀遺構小型土器集積群配置区分図

第三章 発見された遺構と遺物



4区4面3号祭祀SP22'-22

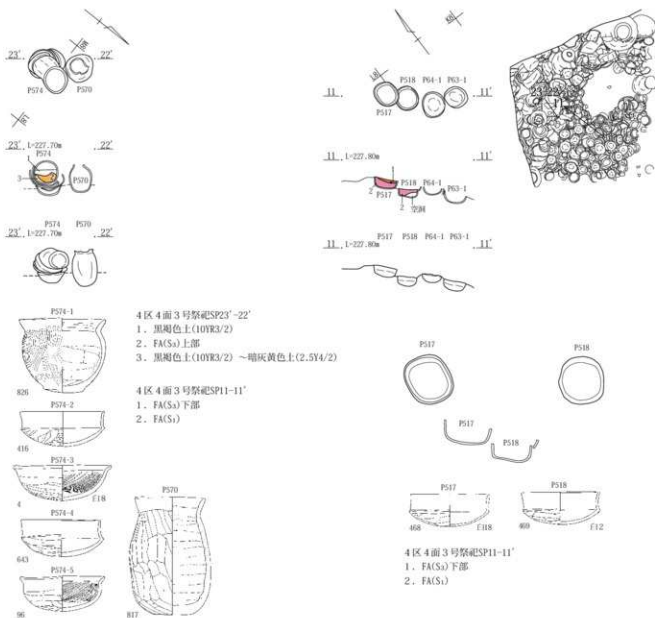
1. FA(Sa)上部
2. FA(Sa)下部
3. FA(Sa)
4. 黒褐色土(10YR3/2)～暗灰黄色土(2.5Y4/2)



4区4面3号祭祀SP11'-11

1. FA(Sa)上部
2. FA(Sa)上部と下部の混じり。
3. FA(Sa)
4. 黒褐色土(10YR3/2)～暗灰黄色土(2.5Y4/2)

第361図 3号祭祀遺構22'・11'のU・Vセクション図・遺物図他



4区4面3号祭祀SP23'-22'
 1. 黒褐色土(10YR3/2)
 2. FA(Sa)上部
 3. 黒褐色土(10YR3/2)・暗灰黄色土(2.5Y4/2)

4区4面3号祭祀SP11-11'
 1. FA(Sa)下部
 2. FA(Si)

4区4面3号祭祀SP11-11'
 1. FA(Sa)下部
 2. FA(Si)

第363図 3号祭祀遺構23'-22'・11セクション図・遺物図他

重ねで、同一型式を積み重ねる例として珍しいものである。102セクションで見ると南東方向に杯AⅡ・杯AⅣ・杯AⅡ(白玉1)の杯Aを3枚重ねたP609群と、北東方向に杯AⅡ・杯BⅢ(白玉2)・杯CⅡを積み重ねたP601群がある。以上のように、P126群の土器を置く前に、4方向から杯を3～5個積み重ねて置台のように配置している。いくつか、土器の底部下に単独の土器や積み重ね土器を置く例はあったが、このように、整然と置く例は珍しい。

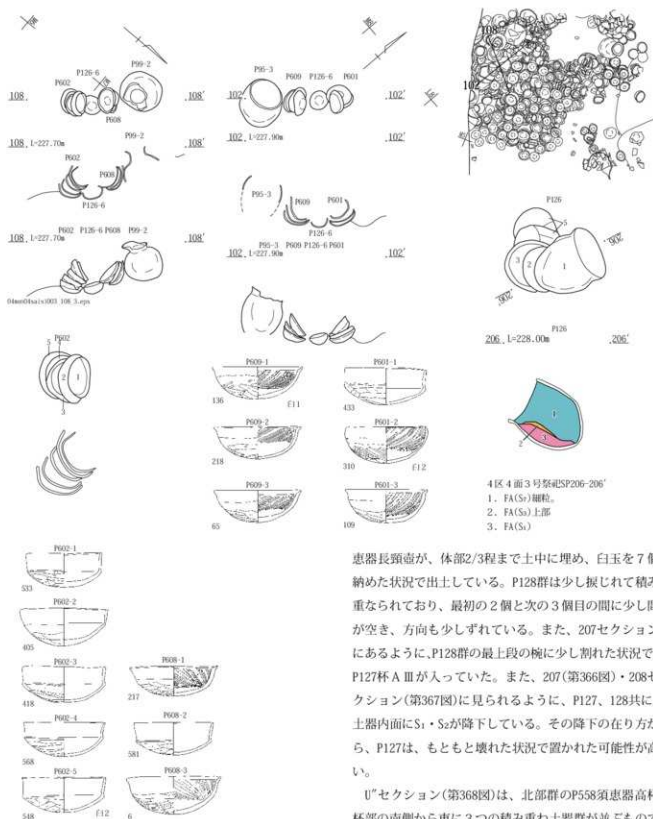
106セクション(第366図)には、中心を成すP126群の状況を示している。杯BⅢ(白玉6)・壺A①・杯AⅡ・杯AⅡ(白玉5)・小型甕CⅡ①(白玉1)・小型甕BⅡ①の6個重ねである。南北方向では、P126群の北側には、西

側大型土器群に入れた、最上部に増を載せ、下に小型杯5個を重ね置きするP600土器群がある。206セクションを見ると、最上部の小型甕には斜めになった状態で、S₁が堆積しており、S₁降下前から甕が斜めに倒れた状況であったことを示している。

109セクション(第366図)には、P126土器群の南西側に積み重ねられているP605群があり、小型甕CⅡ①・杯BⅡ・杯BⅠの3枚重ねである。

26'セクション(第366図)は北西部の西端の積み重ねで、P128群の8個の積み重ねの一群である。下から、杯AⅡ3個・杯CⅢ(白玉2)・杯AⅡ(白玉1)・小型甕BⅡ①(白玉5)・杯AⅡ(白玉8)・杯AⅡ2個が積み重ねられている。また、この積み重ね群のすぐ東側にP597須

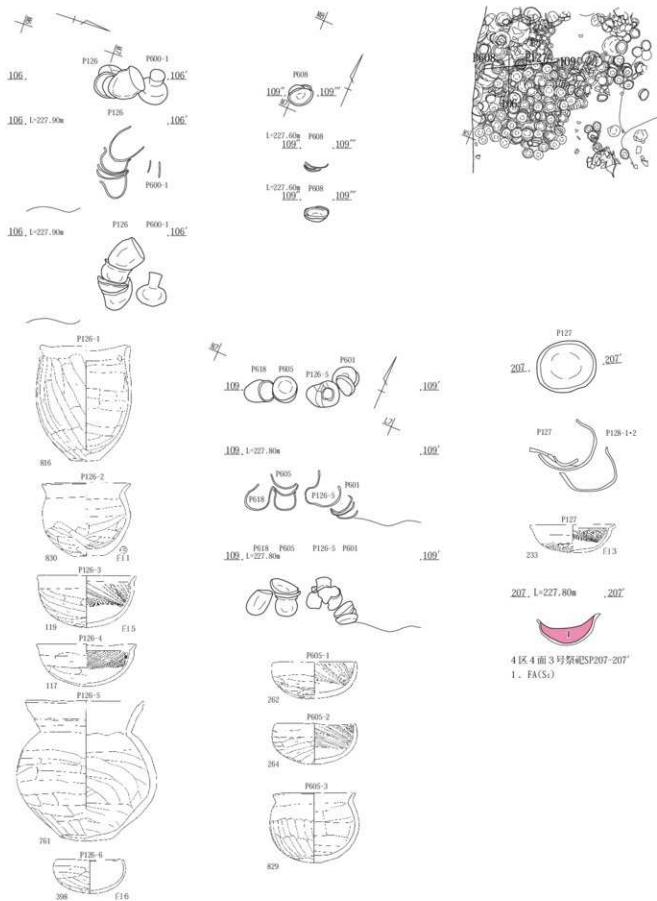
第三章 発見された遺構と遺物



第365図 3号祭祀遺構108・102エレベーション図・遺物図他

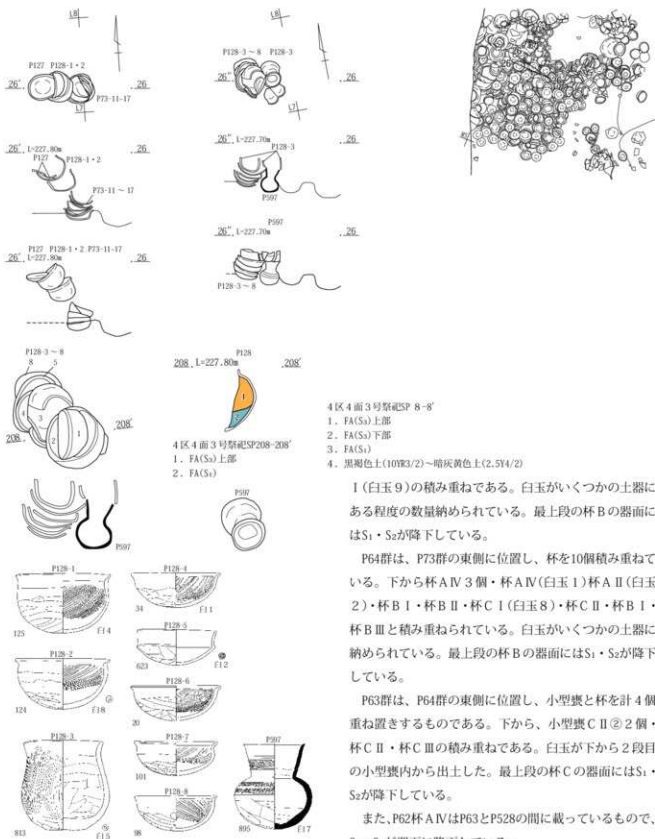
恵器長頸壺が、体部2/3程まで土中に埋め、白玉を7個納めた状況で出土している。P128群は少し掘れて積み重なっており、最初の2個と次の3個目の間に少し間があるように、P128群の最上段の腕に少し割れた状況で、P127杯AⅢが入っていた。また、207(第366図)・208セクション(第367図)に見られるように、P127、128共に、土器内面にS₁・S₂が降下している。その降下の在り方から、P127は、もともと壊れた状況で置かれた可能性が高い。

Uセクション(第368図)は、北部群のP558須恵器高杯杯部の南側から東に3つの積み重ね土器群が並ぶものである。P73群は、杯のみで、16の積み重ねが認められる。やや西側に傾いている。下から、杯AⅡ2個・杯CⅠ(白玉2)・杯AⅢ(白玉35)・杯AⅣ(白玉11)・杯AⅢ・杯BⅠ・杯AⅡ・杯DⅣ(白玉16)・杯CⅠ・杯CⅢ(白玉3)・杯CⅡ・杯AⅣ(白玉8)・杯AⅡ・杯BⅠ・杯B



第366図 3号祭祀遺構106・109・P608・P127エレベーション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物



4区4面3号祭祀SP 8-8'

1. FA(S₁)上部

2. FA(S₁)下部

3. FA(S₁)

4. 黒褐色土(10YR3/2)~暗灰黄色土(2.5Y4/2)

I (白玉9)の積み重ねである。白玉がいくつかの土器にある程度の数量納められている。最上段の杯Bの器面にはS₁・S₂が降下している。

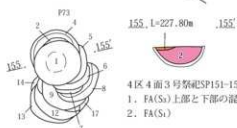
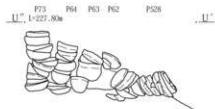
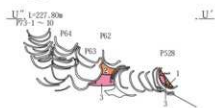
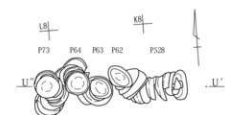
P64群は、P73群の東側に位置し、杯を10個積み重ねている。下から杯A IV 3個・杯A IV(白玉1)杯A II(白玉2)・杯B I・杯B II・杯C I(白玉8)・杯C II・杯B I・杯B IIIと積み重ねられている。白玉がいくつかの土器に納められている。最上段の杯Bの器面にはS₁・S₂が降下している。

P63群は、P64群の東側に位置し、小型甕と杯を計4個重ね置きするものである。下から、小型甕C II ②2個・杯C II・杯C IIIの積み重ねである。白玉が下から2段目の小型甕内から出土した。最上段の杯Cの器面にはS₁・S₂が降下している。

また、P62杯A IVはP63とP528の間に載っているもので、S₁・S₂が器面に降下している。

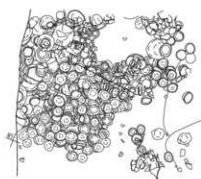
以上P73・P64・P63群の積み重ね土器群の最上段の杯杯内及びP62には、先述したようにS₁・S₂が直接器面に降下しており、これらの土器群がS₁降下直前に置かれたものと推定できる。

第367図 3号祭祀遺構26'・26''エレベーション図・遺物図他



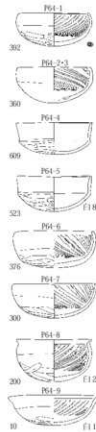
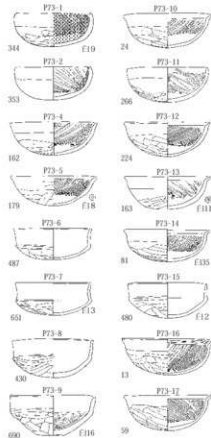
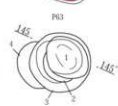
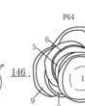
4区4面3号祭祀SP151-151'
1. FA(Ss)上部と下部の混じり。
2. FA(Ss)

- 4区4面3号祭祀SPU"-U"
1. FA(Ss)上部と下部の混じり。
2. FA(Ss)下部
3. FA(Ss)
4区4面3号祭祀SP144-144'
1. FA(Ss)



4区4面3号祭祀SP146-146'
1. FA(Ss)下部
2. FA(Ss)
4区4面3号祭祀SP145-145'
1. FA(Ss)

146, L=227.70m 146' 145, L=227.70m 145'



第368図 3号祭祀遺構U'エレベーション図・遺物図他

101セクション(第369図)は、西側大型土器群のP95裏東側の9段の積み重ねP96群である。西側の大型土器群より段差20cm下の面から、段差崖面に向けて寄り掛かるような形で積み重ねられている。下から、杯AⅡ・杯CⅡ(白玉8)・杯CⅠ(白玉6)・高杯H・須恵器短脚高杯・小型裏CⅡ①・杯CⅤ・高杯GⅠ・小型裏BⅠ①の順である。最上段の裏の内部にはS₃上部層が入っている。

95・96セクション(第369図)は、P126群の東横で、P126群とは段差があるもので、15段の積み重ねP90群がある。下から、杯AⅡ・須恵器罍・杯BⅠ・小型壺BⅡ・杯CⅡ・杯BⅠ・杯BⅠ(白玉1)・杯BⅠ(白玉8)・杯CⅡ(白玉18)・杯AⅣ・杯CⅠ・杯AⅣ・高杯EⅠ・杯CⅣ・杯AⅢの積み重ねである。最上段の杯Aには、S₁・S₂が器面に降下している。

107セクション(第370図)は、上述のP90群のP90-12の上に、崩落した形でP598杯CⅥがあることを示す。この杯は、模倣杯の中でも成形が独特で、底部に突起状のものがある。

91セクション(第371図)は、西側土器群に接するもので、16個の土器が積み重ねられているP72の土器群を示す。下から、椀DⅠ・杯CⅠ(白玉4)・杯CⅠ・小型裏CⅢ①・杯CⅠ・杯AⅡ・杯CⅢ?杯CⅠ・杯AⅢ・杯AⅠ・杯CⅢ・杯AⅣ・杯AⅡ・杯AⅡ(白玉8)・杯CⅢ・杯DⅣと積み重ねられている。最上段の杯Dは特殊な杯で、口辺が幅広く、外反して深い形態を有する。最上段の杯Dには、器面にS₁・S₂が降下している。

98セクション(第371図)は、P95裏の積み重ね群から南で、20cmほど段差の下段面に積み重ねられたP94の土器群の積み重ねを示す。下から杯CⅠ・杯BⅡ・杯AⅡ・杯CⅡ(白玉8)・杯CⅡ・杯CⅢ・杯BⅠ・高杯FⅠ・杯CⅡ・小型壺BⅢ①・杯AⅡが積み重ねられている。最上段の杯Aには、器面直上にS₁・S₂が降下している。

西側土器群に接する99セクション(第371図)を見ると、98セクションと同様に、西側大型土器群が設置されている箇所には基壇状の高まりがありそこに大型土器を埋置している。小型土器群は、20cmほどの段差で下の面に土器を置いている。P95・98の裏はともに既に西側土器群で図示しているが、いずれも土器内に入ったS₁・S₂の存在から、裏の配置がS₁・S₂直前であることが分かる。その南東に、P590の土器群がある。下から、杯CⅡ・杯C

Ⅲ(白玉8)・杯CⅡ・杯AⅡ・杯AⅡ・小型裏CⅡ①・杯CⅤ・高杯Iが積み重ねられている。最上段の高杯は、ロクロ使用の土師器高杯で、その下の杯もロクロ使用土師器杯であり、ロクロ使用土師器が集中している。また、北東側に一部P590-3を支えるような形で、別の杯2個の積み重ね土器群P594がある。杯BⅡ・杯BⅠの積み重ねである。

94セクション(第372図)は、P96の南側に段差がある11個の積み重ねのP89の一群で、下から、杯BⅣ・杯CⅠ・杯BⅢ・杯BⅡ・杯BⅠ2個・小型裏CⅡ①・杯DⅦ・杯CⅡ・小型裏A②・小型壺Ⅳ①となる。最上部の小壺には、S₃上部層が入っている。

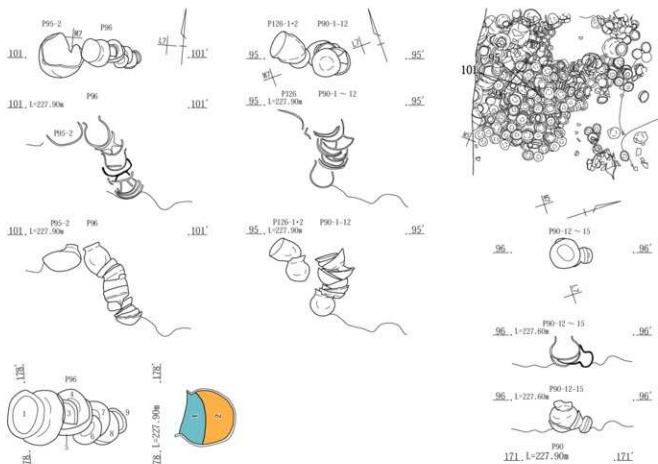
122セクション(第372図)は、北側の中央あたりに位置する8段の積み重ねであるP577群と、そのすぐ南に位置し、P577の3段目の杯から支える形となる4段のP583群である。

P577群は、下から須恵器二重罍、杯AⅡ・杯CⅠ(白玉8)・杯BⅢ・杯CⅡ(白玉6)・杯AⅡ・杯CⅠ・小型壺BⅡ①・杯AⅠ・杯CⅠ・杯AⅡ・杯AⅣ(白玉2)の積み重ねである。須恵器の二重罍が最下段にあることが重要である。かなり南に傾斜するも最後の壺は北側に斜め方向に倒れ込むようにしている。P583群は、P577の最下段の須恵器罍のすぐ南側に接して、杯AⅢ・杯CⅠ・杯AⅢ・杯AⅣ(白玉2)の4段重ねをしている。

この土器群は、P577群を南側から支えるような形態を取っている。

89セクション(第373図)は、北部中央部の南北セクションで、P529、P534群、P69、P70群の配置を示す。16個の小型土器を積み重ねたP72群の南に位置し、P72最上部の杯Aの上に載せているP70群は、下から杯DⅠ・杯BⅡの重ねで、それぞれに白玉が8個ずつ納められている。P534群の上部に斜めに立てかけるような形で置かれていた。P70群と、P534群の上に置かれているのが、P69杯CⅡである。内部器面にS₁・S₂が直接降下している。

近辺の土器群の最上部に位置するP69に、S₁・S₂が直接降下していることは、この一帯の土器群がS₁・S₂降下直前には積み重ねあるいは埋置してあったと想定される資料となる。P534群は、18個に及ぶ積み重ね群である。うち、下の13段を図示した。下から、杯BⅢ(白玉7)・杯CⅡ(白玉8)・杯AⅢ・杯CⅡ・杯CⅡ(白玉16)・杯



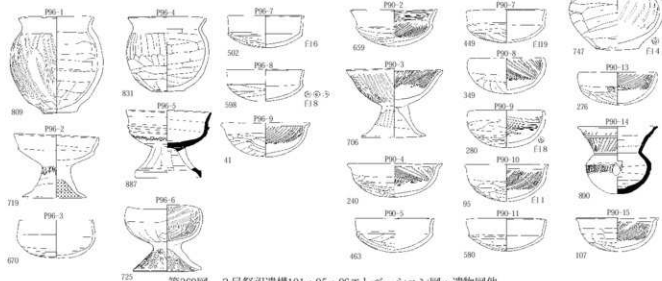
4区4面3号祭祀SP178-178'

1. FA(Sa) 粗粒。
2. FA(Sa) 上部



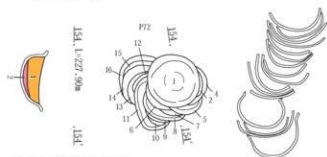
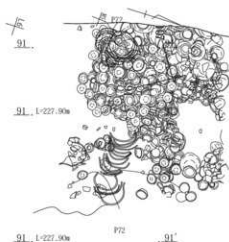
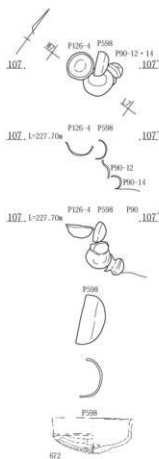
4区4面3号祭祀SP171-171'

1. FA(Sa) 下部
2. FA(Sa)



第369図 3号祭祀遺構101・95・96エレベーション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物



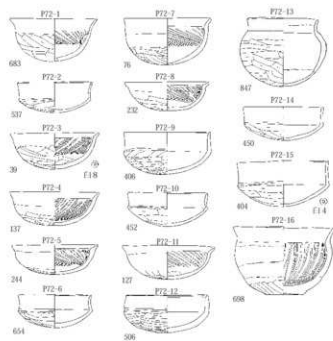
4区4面3号祭祀SP154-154'

1. FA(Ss)上部
2. FA(Si)

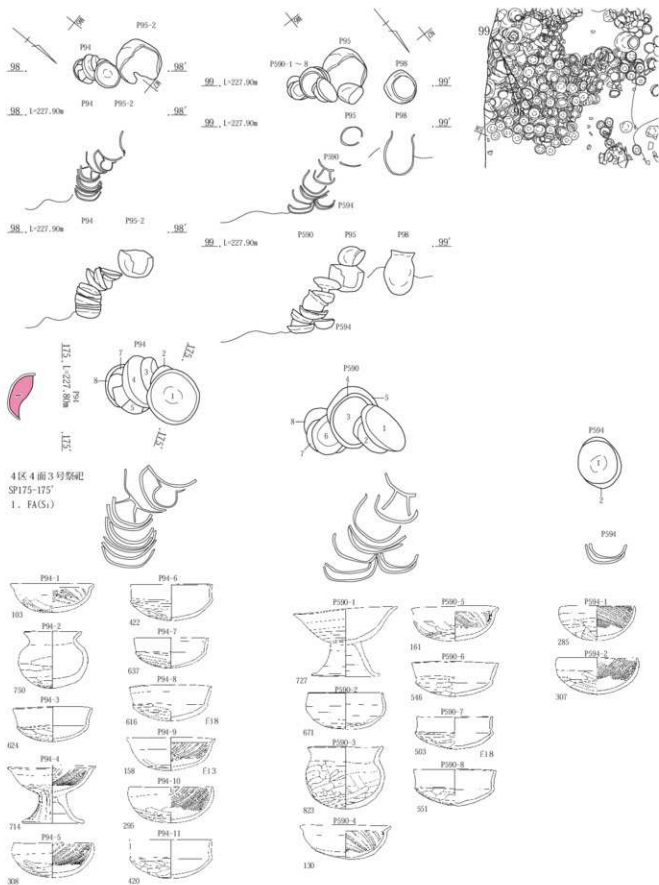
C I・杯C III(白玉8)・高杯E II・杯A II(白玉14)・杯C III(白玉8)・杯B II・杯C III・杯C IIの積み重ねである。この積み重ね群の上に、90セクションで図示する5段の杯が載る。併せて18段となる。下から8段目の高杯の上の土器から南東方向に倒れるように曲がってしまっている。このP534群の南東にP529埴②が器高の半分程埋めて出土している。

85セクション(第374図)は、やや北部寄りのP534とP63の間に挟まれた12段の積み重ねであるP65群となる。下から、杯B III・杯B II・杯C I・杯B II・杯C II 2個・杯B II・杯C II・杯C I・杯B II・杯C I(白玉8)・杯C Iが積み重ねられている。最上段の杯Cには、器面に直接S₁・S₂が降下していた。

90セクション(第374図)は、P65群の南、P71を支える3つの土器群である、P534群・P531群・P532群を示している。5個の積み重ねがあるP534群の斜め上に3個の積

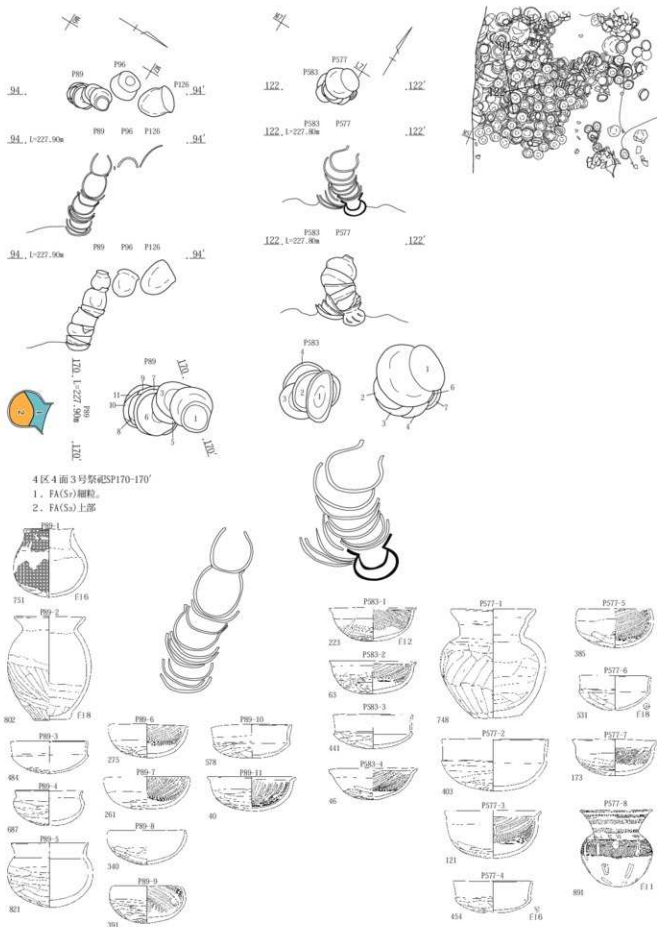


第370図 3号祭祀遺構107・91エレベーション図・遺物図他

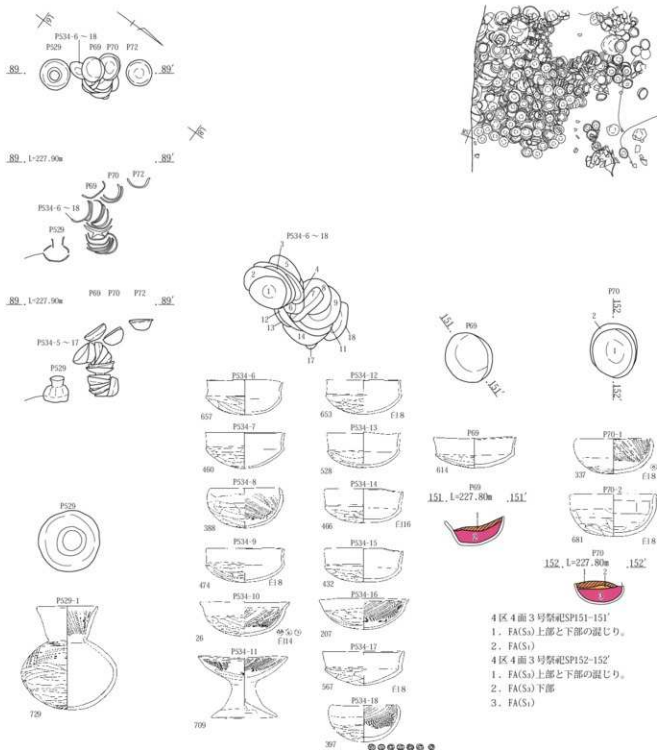


第371図 3号祭祀遺構98・99エレベーション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物



第372図 3号祭祀遺構94・122エレベーション図・遺物図他

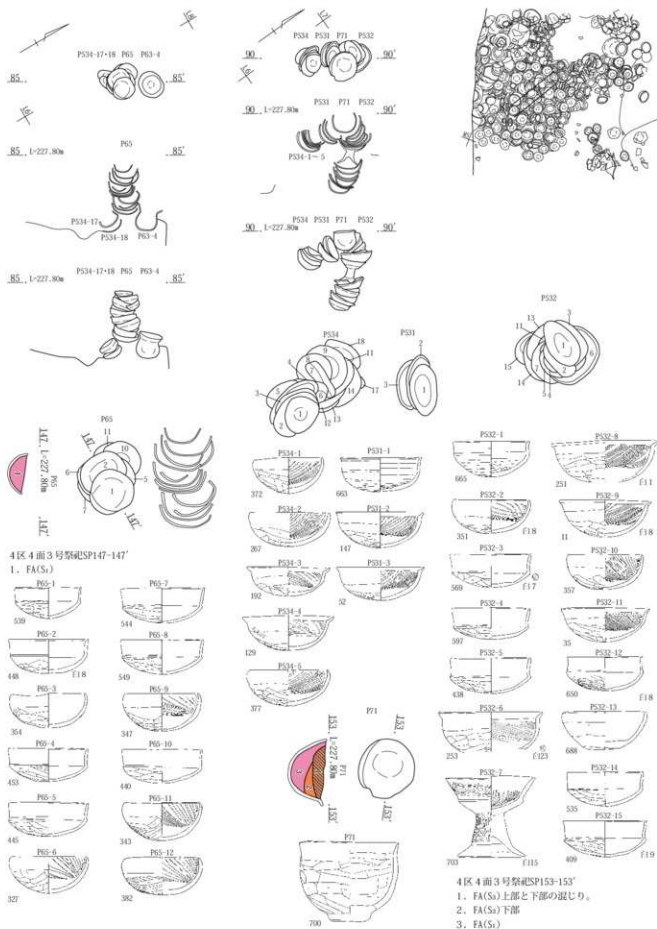


第373図 3号祭祀遺構89エレベーション図・遺物図他

み重ねがあるP531群がある。北側に15個の積み重ねがあるP532群があり、P532群とP531群の両方の土器が支えになって、上にP71碗が置かれている。不安定な土器の積み重ねの上に土器を置くという、乱雑な置き方をしている状況である。杯・鉢・高杯から構成される15個の積み

重ねがあるP532群は、下から杯CⅡ(白玉9)・杯CⅡ・杯DⅦ・杯CⅠ(白玉8)・杯AⅡ・杯BⅠ・杯AⅡ(白玉8)・杯AⅢ(白玉1)・高杯AⅠ・杯AⅡ(白玉23)・杯CⅢ・杯CⅡ・杯CⅡ(白玉7)・杯BⅡ(白玉8)・杯CⅤの重なりとなる。下から3段目の杯Dが平底で金片

第三章 発見された遺構と遺物



第374図 3号祭祀遺構85・90エレベーション図・遺物図他

東裏では数少ない土器である。最上段の杯Cは、ロクロ使用土器である。白玉の納めが多い一群である。5個の杯の積み重ねのP534群は、杯BⅠ・杯AⅡ・杯AⅡ・杯BⅠ・杯BⅡの重ねである。この下に、89セクションで図示した13段の土器がある。併せて18段となる。この斜め上に、杯3個重ねのP531群がある。杯AⅡ・杯AⅢ・杯CⅤの重ねである。最上段がロクロ使用土器である。先ほどのP532群とこのP531群の最上部は共にロクロ使用土器杯で、意識してこの土器を最上部に持ってきた可能性が高い。このP531群とP532群の両方が斜めに寄せ合うようにしている上にP71椀Cが載っている。この椀の器面に直接S₁・S₂が降下している。

20セクション(第375図)は、P63群の南側にあり、東西方向の2つの積み重ね群である。西からP527群、P528群を示している。P527群の杯の積み重ねは東側に傾いている。下から、杯AⅣ(勾玉形石製模造品・穂積具Ⅰ・ガラス玉2・白玉13)・杯AⅡ(白玉10)・杯CⅠ(白玉12)・杯AⅡ(白玉9)・杯CⅠ・杯CⅠ(白玉5)・杯CⅡ・杯CⅠ・杯CⅢの9段重ねである。総じて、この土器群には白玉を初めとする祭具の納めが多いのが特徴である。

東のP528群も、東側に倒壊している。P528群は、下から杯AⅢ・杯CⅠ(白玉1)・杯CⅠ・高杯EⅡ(白玉43)・杯CⅡ・杯CⅡ(白玉19)・杯CⅢ・杯CⅡ・杯CⅠ・杯CⅡ・杯CⅤ・杯CⅢと11段の積み重ねである。杯Cの比率が極めて多く、ロクロ使用の杯もある。高杯に納められた白玉の量も多い、特徴的な積み重ね群である。

Uセクション(第375図)から、P59群から少し東に向けて傾斜があって、平坦になる地点の手前の傾斜部にいくつかの土器群があることが分かる。既に紹介したように、中央部小型土器群に入るP479杯Cは、その傾斜面の傾斜変換点にあるもので豊富な祭具が収められている。積み重ね土器群とは明らかに性格が異なる。

P61群の最上段の須恵器模倣杯と、P479の須恵器模倣杯で重要なのは、それらの土器の杯の内部にS₁・S₂の火山灰が他の土器のように堆積がなく、S₃下部の火砕サーージ層が直接祭具の上を覆っていることである。S₁・S₂降下後、この土器をこの場所に置いた可能性がある。そのため、S₁・S₂火山灰が無く、その後のS₃火砕サーージで直接覆われることになる。調査当時もこの問題では頭を悩

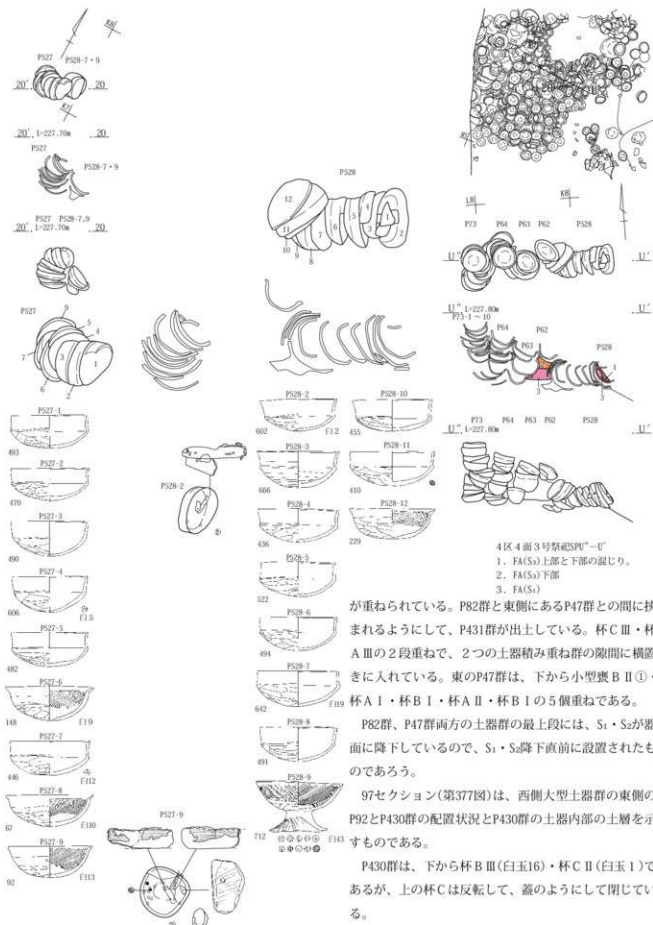
ませせていたが、ヒト足跡が一切見つからないことなどから、S₁・S₂火山灰降下後には、人が立ち入らなかった可能性を考えたのだが、ちょうどこの土器の南西部では、S₇の火砕屑に伴う衝撃痕により、地形等が変形し、ヒト足跡などの確認ができない箇所があるので、想定する入口から入ってきたとすればここで土器を使用した行為を行った可能性を考えておく必要があるだろう。

82セクション(第376図)は、P62群の南側にP59群があり、さらに南側にP507土器群があることを示す。P59群は、南にあるP507土器群のある方へ傾いているものである。141セクション(第376図)にあるように、4段重ねの杯群で、下から杯AⅣ2個・杯AⅢ・杯BⅠとなる。杯Aの新しい様相を示すⅢ・Ⅳ類が多いことが特徴である。最上段の杯BにはS₁・S₂が器面に堆積している。南にある、P507群は、かなり南に傾いている9段重ねの土器群である。下から、小型喪①(白玉20)・杯CⅠ(管玉Ⅰ・半円形石製模造品Ⅰ・ガラス玉Ⅰ・白玉26)、高杯FⅠ・杯CⅤ・杯BⅠ・杯CⅤ・杯BⅡ・杯CⅡ・杯AⅢが重ねられている。杯の中に2点のロクロ使用土器杯CⅤ類が含まれており、特徴的である。最下段の小型喪CⅡ①の東北5cm程の所に青色のガラス製勾玉の破片が土中より出土している。

84セクション(第376図)は、P528群の南、P59群の東側にある東西方向の一群である。西から東に見ていく。P59のすぐ東のP481群は3段重ねの杯群で、その東に4段重ねの杯P61群がある。さらに東にある祭具を収めた杯のP479は、祭具を多く納める中央部小型土器群に入る。

P481群は、下から、杯AⅡ・杯AⅠ・杯AⅢで、杯Aのみの重ねで、最上部の杯には白玉6、鉄素材Ⅰが収められている。その西にあるP61群は、下から杯AⅣ(白玉13)・杯AⅡ・杯AⅠ・杯CⅡで、最上段の杯Cには、白玉63、穂積具Ⅰが納められている。P61群最上段の杯の内面には、S₁・S₂の堆積が認められず、S₃が器面に直接入っている。この土器の設置が、S₁・S₂降下後である可能性を示す資料である。隣の中央小型土器群のP479もS₁・S₂堆積がなく、S₃が降下している状況で、近い箇所にS₁・S₂降下後の土器の設置の可能性を示す資料がある。

71セクション(第377図)は、西側大型土器群の東側の積み重ねで、P82群は、下から椀C①・杯CⅢ(白玉6)・杯AⅣ・杯CⅡ・杯BⅠ2個・杯AⅣ(白玉12)・杯AⅡ



第375図 3号祭祀遺構20・U'エレベーション図・遺物図他

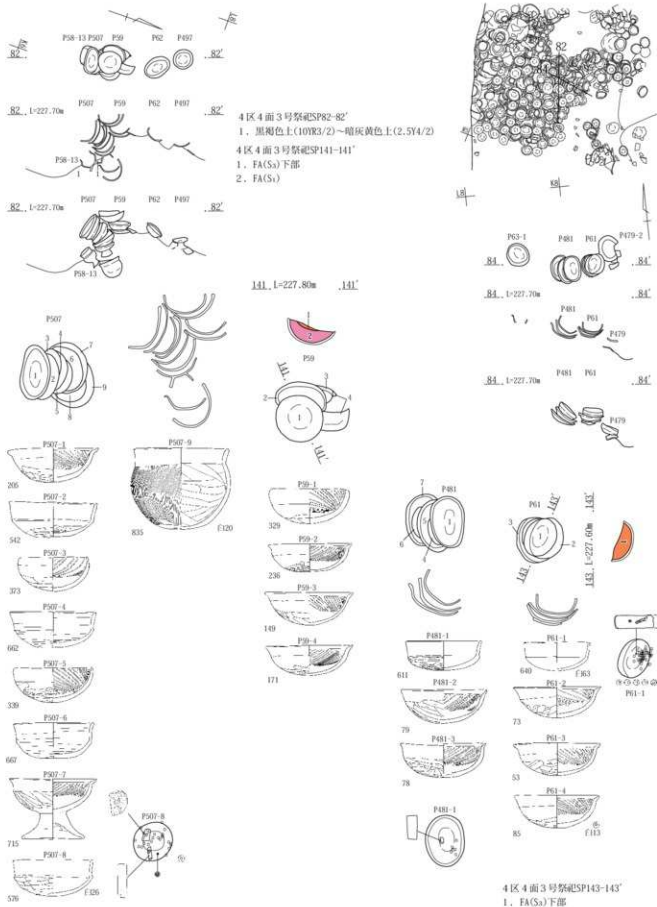
が重ねられている。P82群と東側にあるP47群との間に挟まれるようにして、P431群が出土している。杯CⅢ・杯AⅢの2段重ねで、2つの土器積み重ね群の隙間に横置きに入れている。東のP47群は、下から小型表BⅡ①・杯AⅠ・杯BⅠ・杯AⅡ・杯BⅠの5個重ねである。

P82群、P47群両方の土器群の最上段には、S₁・S₂が器面に降下しているので、S₁・S₂降下直前に設置されたものであろう。

97セクション(第377図)は、西側大型土器群の東側のP92とP430群の配置状況とP430群の土器内部の土層を示すものである。

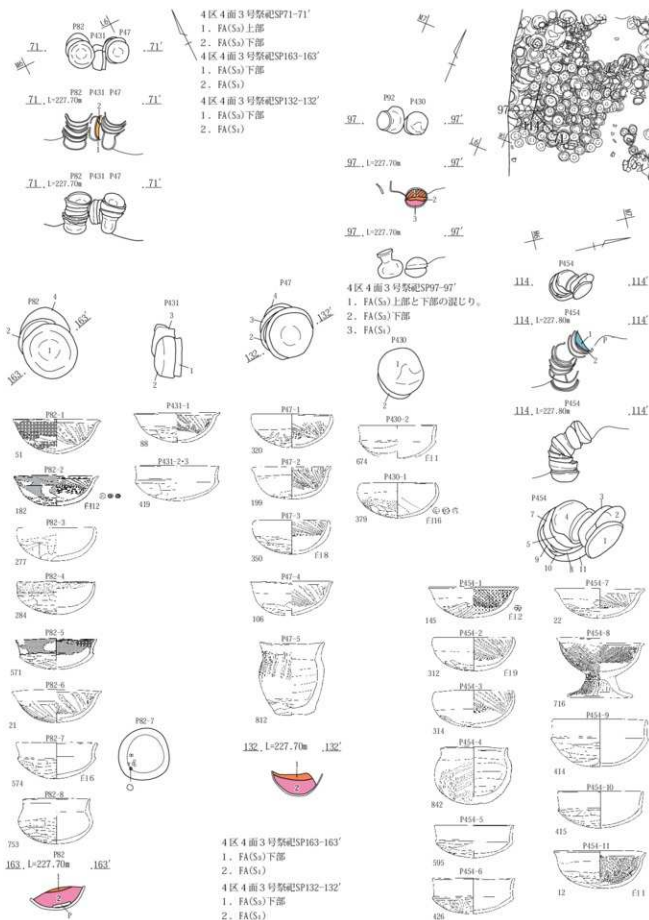
P430群は、下から杯BⅢ(白玉16)・杯CⅡ(白玉1)であるが、上の杯Cは反転して、蓋のようにして閉じている。

114セクション(第377図)は、先ほどのP430土器群のす



第376図 3号祭祀遺構82・84エレベーション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物



第377図 3号祭祀遺構71・97・114エレベーション図・遺物図他

ぐ東側にあり、西側土器群が埋置される面より20cmほど下がった所に積み重ねられているP454群で、その段差崖に寄り掛かる様に土器を積み重ねている。下から、杯AⅡ(白玉1)・杯CⅡ・杯CⅠ・高杯FⅠ・杯AⅣ・杯CⅢ・杯CⅠ・小型甕CⅢ①・杯BⅢ・杯BⅡ・杯AⅣ(白玉2)の11枚重ねである。最上段の杯内器面にS₁・S₂が降下している。

西側大型土器群に近い南西部の箇所から出ている土器を集めている。40セクション(第378図)は現地保存の大型甕の東にある、2つの単独で置かれた土器の配置を示している。大型土器に接してすぐ東に、P92坩②が埋置されている。白玉が9個納められていた。その東にP91小型甕AⅠ①が埋置されている。やはり白玉が8個納められていた。いずれも、器高2/3程まで埋めている。土層断面を見ると、S₁・S₂が2つの土器の際まで降下しており、これらの土器配置がS₁・S₂降下以前であることを示している。ただ、P92坩内部の土層にはS₁・S₂が降下しておらず、S₂が入っており、P91には、S₁・S₂が土器内部下部に堆積し、その上にS₂が入っている。P92坩の頸が狭く、S₁・S₂が入らなかった可能性を考えている。

63セクション(第378図)は、西側大型土器群南端部P786(現地保存)の東にあるP788群を示している。下から杯AⅣ・杯AⅡ2個・杯AⅣ(白玉5)・杯AⅢの積み重ねである。

P92坩の北に埋置されたのがP93杯BⅡである。白玉が1個出土している。杯内器面にS₁・S₂が降下している。

93セクション(第379図)は、中央土器群の南部にあたる。P583群の南にP84群があり、その下から2段目の杯に寄せるようにP88がある。P84群は、さらに南のP455群に倒れ掛かる様になっている。P84群は、下から小型甕BⅠ①・杯CⅠ・杯BⅠ・杯CⅢ・杯AⅣ・杯CⅠ(剣形石製模造品2・白玉1)・杯CⅤ・杯CⅢ(白玉4)・高杯FⅢ・杯AⅣ・杯BⅠの7段重ねである。最上段の杯Bには、器内面に直接S₁・S₂が降下している。また、169セクションにあるように、P84群の2段目から立て掛けるように出土したP88小型甕CⅡ③の器内面に直接S₁・S₂が降下していることが分かる。南側のP455群は、下から、杯AⅢ・杯AⅠ(白玉7)・杯CⅡ(白玉4)・杯CⅢ・高杯EⅠ・杯BⅡ・杯AⅣ(白玉9)・杯BⅡ・杯AⅢ・杯BⅠ2個・杯BⅠ(白玉6)の12段重ねである。

P84群、P88の土器に入ったS₁・S₂火山灰の様相から見ると、これらの設置はS₁・S₂降下直前と想定される。

88セクション(第380図)は、先ほどの80セクションと直交するような形のセクションである。西から説明する。杯を20個積み重ねているP68群は、3号祭祀の重ねの中でも最多のものである。下から見ると、杯BⅡ・杯CⅠ・杯CⅡ・杯AⅡ・杯CⅠ・杯AⅡ・杯CⅡ・杯CⅡ(白玉9)・杯CⅠ・杯BⅡ・杯AⅢ(白玉8)・杯CⅠ・杯BⅡ(白玉8)・杯CⅠ2個・杯CⅢ・杯CⅡ(白玉4)・杯BⅠ・杯CⅡ・杯BⅠの積み重ねである。積み重ねは、他の例にもあるように、断面を見て分かるが、ジグザグ状に積みあがっており、決して安定した置き方ではない。この土器の最上段の杯Bには、器内面に直接S₁・S₂が降下している。

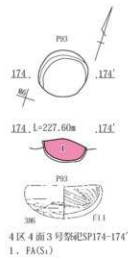
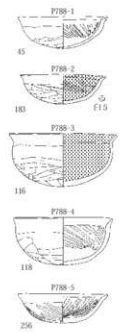
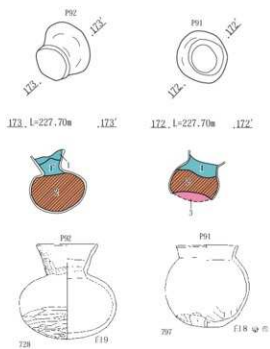
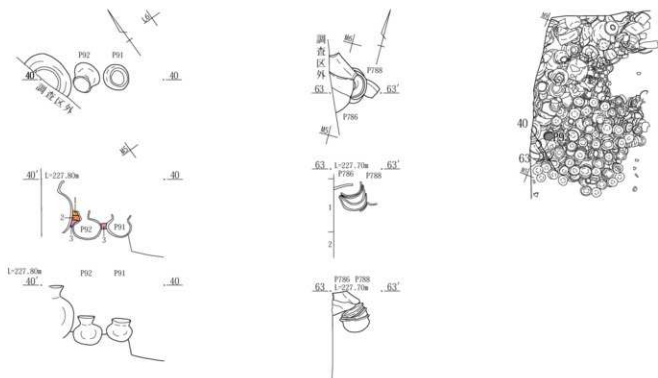
P68群の10cm北東側にP545群がある。下に小型甕BⅠ①が半分ほど土をかけて埋置して、その上に小型甕CⅡ①を置いている。このP545群の下段の小型甕と先ほど述べたP68群の16段目の杯Cの両方に架け渡すように杯のP544群が積み重ねて置かれている。P544群は、下から杯CⅡ・杯AⅣ・杯AⅡ・杯AⅡ(白玉4)・杯CⅡ・杯BⅡ・杯CⅡの7段重ねである。さらに東側に埋置されたP545群の小型甕のすぐ東にP556杯CⅢが破損した状態で、白玉7個が入って単体で置かれている。

92セクション(第381図)は土器群西側の南北方向のセクションで、杯455、杯84群の西側に位置する。北側に17個の杯の積み重ねのあるP456群があり、南の10個の積み重ねのあるP83群と途中で合流している。P456群の北にはP68群の上にかかる形で杯P66が単独で載る。

P456群は、杯のみの17個の積み重ねで構成され、下から杯AⅢ(白玉1)・杯AⅡ(白玉1)・杯CⅡ(白玉3)・杯CⅢ・杯BⅠ・杯CⅠ・杯AⅣ・杯CⅢ・杯BⅡ・杯BⅠ・杯AⅢ・杯CⅤ(白玉8)・杯AⅡ・杯CⅡ・杯AⅣ・杯AⅢの重なりである。杯AにⅢ・Ⅳ類が多く、杯CにⅡ・Ⅲ類が多いなど型式的に新しいものが多く含まれている。最上段の杯は小破片で図示していない。

P83群は、P456群の南側で、P456群に寄り掛かるようにして積み上げており、下から7段目で、P456群の上に載るような形となっていて最上段に至る形態を取る。下から、小型甕CⅡ①、杯AⅣ・杯AⅢ・椀CⅡ・椀CⅠ・杯BⅠ・杯AⅣ・杯CⅠ・杯CⅢ・杯AⅡと積み重ねら

第三章 発見された遺構と遺物

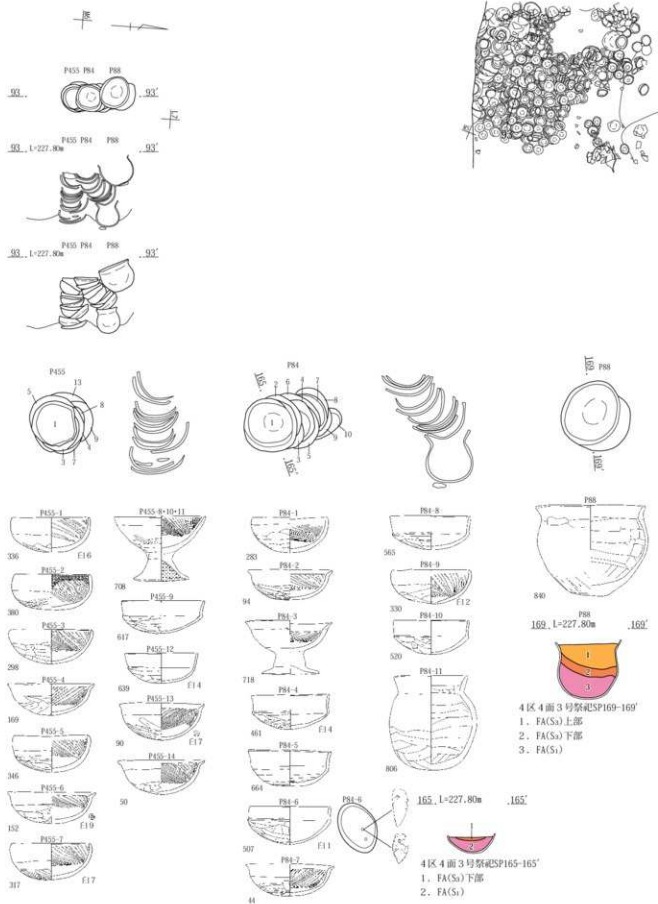


4区4面3号祭祀SP173-173'
1. FA(S₊)細粒。
2. FA(S₊)上部と下部の混じり。

4区4面3号祭祀SP172-172'
1. FA(S₊)細粒。
2. FA(S₊)上部と下部の混じり。
3. FA(S₊)

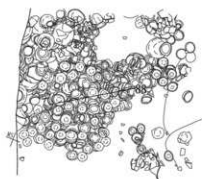
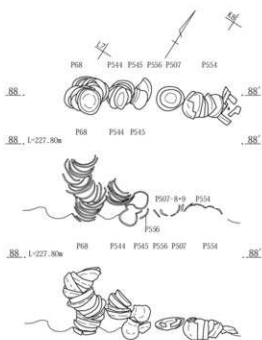
4区4面3号祭祀SP174-174'
1. FA(S₊)

第378図 3号祭祀遺構40・63・P93エレベーション図・遺物図他



第379図 3号祭祀遺構93エレベーション図・遺物図他

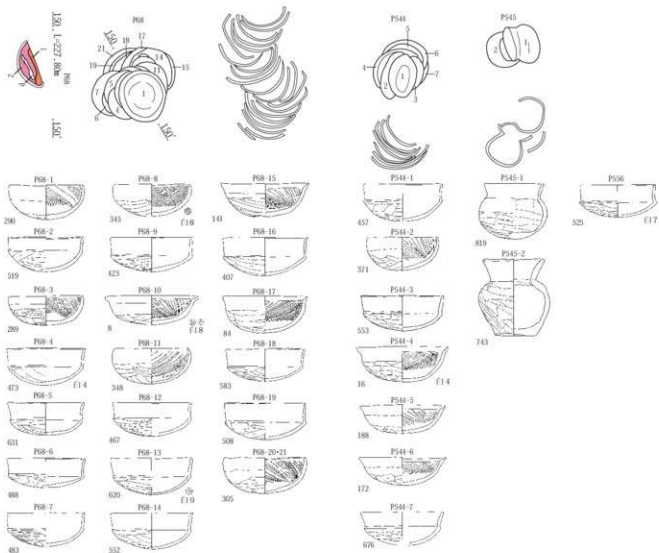
第三章 発見された遺構と遺物



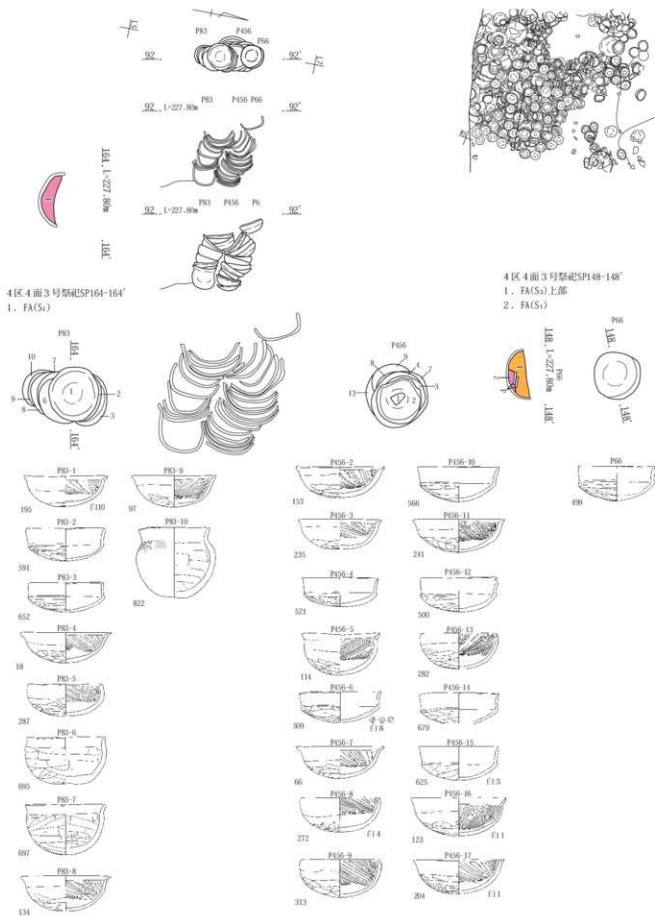
4区4面3号祭壇SP150-150'

1. FA(Sa)下部

2. FA(S)



第380図 3号祭壇遺構88エレベーション図・遺物図他



4区4面3号祭祀SP164-164'
1. FA(S₁)

4区4面3号祭祀SP148-148'
1. FA(S₁)上部
2. FA(S₁)

第381図 3号祭祀遺構92エレベーション図・遺物図他

れている。最上段の内斜口縁杯に白玉が10個納められている。この杯の器内面には、 $S_1 \cdot S_2$ が直接降下しているもので、 $S_1 \cdot S_2$ 降下直前に置かれたものと考えている。

北側のP66は、P456群と北にあるP68群両方の上に載る形で置かれていたもので、杯C Iである。器内面に $S_1 \cdot S_2$ が直接降下している。

87セクション(第382図)は、中央やや南寄りでP66の東側に位置する18段の積み重ねられた、珍しく全て杯から構成されたP67群を示している。積み重ねが少し、北東側に傾斜している。北東側の土器群に寄せかけたものと思われる。下から、杯A II・杯A IV・杯C II・杯C I(白玉5)・杯C II・杯C I・杯A IV・杯C II・杯B II・杯C III(白玉4)・杯B I・杯A IV 2個・杯B I・杯C III・杯B I・杯A IV・杯C Iと積み重ねられている。最上段の杯Cの器内面には、黒褐色土の堆積の後、 $S_1 \cdot S_2$ が降下している。土を入れたか、時間の経過を示すものである。

115セクション(第382図)は、P67の南側に位置する11段に積み重ねられたP457の一群である。やはり、積み重ねが北東側に傾斜している。下から、高杯G I・杯C II・杯C I・杯C III(白玉8)・杯A IV・杯A II 2個・杯B I(白玉3)・杯A IV・杯B I(白玉3)・杯A IIIが積み重ねられている。P457群のすぐ東に、西側に倒れているP125小型甕B II①がある。上部に位置するもので、器内面には $S_1 \cdot S_2$ が降下していた。

80セクション(第383図)は、北部やや南側のP71の南にある南北のセクションで、北から杯を6枚重ね置きP495群があり、南に須恵器甕P57-11を地面に埋め込むようにして埋置した後に杯を10枚重ね置いたP57群、そのP57群の斜め北方向に斜めに杯を4枚重ねたP494群があり、先ほどの6枚重ねのP495群とP494群が支えあうようにして、杯と甕を重ね置きするP87群を上に乗せている。北から見ていくと、P495群は、下から杯B III・杯C I 2個・杯A III・杯B I(白玉8)・杯C IIの積み重ねである。

P494群を支える南にあるP57群は、11個の土器の重ね置きで、下から須恵器甕・杯C III・杯C II(白玉8)・杯A IV・杯C I・杯B I(白玉6)・杯A IV・杯C V・杯C II・杯A II・杯A IIIの積み重ねである。最上部の杯Aの器内面には直接 $S_1 \cdot S_2$ が降下している。最下段の須恵器甕は、

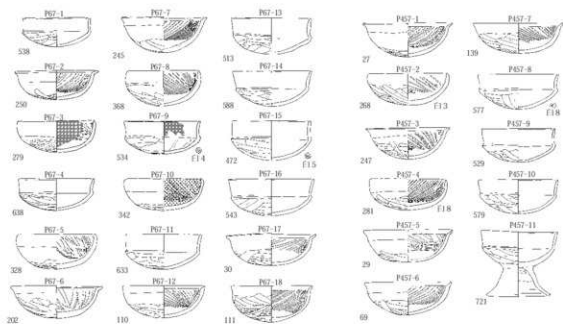
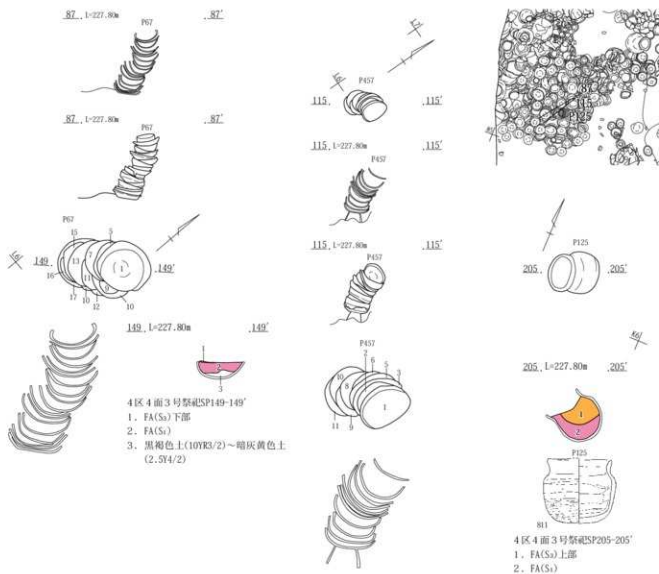
底部が破損しており、その甕を口縁が少し見える位まで、土を被せて埋め込み、その上に杯皿群を載せている。甕自身が南方向に倒れているので、上に乗せる杯群も南方向に傾いており、その傾きを補うように、P494群が、北側に斜めに、下から杯C II・杯A IV・杯A II・杯B Iを重ね置きしている。その上に先ほど述べた、北側のP495群と支えあうようにして、P87群を載せている。P87群は、3段重ねで、下から杯A IV 2個、小型甕C II①と重ねられている。白玉が3個小型甕内から出土した。また、小型甕の内部には直接 $S_1 \cdot S_2$ が器面に降下している。このように、2つの土器群が下で支えあうようにして甕・鉢などを載せる形態は、先ほどの、P531群とP532群の上に鉢P71を置いた在り方を極めてよく似ている。これらの一群の土器群がいずれも $S_1 \cdot S_2$ 降下直前に置かれたことが分かる。

17セクション(第384図)は、88セクションにあるように、P481群、P61群の下にある、東側に向けて倒れている杯の8段の積み重ね群P554群である。上の土器との関係から、早い段階で、東側に倒れて、その上に土器群が載るものである。下から杯B I 2個・杯B II・杯C I(白玉3)・杯C I(白玉5)・杯C I(白玉5)・杯C II(白玉19)・杯C II(白玉1)の積み重ねで、東に倒れて上に土器群が載る。

120セクション(第384図)は、P87群の下にあった、杯3個の積み重ね群P503群である。下から杯内斜口縁杯、須恵器模倣杯2個が重ねられていた。白玉が最下段の内斜口縁杯で1、最上段の須恵器模倣杯に5個が収められていた。

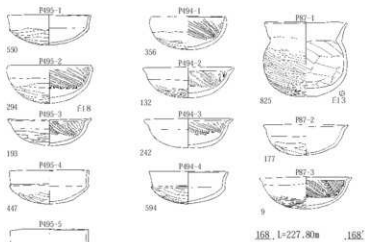
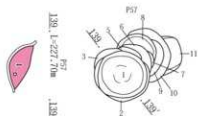
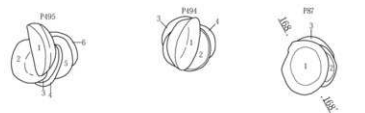
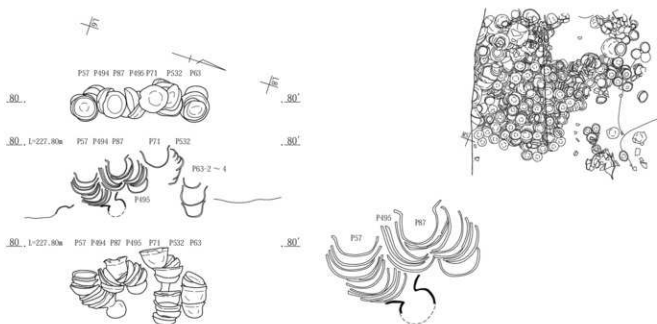
83セクション(第384図)は、西にP502土器群が倒壊した後に、置かれたもので、杯の3段の積み重ねP60群である。下から、杯A I(白玉1)・杯C II・杯C II(白玉5)が重ねられている。最上段の杯内部には、器内面に直接 $S_1 \cdot S_2$ が降下している。P502群が S_1 降下時には、倒壊しており、その上に積み上げられた3段の積み重ねP60群が置いてあったことを示している。

121セクション(第384図)は、P69杯の南で、胴部を1/3程埋めているP529埴が置かれていた東にある、杯3個の積み重ね群P543群を示している。下から杯A III(白玉8)・杯B I(白玉7)・杯B II(白玉6)が重ねられていた。全ての杯に白玉が少数納められていた。

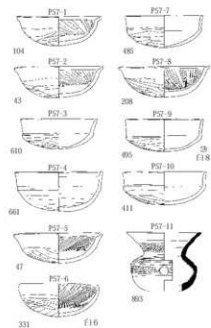


第382図 3号祭祀遺構87・115・P125エレベーション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物

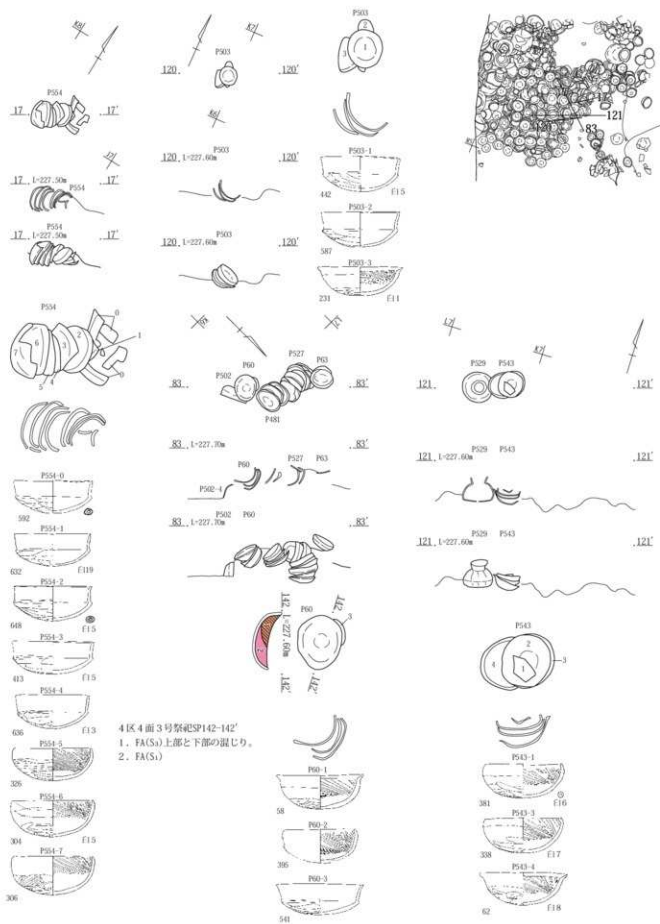


4区4面3号祭祀SP139-139'
1. FA(S₁)



4区4面3号祭祀SP168-168'
1. FA(S₁)上部
2. FA(S₁)下部
3. FA(S₁)

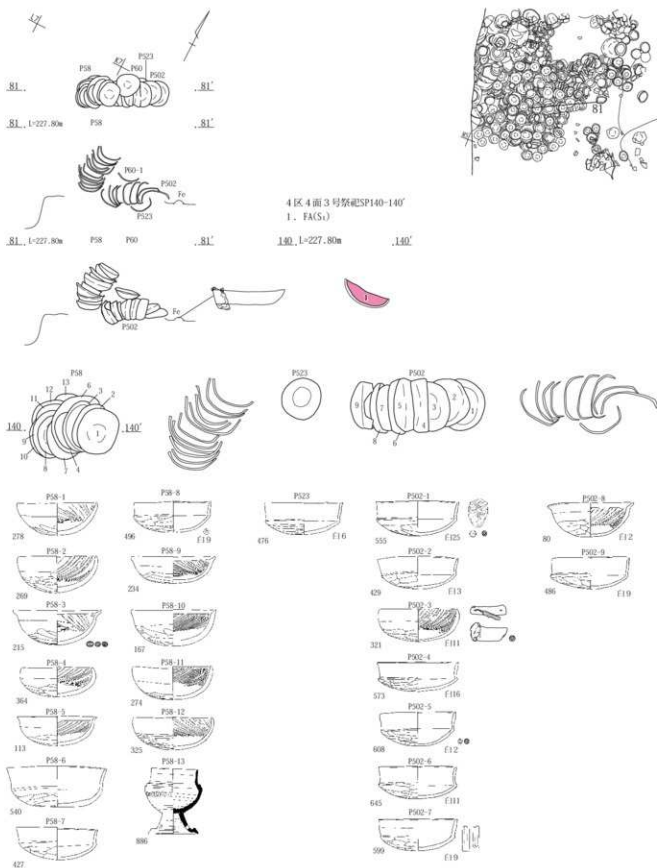
第383図 3号祭祀遺構80エレベーション図・遺物図他



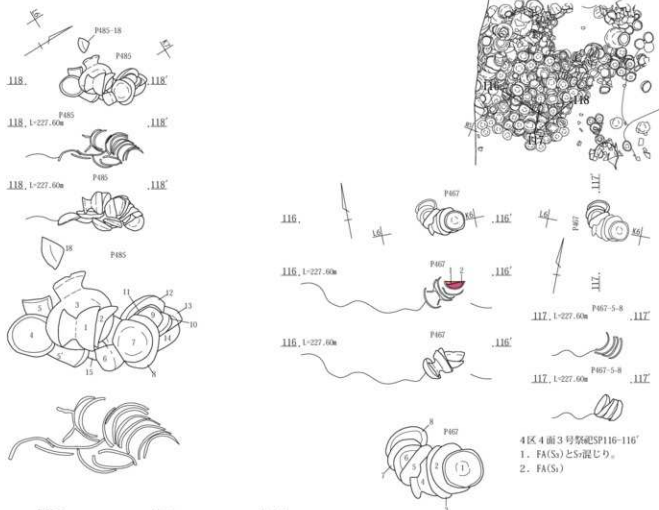
4区4面3号祭祀SP142-142°
 1. FA(Sa)上部と下部の張り。
 2. FA(Si)

第384図 3号祭祀遺構17・120・83・121エレベーション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物

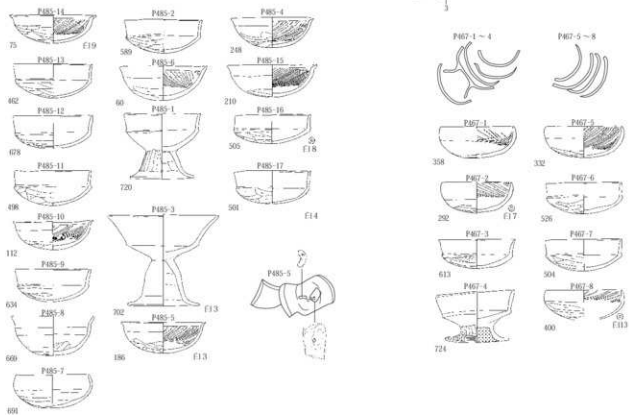


第385図 3号祭祀遺構81エレベーション図・遺物図他

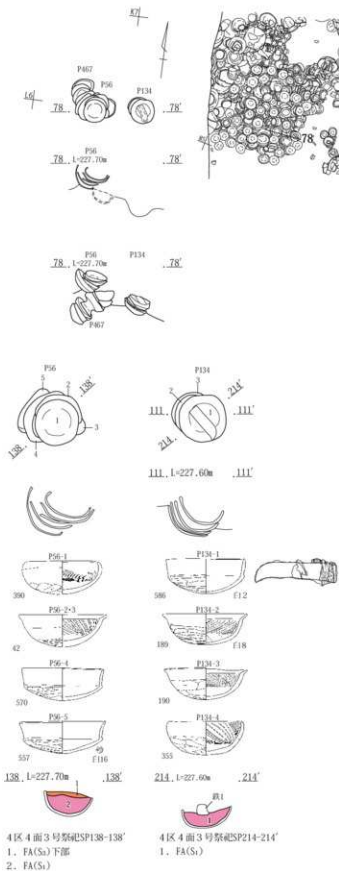


4区4面3号祭祀SP116-116'

1. FA(Ss)とS混じり。
2. FA(Ss)



第386図 3号祭祀遺構118・116・117エレベーション図・遺物図他



4区4面3号祭祀SP138-138'
1. FA(Ss)下部
2. FA(Ss)

4区4面3号祭祀SP214-214'
1. FA(Ss)

第387図 3号祭祀遺構78エレベーション図・遺物図他

81セクション(第385図)はP59群の南、P87群の東に位置して、東西方向に並ぶ13個の土器の積み重ねのP58群と、その東側で9個の土器の積み重ねのP502群とその下に埋没しているP523である。P58群は、東方向に倒れ掛かる状況で検出されている。下から、須恵器小型短脚付椀・杯B 1 2個・杯AⅣ 2個・杯CⅠ(白玉9)・杯CⅡ 2個・杯AⅡ・杯BⅡ・杯AⅣ(白玉3)・杯BⅠ 2個の計13個積み重ねである。この土器群で興味深いのは、須恵器小型短脚付椀で、あまり類例の無いもので、貴重である。

P523杯CⅡは、次に述べるP502の下に置いてあった。恐らく本来は、地面上で見えていたものが、P502の東方向への倒壊に伴い、隠れてしまったものと思われる。P523杯CⅡには白玉が6個納められていた。また、P502群は、P58のすぐ東に接するように積み重ねられているもので、前述したように、東側に完全に倒壊している。別セクションで判明するが、このP502群の上にP60群が置かれており、そのP60群の最上部の土器にはS₁が器面に直接降下しているため、P502群はS₁降下時にはすでに東へ倒壊しており、その上に別のP60群の土器を置いていたことが分かる。

P502群は、杯が9段に積み重ねられたもので、下から杯CⅠ(白玉9)・杯AⅡ(白玉2)・杯CⅡ(管玉2・白玉9)・杯CⅢ(白玉11)・杯CⅠ(白玉2)・杯BⅠ(稗積貝1・曲刃鎌1・白玉11)・杯CⅡ(白玉3)・杯CⅡ(劍形石製模造品1・白玉25)の9枚重ねである。

積み重ねの土器群で全ての土器から祭具が収められた状況で出土しているのは珍しい。

118セクション(第386図)は、P57土器群の東側で、東に向かって倒壊が激しく、積み重ねの復元が難しいが、17段の積み重ねがあると推定した。P485群の積み重ねである。杯CⅠ(白玉4)・杯CⅠ(白玉8)・杯AⅢ・杯AⅡ・杯AⅡ(勾玉1・不明石製模造品1・白玉3)・高杯AⅠ・高杯GⅠ・杯CⅡ・杯AⅡ・杯DⅣ・杯CⅤ・杯CⅡ・杯AⅡ・杯CⅠ・杯CⅡ・杯CⅠ・杯AⅣの17個が重ねた後、東側に倒壊している。異形杯のD形式と杯Cの口クロ使用土器杯が出土しており、高杯は長脚がまだ残る古い形式の土器が入っているのが興味深い。

116・117セクション(第386図)は、中央土器群中央南端で、P83土器群の東にあるP467群を示している。東

南の方向に倒れた状況で出土している。下から杯B I (白玉13)・杯C I 2個・杯B II・高杯G II・杯C II・杯B I (白玉7)・杯B I の8個が積み重ねられている。上から4段目の高杯G IIには膨大な3号祭祀の遺物の中で唯一赤色顔料が塗布されていた。この赤色顔料は、分析によると、酸化鉄で鉱物系ベンガラの可能性がある。赤玉等の金井東裏遺跡の赤色顔料が、赤土起源と考えられる、石英等の小礫混じりのものが中心で、ごく一部に鉄バクテリアによるパイプ状ベンガラが入る状況からすると、鉱物の非パイプ状ベンガラが使用されており特徴的である。

78セクション(第387図)は、中央土器群東南端部の土器にかかる。P56群は、先述したP467群の斜めに、杯を5段積み重ねたものである。下から杯C II (白玉16)・杯C II・杯A IV・杯B IIIの積み重ねである。P134群は、東端部の杯群で、下から、杯B I・杯A IV・杯A II (白玉8)・杯C II (曲刃鎌1・白玉2)の積み重ねである。なお、P56群、P134群ともに、最上段の杯の器内面にS₁・S₂が直接降下している。うち、P134の最上段の杯には、S₁・S₂の上から曲刃鎌が1個出ている。たまたま、S₃の火砕流で流されてこの土器の上に置かれたというより、S₁・S₂降下後、S₁・S₂上に曲刃鎌を置いたものとする。このような例は、先述した、中央小型土器群のP135群の最上部の杯に有肩袋弁をS₁・S₂の上に載せている例と同様である。たまたま火砕流に流されて載ったとは考えづ

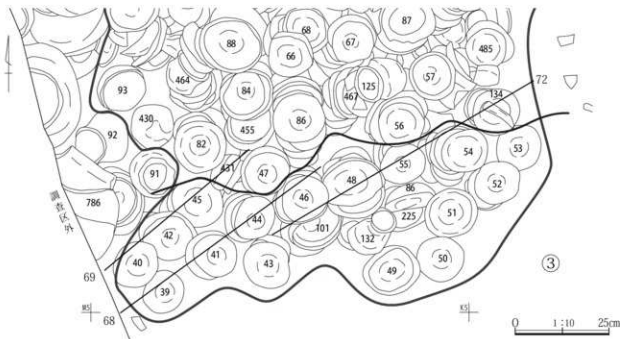
らい。

南部土器集積群(第388図) 南部群は、中央部積み重ね土器群の南にある小型土器の積み重ね配置で、単独で置かれているものも少量ある。全体的に数量は少ない。西側から見ていく。

69セクション(第389図)は、南部群の西端から東に向けたもので、P40須恵器短脚高杯IとP42杯A II (白玉1)と杯B II (白玉3)が並置されている。P42高杯は図示していないが、深く脚部を埋めていた。P40・P42土器ともに器内面に薄く黒褐色土が入り、その上にS₁・S₂が降下しているが、P45杯Bは、器内面に直接S₁・S₂が降下している。

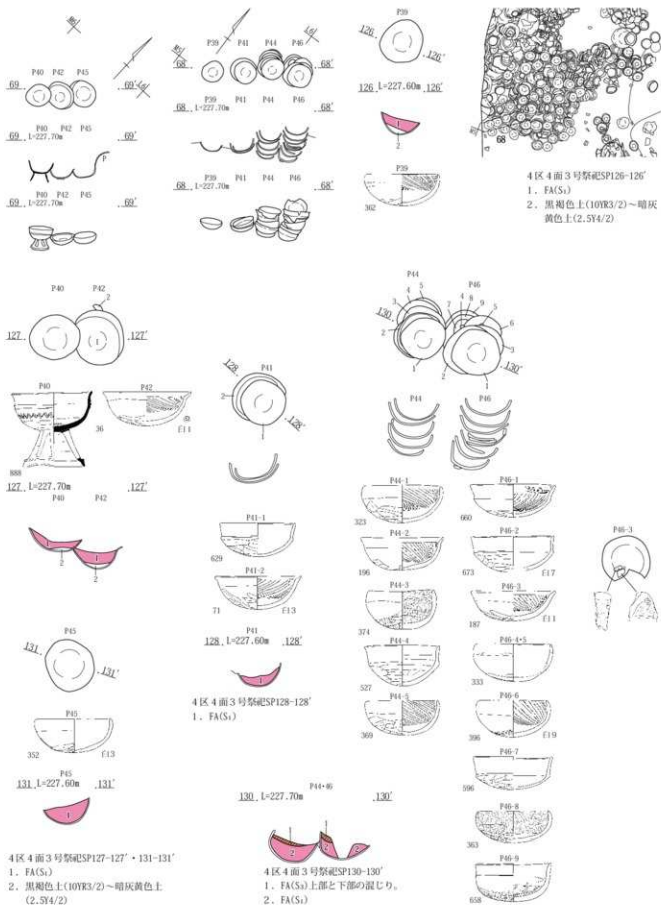
68セクション(第389図)は、69セクションのさらに南側の東西方向のセクションである。P39杯B Iは単独で置かれた土器である。器内面に薄く黒褐色土が入り、その上にS₁・S₂が降下している。東のP41群は、杯A IV (白玉3)と杯C IIの2枚重ねである。その東にP44群があり、杯B I・杯C I・杯D I・杯A II・杯B IIの杯のみの5段重ねである。その東には、P46群があり、杯D X I・杯B II・杯C II・杯B II (白玉9)・杯B I・杯A II (曲刃鎌1・不明石製模造品1・白玉1)・杯C I (白玉7)・杯C IVの8枚重ねである。

P41・44・46群の最上段の土器の器内面には、直接S₁・S₂が降下している。



第388図 3号祭祀遺構小型土器群南部群エレベーション設定図

第三章 発見された遺構と遺物



第389図 3号祭祀遺構69・68エレベーション図・遺物図他



72, L=227.70m P48 P55



72, L=227.70m P48 P55

4区4面3号祭祀SP133-133'

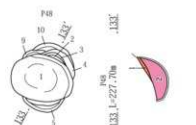
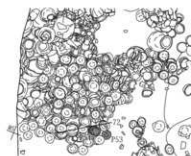
1. FA(Sa)下部

2. FA(Si)

4区4面3号祭祀SP137-137'

1. FA(Sa)下部

2. FA(Si)



P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

P48

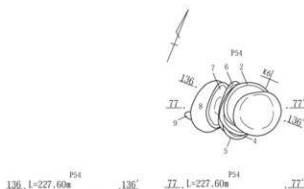
P48

P48

P48

P48

P48



136, L=227.60m P54

77, L=227.60m P54



4区4面3号祭祀SP136-136'

1. FA(Sa)下部

2. FA(Si)



181 P48-1

003 P48-8 F16

302 P55-1



133 P48-2

178 P48-9

166 P55-2



254 P48-3

143 P48-10

222 P55-3



257 P48-4

96 P48-11

590 P55-4



257 P48-5

96 P48-11

590 P55-4



93 P48-5

96 P48-11

590 P55-4



142 P48-6

96 P48-11

590 P55-4



401 P48-7

96 P48-11

590 P55-4



401 P48-7

96 P48-11

590 P55-4



401 P48-7

96 P48-11

590 P55-4



401 P48-7

96 P48-11

590 P55-4



401 P48-7

96 P48-11

590 P55-4



401 P48-7

96 P48-11

590 P55-4



401 P48-7

96 P48-11

590 P55-4



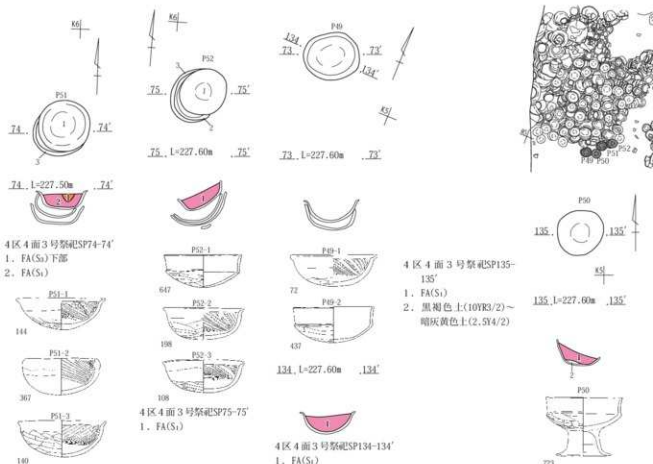
401 P48-7

96 P48-11

590 P55-4



第390図 3号祭祀遺構72・P53・P54エレベーション図・遺物図他



第392図 3号祭祀遺構P51・P52・P49群、P50セクション図・遺物図

72セクション(第390図)は、68セクションの東側に続くもので、P46群の東側である。P48群は、杯AⅣ・杯AⅢ・杯AⅡ・杯CⅡ(白玉6)・杯BⅠ・杯AⅡ・杯AⅢ(白玉5)・杯AⅣ3個・杯AⅢの杯のみの11枚重ねである。すぐ東隣のP55群は、高杯GⅠ(白玉16)・杯CⅡ・杯CⅢ・杯AⅢ・杯AⅣ・杯BⅠの6個重ねである。P46・48群の最上部の杯器内面に直接 S_1 ・ S_2 が降下している。

77セクション(第390図)のP54群は、杯BⅠ(白玉7)・杯AⅣ2個・杯AⅡ・杯AⅢ・杯BⅠ・杯AⅡ・杯CⅢの杯のみの8枚重ねである。この東に単独の土器のP53杯CⅡが埋置されている。P48・54群の最上部の土器及びP53の土器の器内面には、直接 S_1 ・ S_2 が降下している。

南端部の一連の土器・土器群を西から見ていく。P43群は、杯AⅣ・杯BⅠ2個・杯AⅢ・杯AⅣ・杯AⅡの杯のみの6枚重ねである。その東にP101群がある。小型裏A①・杯CⅡ(白玉19)が重ねられている。その東にP132群があり、須恵器小型椀・小型壺B①の積み重ねである。

下の須恵器小型椀の内部に黒褐色土があり、その上か

ら S_1 ・ S_2 が降下しており、その上の一部に S_3 が入り込んでいる。その上に重ねられている小型壺の内面にも S_1 ・ S_2 が入っており、その上に S_7 灰砕角が入っている。このことからすると、須恵器小型椀が S_1 ・ S_2 降下で覆われた後に、別の場所において S_1 ・ S_2 が堆積した小型壺を、この須恵器小型椀の上に置いた可能性も考慮してよい。P132の東にP225群があり、杯BⅠ・杯BⅠ(白玉10)・杯AⅣ(白玉1)・杯AⅡ(白玉8)・杯BⅡ(白玉5)の杯のみの5枚重ねがある。P132のすぐ北側には横置きで、P55群との間に挟み込むようにP86杯AⅣがある。

P132群以外のP43・101・113群の最上段の土器及びP86はすべて、器内面には、直接 S_1 ・ S_2 が降下している。

P225群の南西部にP51群とP52群(第392図)が並置されている。P51群は、下から杯BⅠ・杯AⅡ・杯AⅣの3枚重ねで、P52群は、下から杯AⅡ2個・杯CⅡのやはり3枚重ねである。さらに、この中央積み重ね土器群最南端の土器であるP49群は、杯CⅠ・杯AⅣの2枚重ねで、P50は、高杯GⅠの単独埋置である。杯P51・52・49群はすべて最上段の土器の器内面には、直接 S_1 ・ S_2 が降下し

ている。

唯一P50は、黒褐色土があり、その上にS₁・S₂が降下している。

南部群は、単独や積み重ねでも個数が少ない特徴がある。

以上小型土器集積群は、3号祭祀で最も多くの杯を中心とする小型土器を2～20段まで積み上げている土器群により構成されるもので、白玉などの祭具は積み重ね群の中に一部の土器のみ入るものが多く、後述する積み重ねが少なく祭具の納めが多い小型配置土器群とは明らかに異なる。性格が異なることを示すものである。

小型土器集積群のまとめ(第393図)

中央小型土器群の土器配列は、様々な要因を考えるとやはり、北側から東西方向を中心に積み上げ配置していった可能性が高い。そこで、今までのまとめとして、中央部小型土器群の集積状況を北から東西方向で西から東に向かって配列したと意識して概要をまとめて記す。ただ、すべてを取り上げることはできないので、立面図を作成したもののみを使って、北から南へ東西方向の配列の状況について立面図と土器積み重ね元図で集積状況を記す。

第393図に立面図作成の位置図を示した。なお、立面図では外れてしまうが、集積群として実際には積み重ねられていた土器群については、グレー表示で示している。立面図では、表現されていないが、集積群の土器個別図にグレーで表現している。

西側大型土器群のすぐ東側から小型土器の積み重ねが始まる。北部・中央部・南部の集積群を続けてまとめて説明する。

246列(第393図)は、西側大型土器群の東側の一部に小型土器群が置き始めている。P603群の壺が2個積み重ねられている。ここまでは、西側大型土器群で、その東側から、小型土器の積み上げが始まる。P574群では下から杯AⅡ・杯CⅢ・杯AⅡ・杯CⅡ・小型壺CⅡ①の4個重ねである。その東側にはP578群があり、高杯FⅠ・杯AⅡ3個・杯BⅡ(白玉8)・杯AⅡ(白玉5)の6個重ねがあり、少しずれてP589の杯CⅠ・杯BⅠが積み重ねられている。

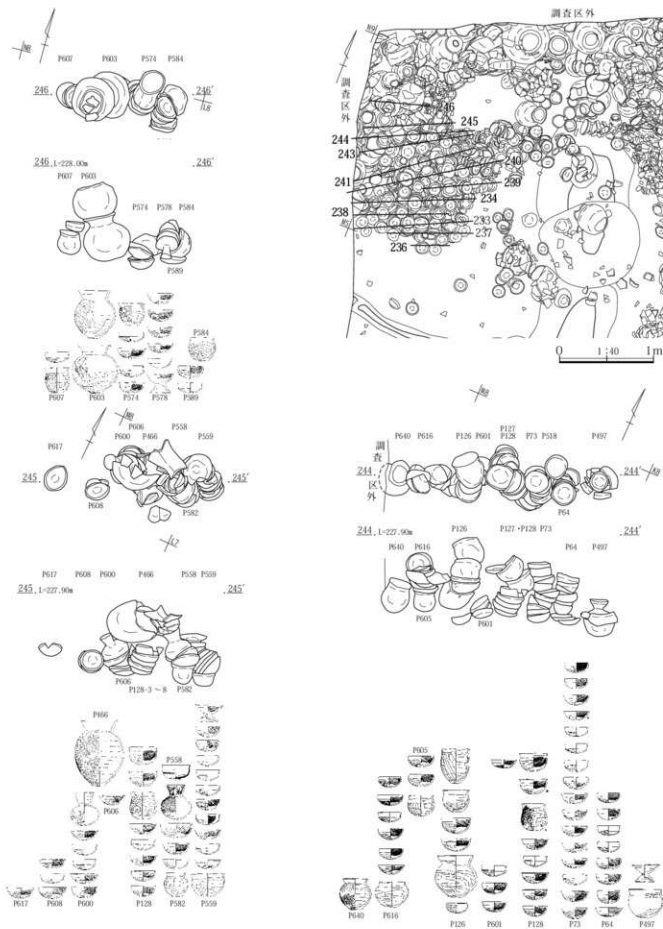
P589杯の上に、P584小型壺CⅡ①があり、図示していないが、さらに上にロクロ使用土師器のP557高杯Ⅰが載

る。

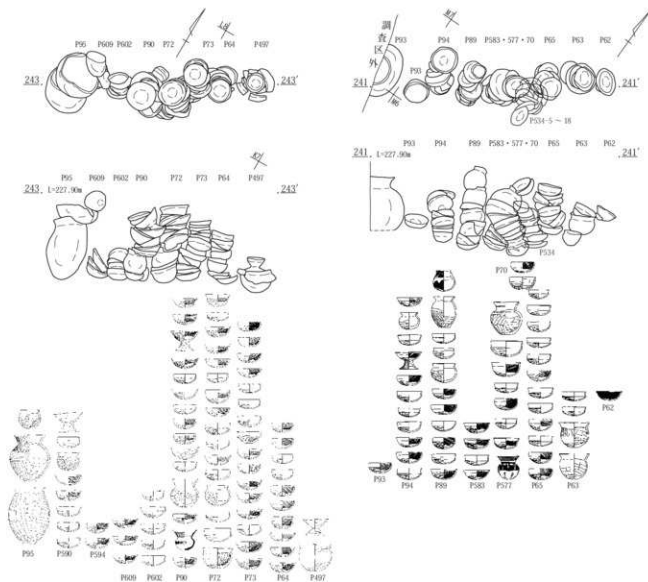
南の245列(第393図)には、西側大型土器群に入るP466壺D③が東に倒壊している状況であり、その西脇にP608群が杯AⅠ・杯CⅡ・杯AⅣの3個重ね、そのすぐ東にP600群が杯AⅡ2個・杯CⅡ・杯CⅠ(白玉2)・杯AⅣ・増②(白玉5)の6個重ねとなる。P606杯AⅣが少しずれて上に載る。その東側やや南にずれて、P128群があり、杯AⅡ3個・杯CⅢ(白玉2)・杯AⅡ(白玉1)・小型壺BⅡ①(白玉5)・杯AⅡ(白玉8)・杯AⅡ(白玉4)の8個重ねであるが、立面図で上の2個のAⅡ2個が外れてしまい、個別図では、上の杯2個はグレーで表現した。やや南東側の列にP582群があり、小型壺AⅠ①(白玉2)・杯AⅡ(白玉1)・杯AⅡ2個・増②と5個の積み重ねの上に、P558の須恵高杯杯部が載せられている。同一重ね群として良いだろう。須恵高杯の脚は破損した状況で、杯部のみであり、故意に破損した可能性も考えたい。その東側に、P559群がある。小型壺CⅡ(白玉13)・杯AⅡ・杯CⅡ・杯AⅡ・杯CⅠ・杯BⅠ・杯CⅡ2個・杯BⅡ3個・高杯EⅡ(白玉8)の12個の積み重ねである。

244列(第393図)は、西にP640の小型壺A②が1個置いてあり、そのすぐ東側に、P616群の小型壺C①・杯AⅡ(白玉7)・杯BⅠ・杯BⅡ(白玉1)・杯CⅡ(白玉1)・杯BⅡ(白玉2)・杯BⅢの7個重ねとなる。ここまでは、西側大型土器群の東端になる。この上にP605群の小型壺CⅡ①・杯BⅡ・杯BⅠが横置きに置かれていた。その東には、P126群があり、杯BⅢ(白玉6)・壺A①・杯AⅡ・杯AⅢ(白玉5)・小型壺CⅡ①(白玉1)・小型壺BⅡ①の6個が重ねられている。その東下にP601群があり、杯AⅡ・杯BⅢ(白玉2)・杯CⅡ3個の重ねがある。さらに東には、P128群があり、すでに245列で積み重ねの内容を紹介している。P128群に斜めにずれて、上部にP127の杯AⅠが載っている。その東やや南側にP73群がある。杯のみの重ねで、杯AⅡ2個・杯CⅠ(白玉2)・杯AⅢ(白玉35)・杯AⅣ(白玉11)・杯AⅢ・杯BⅠ・杯AⅡ・杯DⅩ(白玉16)・杯CⅠ・杯CⅢ(白玉3)・杯CⅡ・杯AⅣ(白玉8)・杯AⅡ・杯BⅠ・杯BⅠ(白玉9)の16段重ねである。置き方が不安定で左右に少しずれている。うち、下の5個の土器は立面図に図示できなかったため、個別図にグレーで表現した。さらに東側に、P64群があり、杯AⅣ2個・杯AⅣ(白玉1)・杯AⅡ(白玉2)・杯

調査区外



第393図 3号祭祀遺構小型集積土器群立面設定位置図・積み重ね状況復元図(233~234・236~241・243~246)



第394図 3号祭祀遺構小型集積土器群積み重ね状況復元②(243・241)

B I・杯B II・杯C I(白玉8)・杯C II・杯B I・杯B III(白玉1)の10個重ねである。さらにその東は、P497群があり、小型甕C II②・高杯E IIの積み重ねである。

すぐ南の243列(第394図)は、まず、西側大型土器群の東端のP95群の甕(白玉7)・壺・小型甕の積み重ねの東、やや北側のP590群から始まる。ただ、立面図には残念ながら少しずれて、P590群を入れられなかった。個別図のみで示している。杯C II・杯C III(白玉8)・杯C II・杯A II 2個・小型甕C II②・杯C V・高杯IXの8個重ねで、特に最上段及びその下の土器は、いずれもロクロ使用土器で、須恵器製作技法を使用したものである。この重ねの脇に、下から支えるような形で、P594群があり、杯B II・杯B Iの2個重ねである。これらの重ね群のすぐ南東側にP609群があり、杯A II・杯A III・杯A II(白玉1)

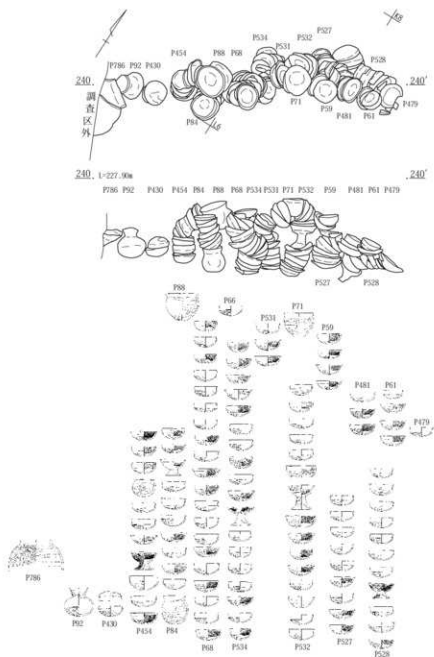
がある。また、P602群があり、杯C II・杯C III・杯C II・杯C Iの杯Cの同一形式5個の重ねが珍しい。さらに東にP90群があり、杯A II・須恵器甕・杯B I・小型壺B II(白玉4)・杯C II・杯B I・杯B I(白玉1)・杯B I(白玉8)・杯C II(白玉19)・杯A IV・杯C I・杯A II・高杯E I・杯C IV・杯A IIIの15段重ねである。うち、下の5個の土器は立面図に図示できなかったため、個別図にグレーで表現した。積み重ねは、不安定で左右に振れている。その東側にP72群があり、検D I・杯C I(白玉4)・杯C I・小型甕C III①・杯C I・杯A II・杯C III・杯C I・杯A III・杯A I・杯C III・杯A IV・杯A II・杯A II(白玉8)・杯C III・杯D IVの16段重ねである。置き方が不安定で左右に少しずれている。うち、下の4個の土器は立面図に図示できなかったため、個別図にグレー

で表現した。その東に、73群があり、既に、244列で説明した。さらに東にはP64群があり、杯AⅣ2個・杯AⅣ(白玉1)・杯AⅡ(白玉2)・杯BⅠ・杯BⅡ2・杯CⅠ(白玉8)・杯CⅡ・杯BⅠ・杯BⅢの10個が重ねてある。当列一番東側最後のP497群は244列で説明したが、小型甕CⅡ②(白玉38)の上に高杯EⅡが重ねられている。ただし、P497群は、集積土器群では無く、小型土器配置群に入り、その西部群に含まれるものである。243列は積み重ねの段数が最も多い列である。

さらに南の241列(第394図)を見る。現地保存の土師器甕が西側大型土器群の東端にあたり、その東から、P93杯BⅠ(白玉1)が1個埋置され、その東にP94群が、杯CⅠ・杯BⅡ・杯AⅡ(白玉3)・杯CⅡ(白玉8)・杯CⅡ・杯CⅢ・杯BⅠ・高杯FⅠ・杯CⅡ・小型壺BⅢ①・杯AⅡの11段重ねである。東にP89群がある。杯BⅣ・杯CⅠ・杯BⅢ・杯BⅡ・杯BⅠ2個・小型甕CⅡ①・杯DⅦ・杯CⅡ・小型甕A①・小型壺Ⅳ①の11段重ねである。さらに東側のP577群を支えるような形で、P583群がある。杯AⅡ・杯CⅠ・杯AⅢ・杯AⅣ(白玉2)の4個重ねである。P577群は、須恵器二重壺(白玉1)・杯AⅡ・杯CⅠ(白玉8)・杯BⅢ・杯CⅡ(白玉6)・杯AⅡ・杯CⅠ・小型壺BⅡ①の8段重ねである。中折れ状況で西に崩れそうな形で重ねられている。P577群の重ねの斜め上にP70群の杯DⅠ(白玉8)・杯BⅡ(白玉8)の2個重ねがある。P577群の東にP65群があり、杯BⅢ・杯BⅡ・杯CⅠ・杯BⅡ・杯CⅡ2個・杯BⅡ・杯CⅡ2個・杯BⅡ・杯CⅠ(白玉8)・杯CⅠの杯だけで、12段重ねている。この積み重ねも不安定である。その東にP63群があり、小型甕CⅡ②・小型甕CⅡ②(白玉8)・杯CⅡ・杯CⅢの4個重ねである。単独で、東にP62の杯AⅣ(白玉4)がある。

さらに南の240列(第395図)を見る。ここが一番多くの土器を重ねている列である。西端は、西側大型土器群の東端である。P786甕が1個とそのすぐ東側にP92埴②(白玉9)が1個埋置されている。その東側にP430群の杯BⅢ(白玉16)に、杯CⅡ(白玉1)の須恵器蓋模倣杯を通常使用する身としてではなく、蓋のように逆転させてかぶせた2個重ねである。東側にP454群があり、杯AⅡ(白玉1)・杯CⅡ・杯CⅠ・高杯FⅠ・杯AⅣ・杯CⅢ・杯CⅠ・小型甕CⅢ①・杯BⅢ・杯BⅡ(白玉9)・杯AⅣ

(白玉2)の11段重ねである。途中で東方向に倒れ気味である。その東にP84群があり小型甕BⅠ①・杯CⅠ・杯BⅠ(白玉2)・杯CⅢ・杯AⅣ・杯CⅢ(白玉1)・杯AⅣ・杯CⅠ(白玉4)・高杯FⅢ・杯AⅢ・杯BⅠの11段重ねである。南に少し倒れ気味である。さらに東に、この遺構の中で最多の20段の重ねを有する杯類のみのP68群がある。杯BⅡ・杯CⅠ・杯CⅡ・杯AⅡ・杯CⅠ・杯AⅡ・杯CⅡ・杯CⅡ(白玉9)・杯CⅠ・杯BⅡ・杯AⅢ(白玉1)・杯CⅠ・杯BⅡ(白玉8)・杯CⅠ2個・杯CⅢ・杯CⅡ(白玉4)・杯BⅠ・杯CⅡ・杯BⅠの20段重ねである。左右に振れて不安定な積み方である。このP68群の斜め北にP66の杯CⅠが載せられ、さらに、P454・84・68群の中央にP88小型甕CⅡ②が載せられている。P68群の東には、P534群がある。杯BⅠ・杯AⅡ2個・杯BⅠ・杯BⅡ・杯BⅢ(白玉7)・杯CⅡ(白玉8)・杯AⅢ・杯CⅡ・杯CⅡ(白玉16)・杯CⅠ・杯CⅢ(白玉8)・高杯EⅡ・杯AⅡ(白玉14)・杯CⅢ(白玉8)・杯BⅡ・杯CⅢ・杯CⅡの18段重ねである。これも途中から積み方がずれている。その東にP532群が不安定な形で積まれている。杯CⅡ(白玉9)・杯CⅡ・杯DⅦ・杯CⅠ(白玉8)・杯AⅡ・杯BⅠ・杯AⅡ(白玉8)・杯AⅢ(白玉1)・高杯AⅠ・杯AⅡ(白玉23)・杯CⅢ・杯CⅡ・杯CⅡ(白玉7)・杯B(白玉8)・杯CⅤの15段重ねである。このP532群と西隣のP534群の間を橋を架けるように繋げているのが、P534群のほうからP532群のほうへ向けて寄り掛かるP531群で、杯AⅡ・杯AⅢ・杯CⅤの3枚重ねで、この上にP91小型甕AⅠ①が斜めに載り、P532群の最上段の杯との間に挟まる様にして、正位で置かれている。P532群の東には、P527群があり、杯AⅣ(勾玉形石製模倣品Ⅰ・徳積具Ⅰ・白玉13)・杯AⅡ(白玉10)・杯CⅠ(白玉12)・杯AⅡ(白玉9)・杯CⅠ・杯CⅠ(白玉5)・杯CⅡ・杯CⅠ・杯CⅢの9段重ねである。このP527群の斜め上にP59群の杯AⅣ2個・杯AⅢ・杯BⅠが載る。P527群の南東側にP481群の杯AⅡ・杯AⅠ・杯AⅢ(鉄素材・白玉?)が斜めに載る。P527群の東にはP528群が東に横倒しになっており、下から杯AⅢ・杯CⅠ(白玉1)・杯CⅠ・高杯EⅡ(白玉43)・杯CⅡ・杯CⅠ(白玉19)・杯CⅢ・杯CⅡ・杯CⅠ・杯CⅡ・杯CⅤ・杯CⅢ(白玉2)の11段重ねである。P528の南側P528群と並行にP61群が東に倒れるようにして出ており、

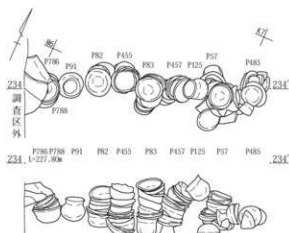
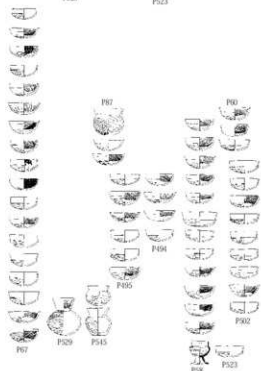
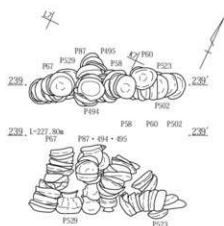


第395図 3号祭祀遺構小型集積土器群積み重ね状況復元③-240

杯AⅣ(白玉13)・杯AⅡ・杯AⅠ・杯CⅡの4段重ねである。また、単独であるが、P479の杯CⅠが東端から1枚出土した。

239列(第396図)は、東側を中心とした列で、西側に関しては、すぐ北の240列で説明した。240列のP68群の南東側から東に向けて説明する。P67群は、全て杯類で、杯AⅡ・杯AⅣ・杯CⅡ・杯CⅠ(白玉5)・杯CⅡ・杯CⅠ・杯AⅣ・杯CⅡ・杯BⅡ・杯CⅢ(白玉4)・杯BⅠ・杯AⅣ2個・杯BⅠ・杯CⅢ・杯BⅠ・杯AⅣ・杯CⅠで、18枚重ねである。全体にやや東に傾き加減である。すぐ東に、P529の卍②が単独で埋置されている。P545群の小

型壺BⅠ①・小型壺CⅡ①が重ね置きされ、その斜め上にP495群の杯BⅢ・杯CⅠ2個・杯AⅢ・杯BⅠ(白玉8)・杯CⅡが横向きに近い状態で置かれており、その南側にP87群の杯AⅡ2個・小型壺CⅡ①(白玉3)が載っている。P494群はその南側に杯CⅡ・杯AⅣ・杯AⅡ・杯BⅠの4枚重ねで斜めに置かれていた。P494・495群のすぐ東にP58群がある。小型脚台付須恵器椀を一番下にして、杯BⅠ2個・杯AⅣ2個・杯CⅠ(白玉9)・杯CⅡ2個・杯AⅡ・杯BⅡ・杯AⅣ(白玉3)・杯BⅠ2個で13段重ね置きをして、やや東に傾き加減である。P58群の東に、完全に東に横倒しになった状態で、P502群があ



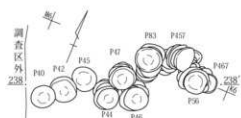
第396図 3号祭祀遺構小型集積土器群積み重ね状況復元④(239・234)

る。杯CⅠ(白玉9)・杯AⅡ(白玉2)・杯CⅡ(管玉2・白玉9)・杯CⅢ(白玉11)・杯CⅠ(白玉2)・杯CⅡ(白玉16)・杯BⅠ(徳積具1・曲刀裏1・白玉11)・杯CⅡ(白玉3)・杯CⅡ(白玉25)と9枚の杯皿が重ねられている。特に注意すべきは、すべての杯に白玉他が納められていることで、重ね置きの土器群の中では珍しい。横倒しになったP502群の上に、斜めにP60群の杯CⅡ・杯BⅡ・杯AⅡが置かれていた。東端に単独で、P523の杯CⅡが埋置されており、その上をP502群が東に横倒しで、P523は土器に覆われていた。

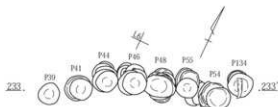
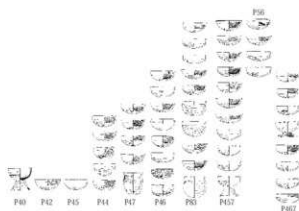
234列(第396図)は、西側大型土器群のP786裏の東側から始まりP788群は、杯AⅣ・杯AⅡ2個・杯AⅣ(白玉5)・杯AⅢの杯A類のみの5枚重ねである。すぐ東にP91小型裏AⅠ①が埋置されている。その東に、P82群が

あり、椀C①・杯CⅢ(白玉6)・杯AⅣ・杯CⅡ・杯BⅠ2個・杯AⅣ(白玉12)・杯AⅡの8個が重ねられている。その東にP455群があり、杯AⅢ・杯AⅠ(白玉7)・杯CⅡ(白玉4)・杯CⅢ・高杯EⅠ・杯BⅡ(白玉7)・杯AⅣ(白玉9)・杯BⅡ・杯AⅢ・杯BⅠ2個・杯BⅠ(白玉6)の12段の重ね置きである。その東にP83群があり、小型裏CⅡ①・杯AⅣ・杯AⅢ・椀CⅡ・椀CⅠ・杯BⅠ・杯AⅣ・杯CⅠ・杯CⅢ・杯AⅡ(白玉10)の10個がやや東側に傾きながら重ね置きされている。その東にP457群があり、高杯GⅠ・杯CⅡ・杯CⅠ・杯CⅢ(白玉8)・杯AⅣ・杯AⅡ2個・杯BⅠ(白玉3)・杯AⅣ・杯BⅠ(白玉3)・杯AⅢの11段重ねで、東に倒れ掛かっている。このP457群の斜めにP125小型裏BⅡ①が置かれている。その東にP57群があり、須恵器盥・杯CⅢ・

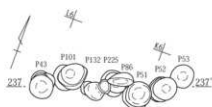
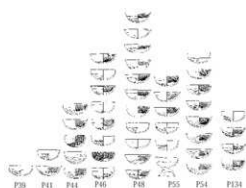
第三章 発見された遺構と遺物



238, 1-227.80m



233, 1-227.70m



237, 1-227.60m



236, 1-227.60m



第397図 3号祭祀遺構小型集積土器群積み重ね状況復元⑤(238・233・237・236)

杯CⅡ(白玉8)・杯AⅣ・杯CⅠ・杯BⅠ(白玉6)・杯AⅣ・杯CⅤ・杯CⅡ・杯AⅡ・杯AⅢの11個がやや東側に傾きながら重ね置きされている。東隣のP485群は、完全に東に倒壊した状況であり、杯CⅠ(白玉4)・杯CⅠ(白玉8)・杯AⅢ・杯AⅡ・杯AⅡ(勾玉1・不明石製模造品1・白玉3)・高杯AⅠ・高杯GⅠ・杯CⅡ・

杯AⅡ・杯DⅨ・杯CⅤ・杯CⅡ・杯AⅡ・杯CⅠ・杯CⅡ・杯CⅠ・杯AⅣの17個が重ねた後、東側に倒壊している。特徴的なのは、異形杯Dとロクロ使用土器杯CⅤが2個重ね置きされていることである。234列の南側に位置する238列(第397図)は、単体の土器の埋置が多くなりをはじめてくる。西側大型土器群のP786裏の南東

に、P40須恵器高杯が埋置されている。その東にP42杯A I(白玉1)・P45杯B I(白玉3)が単独で東西に並んで置かれている。その東からは重ね置きになり、少し南にずれるP44群は233列で説明する。P47群は小型喪B II・杯A II(白玉8)・杯B I・杯A II・杯B Iの5個重ねである。やや北東にあるP46、83、457群は、それぞれ233、234列で説明する。P457群の南西にP467群がある。杯B I(白玉13)・杯C I 2・杯B II・高杯C II・杯C II・杯B I(白玉7)・杯B Iの8個重ねで、最上段に、P457群とこの467群の間を橋渡しするように、P56群が載り、杯C II(白玉16)・杯C I・杯A Iの4個重ねされている。更に南の233列(第397図)も、一部単体の土器が置かれている列である。西から、P39単体の杯B I、東にP41群で、杯A II(白玉3)・杯C IIが2個安置され、東のP44群では、杯B I・杯C I・杯B I・杯A II・杯B Iの杯のみの5枚重ねである。さらに、P46群で、杯A I・杯B III・杯C II・杯B III(白玉9)・杯B I・杯A II(白玉1)・杯C I(白玉7)・杯IVの杯のみ8個重ねである。その東にP48群があり、杯A II・杯A IV・杯A II・杯C II・杯B I・杯A II・杯A III・杯A IV・杯A II 3個の杯のみの11個重ねである。杯Aの内斜口縁杯が特に多く、11個中9個である。その東のP55群では、高杯G I(白玉16)・杯C II・杯C III・杯A IV 2・杯B Iの5個重ねである。この杯群で特徴的なのは、杯類の中で、新しい要素を持つものが多いことで、杯CのII・III類や、杯AのIV類などである。この東にやや東に倒れた状況で出土しているP54群がある。杯B I(白玉7)・杯A II 3・杯A IV・杯B I・杯A II・杯C IIの杯のみの8個が重ねられている。東端にP134群があり、杯B III・杯A IV・杯A II(白8)・杯C II(白2)の杯のみの4個重ねである。237列(第397図)は、重ね枚数の少ない一群である。この枚数の少なさが、横方向の配列をしていたことと同時に、最終的に置いたのが南側の横一列である可能性を示していることを考えたものとなるものである。西端は、P43群で、杯A II・杯B II・杯B I・杯A II 3個の杯のみの6枚重ねである。その東にP101群があり、小型喪A I・杯C II(白玉19)が2個重ね置きである。その東には、P132群があり、特徴的な須恵器小型碗(白玉6)・小型壺A IIが重ね置きされ、小型壺は東に倒れていた。その東のP225群は、杯C I・杯C I(白玉10)・杯A IV(白玉1)・杯A II(白玉8)・杯B

II(白玉5)が杯のみの5枚重ねである。その上に斜め置きで、P86の杯A IVが載っていた。その東に、P51群があり、杯B I・杯A II 2の杯のみの3枚重ねがあり、その東には、P52群で、杯A II・杯A IV・杯C Iの杯のみの3枚重ねとなる。東端には、P53杯C IIIが単独で置いてあった。最前列の236列(第397図)を見ると、中央小型土器積み重ね群の南端のほぼ中央の位置に置かれている。西には、P49群があり、杯C II・杯A IIIが2枚重ねで置いてある。その東には、P50高杯G Iが置いてあった。

以上、中央部小型土器群の全体の流れを見てきたが、中央部の特に中央付近の242・240・239・23列の中で、土器群の中央部に集中して、15～20段重ねの土器群が形成されており、この部分に、杯類を中心にして、多くの土器を積み上げようとしたことが分かる。また、西側大型土器群の近くの小型土器の積み重ねは、全体的に少ない数の積み上げで、中央部で段数が増え、東端には、少ない場合と多く積み上げたものの両方があるという特徴がある。白玉は積み重ねの土器の中に納められていることが多く、全く白玉が収められていない土器で構成された群が20群ほどであることから、白玉を納めることがある程度行われていたことが分かる。白玉を納める位置については、白玉の出土は最も多いのは、積み重ねの中で、最下段の土器で、土器を埋置するという契機となった土器に白玉を納めている例が35例ほどあり、全体の中で見ると、段の途中の土器に納められた46例にはほとんどの多さであり、最初の土器に白玉を納めるという意識は多少あったものと考えたい。納められた土器の器種は杯が最も多い。小型喪に収められていることも多く、杯は148個に納められ、小型喪は13個、他に高杯3個、埴2個、小型壺2個、須恵器甕1個、須恵器小型碗1個に納められている。杯の数が圧倒的に多いので当然であるが、杯の中に白玉を納めることが多いのは事実である。興味深いのは、この中央部小型土器群の土器の中には、白玉以外の、祭具(石製模造品・玉類・鉄器・ガラス玉)などを入れた例がほとんど無く、これから述べる、東小型土器群や、東南部小型土器群のありかたとは明確に異なるということが言える。杯の4個に1個の割合ほどで白玉を納めている。杯の種類により、白玉を納める比率が変わるということは無い。

⑥小型土器祭具の配置群(第398図)

この遺跡の中心部近くに、祭具を納めた杯類を中心に配置された一群の土器群がある。先ほどまで紹介した北・西・東の大型土器配置群や、中央にある小型土器を多数積み重ねる集積土器群とは大きく異なり、単体か数個の積み重ね土器に多くの祭具を納めた形で埋置しているものと想定している。

小型土器群の出土状況 大きく4つのグループに分けられる。北部群：P114須恵器大甕の南側から小型土器群を中心にした群。西部群：中央小型積み重ね土器群の東端部で、積み重ねよりも、それぞれの単体の小型土器に祭具を多く納めて置いてある一群。東部群：P112大型壺の南にあるP438・439・104壺・甕の南から出土する小型土器群でやはり祭具が多く納められたものがある。南部群：中央部集積群の南東側にまとまって出土する。壺・甕と小型土器の組み合わせのもの、南端部にあるあまり積み重ねをしない小型土器の一群である。以上の4群の土器を北から説明していく。

北部群(第399図)：北部群は、北側大型土器群のP114大型須恵器甕の南側にある小型土器群と一部大型土器を含むものである。囲い状遺構の中心点はこのP114須恵器のすぐ西隣のP637須恵甕であり、その中心点近くのこの

小型土器群は、この祭祀の中心的遺構となる可能性がある。

16セクション(第400図)では、P547手捏ね土器が、P114須恵器のすぐ南東部に数個置いてあった。復元実測できたのは1個であるが、複数個配置してあったものである。この祭祀遺構の中で唯一の手捏ね土器が使用された地点である。さらに、P114の南側に破砕した状態で、P440壺A②が置かれていた。

15セクション(第400図)では、P508-2小型甕CⅡ①の北側にP535小型甕BⅠ①がある。土器内部にS₁・S₂が最下層に斜めに入り、S₁・S₂降下直前には既に斜めになっていたことが分かる。白玉が4個内部に納められている。V-2セクション(第400図)にかかる、P508土器群は、小型甕CⅡ①と杯CⅡが重ね置きされていた。上の杯CⅡの内部には、S₁・S₂のすぐ下にごく薄い層厚の黒褐色から暗灰黄色土層の中から剣形石製模造品Ⅰと白玉22個が出土している。その下の小型甕からは、有脚扶独立片逆刺短頸鐵が1本、28個の白玉と一緒に出土している。北側にP509小型甕AⅠ②があるが、S₃火砕サージで東側に少し倒れている。なお、S₁・S₂が土器内部に確認できず、安置した時期について検討を有する。

12セクション(第400図)は、P542杯CⅡとP538埴②の



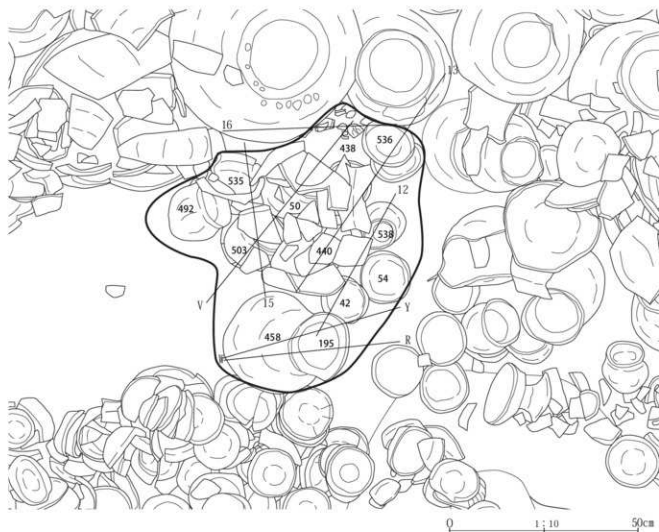
第398図 3号祭祀遺構小型土器群配置区分図

配置が分かる。P538埴には、土器内面に直接 $S_1 \cdot S_2$ が降下しており、P542杯Cには、黒褐色土中より、短茎有脚扶長三角形籬、有孔円板形石製模造品、滑石製白玉68個が出土している。 $S_1 \cdot S_2$ 下に黒褐色土があり、その中から祭具が出てくることから、黒土が堆積したか、土を入れた可能性がある。少し東側の南北方向の13セクション(第401図)から杯を中心とする配置が明らかとなった。北側から、P536群があり、杯AⅡ、杯CⅠと2段重ねである。P536-1杯Aには、 $S_1 \cdot S_2$ 火山灰が土器上に直接入っており、 $S_1 \cdot S_2$ 降下直前に置いてあったものと考えている。土器内部の $S_1 \cdot S_2$ 下から穂積具と短茎有脚扶長三角形籬が出てきて、鉄器を納めていることが分かる。この重ね置き下のP536-2杯Aには白玉4個が置かれていた。この土器のすぐ南にP537杯CⅡがあり、この土器にも $S_1 \cdot S_2$ が降下しているが、その下に2cmほどの黒褐色土があり、この土の下から鉄素材及び、と白玉5個が出

土している。その南側にP539杯CⅢがあり、図示していないが、やはり、 $S_1 \cdot S_2$ の下に黒褐色土があり、その中から有孔円板形と剣形の石製模造品、白玉18個が出土している。その南側から、P540埴③が少し斜めに倒れるように出土している。中には、剣形石製模造品と白玉46個と多くの祭具が出土している。

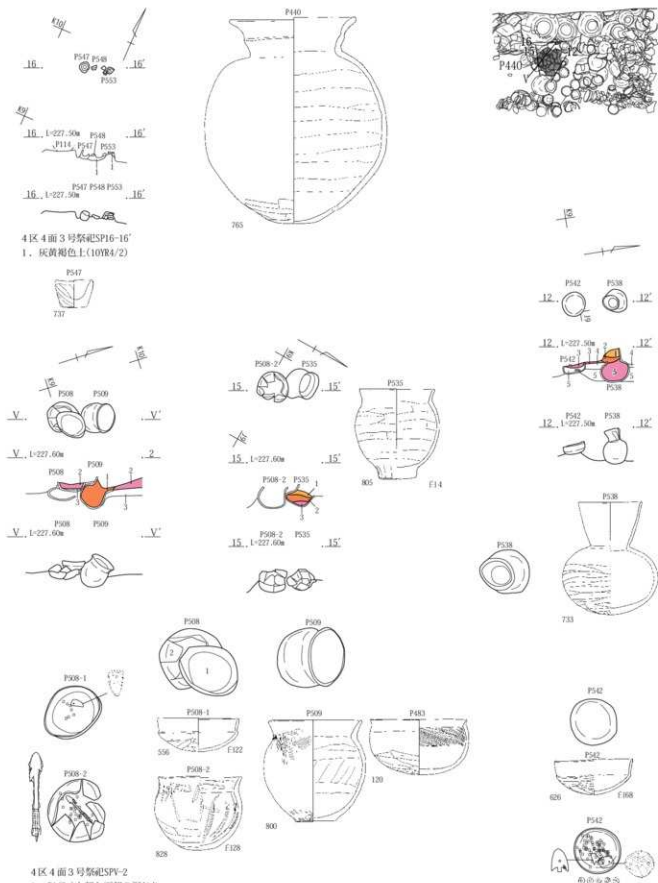
232セクション(第401図)を見ると、P535小型甕の南側にある、P492小型甕BⅠ①がある。土器内部に斜めに $S_1 \cdot S_2$ 、 S_3 上下層が入っており、この土器が $S_1 \cdot S_2$ 降下前には、斜めになっていたと思われる。

東側で、249立面図(第420図)は、P195須恵器甕のすぐ北部の杯の配置を示すものである。P195須恵器とP541杯との間にP542杯CⅢがある。14セクション(第402図)をみると、杯Cが2つ並び、西側のP539杯CⅠには、ほんの一部黒褐色土があり、その上に $S_1 \cdot S_2$ 火山灰に覆われている。そのすぐ東の杯P541には、黒褐色土の中に、長



第399図 3号祭祀遺構小型土器群北部群セクション他設定図

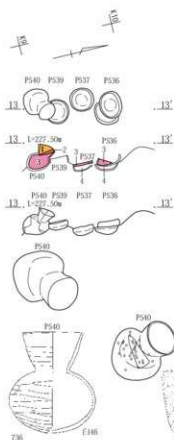
第三章 発見された遺構と遺物



4区4面3号祭祀SP16-16'
1. 灰黄褐色土(10YR4/2)

4区4面3号祭祀SPV-2
1. FA(S)上部と下部の混じり。
2. FA(S)
3. 黒褐色土(10YR3/2) ~ 暗灰黄色土(2.5Y4/2)

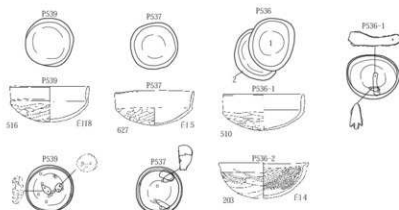
第400図 3号祭祀遺構16・15・12・Vセクション図・P440・483遺物図他



4区4面3号祭壇ESP12-12'

1. FA(Sa)上部
2. FA(Sa)下部
3. FA(Si)
4. 灰黄褐色土(10YR4/2)
5. 黒褐色土(10YR3/2)

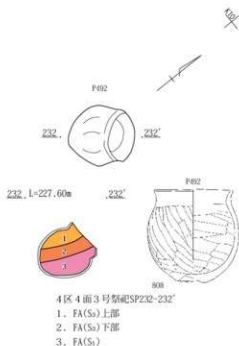
- 4区4面3号祭壇ESP12-12'
1. FA(Sa)上部
2. FA(Sa)下部
3. FA(Si)
4. 黒褐色土(10YR3/2)～暗灰黄褐色土(10YR4/2)



頸有腸状長三角形鐵、短頸有腸状長三角形鐵の2本の鉄鐵が切先を北に向けて置かれており、他に穂積具2、剣形石製模造品、ガラス玉、白玉77個と多くの祭具が納められている。先ほどのP542同様の大量の祭具を納めていること、しかも黒褐色土が被さっていることが重要で、その上にS₁・S₂が降下している。

W-Rセクション(第402図)は、須恵器甕P195の東側にあるP498杯A1で、中には剣形と有孔方板形の石製模造品、穂積具2、白玉112が納められている。この杯の鉄器のすぐ上からS₁・S₂が降下しており、黒土が下に堆積している。

黒土は祭具を納めた後に、時間が経過して、土が積もったか、あるいは、祭具を納めた後に土を被せるような行為があったかのどちらかである。祭具を納めない土器ですぐ隣接した所にあるP539や、P538には、土器内面に直接S₁・S₂が降下している所をみると、ただ土器を設置する場合には、S₁・S₂降下前それほど時間がたたない段階で内面に間層を挟まずに直接降下しているのに対して、祭具を土器の中に納めた場合には、その理由は不明であるが周りの土を少し被せるようにして、黒褐色土が入った後に、S₁・S₂が降下していると推定できる。土器のみの安置と祭具を納めた場合に違いがあることが分かる。

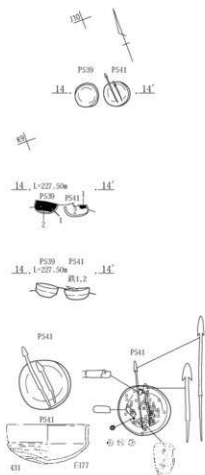


4区4面3号祭壇SP232-232'

1. FA(Sa)上部
2. FA(Sa)下部
3. FA(Si)

第401図 3号祭祀遺構13・P492セクション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物

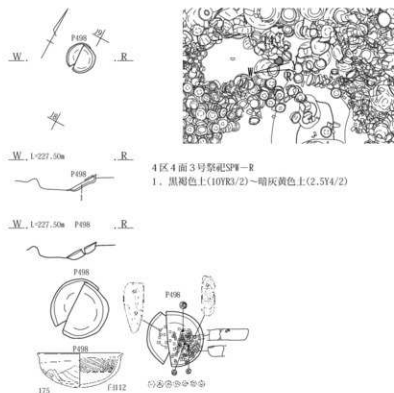


4区4面3号祭祀SP14-14'

1. FA(Sa)
2. 黒褐色土(10YR3/2)～暗灰黄色土(2.5Y4/2)

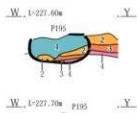
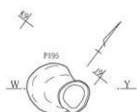
W-Y (第402図)セクションは、先述した土器群の南にある、P195須恵器甕である。胴横に特徴的な凹線を施している。東側に倒れており、一部破損している。中にS₁・S₂が最下層にあり、その上にSa上下層、S₇と入り込んでいる。西から東への、火砕サージ・火砕流の影響で東へ倒れたと思っていたが、火山灰などの堆積状況を見ると、転倒に伴う層の移動が無いので、もともとこの甕は斜めに倒れ込んでいて、一部破損していた所にS₁・S₂が流下したと考えられる。甕中より白玉24個が出土しているのは興味深い。

以上、一部大型甕を配しながら、基本的には、祭具を多く納めた杯を中心とする小型土器を埋置している一群で、いずれもS₁・S₂降下前に埋置し、あるいは祭具を納めた後に土



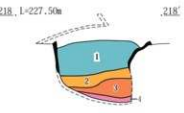
4区4面3号祭祀SPW-R

1. 黒褐色土(10YR3/2)～暗灰黄色土(2.5Y4/2)



4区4面3号祭祀SP218-218'

1. FA(S₇)細粒。
2. FA(Sa)上部
3. FA(Sa)下部
4. FA(S₁)



第402図 3号祭祀遺構14・W-R・W-Yエレベーション図・遺物図他

を被せるような形を取った段階にS₁・S₂が降下したという状況である。

西部群(第403図)：西部群は、中央小型土器集積群の東側、小型土器群の中央西側に位置する祭具を多く納めた小型土器中心に埋置する土器群である。

8セクション(第404図)は、北端に位置し、P497群は、小型甕CⅡ②と高杯EⅡの重ね置きである。下部の小型甕からは勾玉1、曲刃鎌1、鉄鏝?1、ガラス玉1、剣形石製模造品1、白玉38と多様で多数の祭具が出土している。しかも、これらの祭具はS₁・S₂で覆われており、S₁・S₂降下前にもない時期に収められている可能性が高い。そして、この鉢は破碎していた。故意に割った可能性が高い状況での出土である。S₁・S₂火山灰の入り方を見ると、少なくともS₁・S₂降下前には、鉢は割れていることが分かる。さらに、その割れた鉢の上から、短脚高杯を逆さまにして蓋のように鉢の上から被せている。

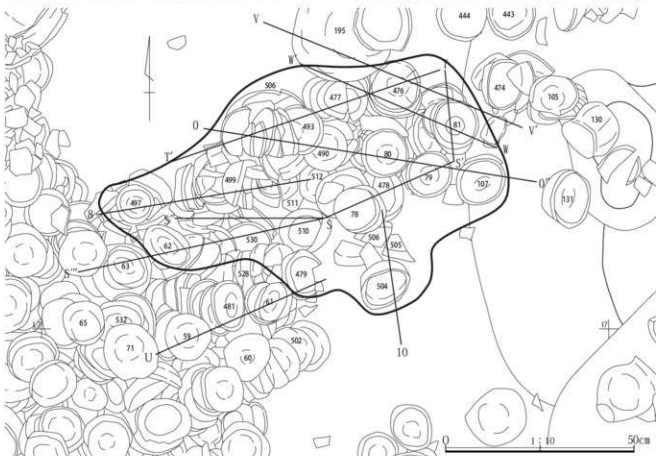
P499群は、P497群の西側にあり、杯の積み重ね群で、下から杯AⅡ・杯AⅡ(白玉13)・杯BⅠ(白玉5)・杯BⅠ・杯AⅡ(刀子・穂積具・白玉17)と杯5枚の積み重ねである。多くの祭具が特に最上段の杯に納められている。

P499群の最上段の杯の最下層にS₁・S₂が堆積しており、S₁・S₂降下直前に置かれたことが分かる。このP497群のさらに西側にP489壇②が出土している。特徴的なのは、この壇の周辺及び内部から剣形石製模造品が出土したことである。

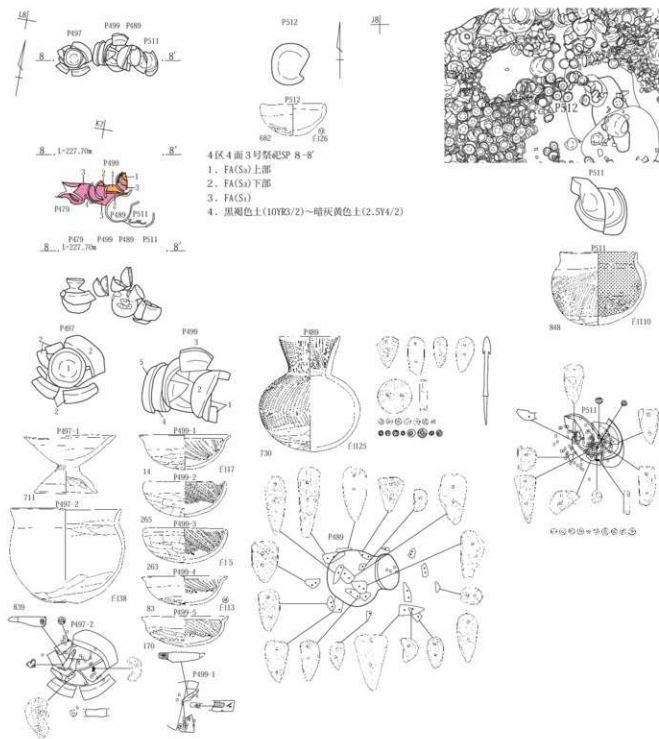
壇の頸の周りを巡る様に石製模造品が16個出土した。剣形14、有孔円板形1、勾玉形1の計16個が出土している。出土状況から、紐で結んで頸に掛けていたものと想定している。さらに、壇内部からは、小骨片(種不明)、長頸有脚長三角形鏝、石製模造品(剣形4・有孔円板板形1)・管玉・白玉125が納められていた。重要なものを納めていた可能性が高い。頸に巻き付けられた剣形品は、魔除けの役割を果たすものであろう。

このP489の東にP511小型甕CⅢ①があり、中に穂積具1、石製模造品(剣形3・有孔方形2・有孔円板形1)、管玉、平玉、白玉110と多種多様な祭具が納められている。さらに東側にあるP512杯DⅠは、異形杯で、3号祭祀で、他に1例あるのみである。白玉が26個納められていた。

0セクション(第405図)は、北端から1段南の東西方向に並ぶ一群を示したものである。中央にある、何も無い



第403図 3号祭祀遺構小型土器群西部群エレベーション他設定図

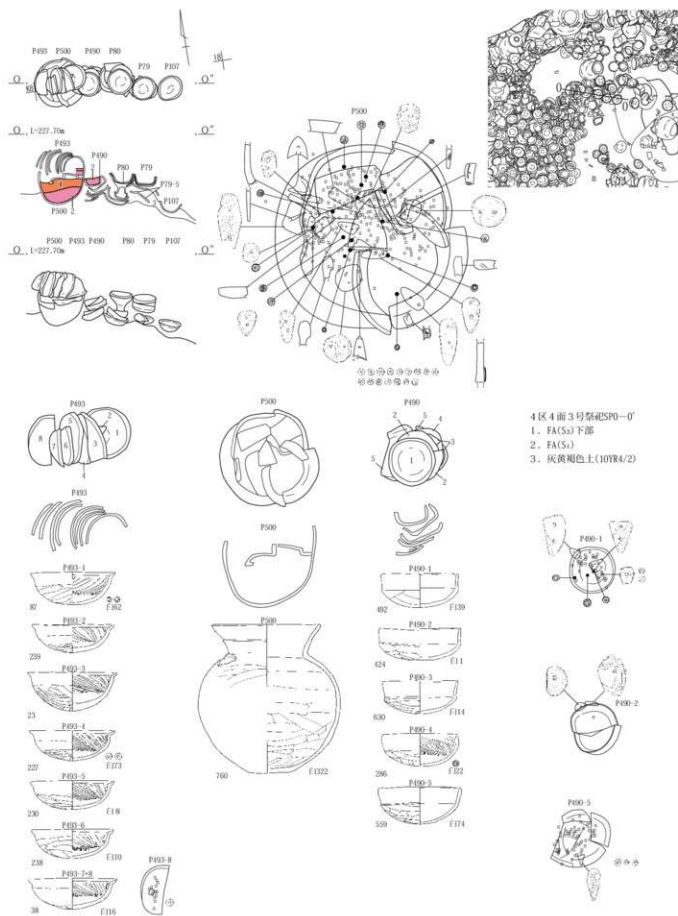


4区4面3号祭祀SP 8-8
 1. FA(Ss)上部
 2. FA(Ss)下部
 3. FA(Ss)
 4. 黒褐色土(10YR3/2)～暗灰黄色土(2.5Y4/2)

第404図 3号祭祀遺構8・P512セクション図・遺物図他

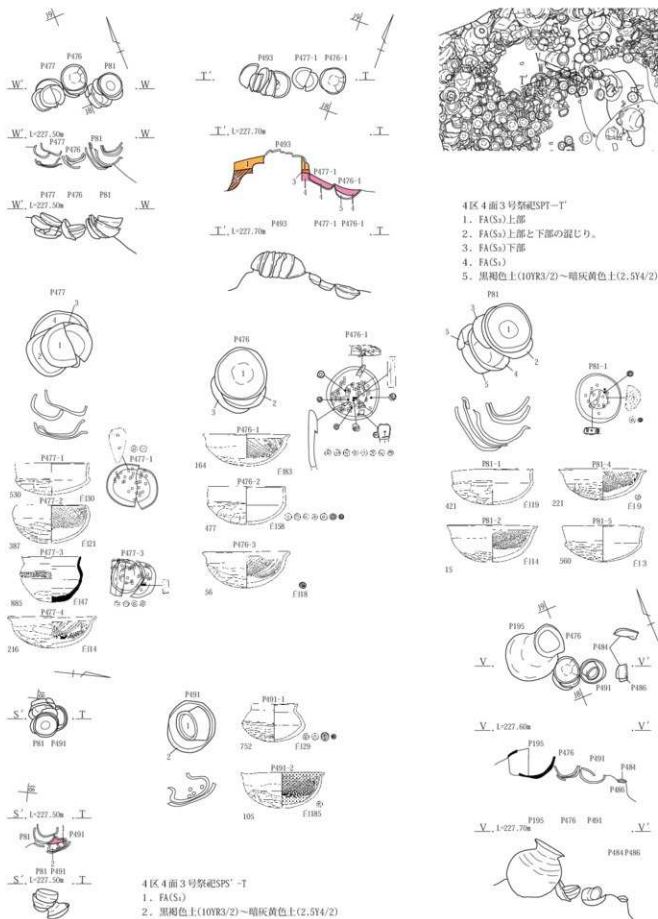
空間のすぐ南側にあるものが、セクション西側のP500壺A①が胴部1/3ほどまで埋め込まれている。この壺には、ガラス玉11、無茎有脚扶三角形鐵2、長頸鐵片、鉄素材8、石製模造品(劍形6・有孔円板2・有孔方板1)、白玉322と大量の祭具が収められている。3号祭祀でも土器の中から出土した祭具の数量としては最多である。この白玉の上S₁・S₂が積み、さらにS₃が入っている。壺の口辺は破損していたが、故意に破損させた可能性もあ

る。この上にP493の土器群が、S₃により西から東に向けて倒れこんでいるものである。下からすべて杯A類7枚で構成された一群である。杯AⅢ(白玉16)・杯AⅠ(白玉10)・杯AⅢ(白玉8)・杯AⅢ(白玉73)・杯AⅢ・杯AⅣ・杯AⅣ(白玉62)と重ねられている。西側の積み重ね土器群のグループに比べて、個々の杯に納められている白玉の数が極めて多い。P500の西側にある、杯5枚重ねの一群P490がある。下から杯CⅡ(劍形石製模造品・

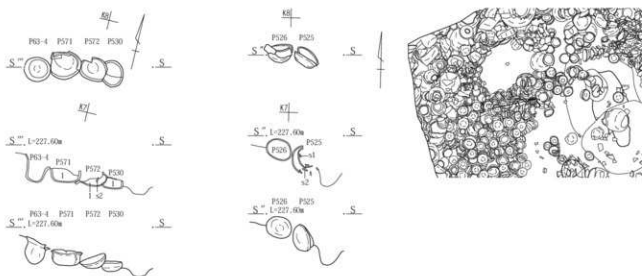


第405図 3号祭祀遺構0-0①セクション図・遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物

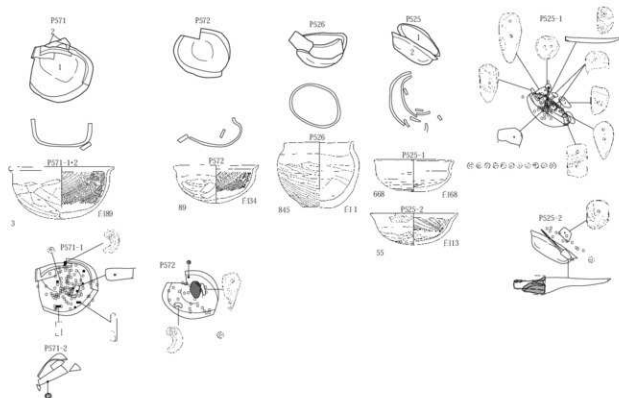


第406図 3号祭祀遺構W・T・S'-T・Vエレベーション図・遺物図他



4区4面3号祭祀遺構S''-S

1. 黒褐色土(10YR3/2)～暗灰黄色土(2.5Y4/2)

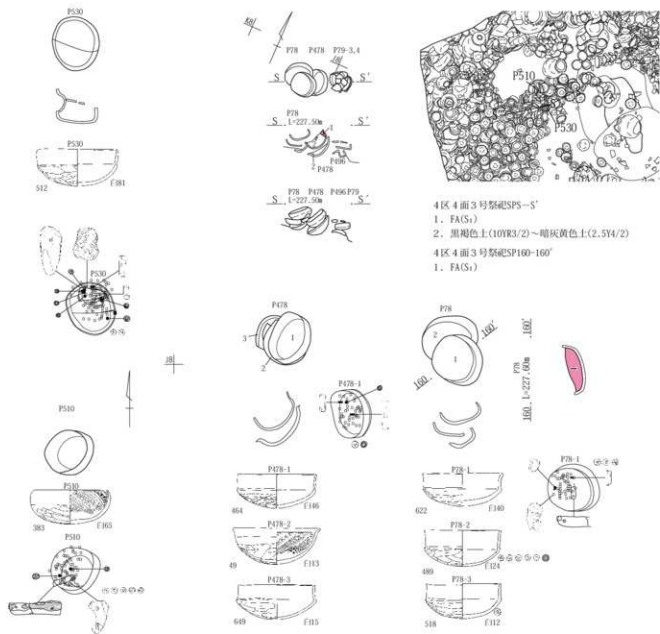


第408図 3号祭祀遺構S''-S・S'-Sエレベーション図・遺物図他

白玉74)・杯BⅡ(白玉22)・杯CⅡ(白玉14)・杯CⅠ(半円形・不明石製模造品・白玉1)・杯CⅠ(剣形石製模造品・白玉39)とすべての杯に祭具が納められており、一部は石製模造品も納められていた。さきほどのP493群同様、多くの祭具が積み重ね群で出土しているのがこの群の特徴である。このP490群の最上層土器の杯内部にも器面に直接S₁・S₂が降下している。土器の積み重ねはS₁・S₂降下直前と思われる。

W-W'セクション(第406図)は、この小型土器群の北端

にある東西の一群で、P195須恵器壺の南にある。P477群は西にある杯4枚重ねの土器群で、杯AⅡ(白玉14)・須恵器小型椀(管玉1・白玉47)・杯BⅢ(白玉21)・杯CⅢ(剣形石製模造品1・白玉30)の順で重ねられている。やはり多量の祭具を入れている。P477のすぐ東にある、杯3段重ねの土器群P476は、下から杯CⅡ(白玉18)・杯CⅠ(白玉58)・杯AⅣ(長頸圓伏長三角形鐵1・穂積具1・鉄素材1・ガラス玉5・白玉83)と重ねられている。多種多様な祭具がある。T'-Tセクション(第406図)にある



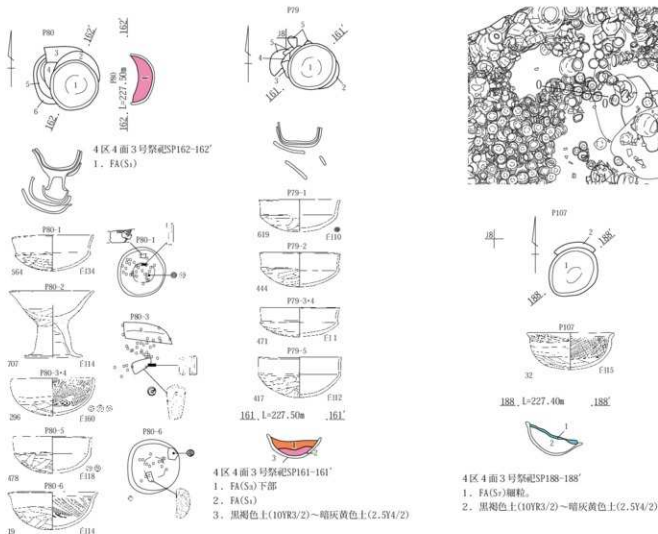
第408図 3号祭祀遺構S・エレベーション図・P530・P510遺物図他

ように、先術のP477群には、S₁・S₂が土器内器面及び祭具の上に降下している。また、P476では、黒褐色土が祭具の上にあり、その上からS₁・S₂が降下している。

V-V'セクション(第406図)は、この小型土器群の北にある東西の一群である。須恵器類P195の東南のP476群のすぐ東にある杯の2枚の積み重ね群P491がある。S'-Tセクション(第406図)を見ると、P491は、P81の杯群の下にある。P491群は、下から杯AⅡ(白玉185)・小型壺C①(白玉29)が積み重ねられている。小型壺C①は須恵器の小型壺の器形を模したものである。この小型壺には、黒褐色土の中に白玉が入っており、その上にS₁・S₂が積もっている。P81群は、P491群の斜め上に杯4つを

重ね置きするP81群である。すべての土器に祭具が収められている。下から杯CⅡ(白玉3)・杯AⅤ(白玉9)・杯AⅣ(白玉14)・杯CⅢ(鉄素材1)・半円形石製模造品1・ガラス玉1・白玉19)が納められている。

8セクションのすぐ南にあるS''セクション(第407図)は、P497群の南、中央部小型土器積み重ね群のP62土器の下、P63土器の西で東へ連なる、P571杯AⅡとP572杯AⅡである。それぞれ豊富な祭具を収めていた。P572杯AⅡは、勾玉1、管玉2、ガラス玉5、穂積具1が収められている。P572杯AⅡは、勾玉1、ガラス玉1、剣形石製模造品1、白玉34、炭化物が収められている。いずれも、豊富な祭具を持つ一群である。それと注意した



第409図 3号祭祀遺構0-0'②P80・P79・P107エレベーション図・遺物他

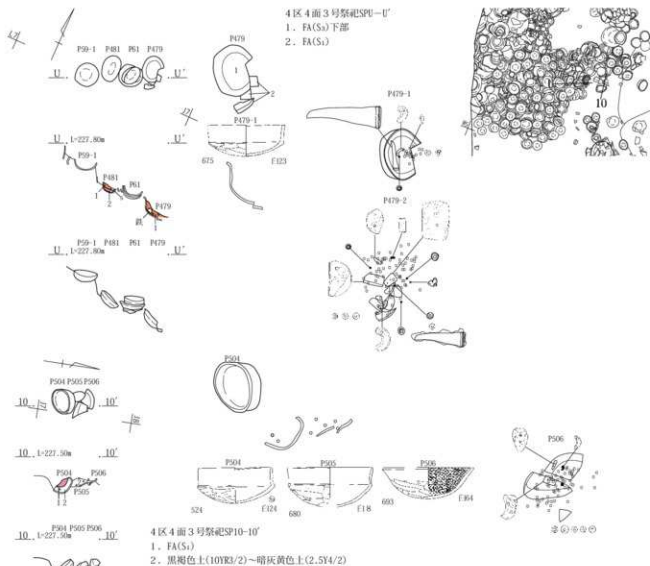
いは、祭具が黒褐色土の中や下から出てきていることで、その上にS₁・S₂が降下している。つまり、S₁・S₂降下前に黒褐色土に覆われていたということである。この黒土の意味は周囲の土器のほとんどが、器面に直接S₁・S₂が降下していることを考えると、時間の経過で積もった土というより、意識的に土を入れたものである可能性が高い。

S''-Sセクション(第407図)は、先ほどのP572杯の東南側にある。東西に土器が並ぶ。西にP526小型甕CⅢ①があり、白玉が1個入る。その東側に杯の2枚重ねP525群がある。下から杯AⅢ(鹿角装刀子1、有孔方形板1、白玉13)、ろくろ使用土器器杯の杯V(刀子1、鉄素材1、石製模造品(剣形5・有孔円板形1・有孔方形板1・勾玉形1、白玉68)が納められており、多量多種である。

先述したS''-Sセクション(第407図)には、さらに南側に位置するP530杯CⅠ(管玉2、ガラス玉5、石製模造

品(斧形1・剣形1)、白玉81)がある。土器内部の黒褐色土の中に祭具がある。P530の東横に、P510杯AⅢがあり、内部に穂積貝1・勾玉形石製模造品1、ガラス玉2、白玉65を納めている。P510の東横には杯の積み重ね群のP478群(第408図)があり、下から杯CⅢ(白玉15)・杯AⅡ(白玉13)・杯CⅡ(白玉46)が重ねられている。このP478群の斜め西上に、杯の積み重ね群のP78群(第408図)ある。下から杯CⅠ(白玉12)・杯CⅠ(白玉24)・杯CⅢ(穂積貝1・勾玉片1・不明石製模造品1・白玉40)が重ねられている。最上段の杯CⅢにはS₁・S₂が器面近くまで降下している。祭具はこの火山灰の下から出てきている。

さらに西側に、高杯と杯の重ね置き群P80(第409図)がある。下から、杯AⅡ(半円形石製模造品1、ガラス玉1、白玉14)、杯CⅠ(白玉18)、杯BⅠ(白玉60)、高杯EⅠ(白玉14)、杯CⅣ(白玉34)で積み重ねられている。



第410図 3号祭祀遺構U・10セクション図・遺物図他

やはり、すべての土器に祭具が収められている。この最上段の杯の内部器面、祭具の上にS₁・S₂が降下している。

先ほどのP490群とともに祭具が多く収められた一群として重要である。

P80群の南西側にさらに4枚の杯の積み重ね群P79 (第409図)がある。下から杯C I (白玉12)・杯C II (白玉1)・杯C II・杯C II (白玉10)である。最上段には、杯内部器面にS₁・S₂が降下している。さらに西側にP107杯A IIがある。この土器には、白玉が12個収められている。特徴的なのは、黒褐色土が内部にたまり、そこに白玉が入り、その上にS₇火砕流が載っている。また、この土器の下にS₅火砕流の混じりの土があるので、S₁・S₂降下後に、設置され、S₅・S₇火砕流でここに杯が流された可能性がある。

Uセクション(第410図)は、中央部集積土器群の南側の東端のP61群の土器の西側にあるもので、P479杯C Iがある。曲刃鎌1、勾玉1、ガラス玉2、白玉23を納めている。P479-2とした下部にも多くの祭具があり、勾玉1、石製模造品(半円形1・剣形1・有孔方版形1)・ガラス玉1・白玉60がある。小破片の土器しか確認できず、土器が細片化しているか、あるいは祭具をP479-1土器の下に納めていた可能性がある。P479-1土器の中には、P107同様にS₅火砕流が入っているので、S₁・S₂降下後に、設置され、S₅で流された可能性を考えている。

10セクション(第410図)は、この群の南に位置する土器南北列である。南に倒壊している様子がうかがえ、北からP506杯D X II (勾玉1、石製模造品(勾玉形1・剣形1)、白玉64)、杯P505 C III (白玉8)、最南端にP504杯C

I(白玉24)がある。北から積み重ねていた可能性が高い。北のP506杯は、信濃に認められる外反口辺の土器の可能性のあるものである。3つの杯には、それぞれ祭具が収められている。最上段の杯の土器内部の黒褐色土の中に祭具があり、その上にS₁・S₂が降下している。

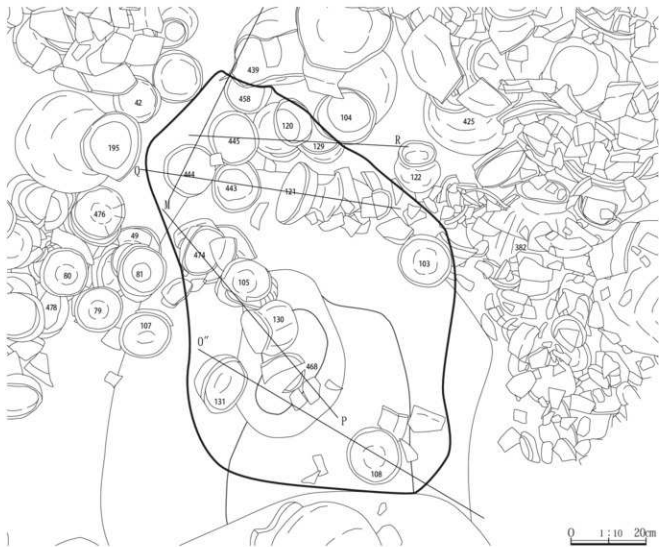
東部群(第411図)：前述した土器群から、少し東に離れて北側の大型土器群の南に接続するように配置される土器の一群がある。祭具の出土が多い特徴と積み重ねの少ないことが特徴である。

Mセクション(第412図)は南北方向の配列で、うち、壺P118-1とそれを、上に乗せている壺P118-2、その南のP439甕は北部大型土器群の一部である。いずれも1/3程まで土器を埋め込んでいる。P439の内部には、S₁・S₂、S_a下部・上部、S₇と正位の堆積が見て取れる。S₁・S₂降下時前、あまり遅らない時期に埋置されたものと想定される。土器の隙間や平坦面などの周りにS₁・S₂が厚く堆

積している。これら大型土器に接するようにした南側の下部に杯P458群がある。下から杯B I(白玉20)、杯C II(白玉8)がある。杯C IIの白玉は、杯内部の黒褐色土の中から出土している。

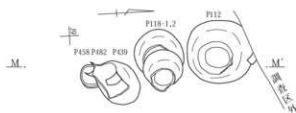
Rセクション(第412図)は、P104甕・P439甕の南側になるが、西側からP445杯A II(白玉15)、P129小型甕C III①、P120群、小型甕B I①(白玉8)、杯D IXの積み重ねが並ぶ。P445杯はS₁・S₂火山灰が白玉の上に降下しており、火山灰降下直前に白玉が杯内部に置かれたことが分かる良い例である。200セクションにあるように、P120小型甕の土器内部にはS_a火砕流が入っており、S₁・S₂が入っていない。この土器設置がS₁・S₂降下後の可能性がある。P120群の杯Dは、異形杯である。

248列セクション(第412図)は、先ほどの土器群から少し離れて東側にある一群の土器群の北部にあるものである。P444杯、P445杯、P120群、P129小型甕が並置されて

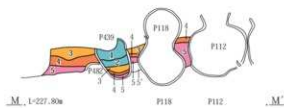


第411図 3号祭祀遺構小型土器群中央群セクション他設定図

第三章 発見された遺構と遺物



M, L=227.80m



M, L=227.80m

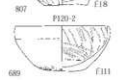


4区4面3号祭祀SP230-230'
1. FA(S₁)

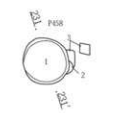
230, L=227.50m



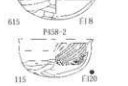
88



807



231, L=227.50m



231, L=227.50m

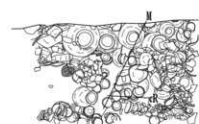


200, L=227.50m



4区4面3号祭祀SP200-200'
1. FA(S₁)上部と下部の混じり。
2. FA(S₁)下部

200, L=227.50m

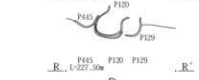


- 4区4面3号祭祀SPM-M'
1. FA(S₁)細粒。
 2. FA(S₁)とS₁混じり。
 3. FA(S₁)上部
 4. FA(S₁)下部
 5. FA(S₁)
 - 5'. FA(S₁)と黒褐色土混じり。

4区4面3号祭祀SP231-231'
1. 黒褐色土(10YR3/2)~暗灰黄色土(2.5Y4/2)



R, L=227.50m



R, L=227.50m



200, L=227.50m



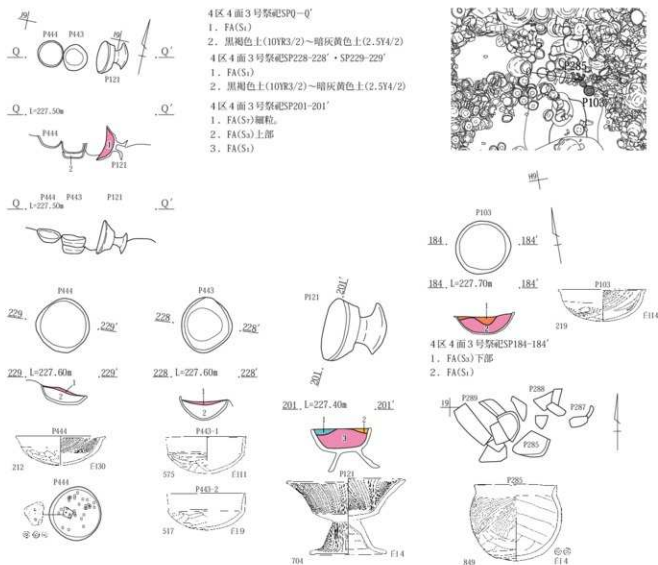
803

4区4面3号祭祀SP209-209'
1. FA(S₁)と黒褐色土混じり。
2. 黒褐色土(10YR3/2)~暗灰黄色土(2.5Y4/2)

いるのが分かる。

Qセクション(第413図)は、先ほどの土器群のすぐ南側にある一群の東西方向に並置される土器群である。西から東へ、P444杯A 1、P443群、下から杯C 1(白玉9)杯C 1(白玉11)、P121高杯D 1(白玉4)となる。P444は、229セクションより黒褐色土の中から、剣形石製模造品1と白玉30が出土しており、その上にS₁が降下している。P443-1も228セクションから同様に、黒褐色土の中から白玉が出土して、その上にS₁・S₂が降下している。東端のP121高杯には、201セクションからS₁が杯部に直に近いように降下しており、その下から白玉が4個出土しているので、降下直前に白玉を高杯の杯の中に置いていた

第412図 3号祭祀遺構M・Rセクション図・遺物図他



第413図 3号祭祀遺構Q・P103・5エレベーション図・P28遺物図他

ことが分かる。

P285などの土器群は、破碎しており、うち、P285の小型甕の中には白玉が4個検出されている。さらにその東側には、S₇に伴う火山弾等の衝撃で少し東に動いたと思われるP103杯A IVがある。白玉14が、S₁・S₂の火山灰降下直前に置かれていたことが、杯内部の白玉が配置された面すく上にS₁が降下したことにより分かる。

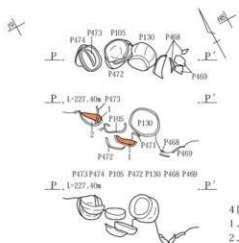
Pセクション(第414図)は、上述の土器群の南側に離れてある一群の土器で、火山弾と思われるものの衝撃で多少影響を受けているもので、東方向に連続して置かれている小型土器群である。

P474群は、下から杯C I(不明石製模造品1・白玉14)・杯B I(白玉13)、S₁・S₂火山灰降下直前に白玉が杯内部に置かれたことが分かる良い例である。東にP472群が下に2つ杯重ね置きで、下から杯A II(白玉16)、杯

C II(白玉6)があり、その斜め上に、P105杯B III(白玉10)が載る。その東にP130小型甕C II ①(白玉4)、P468小型甕C II ②が西北から東南にかけて、衝撃の影響もあって一部破壊して並んでいる。P105には、白玉10が黒褐色土の中に納められ、その上にはS₇が載っていた。S₁・S₂時には、重ね置きで下部にあったのが、S₃・S₇火砕流で、動かされたものと想定している。東南横から出土した、P130・P468の小型甕2つは共に倒れており、特にP468は破碎している。火砕流が火山弾衝撃による倒壊と思われる。南に倒れているP130小型甕の中には黒褐色土が下部に入り、そこから白玉が4個出土した。上層にはS₇火砕流が入っている。P105とP130共に、黒褐色土の上にS₇火砕流が入っており、この2点の土器がS₁・S₂降下後に配置された可能性がある。

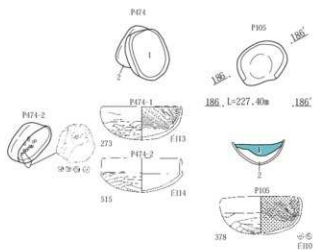
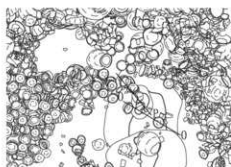
この土器群の最南端部にある、0°-0セクションを見

第三章 発見された遺構と遺物



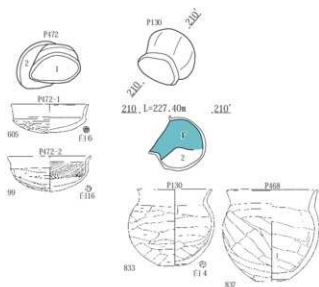
4区4面3号祭祀SP-P'

1. FA(Sa)下部
2. 黒褐色土(10YR3/2)~暗灰黄色土(2.5Y4/2)



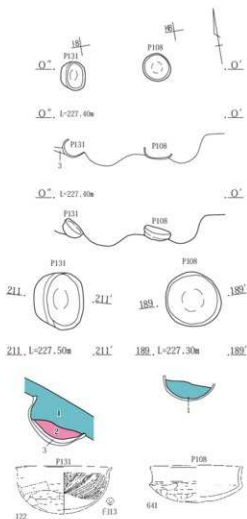
4区4面3号祭祀SP186-186'

1. FA(Ss)細粒。
2. 黒褐色土(10YR3/2)~暗灰黄色土(2.5Y4/2)



4区4面3号祭祀SP210-210'

1. FA(Ss)細粒。
2. 黒褐色土(10YR3/2)~暗灰黄色土(2.5Y4/2)



第414図 3号祭祀遺構P0*-0エレベーション図・遺物図他

ると、衝撃痕跡の中に入った状況にある2点の杯がある。西に位置するP131杯AⅡ(白玉13)とP108杯CⅢである。うち、P131には、下部にS₁・S₂が堆積しているので、S₁・S₂降下前に安置されたもので、P108杯は、S₇火砕流が中心で、S₁・S₂降下後に置かれた可能性がある。いずれもS₇及び衝撃により東に動いているが、配置の時期は異なる可能性がある。

南部群(第415図)：南部群は、中央小型土器集積群の南部にある小型土器と大型壺・甕の組み合わせの配置がある土器群である。

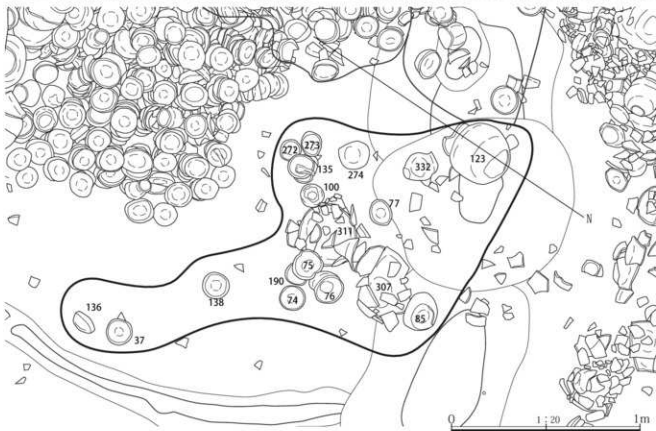
Nセクション(第416図)は、衝撃痕跡の跡に転がり込んだ状況で入っているP123壺A②の出土状況を示すもので、窪みの中には、S₇火砕流のみ入っており、そのS₇の上からP123は出土しているの、明らかにS₇火砕流で流されたことが分かり、S₁・S₂やS₃がほとんど堆積していないことからこの穴が、根穴や土坑ではなく、S₇の衝撃により形成された痕跡であることを示している。このP123壺の内部の土の堆積状況は、203セクションで分かるが、S₁・S₂とS₃が逆転している。これは正位にあった堆積が、甕が転倒する中で逆転したものと考えている。その上に、S₇火砕流が大量に入り込んでいる様子が分か

る。

なお、P123内には、剣形石製製造品が収められていた。P123壺の西には、P332小型甕B②が1個やはり東に転倒して出土している。

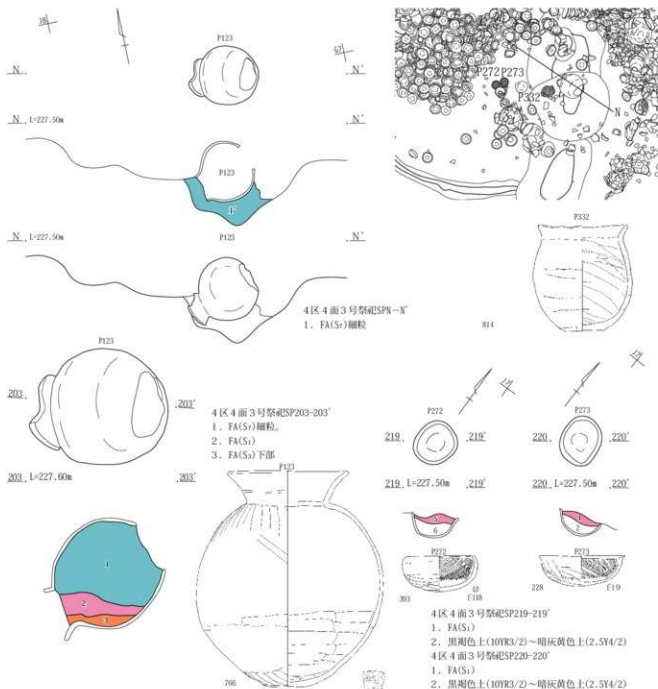
衝撃痕跡のある地点より西側で、中央小型積み重ね土器群より少し南東に離れて杯と壺・甕の組み合わせからなる南北方向に置かれた一群がある。北から説明する。

255列(第422図)を見ると、一群の北端にあるP272杯BⅢがある。平面図から、すぐ東にP273杯AⅣが並置されていることが分かる。西のP272には白玉が18個、東のP273には白玉が9個入っており、いずれも黒褐色土の下の方から出土している。この黒褐色土の上にS₁・S₂がある。これらの杯群のすぐ南に接して、2個の杯の積み重ねがあるP135群(第417図)があり、下から杯CⅢと杯AⅡがある。下の杯CⅢには、管玉と白玉3個が収められており、上の杯AⅡには、白玉3個がS₁・S₂火山灰下にあると同時にそのS₁・S₂上に袋柄杓が載っていた。S₁・S₂降下後に、たまたま、西側にあった袋柄杓が火砕流で流されてこの場所に到達したとは考えられないので、人為的に置かれた可能性を考えている。これらの杯皿群の南側に須恵器甕P100がある。甕の体部1/3程を埋め込んだ後



第415図 3号祭祀遺構小型土器群南部群セクション他設定図

第三章 発見された遺構と遺物



第416図 3号祭祀遺構N・P272・P273エレベーション図・P332遺物図他

に、S₁・S₂が降下している。内部には、S₁・S₂・S₃とも確認できないが、口径が小さく、火山灰が入らなかった可能性を想定している。白玉を3個収めていた。255列の南端及び平面図から、P100須臾器廳南部に大型甕2個、小型壺1個が南西方向に向けて並んで出土している。P311甕A③は内外面に刷毛調整を施す甕で、破損している。そのすぐ東南のP307不明大型壺も破損している。状況から見ると、火砕流が衝撃痕跡を残した衝撃により破砕したものと想定している。その東隣に、P85小型壺B 1②が安置されており、この壺はほぼ完形で埋め込まれ

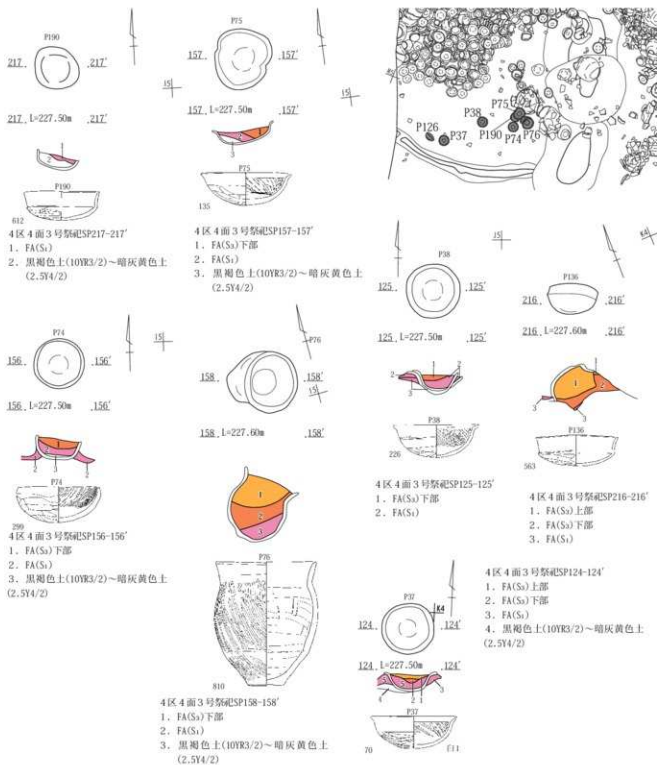
た状態で残っていた。体部半分程まで埋め込まれているので安定していたのであろう。土器の中に入っているのはS₃火砕サージの混土層と考えている。S₁・S₂は確認できていない。

P311甕の周辺に単独で置かれたいくつかの杯がある。P311甕のすぐ西側にP312杯A IIがある。東に少し離れてP77杯A IIがある。土器内部で、白玉をS₁・S₂下から9個出土している。254列(第422図)に見られるように、P311甕の南西部にP190杯C IIと、その斜め上にP75杯A IIがあり、さらに、そのすぐ東にP76小型甕B I ②がある。



第417図 3号祭祀遺構P135・P100・P85・P77エレベーション図・P311・P307・P312遺物図他

第三章 発見された遺構と遺物



第418図 3号祭祀遺構P190・P75・P74・P76・P38・P136・P37エレベーション図・遺物図他

また、P190杯のすぐ南にP74杯B Iがある。P190・P75・P74の杯群には、黒褐色土の層を挟んでS₁・S₂が降下している。P76杯には、器面に直接S₁・S₂が降下している。また、これらの土器群には白玉が納められていない。

これらの土器群から少し離れて、囲い状遺構の南端部

近くに単独で置かれた3個の杯がある。西から、P136杯C IIIは、S₁・S₂火山灰が器内面に密着しており、杯は裏返しに出土している。スタンプ状にP136杯の形が残っているため、人為的に反転した可能性も考慮しておきたい。

P136杯のすぐ東側に、P37杯A IIが埋置されている。

器面に密着してS₁・S₂が堆積しており、その下から白玉が1個出土している。この土器群から東北側に少し離れてP38杯AⅢがある。器面に密着してS₁・S₂が堆積している。P136・P37・P38の杯3点ともに、S₁・S₂降下直前にこの地点に埋置されていることが分かる。以上述べた単独で置いた杯皿群で特に興味深いのは、体部をほとんど地面に埋め込むようにしている。P38・P37で、横から見ると口縁部のみが見えている状況である。このように深く埋置する例を今後留意する必要がある。

小型土器配置群のまとめ(第419図) 中央小型土器配置群は、本体となる集中区以外にいくつかのまとまりがある。P114須恵器大甕のすぐ南に位置する北部群と、やや南東に離れたP439甕の南に位置する東部群、P195甕の南部に集中する、祭具を多く納めた西部群がある。さらに、中央小型集積土器群本体から南東部に甕と杯を中心にした南部群がある。また、南側に単独で杯を置いている例があり、それぞれ特徴があるので、個々に記載していく。

北部群(第419図)：P114大型須恵器甕の南に位置する小型土器群である。まず、北側の251列(第420図)であるが、P492小型甕BⅠ・P535小型甕BⅠ(白玉4)・P509小型甕AⅠが並置されている。その東にP537の杯CⅡ(白玉5・鉄素材1)が、単独で埋置されている。その東にP536群があり、杯AⅣ(白玉4)と杯CⅠ(短茎腸扶長三角形籾1・穂積貝1)が2枚重ねである。

その南の250列(第420図)は、P440の壺A②の南に西からP508群が、小型甕CⅡ(長頸独立片逆刺籾1・白玉28)・杯CⅢ(剣形石製模造品1・白玉22)の2個重ねである。その東には単独で、P540の埴②(剣形石製模造品1・白玉46)、P539の杯CⅠ(有孔円板形・剣形石製模造品各1・白玉18)、P538の埴②が並置されていた。埴が2個近い場所に埋置されているのが興味深い。

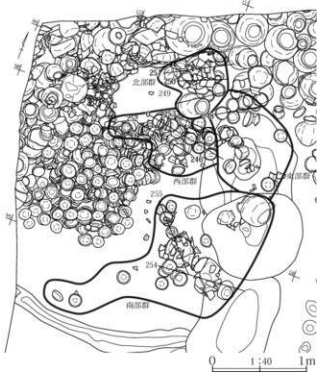
249列(第420図)は、250列のすぐ南東に須恵器甕P195が単独で埋置され、その東にP542杯CⅢ、541杯CⅠが2個並置されていた。P542杯Cは短茎腸扶長三角形籾1・有孔円板1・白玉68が納めており、P541杯Cは、長頸腸扶長三角形籾1と短頸腸扶長三角形籾1・穂積貝1・素材1・剣形石製模造品1・ガラス玉1・白玉77と大量の祭具が納められていた。この北部群の特徴は単独の杯を中心とする小型土器に多様な祭具が多量に納められるこ

とである。

西部群(第419図)：この群は中央小型土器積み重ね群の北東部に接するように置かれていた小型土器群からすると中央西側に位置する土器群である。祭具の収納が多いことが特徴的であるため、個別に説明する。北側から説明すると、253列(第421図)を見ると、P477群に杯AⅡ(白玉14)・須恵器小型碗(管玉1・白玉47)・杯BⅠ(白玉21)・杯CⅠ(剣形石製模造品1・白玉30)があり、東隣のP476群には杯CⅡ(白玉18)・杯CⅠ(白玉58)・杯AⅣ(長頸腸扶片刃籾1・穂積貝1・素材1・管玉1・白玉83)の3個の重ね置き、さらに東隣からは、P491群で、杯AⅡ(白玉185)・小型壺C①(白玉29)が2個重ね置きされている。P491群のすぐ南上部にP81群があり、図示はしていないが、杯CⅢ(白玉3)・杯AⅣ(白玉9)・杯AⅡ(白玉14)・杯CⅠ(穂積貝1・半円形石製模造品1・白玉19)の杯のみ4枚が重ねられている。いずれも多くの白玉と祭具が納められており特徴的である。

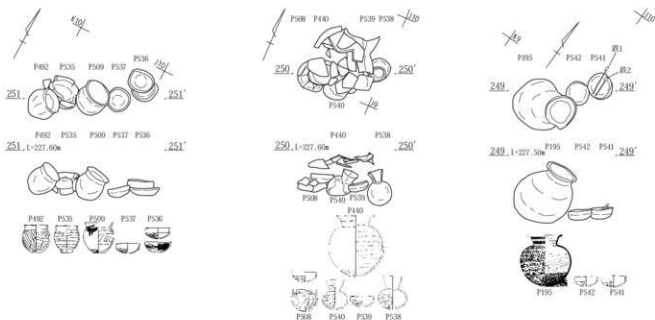
253列よりさらに東から南東にかけて一群の土器があり、多くは衝撃痕の中に落ち込むような形を取っている。

P474群(第414図)は、P441群の東にあり、杯CⅠ(不明石製模造品1・白玉14)・杯BⅠ(白玉13)の杯2枚重ねである。その東南部に少し衝撃痕跡に落ち込むように、P472群があり、杯AⅡ(白玉16)・杯CⅡ(白玉6)の杯2



第419図 3号祭祀遺構小型土器群立面設定位置図

第三章 発見された遺構と遺物



第420図 3号祭祀遺構小型土器群配置状況復元①(251・250・249)

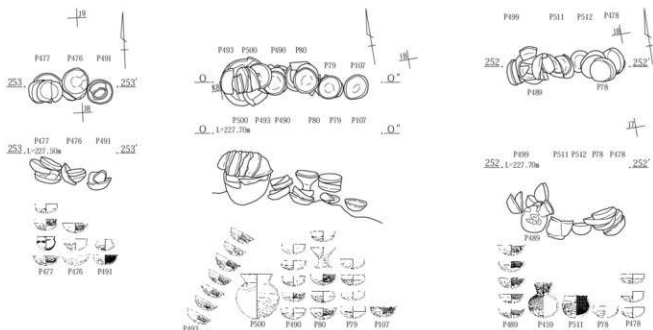
枚重ねの斜め上に、P105杯BⅢ(白玉10)が載り、その東側にP130小型甕CⅢ①(白玉4)が南に口を向けて倒れている。その横に、同じ小型甕P468が破砕した状況で出土した。さらに衝撃痕跡の中に入る状況で、P108杯CⅡがある。この群の土器内部にS₁が認められず、黒褐色土～明灰黄色土の上に、S_aやS_bが入る状況のものも多く、これらの土器群の設置がS₁降下の可能性を示している。

南の0列(第421図)を見ると、大量の祭具を納めているP500甕A①(有孔円板形石製模造品2・剣形石製模造品7・穂積貝3・無茎胴状三角形鉄・鉄鎌頭・茎部3・素材3・ガラス玉13・白玉32)が器高の1/4程まで埋置されている。この祭具のうち白玉の一部には後述する、493群の杯から混じったものがある可能性はある。この甕の上に斜めに覆いかぶさるようにP493群が出てくるからである。493群は、杯AⅣ(白玉16)・杯AⅢ(白玉10)・杯AⅢ(白玉8)・杯AⅢ(白玉73)・杯AⅣ・杯AⅢ・杯AⅢ(白玉62)の杯のみ7枚が重ねられて横倒しになって甕P500の上に被さっている。杯の中には多くの白玉を納めているものが多いのが特徴である。東隣には、P490群があり、杯CⅡ(剣形石製模造品1・白玉74)・杯BⅠ(白玉22)・杯CⅡ(白玉14)・杯CⅠ(半円形石製模造品1・不明石製模造品1・白玉1)・杯CⅠ(剣形石製模造品2・ガラス玉3・白玉39)で、杯のみの4枚重ねである。東隣にP80群があり、杯AⅡ(半円形石製模造品1・ガラス玉1・白玉14)・杯CⅠ(白玉18)・杯BⅠ(管玉2・剣形石製模造品1・白玉60)・高杯EⅠ(白玉14)・杯CⅡ(穂

積貝1・ガラス玉1・白玉34)が5個重ねである。すぐ東隣は79群で、杯CⅠ(白玉12)・杯CⅡ(白玉1)・杯CⅠ・杯CⅡ(白玉10)と珍しく杯Cのみの4枚重ねで、白玉の出土が多い群である。さらに東に、少し衝撃痕跡のほうへ落ち込んで、P107杯AⅡ(白玉15)が出土している。

252列(第421図)は、P499群の杯AⅡ(白玉9)・杯AⅣ(白玉13)・杯BⅠ(白玉5)・杯BⅠ・杯AⅠ(刀子1・穂積貝1・白玉17)の杯のみの5枚重ねである。東隣のP489は、非常に特徴的で、器の頭部に、剣形石製模造品14・有孔円板1・勾玉1・半円形1が周りを巻くように出土しており、おそらく紐状のものでつなげられた状態で頭に巻かれていたものと思われる。さらに、長頸胴状長三角形鉄1・白玉125・骨小片1が出土している。特殊なものを納めた埴と考えると良いだろう。そのすぐ東隣に、P511小型甕CⅢ①が埋置されている。管玉1・琥珀黒玉1・ガラス玉2・石製模造品(半円形1・剣形3・有孔円板1・有孔方版1)・穂積貝1が中に納められていた。東隣にはP512杯DⅠ(白玉26個)があった。さらに東にはP78群があり、杯CⅠ(白玉12)・杯CⅠ(白玉24)・杯CⅡ(管玉1・ガラス玉1・不明石製模造品1・穂積貝1・白玉40)が杯C類のみの3枚重ねである。その東に、P478群があり、杯CⅢ(白玉15)・杯AⅡ(白玉13)・杯CⅠ(管玉2・ガラス玉1・白玉46)の杯のみの3枚重ねである。

252列のすぐ南に、P556小型甕CⅢ①(白玉1)があり、その東横に、P525群(第407図)があり、杯AⅠ(有孔方版



第421図 3号祭祀遺構小型土器群配置状況復元②(253・0・252)

形石製模造品1・鹿角装刀子1・白玉13)、杯C V(石製模造品剣形4・半円形1・有孔方板1・有孔方版1・素材1・白玉168)の2枚重ねで、特にP525群の1枚目の杯C Vには、大量の祭具が納められている。P525群のすぐ南にP530杯C I(第408図 PL.345)があり、この杯にも管玉2・ガラス玉5・斧形石製模造品1・剣形石製模造品1と多くの祭具が出土している。このP525群の南東にP510杯B III(第408図 PL.340)があり、勾玉形石製模造品1・穂積具1・ガラス玉2・白玉65が納められていた。さらに南東部に少し離れて3個の杯が南北方向に置かれている。北から、P506杯D X II(勾玉1・石製模造品勾玉形1・剣形1・白玉24)、P505杯C III(白玉8)・P504杯C I(白玉24)といずれも白玉を納めた杯が出土(第410図)しており、P506からは勾玉や模造品が出土している。

以上、西部群は、杯を中心とする小型土器を単独〜7個ほどまでの積み重ね土器の中に多種多様の祭具を入れている。

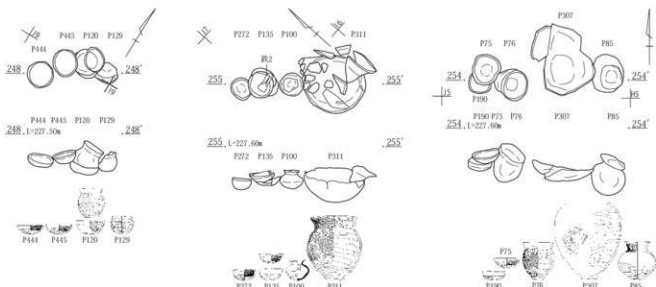
東部群(第419図)：P112壺を中心とした土師器壺・甕の大型土器群の南に位置して、祭具を多く納められた一群。北部群の南東側に位置する。

248列(第422図)を見ると、P195の須恵器甕から間を置いて東に、P444杯A IVが剣形石製模造品1・白玉30を納めており、そのすぐ東横にP445杯A II(白玉15)、P445の南ややずれてP443群があり、杯C I(白玉9)・杯C I(白玉11)の積み重ねである。さらに東横にP120群があり、

杯D IX(白玉11)・小型甕B I(白玉8)があり、その横にP129の小型甕C IIIが出ている。南の衝撃痕跡により窪んだ箇所へ落ち込んで、P121の高杯D I(白玉4)がある。さらに、南西にやはり窪みに少し落ち込むような状態で、P103杯A IVがある。さらに少し北側に離れて、P122の小型壺がある。この地区でも、多くの祭具が納められている。P444杯Aや、多数の白玉をそれぞれの土器が納めており、単独から2枚重ねの杯を中心に小型土器の中へ祭具を納める量の多さに特徴がある。この群には、杯Aで最も形式的に後出すると想定している、A IV類が2つ出ており、いずれもFAのS₁直下と少し間層を挟んだS₁直下の例である。P120群の小型甕B Iの内部には、S₁・S₂が無く、S₃火砕流が入っている。他に、南側の線状衝撃痕に崩落している小型土器群がいくつかあるが、それのうち、P105杯B IIIとP130小型甕C II①には、黒褐色土の上にS₁火砕流が入っており、先ほどのP120-1小型甕B I同様、S₁・S₂降下後に置かれた可能性がある。

南部群(第419図)：南東部に甕と小型土器群両方が埋置されている一群がある。255列(第422図)で南北に見てみると、北からP272杯B III(白玉18)、すぐ東隣にP273杯A IV(白玉9)がある。そのすぐ南にP135群があり、杯C II(白玉3)、杯A II(白玉3)と土器を埋置してからS₁降下後に、有肩袋柄杵1が載っており、偶然、西から火砕流に載ってこの杯の上部に載ったというよりも、S₁降下後に意図的に置いた可能性を考えたい。南隣にP100須恵

第三章 発見された遺構と遺物



第422図 3号祭祀遺構小型土器群配置状況復元③(248・255・254)

器蓋が器高1/4程埋めて置かれており、やはり、竈内部から S_1 が確認できず、 S_1 降下後に置かれているものと想定する。P311は糞A③で、破碎している。

254列(第422図)をみるとP311糞の南にP190杯C IIが埋置され、その斜め上にP75杯A IIが置かれていた。その東隣やや離れて、P76小型甕B I ②となる。これらの中にはいずれも S_1 が降下しているので、 S_1 降下前に置かれたものとしてとすることができる。さらに東に口辺部が確認できないが、P307糞D ②と想定される大型甕がやはり破碎して出土した。火砕流による破碎の可能性が高い。さらに東にP85小型甕B I ②が、器高2/3程まで埋置されている。この甕の中にも S_1 が無く、 S_3 の上下層の火砕流層が入っているので S_1 降下後の埋置の可能性を考えている。

また、少し東側に離れてP123甕A ②(第416図 PL.364)(剣形石製模造品1)の底は、P273杯の東横にあるが、胴部以上は、衝撃痕の中に S_7 とともに転がり込んでいる。甕P123の中には、 S_1 ・ S_3 が入っているのもので、 S_1 火砕流により破碎・転落したものと想定する。P332小型甕B ②(第416図 PL.377)が同じように転落している。P311の東隣やや離れて、P77杯A I (第416図 PL.326)(白玉9)が埋置されている。

また、以上の一群の西側、中央の小型集積群より南側に離れて、単独か2個置きて埋置された土器がある。P74杯B I (第418図 PL.336)の西に40cm程離れてP38杯A IIIが埋置され、その南西70cmの箇所にP37杯A I (第418図 PL.326)(白玉1)とP136杯C II (第418図 PL.347)が置かれている。P74・P37は、 S_1 が杯中に入っているのもので、

S_1 降下前に置かれたものだが、P136は、杯中に S_3 が入っており、 S_1 降下後に置かれたものが S_3 により流された可能性がある。

以上、南部群は、 S_7 の火砕流により動かされたもののうち、一部は S_1 ・ S_3 降下後に置かれた可能性のあるものが、P100須恵器甕、P135-1杯C IIの S_1 ・ S_2 堆積上の袋柄鉄斧の配置、P85小型甕B I ②・P136杯C IIといずれも、南部の入り口に近い端のほうにあることが特徴である。

この群は、単独か2段積み重ねたものであるが、祭具の納めた量は他の群に比べ多くない。

小型土器群内への祭具の埋納 小型土器群配置の際に、土器の中に様々な祭具を入れて配置することが行われている。これは、小型土器群配置群のいずれにも言えることである。ただ、その中でも特に、土器内への祭具を入れることに地区により違いがないか図示してみる。第423図は石製模造品・玉類・ガラス玉についての土器内埋納の度数分布図である。これを見ると、いずれもJ7Gを中心にして祭具が土器の中へ集中埋納されている。小型土器群の西部群の地区に特に土器内へ入ることが多いことが如実に分かる。図は作成していないが、白玉も同じようにこの地点に集中して埋納されている。また、この土器への祭具を入れる行為を行う前の、土中への祭具埋納行為も、先述したように土器内配置例が密集する地区であるJ7Gと同様に埋納の密度が濃く、集中している。このJ7G地点が、この祭祀遺構にとって中心地であったことが良く分かる。復元直径から推定すると祭祀遺構の中心が須恵器大甕P637の前になるが、埋

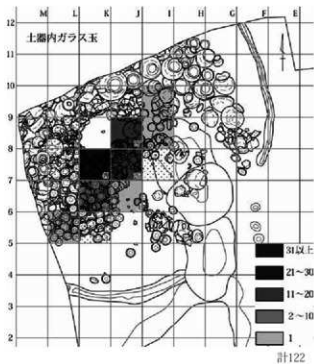
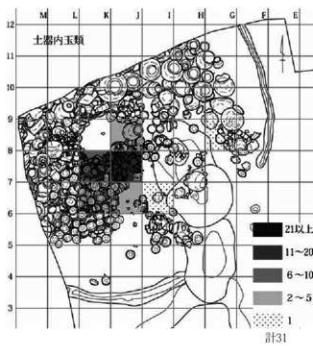
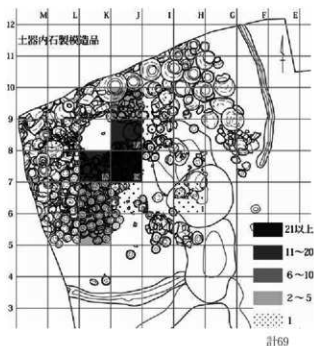
納遺物が集中する箇所は、中心点の南側に位置している。祭祀遺構のほぼ中心からやや南側で、まず、祭具を土の中に埋納し、祭具埋納後、杯を中心とする土器を置く際に、その土器の中に祭具を入れて安置したことがわかる。

⑦ 囲い南外側の大型土器南北列配置(第425図)

囲いの南外側に当初から配置してあった大型土器群が南北方向に並んで出土している。これらの土器群の配置

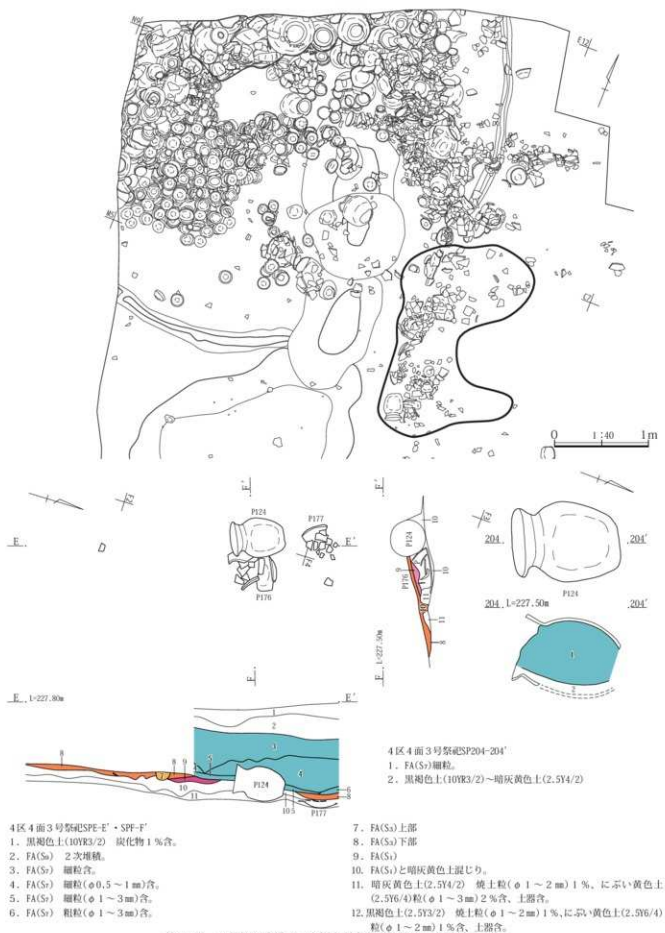
から、囲いへ向かう通路の可能性が考えられ、衝撃痕跡のため不明瞭な入口部分に通じる通路にたてられた可能性が考えられる土器群である。ただ、これらの土器群は、すべて破砕しており、口辺部が分からないものを多いので、型式がはっきりしないものがある。

北から説明していく。P206壺、P205壺ともに口辺部が分からないが、2個並置していた可能性がある。P206は

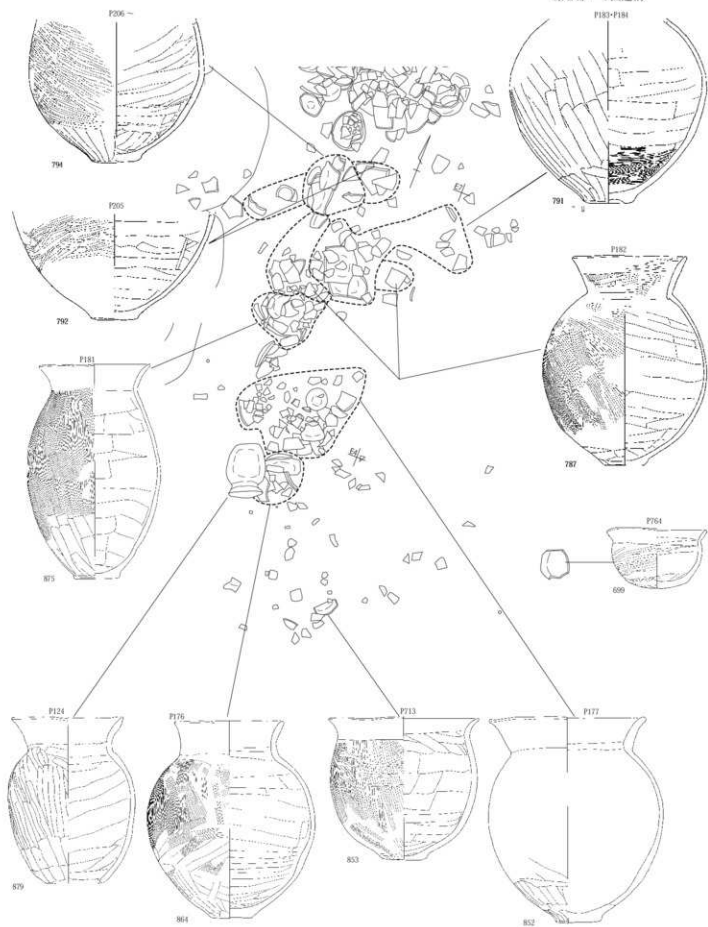


0 1:60 2m

第423図 3号祭祀遺構小型土器群内埋納祭具度数分布図



第424図 3号祭祀遺構囲い南側大型土器群位置図・土層断面図



第425図 3号祭祀遺構内の南側大型土器群出土状況図・配置図

(第302図 PL.375)のように底部の圧痕があるので、この場所に置かれていたのは確かである。P183壺もやはり口辺が無いが、底部圧痕があるのでここに埋置したことは確かである。P415壺CとP181甕D②は南北に並んで配置していたものと思われる。いずれも破砕していた。P177甕A③も破損しており、その横にも底部圧痕があるが、器種は不明である。底部圧痕があるもので最南部は、P124甕Dで、その東にP176甕C②がある。さらに南にP713甕Bと東にP764椀D Iがある。

以上、この土器群では、大型の壺・甕群を中心に南北に列状に置き、白玉などの祭具を納めてはいない。さらに、甕の内部の裏にはいっさい、コゲ・ススの痕跡が見つからないことが観察により分かったが、甕以外のこの土器群の中で、P181甕には、内面コゲ、外面に火による赤化があり、明らかにこの土器を煮炊きに使用していることが分かる。甕の中の内裏が、調理では無く、容器としての使用のみであったのに対して、甕以外の土器に調理痕跡があることは、甕の内外で土器の使われ方が異なっていたことを示す良い例となる。

1号盛土遺構(第416・427図 PL.150・455)

1号盛土遺構は、3号祭祀遺構の甕の南西側、祭祀遺構の入口と想定した箇所西側で、甕のすぐ南にある。長径2.5m、短径1.5mの不定楕円形状の形態で、中央に、線状衝撃痕の可能性のある窪みが北西から南東方向にあるもの、厚い所で10cmほどの高まりがある。土層断面を見ると、赤色系鉱物粒を多く含む層があり、また、シルト質土の灰白色の土を中心とした土がある。他の箇所ではこのような土層は認められないので、この場所で意識して積まれたと考えると、盛土遺構とした。これらの層は3号祭祀遺構の土層にも認められない特徴的な盛土層である。この盛土遺構では、3号祭祀遺構ではあまり出土しない遺物が大量に出土した。粒状礫と称した、径7mm～27mmの大きさの円磨された極小・小礫である。自然の作用と考えられる円磨により、光沢がわずかにある円礫がほとんどである。多様な石材が含まれている。これら粒状礫が、3号祭祀遺構の入口西側から盛土遺構にかけての範囲での出土が認められる。この場所を意識して埋納したものと思われる。また白玉が盛土遺構の北側からまとまって出土している。紐で繋いだ痕跡は認められなかったが、出土状況からすると紐状のもので繋い

だ可能性がある。土師器は破砕した状態で出土している。杯C I(第427図1)は盛土遺構の南から、小型甕A I(第427図2)は分散した状態で、出土している。この場所は火砕流の衝撃の影響を受けているので、必ずしも発見時の状況が本来の状況とは限らないので、土器の破砕の原因については明瞭に言えない。

この盛土遺構が、3号祭祀遺構と関連性があるかどうかははっきりとは言えないが、祭祀の入り口のすぐ横にあり、様々な祭具を納めているところを見ると、3号祭祀と関連性がある可能性は高い。

3号祭祀出土遺物の説明(第428～459図 PL.325～354)

土器の詳細な検出 出土土器は、半分以上残るものをカウントすると総数905個で、その内訳は、土師器888個、須恵器19個である。土師器の内訳は、杯が663個ある。いわゆる内斜口縁杯を杯Aとし、242例、いわゆる内湾口縁杯Bが142例、いわゆる須恵器蓋模倣杯の杯Cが279例、それ以外の杯Dがとなり、杯Cのいわゆる須恵器蓋模倣杯が一番多い。

いわゆる内斜口縁杯は杯A(第428～437図 PL.325～334)として設定した。この3号祭祀遺構では、242個出土している。杯Cに次いで多い。杯Aは、口縁の形態で、大きく4類に区分され、さらに5段階に区分する。

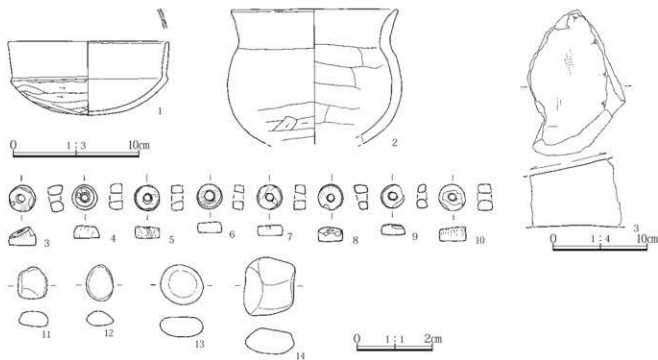
I類：口縁の内斜がやや強めで、口縁端部につまみ上げる小さな屈曲があるもの(109例)、II類：口縁の内斜の屈曲はやや強めであるが、口唇端部のつまみ上げが無いもの(75例)、III類：口縁の内斜の屈曲は弱く平らに近いものであるが、口唇端部につまみ上げる小さな屈曲があるもの(39例)、IV類：口縁の内斜の屈曲は弱く平らに近いもので、口唇端部につまみ上げる屈曲もないもの(11例)である。口径から見た大きさの区分から見ると、A類は口径15cm以上の大型で、B類は口径14cm以上～15cm未満を中型Iとし、C類は口径13cm以上～14cm未満の中型2で、D類は口径12cm以上～13cm未満の小型である。I類は、A類が5例、B類が26例、C類が73例、D類が11例である。II類は、A類が8例、B類が16例、C類が54例、D類が7例である。III類は、B類が12例、C類が24例、D類が3例である。IV類は、B類が2例、C類が9例である。この傾向で分かるのは、I～IV類に共通して一番多いのは中型2のC類で、次に中型1のB類がくることである。また、I・II類にのみ大型のA類があること、III・IV類



4区4面盛土31-31'

1. 灰黄褐色土(10YR5/2) 赤色土鉱物($\phi 2\sim 4\text{mm}$)5%、炭化物1%含、盛土。
2. 灰白色土(2.5Y8/2) シルト質土、赤色土鉱物($\phi 2\sim 40\text{mm}$)7%、粒状礫($\phi 1\sim 40\text{mm}$)2%、炭化物2%含、盛土。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 赤色土鉱物($\phi 2\sim 5\text{mm}$)2%、粒状礫($\phi 1\sim 40\text{mm}$)2%、炭化物1%含、盛土。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物($\phi 1\sim 4\text{mm}$)1%、ローム粒($\phi 1\text{mm}$)極少量含、礫まじりや砂質、土器、白玉、ガラス玉、鉄器、石製模造品含、この層の上面に杯、費などの時期が捉え置かれる。祭祀行為を行った層上下2層に互分される。
5. 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物($\phi 1\sim 2\text{mm}$)、ローム粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)1%含、土器、白玉、ガラス玉含、祭祀行為を行った層上下2層に互分される。

第426図 1号盛土遺構遺物出土状況図・土層断面図



第427図 1号盛土遺構出土遺物図

は中型の一群が多いことを示している。さらに特徴的なのは、高さ／口径の指数で、①指数38～45の深形のもの、②25～37の浅形のもの2分類で、明らかにⅠ・Ⅱ類は①類の深形が多く、Ⅲ・Ⅳ類は②類の浅形が多い。さらに、横から見た形全体の形状で、3類に区分され、a類は、横から見た形全体が箱形を呈するもの、b類は箱形から皿形への移行形にあたるもの、c類は、丸底で皿形を呈する物であり、やはり、Ⅰ・Ⅱ類には、a・b類が多く、Ⅲ・Ⅳ類は、c類が多い。

内面の磨き調整方向は、右斜め方向がⅠ類で67例、Ⅱ類で30例、Ⅲ類で14例例、Ⅳ類で3例である。左斜め方向がⅠ類は46例、Ⅱ類は43例、Ⅲ類で25例、Ⅳ類で6例である。Ⅰ類では、右斜め方向の磨きが多いが、Ⅱ類以降は、左斜め方向の磨きが多くなる傾向にあることが分かる。

基本的には、Ⅰ類からⅣ類に向けて型的に新しいなる傾向を示すと考えており、口径で示されるように大型から小型化、器高は深い形から浅い形へ、横から見て箱型を呈するものから、丸底の皿型へ、内面の磨き調整は、右斜め方向から左斜め方向へと変化していることが想定される。

いわゆる内湾口径杯は杯B(第438～427図 PL.335～341)として設定した。141個出土している。杯Bは、口径形態で大きく3類に区分される。Ⅰ類：口径内部内湾の屈曲は、ほんの少しかあるいはほぼ直線状のもので、

口径外側は、直線状のものと内湾状を呈するものがある(32例)、Ⅱ類：口径内湾の屈曲がややあり、少し内側に屈曲するもの(85例)、Ⅲ類：口径の内側の屈曲が強めて、大きく内側に屈曲するもの(21例)である。口径から見た大きさの区分から見ると、A類は口径13cm以上の大型で、総数40例あり、B類は口径12cm以上～13cm未満を中型とし、総数85例ある。C類は口径12cm未満の小型で、総数17例ある。圧倒的に多いのは中型のB類である。Ⅰ類では、A類が8例、B類が22例、C類が3例、Ⅱ類は、A類が28例、B類が44例、C類が11例である。Ⅲ類は、A類が4例、B類が14例、C類が6例である。Ⅱ類が中心的な型式で、Ⅲ類は小型のものが多いのが分かる。

特徴的なのは、高さ／口径の指数で、①指数47～54の深形のもの、②40～46の中形のもの、③指数34～39の3分類で、小型のC類群と、Ⅲ類の土器に深形のものが多い。さらに、横から見た形全体の形状で、3類に区分され、a類は、横から見た形全体が箱形を呈するもの、b類は箱形から皿形への移行形にあたるもの、c類は、丸底で皿形を呈する物であり、Ⅱ・Ⅲ類にc類が多い傾向がある。内面の磨き調整方向は、右斜め方向がⅠ類で9例、Ⅱ類で18例、Ⅲ類で3例である。左斜め方向がⅠ類は18例、Ⅱ類は56例、Ⅲ類で18例である。Ⅰ～Ⅲ類とも左斜め方向の磨きが多い傾向にあることが分かる。いわゆる内斜口径杯である杯Aと比較すると、深さの指数

や横から見た形状で、Ⅱ・Ⅲ類からⅠ類という流れの可能性も考えている。口径で示されるように小型から大型化、器高は深い形から浅い形へ、横から見て箱形から丸底の皿形を呈するものへ、内面の磨き調整は、当初より右斜め方向より左斜め方向の調整が多いことが分かる。

型式学的には、杯類の中で最も新しいものが、須恵器蓋模倣杯で杯C(第444～458図 PL.341～353)とした。279点出土している。この杯Cは、祭祀遺構から万遍なく杯の積み重ねの一番下からも上からも出土している。つまり、時間的には、この杯Cに代表されるような、新しい段階の祭祀遺構であり、しかも短期間に積み重ねられたことが想定される。

凡例にも書いたが、杯Cは、7類に区分される。Ⅰ類：口辺が直か直に近く立ち上がるもの(137例)、Ⅱ類：口辺が、やや外傾するもの(101例)、Ⅲ類：口辺が内傾した後、直か外傾するもの(17例)、Ⅳ類：内面調整に磨きを多用するもの(4例)、Ⅴ類：須恵器の技法を模倣したもの(回転ヘラ削りによる仕上げ)(11例)、Ⅵ類：異形の須恵器蓋模倣杯(1例)である。

Ⅰ～Ⅲ類は、更に口径で区分され、口径ごとに大きい方から小さい方へ、大きく3類に区分する。A:口径13cm以上を大型とする。B:口径12cm以上～13cm未満を中型とする。C:口径10cm以上～12cmを小型とする。大型のAはほんの少しで、36例である。圧倒的に12cm以上～13cm未満の中形Bが多く、178例ある。ちなみに10cm以上～12cm未満の小型のCは、42例ある。Ⅰ～Ⅲ類ごとに、口径の大きさごとの変化を見ると、Ⅰ類とⅡ類では、A類が17、18例で変わらず、Ⅲ類は1例のみで極めて少ない。中型のB類はⅠ類99、Ⅱ類71例で共に大きな比率を示す。Ⅲ類は全体が17例と少ないが、8例がB類に入る。小型のC類は、A類とほぼ同じ位の比率で入り、Ⅰ類22例、Ⅱ類12例である。特徴的なのはⅢ類で、小型C類が8例もある。まとめると、Ⅰ・Ⅱ類では、中型のB類が中心となり、大型のA類と小型のC類がそれぞれ2割程度を占める。対して、Ⅲ類では、大型A類は少なく、小型のC類が、中型B類と同数あるなど、小型化が進んでいることが分かる。もう一つ、口唇端部の調整であるが、Ⅰ～Ⅲ類ともに調整の無い②類は少なく、②類は、Ⅰ類25例、Ⅱ類19例、Ⅲ類3例と全体の約2割の比率で、口径の大小などとも関係は無く、比率が低い。口唇端

部調整は、須恵器の技法として認められるもので、この調整技法が多く存在することは、金井東裏3号祭祀遺構が、須恵器蓋模倣の杯Cの忠実に口唇部端部調整を模倣した初期段階にあたることを示している。

Ⅳ類は、杯内部を中心に、磨き調整が顕著に認められるものを分類したものである。直線状に立ち上がるもの(257)と、外反気味の口辺を有するもの(258・259)があるが、共通するのは、杯Cでは通例行わない、内面への磨き調整があることである。

Ⅴ類は、別稿で詳しく記述されるが、須恵器の技法を模倣した杯類である。ロクロ使用の回転ヘラ削りの技法で製作しており、県内でもいくつか類例があるが、11個もの多くの出土数を持つのは本例が初めてである。Ⅵ類は、底部が、突出している形で、独特の形状を呈する。1例のみの出土である。

それ以外の異形杯群杯D(第459図 PL.354)は、Ⅰ類は、口辺が短く、内面やや内傾するも、外側はほぼ直に立ち上がる形態のものが2例。Ⅱ類は、口辺端部がほんの少し外反するもので、造りは粗雑なものが多い。3例。Ⅳ類は、口辺が長めで、やや外側に開くもので、内面に磨きが施されているものが1例、Ⅴ類は、外反状に直線状に開く口辺を持つものである。内面口辺部には横方向の磨き、体部内面には、放射状の磨きがある。胎土、調整、焼きが同じで同一の工房で製作された可能性が高い。Ⅶ類は、胴上部がやや張る形態で、少し窄まった後に開く形態のものである。1例ある。Ⅷ類は、外反状に開き、短めの口辺をややくの字形に屈曲させ、口辺部は帯状にナデで面を形成するもので2例。Ⅹ類は、外方に開いた後、少し内側に屈曲する。平底で、2例。Ⅺ類：口辺がⅩ類に比べ巾が広く、しっかりと面を形成して直線状に立ち上がるもので、平底である。内面に磨き調整あり。1例。Ⅻ類：口辺が、垂直状に幅広く立ち上がるが、丸底で赤味が強い。内面の口辺は横ミガキ、体部は斜交ミガキである。1例。Ⅼ類：体部が浅く、全体が外側に開き気味で、体部上位でさらに外方に大きく開く長めの口辺を有する。内面は黒色のイブシあり。1例。このⅩⅡ類の類例は、信濃方面の土器に近似したものがあるので、それとの関係性も考える必要がある。